

いま、なぜ

サブジェクト・ライブラリアンの

意義・現状・課題に理解を深め

これからの専門図書館を考える――

サブジェクト・

図書館をめぐる知の変革のために

ライブラリアン

なのか

 U-PARL協働型アジア研究叢書

U-PARL

東京大学附属図書館アジア研究図書館
上廣倫理財団寄付研究部門

中尾道子……[編]




いま、なぜ

サブジェクト！

図書館をめぐる知の変革のために

ライブラリアン

なのか

 U-PARL 協働型アジア研究叢書

U-PARL

東京大学附属図書館アジア研究図書館
上原倫理財団寄付研究部門

中尾道子……[編]



目次

刊行の辞 ◆六反田豊	007
------------------	-----

はじめに——いま、なぜサブジェクト・ライブラリアンなのか——	009
--------------------------------------	-----

◆中尾道子

1. サブジェクト・ライブラリアン配置と養成のために
2. サブジェクト・ライブラリアンとは？
 - (1) サブジェクト・ライブラリアンとは？
 - (2) サブジェクト・ライブラリアンの業務内容
 - (3) サブジェクト・ライブラリアンの必要条件
3. 日本の大学図書館への導入拡大に向けて
4. 本書の構成

第1部 図書館をめぐる知の変革

第1部をお読みにする前に	031
--------------------	-----

01	037
----------	-----

オープンサイエンス時代の新たな図書館員像

——データライブラリアンに求められるスキル標準とその育成——

◆尾城孝一

1. データとは何か、データの管理とは何か
2. オープンサイエンスという背景
3. 研究公正、不正防止という背景
4. トップダウンの圧力
5. 追い込まれている研究者
6. 図書館と研究データ管理サービス——海外と日本の違い
7. 日本での人材育成——データライブラリアンをどう育てるのか
8. それぞれで異なるデータライブラリアンのあり方

02	051
----------	-----

橋を築け、橋になれ

——ライデン大学のアジア図書館と橋渡しとしてのサブジェクト・ライブラリアン——

◆ナディア・クレフト

1. はじめに
2. サブジェクト・ライブラリアンとキュレーター

- (1) サブジェクト・ライブラリアンとしての主なタスクについて
- (2) キュレーターとしての主なタスクについて
3. ライデン大学アジア図書館とこれからのチャレンジ
 - (1) ライデン大学アジア図書館について
4. これからのチャレンジについて

03

077

図書館に溶け込む世界の知識——資料と空間と人の新たな関係——

✧宇陀則彦

1. はじめに——記録による知識共有
2. 知識はどこにある？
3. 記録はいつから行われてきたのか
4. 知識を集めたいという欲求
5. 今後の図書館情報学は知識情報学である
6. 我々はテキストから構成されている——テキスト空間
7. 情報資源空間はドキュメントから構成されている
8. 本棚と、個人知と世界知、そして共同知

04

091

アジア研究図書館の可能性と方向性

✧小野塚知二

1. どういう夢を描いているか
2. 東京大学の蔵書の特徴——アジアのほぼ全域を研究してきた
3. 学内で分散して保管されている資料を集約する
4. 図書・資料を集約し「書脈（コンドキュメント）」をつくる
5. 自然発生的にできあがった書脈は、意図的に再現するのは難しい
6. アダム・スミスの書斎を再構成——蔵書目録と書き込み（Marginalia）
7. サブジェクト・ライブラリアンという職種をどう考えるか
8. アジア研究図書館の様々な可能性

05

105

パネルディスカッション

✧モデレーター：齋藤希史

✧登壇者：熊野純彦×小野塚知二×蓑輪顕量×尾城孝一×ナディア・クレフト×宇陀則彦

1. 熊野附属図書館長から総括コメント
2. 図書館の一般社会との関係と、物・事を集約することについて
3. プレストルームの研究
4. 図書館における民間企業の役割／データ管理は誰が担うのか
5. サブジェクト・ライブラリアンの専門性と身分
6. 東京大学内の図書館の連携と人材育成
7. ライデン大学のアジア図書館から学べること
8. 「研究する図書館」は誰と協働し、あるべき姿を模索していくか
9. ライブラリアンにできて研究者にできないこと

オープンアクセスをめぐる近年の動向

——即時オープンアクセス義務化の流れと新たな取り組み——

✧横井慶子

1. オープンアクセス義務化の動き
2. オープンアクセスが直面する課題と克服の取り組み
3. 図書館員に期待される役割

第2部

サブジェクト・ライブラリアンの将来像

——日本の大学図書館への導入拡大に向けて——

第2部をお読みになる前に 133

アジア研究図書館の紹介

✧小野塚知二

1. 東京大学アジア研究図書館と東京大学憲章
2. 「アジア研究図書館の理念」という文書
3. 「アジア研究図書館の将来像」という文書
4. 幅を持った研究者として自己を形成してほしい
——サブジェクト・ライブラリアンの任務
5. サブジェクト・ライブラリアンという初めての試みを前にして

米国サブジェクト・ライブラリアンの現状

——「博士号オンリー」日本研究専門ライブラリアンによる現場報告——

✧吉村亜弥子

1. はじめに
2. ライブラリアンになるまでの経緯
3. 北米大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの位置づけ
4. 実務経験の重要性
5. むすび

通訳としてのサブジェクト・ライブラリアン

——図書館の言語、研究の言語——

❖ 福田名津子

1. 報告者の経歴——なぜ図書館へ
2. サブジェクト・ライブラリアンの仕事
3. サブジェクト・ライブラリアン 10 年の仕事
4. ロールモデルがいない私の居場所
5. 図書館の言語、研究の言語
6. 常勤職員であること

九州大学大学院ライブラリーサイエンス専攻による 大学図書館員の人材育成

❖ 渡邊由紀子

1. はじめに
2. ライブラリーサイエンス専攻の設置経緯
3. ライブラリーサイエンス専攻の概要
4. 九州大学附属図書館の教育研究活動
 - (1) 研究開発機能を持つ図書館
 - (2) ライブラリーサイエンス専攻と附属図書館の連携
 - (3) 文学部司書養成課程に協力
5. 大学院と連携した人材育成の効果と課題

〈特別寄稿〉大学図書館に対する期待

——大学図書館をめぐる政策動向の視点から——

❖ 三宅隆悟

研究の世界と図書館の世界と二つ持っているサブジェクト・ライブラリアン

——コメント①——

❖ 大向一輝

コミュニケーションを通じた新たな価値観の創生を

——コメント②——

❖ 北村由美

パネルディスカッション

❖モデレーター：蓑輪顕量

❖登壇者：小野塚知二×吉村亜弥子×福田名津子×渡邊由紀子×大向一輝×
北村由美×三宅隆悟

1. サブジェクト・ライブラリアンの方々の情報交換の場
2. サブジェクト・ライブラリアンの異動／ポスト
3. サブジェクト・ライブラリアンの業績の評価
4. サブジェクト・ライブラリアンはどう知識をアップデートしているか
5. 先端的な研究を支えていくためには
6. サブジェクト・ライブラリアンは自らの専門領域の授業を持つべきか
7. サブジェクト・ライブラリアンというポストは、ポストドク研究員の受け皿で終わってしまいうのか
8. おわりに

第3部

U-PARL における 図書館機能開拓研究の取り組み

1. はじめに	215
2. U-PARL の活動内容	215
3. 図書館視察とサブジェクト・ライブラリアンとの交流	216
4. アジア研究図書館開館に向けた取り組み	223
5. アジア資料の目録作成	230
6. アジア資料のデジタル化	232
7. 各種セミナー・イベントの実施	234
8. ウェブサイトを通じた発信	250

あとがき ❖蓑輪顕量 256

執筆者・参加者プロフィール 261

刊行の辞

❖六反田豊

本書の題目にある「サブジェクト・ライブラリアン」なるものを御存じの方は、一体どのくらいいらっしゃるのでしょうか。「ライブラリアン」とありますので、それがライブラリーすなわち図書館の職員の一種であることは何となく予想できるかと思います。「主題資料専門家」と訳されることもあるようで、『図書館情報学事典』第5版（日本図書館情報学会編、丸善出版、2020年）ではこの訳語で立項され、「特定主題や学問分野の専門的知識を持つ図書館員で、その主題領域の資料選択と評価に責任を持ち、「その特定主題の資料管理、閲覧、貸出からレファレンスサービスなどを一元的に行う主題専門図書館員を指す」と説明されています。つまりサブジェクト・ライブラリアンとは、特定の主題（サブジェクト）に関する専門的知識に基づいて図書館業務を遂行する図書館員のことなのです。

大学図書館など高度の学術情報を扱う専門図書館にとって、このようなサブジェクト・ライブラリアンの存在は欠くべからざるものです。現に、アメリカ合衆国をはじめ欧米諸国ではサブジェクト・ライブラリアンの制度化がいち早く進み、学術の発展に大きく寄与しています。日本でもその必要性はかなり早くから指摘されてきました。たとえば、専門の文化人類学や生態学だけでなく多方面で大きな業績を残した梅棹忠夫は、今から約半世紀前の1976年に行った「大学の使命と大学図書館の役割」と題する講演において、高度化した学術情報を取り扱う教員身分（すなわち研究者）の図書館専門職員として「学術情報管理官」の設置を主張しています（『学術月報』第29巻9号、1976年。梅棹忠夫『情報管理論』〔岩波書店、1990年〕所収）。「サブジェクト・ラ

イブラリアン」という語こそ用いてはいませんが、梅棹が意図していたものがサブジェクト・ライブラリアンにほかならないことは明らかでしょう。しかし、現在の日本でその制度が根付いているかといえば、残念ながら実情は決してそうとはいえません。

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄附研究部門（U-PARL）は、公益財団法人上廣倫理財団の寄附により 2014 年に東京大学附属図書館最初の研究組織として設置されました。U-PARL は現在、①文理融合・東西融合フォーラムの形成、②デジタル資源の作成、③アジア研究図書館の運営、④社会還元、といった四つのミッションを掲げて活動しています。なかでも③に該当するアジア研究図書館の蔵書構築とサブジェクト・ライブラリアン相当業務の支援は、設立当初から取り組んできた重要な課題の一つです。そして、この課題と関連して学内外の専門家の協力のもとシンポジウムも複数回開催してきました。本書の第 1 部と第 2 部はそうしたシンポジウムの講演録です。また第 3 部は、研究図書館機能開拓に関する U-PARL のこれまでの取り組みについて紹介しています。

情報のデジタル化が急速に進展するのに伴い、大学図書館のあり方も大きな変革期を迎えています。サブジェクト・ライブラリアンの必要性も、これまで以上に高まってきているように思います。本書が、そうしたサブジェクト・ライブラリアン制度の意義・現状・課題等に関する理解を深める一助となり、かつ U-PARL の活動についても広く知っていただく機会となることを願ってやみません。

はじめに

——いま、なぜサブジェクト・ライブラリアンなのか——

❖中尾道子

1. サブジェクト・ライブラリアン配置と養成のために

大学図書館は、大学における学生の学習や大学が行う高等教育及び学術研究活動全般を支える重要な学術情報基盤の役割を有しており、大学の教育・研究にとって不可欠な中核を成し、総合的な機能を担う機関の一つである。電子化の進展と学術情報流通の変化、大学を巡る環境の変化によって、現在、大学図書館には、学習支援及び教育活動への直接の関与、研究活動に即した支援と知の生産への貢献、コレクション構築と適切なナビゲーション、他機関・地域等との連携及び国際対応という多様な機能・役割が求められている【注1】。

デジタル化が急速に進展している今日、大学図書館を巡る環境は大きく変化しており、かつてのいわゆる図書館学的な専門性だけでは対応が困難な状況が生じている。それゆえ、教育への関与、とくに研究支援において主題知識を持った図書館員が求められている。電子メディアを含む図書館資料の選定、コレクション構築、一般教養以上のレファレンス、主題に特化した情報リテラシー教育は、研究レベルの高い専門知識なくして行うことができない。図書資料のデジタル化が急速に進展している状況のなかで、書誌・資料情報をきちんと把握することを、個別の研究室や研究者個人の努力に委ねている現状の限界が明らかになっており、サブジェクト・ライブラリアンを配置できる仕組みの形成が望まれている。

高度研究を担う研究型大学の図書館において、専門史資料の効率的な蒐集や集積すべきコレクションの方針の提言、利用環境の整備、情報リテラシー教育を担う高度専門職として、欧米の研究大学（Research University【注2】）に見られるようなサブジェクト・ライブラリアンの配置・養成は不可欠かつ急務ではあるものの、欧米の大規模研究大学のような、多様化する学問分野を適切にカバーする高い専門性と図書館情報学の知識、ならびに実践的能力を兼ね備えた人材の配置は、研究を行う研究者と史資料の選定・収集や提供を行うサブジェクト・ライブラリアンの業務が明確に区分された欧米の研究環境・図書館文化を前提に成り立つものであり、日本の大学においてこれを一足飛びにそのまま模倣・再現することは現実的とはいえない【注3】。

そこで2014年4月に東京大学附属図書館に設置されたアジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（以下、U-PARL）では、設立時よりサブジェクト・ライブラリアン配置と養成のための図書館機能開拓研究の一環として、国内外の図書館との交流・連携を図り、日本の研究・教育環境に即したかたちでのモデルを提示すべく、同職に求められる資質、能力、業務内容を調査し、その実現可能性について検討を重ねてきた【注4】。以下の内容はその調査結果によるものである（U-PARLのサブジェクト・ライブラリアン配置に向けた取り組みについては第3部を参照されたい）。

2. サブジェクト・ライブラリアンとは？

(1) サブジェクト・ライブラリアンとは？

サブジェクト・ライブラリアンは「ある特定の主題知識を持つ図書館員」として知られているが、国や図書館によってその定義や呼称は実にさまざまであり、それをあらわす用語は一定していない。また、使用されている呼称が同じでも、図書館によって業務内容が異なる場合もある【注5】。ただ、北米においてほとんどの主要な大学図書館が主題情報の専門家を置くように

なった1960年代以降、現在に至るまで「サブジェクト・ライブラリアン」の呼称は使用され続けており、また、近年、日本で出版された北米の大学図書館の図書館員に関する書籍のタイトル【注6】や、文部科学省の報告書においても「サブジェクト・ライブラリアン」が使用されていることから、本書においても「サブジェクト・ライブラリアン」の呼称を使用することとする。定義については「特定のサブジェクト（主題分野）における専門知識やスキルを活かして、当該分野のレファレンスやコレクション構築、情報リテラシー教育等を行い、研究者や学生とその関連分野を接点として関わりを持つ図書館員」ということになる【注7】。また後述のとおり、これらの業務を行うためにも、サブジェクト・ライブラリアンには、自らも研究を進めることで研究情報を蓄積することが求められる【注8】。

(2) サブジェクト・ライブラリアンの業務内容

欧米のサブジェクト・ライブラリアンの業務内容に関する調査の結果、その業務は、コレクション構築・レファレンス（情報リテラシー教育、大学院生および教員への研究支援を含む）・研究活動（所蔵史資料に関する研究、主題に関する研究）の大きく三つに集約される。

① コレクション構築

サブジェクト・ライブラリアンの業務の中で最も重要視されている。教育や研究の目的に必要な最も効率的な資料（電子資料やデータベースを含む）を選定、入手し、可能な限りバランスの良い蔵書を保つことが必要とされる。また、蔵書構築には、最近の図書の入手のみならず、過去に刊行された資料の購入や保存、不要資料の選択、資料のマイクロフィッシュ化やデジタル化、製本等の判断、地域研究等の場合は担当地域の資料購入のための現地との交渉も含まれる。また、これに寄贈資料の受け入れも加わる。

担当するサブジェクトの選書は自身のディシプリンに関して最もやりやす

いが、当然、それより広い領域を担当することになる。この点、研究者であれば核となるサブジェクトは狭くても、学問全体を見渡す視点も意識しているので、専門外のサブジェクトであってもキーワードや研究動向、信頼し得る研究や研究者を把握していることが多く、そうした情報が担当領域内の多様なサブジェクトの選書に活かされることは言うまでもない。重要なのは「知っていること」だけでなく、「それをどこで見つけるか」を知っていることであり、また研究者ネットワークを活かして「知っている人」を知っていること、あるいは「知っている人を知る人」を知っていることである。サブジェクト・ライブラリアンには、研究者のニーズを受け止め、最新の研究動向の把握ならびに研究者ネットワーク構築のためにも、担当する主題および学問領域に関連する学会や研究会への積極的な所属や参加が求められる。

また、サブジェクト・ライブラリアンはあるテーマに沿った資料を揃えるというキュレーションの仕事をし、キュレーターを兼ねることも多い（第1部02 ナディア・クレフト「橋を築け、橋になれーライデン大学のアジア図書館と橋渡しとしてのサブジェクト・ライブラリアン」を参照）。今後はウェブアーカイブなどのデータ資料収集やデジタルキュレーションによって新たなデータ資料を創出する仕事の比重が増してくることは間違いない。図書館に散在する資料、アーカイブ文書群の中に点在する資料をそれぞれデジタル化し、「ひとつの意味のあるコレクション」としてまとめ、教育や研究のために利活用できる形にする、コレクションとしてのデータを創り出して新たな利用価値を付与する。こうしたデジタルキュレーションの仕事も増えることも予想される【注9】。

②レファレンス（情報リテラシー教育・研究支援）

サブジェクト・ライブラリアンによるレファレンスは、情報リテラシー教育と研究支援にわけられる。実質的には文献・情報探索指導とアカデミック・ライティング（論文執筆指導）であるが、北米の研究大学では後者に力を入れ

ているところが多い。北米の研究大学の場合、論文に書く「内容」、すなわち「内容指導」は日本と同様、指導教員が行うが、論文中の史資料の扱いや参考文献の書き方等の論文を書くことに関する「指導」、すなわち「執筆指導」はサブジェクト・ライブラリアンの主要な業務となっている。というのも、すでにインターネットで情報が容易に入手できる環境に慣れている世代の学生にとって情報検索に対するニーズは必ずしも自覚的ではないが、レポート執筆から論文執筆に至るまで、経験不足に起因する需要が高まっているためである。また、オープンアクセスなど学術情報資源のあり方が変化する中、研究者の投稿雑誌の選定や研究成果の広報・管理など、多様な研究活動の支援が必要となっている。現代は資料や情報が「ありすぎる」ほうが問題の時代であり、利用者のニーズを理解して適切な情報を提供し、信頼し得る情報にアクセスできるようナビゲートするのがサブジェクト・ライブラリアンの重要な役割である。

③研究（史資料に関する研究・主題に関する研究）

サブジェクト・ライブラリアンは担当領域の史資料に関する専門家でもあり、所蔵する史資料の研究はもちろんのこと、コレクション構築やレファレンスを円滑に行うためにも、主題に関する研究が求められる。また、サブジェクト・ライブラリアンが研究者として認知されているからこそ、学術情報が集まり、研究者ネットワークが生まれ、図書館に学生や研究者、教員が訪ねてくるのである。サブジェクト・ライブラリアンが社会的に認知されていない日本の状況下ではなおさらであろう。ただし、基本的にサービス業であり、あくまで研究支援が主要な業務であるので、自身の研究が第一である人には向かない。サブジェクト・ライブラリアンは自らも研究を進めることで研究情報を蓄積しつつ、持続可能なかたちでの業務の遂行と、図書系職員との最も効率的な協働の可能性を模索する必要がある（第2部 03 福田名津子「通訳としてのサブジェクト・ライブラリアン—図書館の言語、研究の言語—」を参照）。

(3) サブジェクト・ライブラリアンの必要条件

専門的かつ多岐にわたる業務を遂行するサブジェクト・ライブラリアンには、図書館員に求められる知識やスキルに加え、何よりもサブジェクト（主題）に関する知識が必要となる。北米のサブジェクト・ライブラリアンには図書館学修士号（Master's Degree in Library Science、以下 MLS と略す）と専門分野での修士号・博士号を雇用条件とするところが多いが【注10】、近年、MLS を必須資格としていた人事規定にも変化があり、不要とする大学も増えている。MLS を持たず主題分野の博士号を持つ者がサブジェクト・ライブラリアンになり、職につきながら MLS を取得するケースもある【注11】。とくに研究重視の大学では博士号保持者を積極的に採用し、主題分野の知識と研究能力を持っていれば MLS の有無は問わないところもある【注12】。このことは、図書館員としての知識やスキルよりも、研究支援の担い手として、担当学問領域の資料に精通していることはもちろんのこと、研究情報資源へのアクセスや学術論文執筆の経験等、研究者としてのキャリアを重視する大学側のニーズが反映されているといえよう（第2部 02 吉村亜弥子「米国サブジェクト・ライブラリアンの現状―「博士号オンリー」日本研究専門ライブラリアンによる現場報告―」を参照）。

図書館は単なる紙資料保存の場ではなく、常に新たな変化が起こる場でもある。現在、情報化に伴う変化のうねりの中で、大学ならびに大学図書館もまた大きな変化の最中にある。研究を取り巻く環境も急激に変化しつつあり、新たな情報化時代の到来に伴う様々な課題に直面している。また、日本のみならず、世界各国で経済発展が進むにつれ、これまで顧みられなかった多くの史資料が発見あるいは再発見され、その保存や修復、公開などが大きな課題となっている。また、研究リソースのデジタル化は、研究・教育のスタイルに大きな変化をもたらし、新たな研究インフラの整備により、従来よりも効率的に研究を行えるようになった。これまで遠隔の図書館に赴いてようやく

参照していた史資料が研究室や個人のパソコンでも閲覧可能となり、研究者個々人にもコンピューター・リテラシーが求められる時代になったのである。

こうした情報化時代において、何よりも必要となってくるのは情報リテラシー教育であろう。では、その情報リテラシー教育は誰がどこで行うのか、また、どのレベルのものを提供するのか、ということが大きなポイントとなる。現在、国内の大学図書館が行っている主に学部学生への学習支援レベルの情報リテラシー教育であれば、サブジェクト（主題）の知識がなくとも対応可能であるが、大学院生以上の研究者を対象とする研究支援にはやはり研究主題に対する高度の専門知識が求められ、文献の収集および管理の方法・投稿する学術誌の選定・論文執筆・掲載・公開に至るまでの研究経験が必要不可欠となる。つまり研究レベルの情報リテラシー教育を行うのであれば、やはり専門的な研究経験を持つサブジェクト・ライブラリアンが必要ということになる。日本の大学では従来、不十分ながらも教員がこうした役割を担ってきたが、現在、それに時間と労力を割くことができる大学教員はほとんどいないのが現状であろう。すなわち、研究支援を行い得る専門ライブラリアンの配置は、年々増大する教員の教育負担の軽減にもつながり、ひいては近年低下し続ける日本の大学の研究力の回復にも寄与するものと期待されるのである。また、各分野の専門知識を活かしたレファレンスによる研究支援、情報リテラシー講座等による研究倫理教育の実践は、研究不正の防止にも貢献することが期待される。大学院生から教員に至るまで研究者のニーズを受け止め、研究レベルの情報リテラシー教育を担い得る専門的人材の配置は大学にとっても急務の課題といえよう。

電子メディアを含む図書館資料の選定、コレクション構築、一般教養以上のレファレンス・サービス、主題に特化した情報リテラシー教育は、担当学問領域における専門知識なくして行うことができない。図書資料のデジタル化が急速に進展している状況のなかで、サブジェクト・ライブラリアンの業務として比重が高まっている情報リテラシー教育は研究倫理教育の一環とし

でもとくに重点を置く必要がある【注13】。

これまでの大学図書館による情報リテラシー教育は「学習支援」という側面が圧倒的に強く、「研究支援」という観点で語られることはほぼ皆無であった。現在の日本の多くの大学図書館では、研究者への研究支援よりも、学部学生に向けた学習支援の方が圧倒的に優先度が高いのが実情である。

しかしながらサブジェクト・ライブラリアンを擁する欧米の研究大学においては、教員を含む研究者への支援が重要視されている。日本においても研究支援を必要とする若手教員や大学院生を抱える機関は多数存在するが、日本においては大学院生以上の研究者に必要とされる情報スキルは、主に指導教員や研究室の先輩といった閉じた範囲でのみ得られるものになることが多い。研究室という閉ざされた空間でのみ継承される情報スキルというのが、アップデートされないまま受け継がれ、それを知らぬまま研究が続いている場合もある。すなわち配属される研究室によって情報スキルの大きな格差が生じうるのである。

研究者が研究上必要とする情報スキルには、学術情報の検索方法、文献資料の管理方法、論文投稿先の選定等があるが、こうしたスキルの向上にはサブジェクト・ライブラリアンが行う情報リテラシー教育が担う役割が大きい【注14】。今後は大学院生以上の若手研究者への支援の在り方を検討し、研究支援によりいっそう注力する必要があるだろう。

研究者にとって本当に意義のある情報リテラシー教育を行うためには、学術情報に対するサブジェクト・ライブラリアンの高い専門性と知識が必要であり、研究者の研究活動上のニーズと結びつけた支援方法を構築することが今後より一層求められる。研究倫理教育の実践という観点からも研究支援としての情報リテラシー教育を大いに重視する必要がある、それを担う人材としてサブジェクト・ライブラリアンの設置が必要不可欠である。

3. 日本の大学図書館への導入拡大に向けて

欧米で普及しているサブジェクト・ライブラリアン制度【注15】であるが、日本においても、主題知識を持った図書館員の必要性については1970年代から政策文書においてすでに指摘されており、2010年に文部科学省、科学技術・学術審議会学術情報作業部会から出された「大学図書館の整備について（審議まとめ）―変革する大学にあって求められる大学図書館像―」（以下、「審議まとめ」）には、大学図書館職員の新たな専門性の確立と養成について具体的な提言が示されている【注16】。その「審議まとめ」では、電子化の進展、学術情報流通への対応とともに、学習支援を大学図書館の課題として挙げた上で、大学図書館職員としての専門性について、図書館学的な専門性だけでは対応が困難であり、「伝統的な知識と見識を基礎として、環境の変化に柔軟に適応し、大学における学生の学習や大学が行う教育研究に積極的に関与する専門性」が求められるとし、「大学院において研究者としての知識とスキルを学び、修士もしくは博士の学位を取得する必要がある」として、大学院レベルでの大学図書館職員養成の必要性が強調されている。さらに、現職者の学位取得も併せて「長期的には図書館情報学の学位を有するライブラリアンと他分野の学位を有するライブラリアンがバランスよく配置されることが望ましい」、「新しい資格の確立を含めた広い意味での大学図書館職員養成の仕組みを模索する必要がある」とし、長期的な展望も示しつつ、大学図書館職員のあり方として、従来の事務系職員とは異なる枠組みの必要性が明確に指摘されている。

また、近年、研究公正の確保を背景として、研究データの公開や論文のオープンアクセスなど、学術情報のオープン化、オープンサイエンスの推進が叫ばれている（第1部06横井慶子「オープンアクセスをめぐる近年の動向―即時オープンアクセス義務化の流れと新たな取り組み―」を参照）。

オープンサイエンスの実現のために、大学にも「技術職員、URA 及び大

学図書館職員等を中心としたデータ管理体制を構築し、研究者への支援に資する」ことが期待されており、研究データの整理・公開・管理を専門とするデータ・ライブラリアン（データ・キュレーター）などを研究支援人材として位置付けることや、そうした人材の確保、さらには、そうした人材の包括的な育成システムの検討もなされている【注17】（第1部01尾城孝一「オープンサイエンス時代の新たな図書館員像—データライブラリアンに求められるスキル標準とその育成—」を参照）。

新しい時代に求められる高度な機能を大学図書館が実現するためには、それを担う人材の確保と育成が最も重要な課題であり、そのための新しい仕組みを構築する必要がある。しかし、現在の日本の大学図書館の状況に鑑みれば、予算の削減や専任職員の減少、電子ジャーナルの価格高騰による資料購入費の圧迫など、日本の大学図書館にサブジェクト・ライブラリアンを導入することは多くの困難を伴うことが予想される。加えて、その養成やキャリアパスの面での課題も多い。

日本の大学図書館においてもすでに金沢工業大学、一橋大学、天理大学等で、サブジェクト・ライブラリアンあるいはそれに準ずる専門司書が配置されている例もある。しかしながらその貴重な試みは、その意義の大きさや必要性の高さにも関わらず、日本の多くの大学図書館に対して今のところ大きな波及効果を及ぼしてはいない。

その一つの要因として、日本の大学図書館におけるジェネラリスト志向がある。現在の日本の大学図書館の職員人事は、大学種別や機関によって多少の違いこそあれ、概ね数年程度の短期間での配置転換を伴うことが慣例となっている。また慢性的な人員不足から一部署・一職員が複数の業務を兼任・兼務する例も多い。このような大学図書館職員人事の現状と、サブジェクト・ライブラリアンの在り方（多岐にわたる高度かつ専門的な知識・技術・能力を持った人材を確保すること、またはそのような人材を養成すること、そして長期的・永続的な管理運営が求められること等）とは、本質的に矛盾した状態にある。サブジェクト・

ライブラリアンの配置は日本の大学図書館界全体の人事制度や動向と無関係でありえない。サブジェクト・ライブラリアンは、スペシャリストでありジェネラリストではない、という認識が改めて重要である。ジェネラリスト養成の観点でなされる現行の人事異動において、主題を追求するサブジェクト・ライブラリアンの配置は困難といわざるを得ない【注18】。

二つ目の要因として考えられるのは、日本における司書および図書館員の地位の問題である。北米の大学図書館のサブジェクト・ライブラリアンはアカデミックな専門職であり、固定した職種として独立した地位と権限が認められている。内部人事のランク（任務・給与体系）により、勤務年数と業績による厳しい業務査定を経て、教授職と同等のファカルティ・ステータスであることも多い【注19】。ところが日本においては司書という職業範疇自体の地位が高くはなく、待遇や権限の面で北米と大きな違いがあると言わざるを得ない。これにより日本においては研究者のキャリアパスとはなり得ないのではないかという考えが根強く、これまで制度としての定着が困難であったものと思われる。

三つ目の要因は、欧米のサブジェクト・ライブラリアンのように、図書館情報学の学位を持ち、かつ他分野の学位を有する人材がほとんど存在しないことである。少なくとも日本の現状では、専門的な主題知識を持つ人材を、現行の学部レベルの司書課程中心の制度から輩出するのは不可能と認識されており【注20】、今後、日本においても図書館情報学以外の学問を修めたうえで大学院に進学し、主題の専門知識を活かして図書館情報学を学ぶなど、サブジェクト・ライブラリアン養成の仕組みについて検討する必要がある。

では、日本のこうした現状において、サブジェクト・ライブラリアンをどのように位置付けるべきか。

サブジェクト・ライブラリアンの位置付けについては、高度専門職でありかつ研究職でもあるため【注21】、従来の大学図書系職員とは異なった職種とならざるをえない【注22】。また、先に挙げた2010年の「大学図書館の整備

について（審議のまとめ）」においても、「研究者として大学図書館の新たなプロジェクトを開発するために調査研究等を行うライブラリアン」には、「大学院において研究者としての知識とスキルを学び、修士もしくは博士の学位を取得する必要がある」とされている【注23】。これに従えば、図書系職員をサブジェクト・ライブラリアンに転向するのではなく、主題知識を持った研究者を専門図書館員として採用するという方向での位置付けとなるであろう。また、多岐にわたる高度かつ専門的な知識・技術・能力に加えて、コレクション構築は長期的・永続的な提供と管理運営を必要とするため、その人材確保も長期的で安定したものである必要がある。

加えて、日本の大学の現状を考えれば、大学院生を多く抱える研究を中心とした大学にサブジェクト・ライブラリアンが配置されることが望ましい。大学は幅広い学問分野・領域で構成され、各大学図書館によって、当然重視されるサブジェクト（研究主題）は異なってくる【注24】。研究分野によって扱う資料の在り方や研究に係る作法に違いがあることを認識し、特性に応じた人材の確保が必要である。具体的に人員の選抜や採用を行う際、必要な人材に関する基準の設定が前提条件となる。各大学の図書館にとって、どのような人材が必要とされるのか、その基準を明らかにするためには、図書館のミッション・ステートメントが不可欠である。その図書館が何を使命に、どのようなサービスを、どのような対象者に対して提供するのかを明らかにし、そのサービスの提供に必要な人的資源について考えなければならない。

先に、サブジェクト・ライブラリアンは、スペシャリストでありジェネラリストではない、ということ述べたが、日本においてこの制度を導入し定着させるためには、安定的でありながら一定の流動性が確保されるようなキャリアパスの整備が必要となるであろう。人材育成ならびに確保の観点から考えれば、主題（サブジェクト）というパスでキャリアを重ねることができるよう、複数大学間での異動や、特定の主題を修めた人材をそれに関連する学部等を有する大学の図書館で採用するなどの、新しいキャリアパス形成の

仕組みづくりが必要となってくる。

サブジェクト・ライブラリアンをどのように養成していくのかという問題であるが、2010年の「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」が指摘するように、図書館情報学以外の主題分野における学問を修めつつ、大学院においても図書館情報学を履修できる仕組みを作るなど、サブジェクト・ライブラリアン養成課程の在り方を検討する必要もある（大学図書館員の人材育成については、第2部04 渡邊由紀子「九州大学大学院ライブラリーサイエンス専攻による大学図書館員の人材育成」を参照）。

4. 本書の構成

以上のような課題解決の糸口を模索すべく、U-PARL ではサブジェクト・ライブラリアンに関して過去2回のシンポジウムを開催してきた。本書はその2回のシンポジウムの内容(第1部・第2部)とU-PARLのこれまでのサブジェクト・ライブラリアン配置に向けた取り組み(第3部)で構成されている。

第1部は、2019年1月26日に開催したシンポジウム〈むすび、ひらくアジア3〉「図書館をめぐる知の変革」がベースになっている。なお第1部では、このシンポジウムの内容に加えて、オープンアクセスをめぐる近年の動向について、図書館情報学がご専門の横井慶子氏にご寄稿いただいた。近年、欧米を中心に公的資金を受けた研究成果の即時オープンアクセスを求める動きが相次いでおり、日本でも2024年度に文部科学省により、各大学等の即時オープンアクセスに向けた、体制整備・システム改革を加速させることを目的とする「オープンアクセス加速化事業」が実施されたことは記憶に新しい。政策や研究助成機関によってオープンアクセスが推進される一方で、その実施は様々な問題に直面している。研究データのオープン化という新たな課題に対して、図書館は何をすべきなのであろうか。図書館員に期待される役割についても述べられており、サブジェクト・ライブラリアンを考える

上でも示唆に富む内容になっている。

第2部は、2021年3月15日にU-PARLと東京大学アジア研究図書館の共催で行われたアジア研究図書館開館記念シンポジウム〈むすび、ひらくアジア4〉「サブジェクト・ライブラリアンの将来像—日本の大学図書館への導入拡大に向けて—」の内容を収録している。サブジェクト・ライブラリアン制度が国内の大学図書館にも広がっていくことを目指して、その課題を共有し、サブジェクト・ライブラリアンに求められる期待や役割について議論している。

U-PARLでは2014年の設立時よりサブジェクト・ライブラリアン配置と養成のための研究の一環として、国内外の図書館との交流・連携を図り、日本の研究・教育環境に即したかたちでのモデルを提示すべく、同職に求められる資質、能力、業務内容を調査し、その実現可能性について検討を重ねてきた。第3部ではU-PARLのこれまでの図書館機能開拓研究の取り組みについて紹介している。

なお、各部の内容についてはそれぞれ冒頭にある「お読みになる前に」で紹介しているのでそちらをご覧ください。

サブジェクト・ライブラリアンの確保・育成は、個々の大学では困難であり、全国規模で検討する必要がある。また、学外との人事交流やキャリアパスの仕組みを考える、さらには、業務、パフォーマンスの評価をどのように行うのか、といったことも共有すべき重要な課題になるであろう。こうした問題をアジア研究図書館の、東京大学の中だけに閉じるのではなく、サブジェクト・ライブラリアン制度が国内の大学図書館にも広がっていくことを目指して、その課題を共有し、サブジェクト・ライブラリアンの意義・現状・課題に理解を深め、これからの図書館を考えるために本書が役立つことを願ってやまない。

本書のもとになったサブジェクト・ライブラリアン制度の調査・研究にあたっては、第3部で挙げた関連機関の皆さまの他にも、学内外、国内外の数多くの方々から助言と協力を賜った。とくに海の向こうの現職のサブジェクト・ライブラリアンの方々からは、日本にも同僚ができることを期待して、いつもあたたかい言葉で励ましていただいた。この場をお借りしてお礼申し上げます。

なお、本書の企画から刊行まで、とくに U-PARL を離れてから思うように編集作業を進めることができず、原稿をいただいてからずいぶん長く執筆者の方々をお待たせすることになってしまい、慚愧に堪えない。執筆者の皆さまにお礼とともに、深くお詫び申し上げます。また、本書の編集にあたっては、企画の段階から文学通信の岡田圭介氏にはお世話になり、編集をお引き受けくださった西内友美氏、U-PARL の菅崎千秋氏には多忙なスケジュールの中で編集作業を引き継いでいただいたにもかかわらず、筆者の作業が遅れに遅れたことで長く手を煩わせた。お詫び申し上げると同時に厚く感謝の意を表する次第である。

初代 U-PARL のスタッフから受け継いできた取り組みを、現副部門長である一色大悟氏をはじめ現任の U-PARL スタッフの方々の助けを得てようやく世に送り出すことができた。このように、U-PARL が活動を続けてこられたのも、サブジェクト・ライブラリアン制度の理念に賛同して U-PARL の活動を長年ご支援いただいている公益財団法人上廣倫理財団によるご寄付のお陰であり、心より感謝を申し上げます。次第である。

※なお、本文中の執筆者の所属は第1部は2019年、第2部は2021年に行われたシンポジウム当時のものです（「当時」の表記は割愛しています）。2025年現在の所属は巻末「執筆者・参加者プロフィール」をご覧ください。

注

- [1] 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」（2010年12月）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm（accessed 2025-10-1）
- [2] 研究大学（Research University）の認定は、アメリカ大学協会（Association of American Universities）が行っている。北米にはおよそ3,600校の大学があると言われるが、研究大学と認められているものはわずか60校にすぎない。
- [3] 北米の大学図書館では、第二次世界大戦下で地域研究の必要性をきっかけに主題情報の専門家が本格的に導入され、戦後の学生数や出版数の増加による教員から図書館員への選書の役割の移行により、1960年頃には、ほとんどの主要な大学図書館で主題情報の専門家、いわゆるサブジェクト・ライブラリアンが配置されていたことが知られている。サブジェクト・ライブラリアンの主な役割は、蔵書構築、レファレンス・研究支援、図書館利用教育、リエゾンサービスであり、1980年代以降はオンライン化や電子情報源の登場により、これらの役割に電子情報源の選択やチャットレファレンスなどが加わった。北米の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの歴史については、山田かおり「アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアン」『Library and Information Science』71, 2014, p.34－39.

日本においても戦前から戦後の数年は司書官という地位が存在しており、選書や目録作成を職責としていた。また、東京大学総合図書館や早稲田大学図書館にはこうした学者肌の図書館員が1980年代まで存在し、サブジェクト・ライブラリアンのような役割を果たしていたという。しかし、これも本人の努力と資質によって可能であっただけで、制度として育ってきたわけではない。そのため、優れた図書館員であっても、それにふさわしい待遇が得られるわけでもなく、後継者の養成も困難であった。松林正己『続・図書館はだれのものか—図書館の未来を求めて』中部大学（中部大学ブックシリーズ Acta）2010, p.107.

大学図書館のサブジェクト・ライブラリアンを対象とした研究をまとめたものとして、曾加・河村俊太郎「大学図書館のサブジェクトライブラリアンを対象とした研究の現状と課題—英米と日本の比較を中心として—」『日本図書館情報学会誌』70(4), 2024, p.181－190.

- [4] 筆者は2017年10月から2024年3月までU-PARLに東アジア（韓国朝鮮）担当の特任研究員として在職し、在任中、サブジェクト・ライブラリアン制度の研究に主担当として携わり、アジア研究の専門ライブラリアンとの意見交換を重ね、研究図書館に必要な人的資源に関する調査・分析に取り組んできた。

- 【5】サブジェクト・ライブラリアンを表す用語の多様性について、山田かおりは Fred J. Hay と John D.Haskell, Jr. による調査結果を紹介し、「サブジェクト・ライブラリアン」が中心として使われているもののさまざまな同義語があるとする。「サブジェクトスペシャリスト」「サブジェクトビブリオグラファー」「プロフェッショナルスペシャリスト」「レファレンスビブリオグラファー」「ビブリオグラファー」の他、「エリア」、教員組織と図書館をつなぐ意味の「リエゾン」が入ったものなど、様々な用語が存在する。山田かおり「アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアン」『Library and Information Science』71, 2014, p.29－31.

他にも、近年、図書館ではなく、図書館サービスの利用者がいる組織において利用者に特化したサービスを提供する「エンベディッド・ライブラリアン」や、研究データの整理・公開・管理を専門とする「データ・ライブラリアン」などが注目されている。鎌田均「エンベディッド・ライブラリアンにみる図書館環境の変化」『情報の科学と技術』68(1), 2018, p.14－18.

英国においても、1996 年に実施された主題情報専門家に関する調査で、約半数の大学図書館で“Subject Librarian”の呼称を使用していることがわかっている。呑海沙織「大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの可能性」『情報の科学と技術』54(4), 2014, p.193.

- 【6】田中あずさ『サブジェクト・ライブラリアン：海の向こうアメリカの学術図書館の仕事』笠間書院, 2018.
- 【7】サブジェクト・ライブラリアンの定義については、山田かおり「アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアン」『Library and Information Science』71, 2014, p.29－31. 呑海沙織「大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの可能性」『情報の科学と技術』54(4), 2014, p.193.
- 【8】大学によってシステムや重要性は異なるが、テニュアトラックのサブジェクト・ライブラリアンには特に、学会での発表や研究論文を書くことが求められ、個人研究が業務評価の対象となり、昇進やテニュア審査でも評価に換算される。また、ファカルティ・ステータスのサブジェクト・ライブラリアンはサバティカル休暇の取得も可能で、研究やその他プロフェッショナルとして諸活動に従事する時間と資金が与えられるところも多い。高木和子「米国大学図書館員のファカルティ・ステータス」『情報管理』46(8), 2003, p.554-560.
- 【9】横田カーター啓子「人文学系ライブラリアンのキャリアパス：人文学の危機の時代に働く」『情報の科学と技術』69(1), 2019.6, p.30.
- 【10】ハワイ大学のように「MLSに加えて当該研究分野の修士以上の学位」を求める、い

いわゆるダブルマスターを必須とするものから、ライデン大学をはじめ、欧州の大学図書館において認められているような「必ずしも予めその主題分野の知識や学位を有する必要はない」とするものまで幅がある。

【11】田中あずさ『サブジェクト・ライブラリアン:海の向こうアメリカの学術図書館の仕事』笠間書院, 2018, p. 70.

【12】2013年の調査では13%の学術図書館長がすでにライブラリアンの職にMLSの有無は問わないとし、10%が将来的にはそのようになるだろうと回答したという結果が出ている。Simpson, Betsy “Hiring Non-MLS Librarians: Trends and Training Implications” *Library Readership & Management* (Online)28, no.1,2013, p.1 – 15.

【13】平成25年文部科学省令第5号「学位規則の一部を改正する省令」で博士論文全文のインターネット公開が定められたことで学位の妥当性が全世界に問われるようになり、学位授与の主体である大学は論文剽窃防止によりいっそう力を入れている。東京大学では、提出された博士学位請求論文の独創性・新規性・引用等に関する確認を合理的かつ迅速に行うため、平成27年12月1日以降に提出する学位請求論文(課程博士・論文博士)について剽窃チェックソフトウェア(iThenticate)による事前の確認を行っている。

しかしながら、この剽窃チェックソフトウェアが、日本の人文科学分野の学術論文のオープンアクセスの遅れにより、少なくとも東アジアを主題として日本語で書かれた人文科学の論文には、まったく何の役にも立たないことが指摘されている。佐藤康宏「《日本美術不案内114》剽窃指南」『UP』553, 2018.11, p.48 – 49.

【14】坂本拓「《座標》研究支援としての情報リテラシー教育」『図書館界』69巻5号, 2017, p.271.

【15】北米の図書館にサブジェクト・ライブラリアンが本格的に導入された契機は、第二次世界大戦下において、国防上、地域研究の必要性が高まり、大学図書館でも地域情報が重視されたことによる。山田かおり「アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアン」『Library and Information Science』71, 2014, p.34 – 35.

【16】科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について(審議のまとめ)」(2010年12月) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm (accessed 2025-10-1)

【17】科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会「学術情報のオープン化の推進について(審議のまとめ)」(2016年2月) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/036/houkoku/1368803.htm (accessed 2025-10-1)

国立大学図書館協会「国立大学図書館のオープンサイエンスへの取り組み」(2019年3月) https://www.janul.jp/sites/default/files/statement_20190312.pdf (accessed 2025-

10-1)

国立大学図書館協会「国立大学図書館におけるデジタルアーカイブの利活用に向けて」
(2019年6月) https://www.janul.jp/sites/default/files/sr_dawg_report_201906.pdf
(accessed 2025-10-1)

【18】 呑海沙織「大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの可能性」『情報の科学と技術』54(4), 2014, p.190 – 197. 呑海は選考・採用、評価、報酬、養成・研修をキーワードとして人的資源管理の観点から日本におけるサブジェクト・ライブラリアン導入を検討しつつも、最後に人事制度に触れて、導入の困難さを指摘する。

【19】 横田カーター啓子「人文学系ライブラリアンのキャリアパス：人文学の危機の時代に働く」『情報の科学と技術』69(1), 2019.6, p.28.

北米の大学図書館に勤めるライブラリアンのファカルティ・ステイタス事情については、高木和子「米国大学図書館員のファカルティ・ステイタス」『情報管理』46(8), 2003, p. 554-560. また、William H. Waltersによれば、ファカルティ・ステイタスを採用している大学図書館の割合について、2015年に北米の大学図書館203館に問い合わせて得られた124館からの回答の結果、52%で、とくに博士課程を持ち研究に重点を置く公立大学に多いという。“Faculty status of librarians at U.S. research universities” *The Journal of Academic Librarianship*. 42, 2016, p.161-171.

【20】 葉師院はるみ「サブジェクト・ライブラリアンとは何か：その導入がもたらすもの」『情報の科学と技術』55(9), 2005, p.365 – 366.

【21】 例えば、Japanese Studies Librarian は、国際交流基金の *Directory of Japanese Studies in the United States and Canada* (2011/12) で specialists にリストされ、日本研究者の一員という位置付けがなされている。

【22】 職員として採用することも検討の余地はある。その場合もサブジェクト・ライブラリアンが教育や研究と密接に関わる業務を担うからには、現行の一般職員とは区別して位置付けを行う必要がある。職員としての採用を検討する場合、参考にしたいのは独立行政法人国立文化財機構の例である。独立行政法人国立文化財機構では、事務系職員である一般職と文化財に関する調査研究、管理・展示に関連する業務を担当する、いわゆる学芸員に相当する研究職（名称としては研究員）とに区分して採用を行っている。これは大学図書館に研究職の職員としてサブジェクト・ライブラリアンを設置する場合、参考になる例であると考えられる。ただしこの場合、現行の大学の人事制度を変更する必要があり、人事異動や給与等の面で、サブジェクト・ライブラリアンに一般職員とは異なる特別な処遇を与えることになり、実現は容易ではない。独立行政法人国立文化財機構の人事関係の規定については <https://www.nich.go.jp/data/kisoku/> (accessed 2025-

10-1)。

また近年、研究者の研究活動の活性化や研究開発マネジメントの強化等を支える業務に従事する人材である URA (University Research Administrator) が、大学における教員、事務職員に並ぶ第三の職種として注目され、その配置が推進されている。専門的な能力を必要とするサブジェクト・ライブラリアンについても、「第三の職種」として位置付けることも考えられる。最近では千葉大学が学生・教員との連携をメインとした「第三の職種」としてリエゾン・ライブラリアン制度を導入し、注目される。金山亮子・武内八重子「日本におけるリエゾン・ライブラリアン—千葉大学附属図書館の挑戦(特集:図書館の理想と現実)」『専門図書館』2006, no.222, p.15-20. サブジェクト・ライブラリアンの配置を念頭に、日本の大学図書館を機能させるための人材のあり方、その人事制度を考察したものに、ティムソン・ジョウナス「日本の大学図書館を機能させるための人事制度の可能性」(2023 年度私立大学図書館協会研究助成報告書)がある。<https://www.jaspul.org/ind/asset/docs/2023hokokusho.pdf> (accessed 2025-10-1)

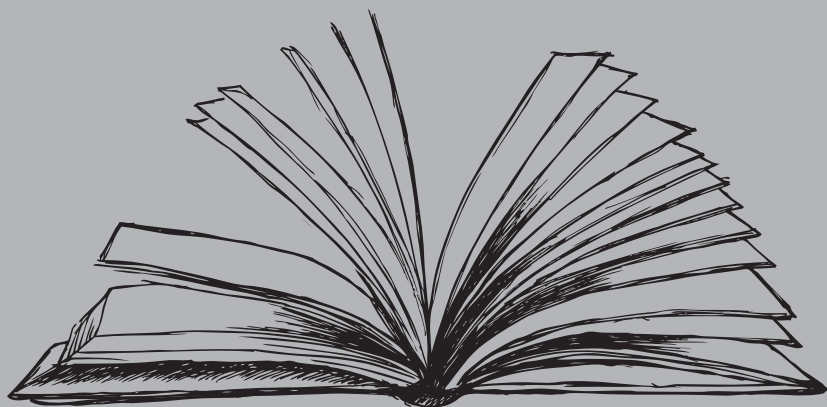
【23】注 16 を参照。

【24】自然科学の場合、例えば、国立環境研究所には、研究者の論文投稿先のジャーナルの選定や研究成果の広報・管理など、多様な研究活動を支援する高度技能専門員が図書館に配置され、実質的にサブジェクト・ライブラリアンの役割を担っている。また、医学図書館や法学関係の専門図書館でも、主題知識を活かした業務を行う図書館員が存在する。こうした事例は、大学図書館に導入する際のモデルになり得ると考える。

第 1 部

図書館をめぐる

知の変革



第1部をお読みにする前に

U-PARL は第1期(2014-2018年度)に、アジア研究図書館の構築支援、アジア研究、研究支援、講演会の開催など、様々な活動を行ってきた。その活動の一つに、貴重資料のデジタル化と公開が挙げられる。アジア研究図書館では、紙媒体の書籍を中心とした収書を行ってきたが、これらに加え、U-PARL ではオンラインデータベースの購入や、一点ものの資料のデジタル化にも注力してきた。というのも、東京大学の新図書館計画が掲げた目標の一つに、「電子図書館と伝統的図書館の融合」が挙げられていたためである。この電子図書館の収集対象には、これらのデータベースやデジタル化された資料のほかにも、もともとデジタル媒体やオンライン媒体での公開を前提として生み出されたいわゆるボーンデジタル資料も含まれる。

大学図書館では、機関リポジトリを活用し、とりわけ紀要論文や教員が作成したデジタル資料のオープンアクセス化が進められている。このような状況において、紙媒体やデジタル媒体の学術成果だけではなく、その成果の裏付けとなる研究データの管理・公開も求められるようになってきている(管理・公開された研究データのことをオープンデータという)。研究データのオープン化という新たな課題において、図書館は何をすべきなのであろうか。そして何より、研究者自身が、自分の研究データをどのように管理し、公開していかなくてはならないのかを考えて行かねばならない。オープンデータ化の取り組みについては、我が国では内閣府等を中心にガイドラインと手順の制定が急ピッチで審議されている。

本書の第一部のもととなったシンポジウム〈むすび、ひらくアジア3〉「図書館をめぐる知の変革」では、まず、このオープンサイエンスとりわけオープンデータ化について、その最新の動向を、国立情報学研究所オープンサイエンス基盤研究センターの尾城孝一氏に紹介いただいた。

尾城孝一「オープンサイエンス時代の新たな図書館員像—データライブラ

リアンに求められるスキル標準とその育成」では、①オープンサイエンス時代の研究データ管理はグローバルスタンダードであること、②研究データ管理にはコストや時間がかかること、③機関の組織的なサポートが不可欠なこと、④研究データ管理を担うのがデータライブラリアンであること、の四つが取り上げられた。中でも、データライブラリアンの養成は喫緊の課題であり、そのための取り組みとして、教材開発（『オープンサイエンス時代の研究データ管理』『研究データ管理サービスの設計と実践』）やデータライブラリアンのスキル標準（コンピテンシー）の策定に関する事例が紹介された。

次に、学内資料を集約するというアジア研究図書館のもう一つの役割に目を向けてみたい。

東京大学には様々な部局や研究室に付属する約 30 の図書館・図書室があり、そこには数多くのアジア関連の資料が存在している。アジア研究図書館には、これらの学内に分散しているアジア関係資料を可能な限り集約させるというミッションを担っている。世界の図書館を見渡せば、学内の図書館や各研究室に分散していた研究資源を集約させ、研究の活性化を図る試みが見られる。

そのような試みに成功している図書館の一つが、オランダのライデン大学アジア図書館である。ライデン大学アジア図書館は 2017 年 9 月に、四つの部署の研究資源を集約させるかたちで開館した。その立ち上げに関わり、サブジェクト・ライブラリアン兼キュレーターとして尽力されたのが**ナディア・クレフト氏**である。「橋を築け、橋になれーライデン大学のアジア図書館と橋渡しとしてのサブジェクト・ライブラリアン」と題する発表で、氏には、新図書館創設の先例として、開館のコンセプト、蔵書構築、キュレーション、デジタル化、オープンデータ化など、ライデン大学アジア図書館の取り組みについて、多岐にわたる内容をご紹介いただいた。

クレフト氏の発表の中で提示された以下の内容は、これからサブジェクト・ライブラリアン制度を実現させていこうとしているアジア研究図書館に

とって大いに参考になるものであった。

①サブジェクト・ライブラリアンの業務内容について、学部との連携、コレクション構築、学生・院生・教員へのチュートリアルが主であり、特に学部との連携を核としてコレクションの選定やチュートリアルの方向性が定められること、サブジェクト・ライブラリアンは、図書館の顔として、学部などの組織と図書館とを結ぶ橋渡しとなる重要な存在であること、②キュレーターの業務としては、貴重書の購入と目録作成、展覧会の実施、訪問研究者の支援等を行っていること、③ライデン大学アジア図書館の紹介がなされた。

ライデン大学では、アジア学に関する長い研究の蓄積があるものの、アジアに関するコレクションが分散していたため、アジア学のためのハブをつくるという構想のもと、学内三つの図書館を統合させることにより、2017年9月14日にアジア図書館をオープンしたことが述べられた。現在、500万冊の蔵書を誇っており、コレクションを世界（研究者・学生・一般）に開くという使命を担っているという。また、デジタル化やデジタル・ヒューマニティーズに貢献することや、研究のためのコミュニティー作りも大切な使命であることが語られた。

ここまで、研究資源の拡充と質の変化、研究資源の集約と新しい図書館の運営についてみてきたが、では、アジア研究図書館の開館により今後どのような変化が起こるのだろうか。その効果はどのようなものか。図書館とは、図書が配架され、人が集う空間でもあるため、視覚・聴覚を活用して人が本と接する読書空間ともいえる。

このような空間から、研究者たちはどのような知を構築していくのか。図書館の蔵書と学知の接点について考えるために、図書館情報学がご専門の筑波大学の宇陀則彦氏にご紹介いただいた。

氏の発表「**図書館に溶け込む世界の知識—資料と空間と人の新たな関係**」は、「記録を介した知識共有現象」を考えるものであった。つまり、「人が頭の中に持つ知識」（テキスト空間）と「記録された知識としての情報資源空間」

(ドキュメント空間)の間に相互作用があるという指摘である。

人間は、自らの頭の中の知識(テキスト)を外に出して、記録された知識(ドキュメント)として拡大させる。そして図書館には書籍や雑誌などのドキュメントが配架されている。その一方で、ドキュメント空間としての図書館において、人は、曖昧な考えをテキスト化し、意外な言葉の組み合わせや自分の語彙にない言葉に気づく。つまり、ドキュメント空間に入ることにより、個人の中のテキスト空間の言語化やテキスト空間内部での相互作用が生まれるのである。このようなテキスト空間内部での相互作用は、J. クリステヴァの言う「間テキスト性」と同じものだと言える。また、「間テキスト性」をドキュメント空間に持ち込むことにより「間ドキュメント性」が生まれるのであるが、この点については、パネルディスカッションで示された通りである。

以上3名の発表を受け、**小野塚知二**アジア研究図書館長よりアジア研究図書館の構想が示された。大学というものは、伝統的に学問の方法別に組織されてきたものであるため、資源の集約も、学問の方法別に行われてきた。しかし、今や、学問の方法は大きく変わろうとしており、「文理」や専門分野を超えた知の統合・融合・連携が必要になっている。その一つの方向性が、対象別資料の集約とそれによる専門分野間の、研究者と研究資源との、学外・国外諸機関との、様々な架橋(bridging)だといえる。アジア研究図書館は、まさにその試みの一つとなる。

研究資源の集約の意義・効果は次の点にある。文書(document)からテキスト(text)を読み取り、それが他のテキストと結びつけられること、つまり文脈(context)の生成が図られる。また、文書を何らかのルールに従って配列すると、一つの文書は他の文書と結びつけられ、「書脈(condocument)」(宇陀氏のいうところの「間ドキュメント性」)が生成される。東京大学にアジアに関する文書の書脈を創るのが、研究資源の集約の意義・効果だといえよう。これを達成するためには、専門図書館を土台にして形成され、また、専門図

書館を支える人材としてサブジェクト・ライブラリアンが必要である。また、研究者を擁した研究図書館として、アジア研究、とりわけアジアに関する文書の総合的な研究を行っていくことも大事な使命である。

以上の発表を受け、発表者4名に熊野純彦附属図書館長、養輪顕量U-PARL 部門長、モデレーターに齋藤希史氏（大学院人文社会科学研究科）を加え、パネルディスカッションが行われた。会場からの質問への回答も交えつつ、研究図書館、サブジェクト・ライブラリアンの具体的な業務やイメージについて、各発表者の活発な意見が交わされた。

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

U-PARL
東京大学附属図書館アジア研究情報・言語情報研究センター
VERIFIED PROJECT FOR THE ASIAN RESEARCH LIBRARY
THE UNIVERSITY OF TOKYO LIBRARY SYSTEM

むすび、ひらくアジア3

図書館をめぐる
知の変革

学 問の世界において、図書館の業務が重要であることは言うまでもありません。最近では、アジア系属するものも研究資料として、国際的な関心を集めています。また、オープンサイエンスが推進し、研究の透明性を高めることが求められ、図書館の役割が重要視されています。本シンポジウムでは、図書館の役割と、アジア研究の発展、そしてオープンサイエンスの推進について、研究者、図書館関係者、学生が一堂に会し、議論を交わします。

プログラム

- 12:30 開場
- 13:00 講演1 熊野純彦氏（附属図書館長）「アジア研究と図書館」
- 13:10 講演2 養輪顕量氏（U-PARL 部門長）「アジア研究と図書館」
- 13:30 オープンサイエンスの推進と図書館の役割
- 14:00 講演3 齋藤希史氏（大学院人文社会科学研究科）「アジア研究と図書館」
- 14:30 講演4 熊野純彦氏（附属図書館長）「アジア研究と図書館」
- 14:40 講演5 養輪顕量氏（U-PARL 部門長）「アジア研究と図書館」
- 15:00 講演6 齋藤希史氏（大学院人文社会科学研究科）「アジア研究と図書館」
- 15:30 講演7 熊野純彦氏（附属図書館長）「アジア研究と図書館」
- 16:00 講演8 養輪顕量氏（U-PARL 部門長）「アジア研究と図書館」
- 16:30 講演9 齋藤希史氏（大学院人文社会科学研究科）「アジア研究と図書館」
- 17:00 講演10 熊野純彦氏（附属図書館長）「アジア研究と図書館」
- 17:30 講演11 養輪顕量氏（U-PARL 部門長）「アジア研究と図書館」
- 18:00 講演12 齋藤希史氏（大学院人文社会科学研究科）「アジア研究と図書館」

無料・一般公開

東京大学本郷キャンパス内
福武ホールB2
福武ラーニングシアター

2019年1月26日（土）
13:00～17:30（12:00開場）

主催：東京大学附属図書館・アジア研究情報・言語情報研究センター（U-PARL） 共催：東京大学附属図書館
【問い合わせ先】TEL: 03-5841-4500 E-mail: u-parl@u-tokyo.ac.jp
東京大学附属図書館・アジア研究情報・言語情報研究センター（U-PARL） 2階202号室

東京大学附属図書館 U-PARL シンポジウム〈むすび、ひらくアジア3〉
「図書館をめぐる知の変革」
2019年1月26日（土）13:00～17:30
東京大学本郷キャンパス 福武ホール B2 福武ラーニングシアター

プログラム

13:00 開会の辞 蓑輪 顕量 (U-PARL 部門長、大学院人文社会系研究科)

13:10 趣旨説明 永井 正勝 (U-PARL 副部門長)

13:30 オープンサイエンス時代の新たな図書館員像 ～データライブラリアンに求められるスキル標準とその育成～

■ 尾城 孝一 (国立情報学研究所オープンサイエンス基盤研究センター)

14:00 橋を築け、橋になれ ～ライデン大学のアジア図書館と橋渡しとしてのサブジェクト・ライブラリアン～

■ ナディア・クレフト (ライデン大学アジア図書館)

15:15 図書館に溶け込む世界の知識 ～資料と空間と人の新たな関係～

■ 宇陀 則彦 (筑波大学図書館情報メディア系)

15:45 アジア研究図書館の可能性と方向性

■ 小野塚 知二 (アジア研究図書館長、大学院経済学研究科)

16:25 パネルディスカッション

モデレーター：齋藤希史

登壇者：熊野純彦、小野塚知二、蓑輪顕量、尾城孝一、ナディア・クレフト、宇陀則彦

17:25 閉会の辞 熊野 純彦 (附属図書館長、大学院人文社会系研究科)

オープンサイエンス時代の新たな図書館員像

——データライブラリアンに求められるスキル標準とその育成——

❖尾城孝一

1. データとは何か、データの管理とは何か

私は基本的に図書館員として、名古屋大学の附属図書館を皮切りとし、最初はいくつかの大学図書館で、その後は国立国会図書館、国立情報学研究所で様々な仕事をしてきました。2017年の3月に東京大学の附属図書館で定年退職を迎えましたが、その後すぐ4月から、国立情報学研究所（NII）のオープンサイエンス基盤研究センター【注1】という部署で特任研究員をしています。私が所属しているオープンサイエンス基盤研究センターのスタッフは、現在、全部で17名です。当センターが発足した当時は、たしか8名でスタートしたのですが、それが、気がついてみると倍になっています【注2】。NIIの中でも、今、1番、活気のあるセンターだと思います。

本センターでは、大学や研究機関におけるオープンサイエンス活動を支えるためのICT基盤の構築と運用を行っており、これが本センターのミッションです。現在、オープンサイエンス推進のための研究データ基盤の開発を進めています。この基盤というのは、データを管理するためのシステム、デー

タを公開するためのシステム、データを検索するためのシステムという、三つのプラットフォームから構成されています【図1】。さらに、これら三つのシステムの運用を支える人の基盤の整備にも力を入れています。

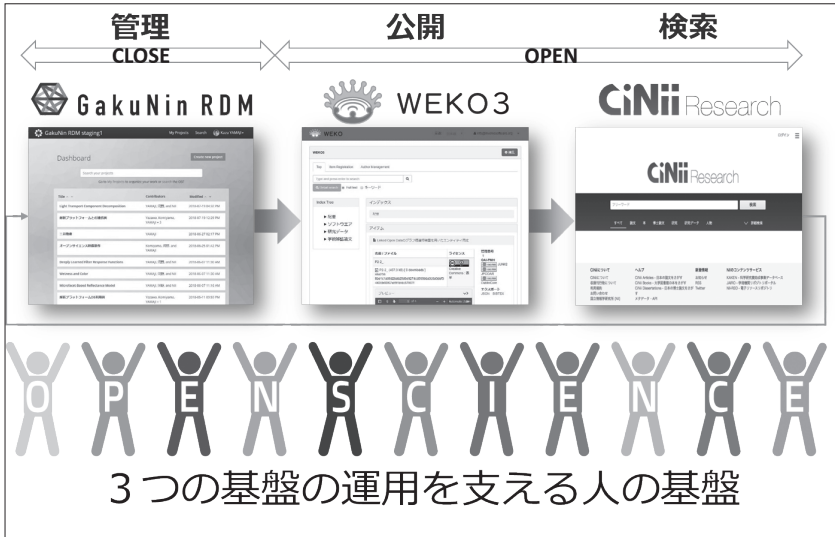


図1：オープンサイエンス推進のための研究データ基盤

本日の話は、四つ目の人の基盤が中心となります。オープンサイエンスを支える研究データ管理に関する人材育成の話に入る前に、少し、データとは何か、データの管理とは何かというお話をさせてください。研究データというのは、いろいろな定義の仕方がありますが、ここでは、研究の過程あるいは研究の結果として収集・生成される情報であるというふうに、広く捉えておきたいと思います。具体的には、観測データ、実験から得られたデータ、さらにはシミュレーションによって取られたデータなどがあります。生のデータから派生するデータや、それを編集して加工したデータというのも含めます。さらに、研究の中で参照される標準的なデータやデータセットというものもあります。具体的には、遺伝子配列データバンク、結晶データベース、さらには歴史画像のアーカイブなども研究データの一つとして扱われて

います。データというと、皆さん、自然科学系のいわゆるビッグデータなどを思い浮かべる方も多いかと思いますが、必ずしもデータというのはビッグなデータだけではなくて、スモールなデータも含まれるし、人文系の資料をデジタル化したものなども研究データとして扱っていくというような動きもあります。

研究データの管理については、ここ数年来、研究推進（オープンサイエンスの推進）と研究倫理（研究公正）という二つの流れを背景として注目を集めています。研究データ管理は、英語で Research Data Management、略して RDM とよく言われますが、ある研究プロジェクトにおいて使われた、あるいはそこから生み出されたデータの組織化、構造化、保存、共有、公開、再利用に関する一連の作業を指す言葉とされています【注3】。

2. オープンサイエンスという背景

研究データ管理の背景の一つ目としてオープンサイエンスがありますが、では、オープンサイエンスとはどのようなものなのでしょう。これもまた、定義するのはなかなか難しいのですが、内閣府の報告書によると、「オープンサイエンスとは、公的研究資金を用いた研究成果（論文、生産された研究データ）について、科学界はもとより産業界及び社会一般から広く容易なアクセスを可能にし、知の創出に新たな道を開くとともに、効果的に科学技術研究を推進することでイノベーションの創出につなげることを目指した新たなサイエンス」のこととされています（内閣府 2015）。

一方、欧州委員会に、Open Science Monitor というプロジェクトがありますが、これはオープンサイエンスに関わる様々な活動の進捗状況というのをモニタリングしようというプロジェクトです【注4】。このプロジェクトではオープンサイエンスの進捗を三つの観点から見ていこうとしています。

その一つが出版物のオープンアクセス。いわゆるオープンアクセスです。

論文や図書へのオープンなアクセスのことです。二つ目が研究データのオープン化。三つ目が、さらにもう少し幅広く、オープンな学術コミュニケーションです。このような三つの観点からオープンアクセスの進捗を見ていこうとしています。ですから、このプロジェクトは、オープンサイエンスをこうした三つの活動を総合したものと捉えていると言えます。

さらに、様々なオープンな学術活動のアンプレラがオープンサイエンスだとみなすこともできます。このように、オープンサイエンスには様々な捉え方がありますが、少なくともデータを扱うということは、共通していると考えてよいでしょう。

3. 研究公正、不正防止という背景

もう一つ、研究データ管理の背景として、研究公正、不正防止という側面があります。ご存じの方がいるかもしれませんが、Retraction Watch というサイト【注5】があり、出版後に何らかの不正が発覚して取り下げられた論文のデータベースを検索することができます。

研究公正については、文科省が2014年にガイドラインをつくって、研究機関は、研究者に対して一定期間研究データを保存し、必要な場合に開示することを義務づける旨の規定を設けるべし、ということを大学に対して要求しています。そこには、一定期間、研究データを保存しておくことと書いてありますが、この期間というのは一体どれくらいの期間なのでしょう。文科省は学術会議にそれを諮問して、学術会議は大体10年間の保存を原則とすると回答しています。これによって、いわゆる研究データの10年保存という原則が確立することになります。これにあわせて、今、各大学で規則の整備が行われており、ほとんどの大学が、研究データを10年間保存するという規則を持っています。

4. トップダウンの圧力

次に、別の側面から研究データを見てみると、政府・研究資金配分機関・学術機関・出版社という、上からのトップダウンのポリシーと、それから研究者／研究者コミュニティ自身による活動、ボトムアップ的な活動の両方から、研究データ管理というものが、今、注目を集めてきています。特に最近では、上からのトップダウンの圧力というものが物すごく強くなってきています。

日本の例で、国内のオープンサイエンスに関連する政策を見てみると、2013年6月に、G8の科学技術大臣会合で研究データのオープン化を確約する共同声明というものが出されて、日本もそれに調印しました。その後、それを皮切りとして、オープンサイエンスやビッグデータの公開・共有に関する国レベルの政策というのが立て続けに出てきています。

それを受けて、国内の研究助成機関、つまりファンディングエージェンシーの、AMED、JST、経産省といったところが、研究費を配分する条件として、データマネジメントプラン（データ管理計画書）の提出を研究者に要求するようになってきています。これを提出しないと研究費をもらえないわけです。科研費を出しているJSPSはやや遅れており、データに関するポリシーはまだ持っていませんが、いずれ科研費でも、データマネジメントプランを書いて提出しないと科研費が取れなくなるという時代がすぐ来ると思います【注6】。

出版社の動きを見ても、論文を投稿する際に、論文の基になったデータをきちんとデータリポジトリなどに登録しておいて、それをきちんと論文の中で引用するとか、それへのリンクを設定するといったことを求めるガイドラインをつくっており、Elsevierは五つのガイドラインを示しています【注7】。

Springer Natureも四つのタイプのデータポリシーというものをづくり、Springer Natureが出版するジャーナルは次のポリシーのいずれかを採用

するようにという方針を示しています【注8】。それゆえ、論文を投稿するときも、データを付して投稿しないと、論文を発表・出版できないという状況にだんだんとなりつつあります。

5. 追い込まれている研究者

このような研究データ管理というのは、基本的には、研究を行う研究者自身が行うものですが、研究者の意識調査の結果を見ると、ほとんどの研究者は、データをきちんと管理して、それを共有していくことが重要だと答えています。同時にいくつかの課題が指摘されており、利用可能な形でデータを整理するのが大変だというのだ、著作権とかライセンスのことがよくわからない、どのリポジトリにデータを登録していいのかわからない、データを登録する時間がない、コストがかかる、といったことが課題として挙げられています (Stuart, David et al. 2018)。

国内の調査でも、データ公開に関する資源の充足度について、やはり人材、時間、資金が不足する傾向にあることがわかります。要するに、研究者は、できればデータをきちんと管理して、それを共有して公開できるようにしたい、あるいは、そうしなければいけないという事態に追い込まれているのですが、時間も予算もなく、なかなか思うようにできないという実態が、明らかになっています (池内ほか 2017)。

6. 図書館と研究データ管理サービス——海外と日本の違い

そのような、困っている研究者をサポートするサービスが、研究データ管理サービスと呼ばれています。研究データにはライフサイクル【図2】【注9】というものがあり、その全体に対して、図書館職員などを含めた研究支援スタッフが研究者に提供する一連のサービスだということになります。

海外の研究大学では、大学としての研究支援の一環として、こういう研究データ管理サービスというのがすでに当たり前のように行われています。例えばエジンバラ大学では、図書館に研究データサポートチームというものを置き、そのチームが中心となって、四つのサービスで研究者を支援しています。研究前のサービス、研究中のサービス、それから研究が終わった後のサービス、さらに日常的な教育の制度という活動で、研究者を支えており、大学が組織としてデータ管理に関して研究者を支えるという体制ができているという事例です【注10】。

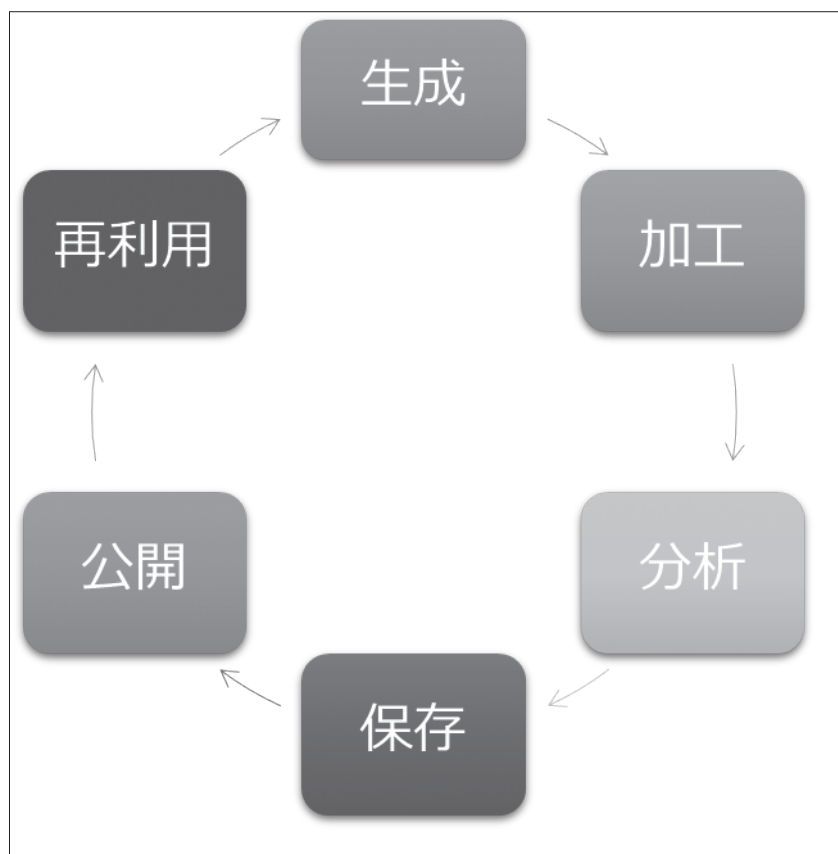


図2：研究データのライフサイクル

翻って日本の現状を見てみると、日本の大学・研究機関では、研究データの管理、保管、公開について十分な認識もなく、現時点では具体的な動きは何も見られません。研究不正への対応の一環として、多くの大学が研究データの保管を定めた規則やガイドラインを制定していますが、研究者が自分たちで保管することを義務づけているだけで、大学からの支援はなされていません（倉田ほか 2017）。これが日本の実態だと思います。

7. 日本での人材育成——データライブラリアンをどう育てるのか

このような状況をふまえると、日本でもデータ管理に関して研究者を支えるようなサービスを、これから大学や研究機関でつくっていかねばならないと思いますが、それには、それを担う人つまり、人材の育成が必要です。いわゆるデータライブラリアンと呼ばれている、サポートをする専門的な人材の育成が必要です。そして、人を育成するには教材が必要だ、ということで、大学の図書館の機関リポジトリのコミュニティであるオープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）【注 11】の中にある研究データタスクフォースという組織が、ここと NII と共同して、日本語版の教材を作ろうということになりました。海外にはすでにたくさん教材があったので、それらを参考にして、事例調査を行い、それを類型化して、構成要素を抜き出し、日本語版の教材の構成案をつくりました。

そうして完成したのが、第 1 弾の教材『RDM トレーニングツール』です。これは基礎的なことを学ぶための教材で、2017 年 6 月に、先ほどの JPCOAR というコミュニティのサイトでスライド版を公開しました【注 12】。さらに、2017 年 11 月から 2018 年 1 月にかけて、JMOOC の gacco という、MOOC のプラットフォームに乗せて、オンライン講座『オープンサイエンス時代の研究データ管理』としても提供しました。この講座の動画については、NII のサイトにアーカイブしているので、そこから見ることが

できます【注13】。

さらに、それに続いて第2弾の教材として『研究データ管理サービスの設計と実践』を作成しました。これは、どちらかというと応用編で、研究者自身ではなくて研究支援職員、図書館員、URA、さらには情報センターの技術スタッフなどの人々のための教材です。研究者の研究プロセスに沿って、具体的なサービスの設計と実践について学ぶという教材になっています。この教材についても、JPCOARのサイトですでに公開されています【注14】。

第2弾の教材は全体の構成が6章になっています。「序論」で、研究データというのは何かという基礎的なことを学ぶ。これは、第1弾の教材の復習のようなものです。それから第2章「サービスの設計」では、サービス設計の全体について述べられている。その他は、研究前（第3章）、研究中（第4章）、研究後の支援（第5章）、日常的な支援（第6章）という内容になっています。

2018年の8月から10月にかけて、この教材をNIIが開発中のオンライン学習プラットフォームに載せて、実験的に使ってもらおうというプロジェクトを行いました。全国の18機関の、あわせて約140名のモニターの方に協力していただきました。モニターの方の内訳を見ると、やはり図書館員、図書館の人が全体の58%で1番多かったのですが、それ以外にも、研究者、URA、技術系の職員、事務系の職員など、幅広い職種の人たちに使ってもらいました。

モニターの方々からは多様な意見をいただき、これをふまえて、今、教材の内容とシステム改修を行っているところです。そして、なるべく早く、この教材をオンライン講座として提供できるようにしたいと思っています【注15】。

このように、これまで私たちは、研究データ管理に関して、それを支援するデータライブラリアンと呼ばれる人たちを育てるための教材を作成し、それをオンライン講座として提供するというような活動をずっと行ってきまし

たが、そもそも教材を作るには、シラバスが必要であります。そして、シラバスを書くには、その前に、求められるスキルやコンピテンシーをきちんと定義しておく必要があります。そこで、一旦立ち止まって、いわゆるデータライブラリアンに求められるスキル標準あるいはコンピテンシーというものをしっかりと考え直す調査を始めました。

また、スキル標準を制定する前に、データライブラリアンの位置づけをはっきりさせておかないといけないと考え、次のように捉えることとしました。つまり、研究データ管理に関しては様々な専門的な知識が想定されるが、その知識やスキルのすべてを1人で身につけて、それを提供するスーパーライブラリアンを育てるのではなく、むしろ、図書館員や学内の関連する部門の職員が集合的にこういう機能を提供する、その機能の総称をデータライブラリアンと定義したほうがいいのではないかと捉えました。このような前提の上で、スキル標準の策定の作業を今進めているところです。

まず、文献調査をしました。海外のデータライブラリアンのコンピテンシーに関する文献を調べて、必要なスキルを抽出しました。それから、国内の関連職種のスキル標準に関する資料がいろいろとあります。データサイエンティストのためのスキルチェック、アーキビストの職務基準書、知的人材スキル標準、URA スキル標準などいろいろとあるので、こういった資料も参考にしました。さらに、既存の教材の調査もやっています。これも、海外の約10種類の教材を対象として調査を行いました。教材から遡って、いわゆるリバースエンジニアリング的にスキルを特定しようというのがその狙いです。

現在は、スキルを大項目と小項目に分けて、小項目ごとに、必要な能力や技術を定義しているところです。さらに、これらのスキルと職種の対応も検討しているところです。

このスキル標準の活用の仕方についてはいくつかあると思いますが、今考えているのが、教材と連携させた使用です。まず、教材を小さく分割し、マイ

クロコンテンツ化します。そして、それぞれにメタデータをつけておきます。その上で、スキルとマイクロコンテンツ化した教材を関連づけておくと、マイクロコンテンツを自由に組み合わせて、教材のカスタマイズというのが簡単にできるようになります。例えば、基礎編の教材、図書系職員向けの教材、あるいはデータ公開編などの教材が比較的簡単に作れるようになるのではないかと考えています。さらに、各機関における人材育成の指標・ガイドラインなどにも使えるでしょう。あるいは、将来的にデータライブラリアンの資格認定というのが求められるようになったときにも、その達成基準のようなものにも使えるのではないかと想定しています【注16】。

8. それぞれで異なるデータライブラリアンのあり方

最後にまとめをしておきたいと思います。オープンサイエンス時代の研究データ管理というのは、もはやグローバルスタンダードであり、避けては通れないものです。データ管理をしっかりとやらないと、研究者は研究費がもらえません。共同研究、国際共同研究などにも加えてもらえません。さらに論文も出せないということになると、これはやらざるを得ません。ですが、データ管理にはコストや時間がかかります。これを全部、研究者に任せてしまう、あるいは研究者に負わせてしまうということになると、今以上に研究者の研究時間の劣化が進んで、我が国の研究力がますます低下する一方になってしまいかねません。それゆえ、やはり機関として、組織的なサポートを行うことが必要でしょう。そして、それを担うのがデータライブラリアンなのではないでしょうか。データライブラリアンのあり方というのは、おそらく、各大学でそれぞれ異なるのだと思います。大学の中に関連する様々なステークホルダーが、自らが考えて、自らの大学にふさわしいデータライブラリアン像というものをつくっていく必要があると私は考えています。

注

- 【1】国立情報学研究所．オープンサイエンス基盤研究センター．<https://rcos.nii.ac.jp/>, (参照 2022-02-15).
- 【2】2022 年 2 月 15 日現在のスタッフは、27 名となっている．<https://rcos.nii.ac.jp/about/member/>, (参照 2022-02-15).
- 【3】Research Data Oxford. “About RDM”. <https://researchdata.ox.ac.uk/home/introduction-to-rdm/>, (参照 2022-02-15).
- 【4】European Commission. Open Science Monitor. https://ec.europa.eu/info/research-and-innovation/strategy/strategy-2020-2024/our-digital-future/open-science/open-science-monitor_en, (参照 2022-02-15).
- 【5】Retraction Watch. <https://retractionwatch.com/>, (参照 2022-02-15).
- 【6】『令和 4（2022）年度 科学研究費助成事業 公募要領 特別推進研究、基盤研究（S・A）令和 3（2021）年 7 月 1 日』によれば、「採択された研究課題の研究代表者に対し、交付申請時に、当該研究課題における研究成果や研究データの保存・管理等に関するデータマネジメントプラン（DMP）の提出を令和 6（2024）年度科研費以降求める予定」とされている．https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/03_keikaku/data/r04/r4_7_kobo.pdf, (参照 2022-02-15).
- 【7】Elsevier. Research Data Guidelines. <https://www.elsevier.com/authors/tools-and-resources/research-data/data-guidelines>, (参照 2022-02-21).
- 【8】Springer Nature. Research Data Policy Types. <https://www.springernature.com/gp/authors/research-data-policy/research-data-policy-types>, (参照 2022-02-21).
- 【9】Mariette van Selm, RDM Support - basic training course for information specialists. をもとに加工．<https://doi.org/10.6084/m9.figshare.1285313.v1>, (参照 2022-02-21).
- 【10】The University of Edinburgh. Information Services. Research Data Service. <https://www.ed.ac.uk/information-services/research-support/research-data-service>, (参照 2022-02-23).
- 【11】オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）．<https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/>, (参照 2022-02-23).
- 【12】RDM トレーニングツール．<https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/records/34>, (参照 2022-02-23).
- 【13】オープンサイエンス時代の研究データ管理．<https://www.nii.ac.jp/service/jmooc/>

rdm/, (参照 2022-02-23).

【14】研究データ管理サービスの設計と実践（第2版）. <https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/records/607>, (参照 2022-02-23).

【15】2021年6月14日に、研究データ管理に関するほかの教材とともに、学習管理システム「学認LMS」から公開された。 <https://rcos.nii.ac.jp/news/2021/06/2021618-0/>, (参照 2022-02-23).

【16】このスキル標準は、国立情報学研究所オープンサイエンス研究データ基盤作業部会トレーニング・サブ・ワーキング・グループによる検討を経て、2021年9月21日に公開された。 <https://doi.org/10.20736/0002000219>, (参照 2022-02-23).

参考文献

- ・ 内閣府 2015: 「国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会. 「我が国におけるオープン推進の在り方について～（2015年3月30日）」. <https://www8.cao.go.jp/cstp/sonota/openscience/>, (参照 2022-02-15).
- ・ Stuart, David et al. 2018: Whitepaper: Practical challenges for researchers in data sharing. Springer Nature. <https://doi.org/10.6084/m9.figshare.5975011>, (参照 2022-02-21).
- ・ 池内有為ほか 2017: 「研究データ公開と論文のオープンアクセスに関する実態調査」『NISTEP RESEARCH MATERIAL』268. <http://doi.org/10.15108/rm268>, (参照 2022-02-21).
- ・ 倉田敬子ほか 2017: 「日本の大学・研究機関における研究データの管理，保管，公開：質問紙調査に基づく現状報告」『情報管理』60-2:119-127. <https://doi.org/10.1241/johokanri.60.119>, (参照 2022-02-21).

橋を築け、橋になれ

——ライデン大学のアジア図書館と橋渡しとしてのサブジェクト・ライブラリアン——

※ナディア・クレフト

1. はじめに

オランダより参りましたナディア・クレフトです。最初に自己紹介をいたします。私は高校生のときに武道を習い、日本のアニメを見たり漫画を読んだりして、卒業する1年前に日本語と日本の文化を勉強しようと決めました。2005年、18歳で高校を卒業し、その後、ライデン大学の日本研究所に入学しました。2008年、大学3年生になる前にJASSO（独立行政法人日本学生支援機構）の奨学金を受給し、1年間長崎大学に留学しました。それが初めての来日であり、長崎大学では、日本語と日本の文学、歴史を学び、日蘭関係についての授業も履修しました。授業以外の時間には、劇団サークルで活動したり、毎週友達と近所の居酒屋へ行きお酒を飲んだりしました。大変勉強になったすばらしい1年間でした。

留学中に九州の歴史と日蘭関係に興味を持ち、帰国後も研究を続けました。2010年、修士論文の研究のために再び1年間長崎大学に留学しました。修士論文のテーマは、ヨーロッパではよく知られていない島原・天草の乱で

した。乱とキリスト教徒の關係に焦点をあて、漢文と 17 世紀のオランダ語資料に基づいて研究をいたしました。2011 年に大学院の修士課程を修了し、研究者としてライデン大学で島原・天草の乱の研究を続けようと考えたのです。

ところが、転機が訪れました。2012 年にライデン大学東アジア図書館の日本研究司書の方が退職され、さらには東アジア図書館がライデン大学本館と合併することが決定されました。そして、日本研究を担当するサブジェクト・ライブラリアンの求人が出されたのです。私は大学の教授に薦められ、新しい求人に応募したところ、運よく採用されました。私のサブジェクト・ライブラリアン（オランダ語では Vakreferent ファクレフレンツ）としてのキャリアは今年(2019 年)の 4 月 1 日には 7 年目に入ります。この講演では、サブジェクト・ライブラリアンとキュレーターについて述べたのち、ライデン大学のアジア図書館（Asian Library）と今後の私のチャレンジについてご説明いたします。

2. サブジェクト・ライブラリアンとキュレーター

(1) サブジェクト・ライブラリアンとしての主なタスクについて

サブジェクト・ライブラリアンの仕事の定義は決まっていて、おそらく、サブジェクト・ライブラリアンの仕事というのは世界中どこでも同じと言ってよいでしょう。サブジェクト・ライブラリアンの主なタスク(任務)としては、①ファカルティー・リエゾン (faculty liason)、②コレクション形成 (collection development)、③チュートリアル (教材・解説書)、④プロジェクト、⑤その他、があります。以下では、サブジェクト・ライブラリアンの仕事のうち、何よりも 1 番大事なタスクであるファカルティー・リエゾンについて、他の主なタスクより詳しく説明したいと思います。

①ファカルティー・リエゾン

ファカルティー・リエゾンとは、学部連絡係のことです。サブジェクト・ライブラリアンは、大学図書館の「大使」のように、大学図書館と学部の研究者との間の「橋渡し」の役割を果たします。「橋渡し」というのは、サブジェクト・ライブラリアンが図書館からの情報を一方的に宣伝することではありません。ファカルティー、すなわち、学部には、研究者、学生、外国の研究者がおり、彼らから受けた、質問、苦情、問題、提案とアイデアを聞いてとりまとめ、それに基づいた図書館としての新しいサービス、知識、コレクション、ソフトウェア、ファシリティーズ（facilities、設備や施設）、専門図書館員などを、ファカルティー側に伝えることが「橋渡し」となるのです。我々サブジェクト・ライブラリアンは、ファカルティー・リエゾンを通じて、学部の問題点や要望を理解することができ、その知識を自分の仕事に生かすことができるのです。

学部と連絡をとる場合、学部全体を相手にするだけではなく、個別へのアプローチを行う必要もあります。私が担当している学部では、ファカルティーのメンバーの人数は約25人ですので、その一人一人と話をしたり、相談したりすることが比較的簡単であります。しかし、大きい学部を支えているサブジェクト・ライブラリアンは、学部の代表者たちと話すのが通例となります。私も少なくとも毎年1回は、ファカルティーのメンバーと公式なミーティングを行っています。公式なミーティングが終了すると、内容をレポートにまとめ、他のサブジェクト・ライブラリアンや我々の上司が、レポートに簡単にアクセスすることができる場所にそれを保存して共有します。このレポートの中には、いわゆるフォローアップ点、つまり、ミーティングの結果を受けて、ファカルティーから出された要望や苦情を解決するためのアクションも含まれています。解決できなかった問題であっても、きちんと検討し、その結果を学部に報告しなければなりません。

ファカルティー・リエゾンの主な内容を紹介する前に強調したい点として

は、ファカルティー・リエゾンのレポートの内容は、学部全体を等しく代表するように、学部の教授だけではなく、准教授、研究者、語学担当教員、さらに学生と相談した結果など、偏りなくカバーしていなければならないということです。

私が考えるファカルティー・リエゾンの主な内容は以下の通りになります。

(i) 図書館の新しいサービスと購入したコレクションについてまとめ、相手に報告すること。(ii) 相手が図書館に対してどのようなサービス改善を望んでいるのか、新しいサービスやプロジェクト、コレクションを望んでいるのかといった点を確認すること。(iii) 相手が、プロジェクトのためにデータを収集する研究のための申請を申し込み中か否かを確認すること。相手がデータを収集中であれば、大学図書館のデータ・ライブラリアンに紹介することを考える。(iv) 相手の研究や教育のために必要となる資料が図書館にあるか否かを調べること。(v) 相手が学生の場合、宿題と論文のために必要な資料をカタログやデータベースで発見できるか否かをあらかじめ確認しておくこと。そして、(vi) 問題点、提案、苦情があるかどうかの調査、です。相手によって要望が異なるため、私は上記の項目を基本チェックリストとして作成し、それを確認するようにしています。個人的なアプローチとしては、公式なミーティングだけではなく、ランチミーティングや「飲み会」のような非公式な出会いやソーシャルメディアも活用しています。特に、「飲み会」をすると、相手は安心し、仲よくなることができるので、「飲み会」はオランダでもお勧めのアプローチ方法であります。

次に、「新しい知識とその問題」について述べたいと思います。私は、大学図書館はいつの間にか時代遅れの機関になるおそれがあるものだと感じています。その理由は、現代の研究方法や研究のトレンドというものが、伝統的な図書館が提供する資料と知識の時代から、誰でもどこからでもアクセスできる資料の時代、言い換えればデジタルヒューマニティーズ時代に移行してきているからです。それでは、時代遅れにならないように、現代の大学図

書館はどうすればよいのでしょうか？その回答の一つとして、データ・ライブラリアンを配置して、オープンサイエンスの知識を培い、現代の研究にふさわしいサービスを提供する必要があると考えています。

しかしながら、このような新しい知識が図書館にあったとして、どうすればそれを利用者に紹介することができるかが次の課題になります。おそらく、この課題まで計画に入れている図書館はまれなのではないでしょうか。新しいサービスの提供について、経験上頻発する問題には次のようなものがあります。まず、利用者は新しい知識について知らないか、あるいはそれを耳にしたことがあっても、利便性や必要性を感じていないことがあります。次に、新しい知識は図書館とは無関係なものだと思い込んでいることもあります。あるいは、新しい知識に興味があっても、図書館は「誰も知らない要塞みたいなところ」であると認識しているため、図書館に出入りすることに恐怖を感じる人もいます。さらに、新しい知識について図書館に聞いてみたいと思っただけでも、「変な質問や愚かな質問を知らない専門家にするのは怖い」と感じ、連絡をためらっている人もいます。

しかしながら、サブジェクト・ライブラリアンは、自分自身が持つファカルティーとの間のネットワークを利用して、自分自身が利用者にとって親しみやすい「図書館の顔」となることで、このような問題を解決することができるのです。具体的には、(i)利用者にとってすぐに必要なものではなくとも、新しい知識とサービスを利用者に紹介し、利用者に図書館の専門家を紹介する。(ii) 利用者と同じ分野の研究者の提案を取り上げながら、新しい知識とサービスの利便性について議論する。(iii) 新しい知識とサービスにファカルティーと学生が興味を持ってくれた場合には、図書館の専門家を紹介して橋渡しをする。ファカルティーや学生と図書館の専門家の双方とを安心させるために、顔合わせにはサブジェクト・ライブラリアンが同席する、といったことができるのです。

以上のことを要約しますと、サブジェクト・ライブラリアンは、ファカ



■ 図1：2017年のクリスマスの写真。
「図書館の顔」であるサブジェクト・ライブラリアンたち。

ルティー・リエゾンを行い、図書館・ライブラリアンとファカルティーとの間に「橋を築き」、図書館の大使として、新しい知識の世界をファカルティーに紹介するように努める。そのことによって、ファカルティーが図書館の新しい知識に興味を持ってくれるようになります。サブジェクト・

ライブラリアンは、自分自身が「橋になり」、研究者と学生に対して図書館の専門家を紹介する役目を果たしているのです【図1】。

②コレクション形成

次にコレクション形成についてお話をいたします。サブジェクト・ライブラリアンは司書と同じく、自分の地域・専門の資料を購入します。しかし、サブジェクト・ライブラリアンは、資料購入にかけられる時間が限られているという点で司書とは異なります。

コレクション形成計画を策定する際には、下記の七つの情報が必要になります。(i)コレクションの形成史。(ii)毎年の予算。(iii)購入方法とベンダー(販売会社)。(iv)購入する資料がどのファカルティーのためになるのか？私の場合であれば日本学部と韓国学部のためになるのか？(v)購入計画はファカルティーが現在関心を持っているトピックと関連しているか。これを考えるために、購入計画は2年おきに改訂されたり、2年に満たない場合でも更新されたりすることがあります。(vi)強みであって、さらに充実させてい

くべきコレクションと、これから形成していくべき弱いコレクションについての詳細な情報。なお、ヨーロッパにおいて図書館間相互貸出は大変容易であるため、できるだけヨーロッパの図書館等に所蔵されていない専門書の購入に力を入れます。(vii) ほかのサブジェクト・ライブラリアンと地域・専門が重なる場合は、分担方法の協定を定めるのですが、その協定についての情報も重要となります。

このように、私のコレクション形成計画は非常に幅広いものです。ライデン大学において、コレクション形成計画というものは、担当者が仮に明日転職することになったとしても、後任のサブジェクト・ライブラリアンが、担当するコレクションならびに利用者のすべての面についてすぐに理解できるように書かれるべきもの、とされています。

③チュートリアル（教材・解説書）

コレクション形成計画を策定することとファカルティー・リエゾンとは大変に重要なものなのですが、たとえ図書やデータベースがあっても、利用者がオンラインカタログ上で必要な資料を見つけられなければ意味がありません。いわば、大学図書館の負けであるわけです。特にライデン大学のアジア図書館の利用者は、コレクションにアクセスするためにオンラインカタログを使わざるを得ないので、カタログとデータベースの使い方を学ぶため、いわゆる図書館チュートリアルを提供する必要があります。学術的なカタログと専門のデータベースを検索するためのテクニックというものは、学部1年生から教授まで、今日の研究者にとって大事なスキルとなっています。そのため、ライデン大学図書館は、資料の供給者として責任を持って、研究を遂行するためのインフォメーション・リテラシーのコースを設置しています。私が学生だった頃には図書館のチュートリアルがなかったこともあり、私自身がライデン大学図書館のコレクションの幅広さを理解できたのは、実は図書館に勤務するようになってからのことでした。学生のときに知っていたら

と思う情報が多くあります。そこで私はサブジェクト・ライブラリアンとして就職した直後に情報リテラシーの一般コースのチュートリアルを作成いたしました。

一般的な傾向として、1年生は検索のテクニックを持たないので、資料をすぐ見つけられないと、図書館を飛び越えて Google Scholar を使っています。したがって、入学後の1年生がすぐにカタログを利用することができるように、基本的なカタログ・チュートリアルを提供するようにしています。2年生以上は、エッセイや論文執筆のための資料を自力で探さないといけないので、2年生以上に対しては、学術的なキーワードを認識させ、論文の注から芋づる式に関連資料を発見することができるように支援しています。また、日本学部のデータベースを自力で使えるようなチュートリアルも提供しています。3年生と修士課程の大学院生が、卒業論文または修士論文の執筆のために、日本語で書かれている原資料を発見するための上級コースも設置されています。この上級コースでは、日本の図書館からの文献の複写を取り寄せる方法も教えています。博士課程の大学院生と研究者、教授からも、データベースの使い方を教えてほしいという要請がまれに寄せられます。しかし、専門性が非常に高いデータベースの使い方を教えるのはサブジェクト・ライブラリアンであっても困難なので、データベースのベンダーと一緒に教えるのが普通になっています。

学生のインフォメーション・リテラシーの弱点はどのような点にあるのか、使いにくいデータベースや学生に人気がないデータベースはどのようなものか。そういったことを知らずにチュートリアルを作成しても無意味となりますので、ファカルティー・リエゾンによる情報収集は、チュートリアルを作成することでも非常に重要となっています。

④プロジェクト

最後の主なタスクは、参加者あるいはリーダーとして、図書館のプロジェ

クトに参加することです。具体的には、自分のサブジェクト・ライブラリアンとしての知識が必要とされた際に、顧問としてプロジェクトに参加します。また、サブジェクト・ライブラリアンとして、自分の担当する学部が新しいサービス、知識を必要とした際には、新しいプロジェクトを提案して、図書館職員チームを形成してそのリーダーを務めます。プロジェクトの最終結果をファカルティに報告することと、逆にフィードバックを集めて図書館のプロジェクトチームに報告することは、サブジェクト・ライブラリアンの重要な仕事となりますので、プロジェクトを行う際にもファカルティ・リエゾンとは重要なポイントとなります。

以上の四つのタスクは、サブジェクト・ライブラリアンの仕事のエッセンスとなっています。これらのタスクの周辺には、事務処理やソーシャルメディアの運営、諮問機関など、様々な副次的なタスクがありますが、本日は省略させていただきます。

(2) キュレーターとしての主なタスクについて

次にキュレーターとしての主なタスクについてお話をいたします。2017年1月から私はキュレーターの仕事を週1日担当することになりました。現在、東アジアの貴重コレクションの責任者は、私と中国担当のサブジェクト・ライブラリアンであるマルク・ギーベルト (Marc Gilbert) 氏の2名です。私はライデン大学図書館で初めての日本学専門家キュレーターとなりましたが、キュレーターになるための教育は受けてきませんでした。そのため、今後のキュレーターのタスクと、担当する貴重コレクションの歴史とを勉強する必要を感じています。著者のキュレーターとしての主なタスクは次の通りです。



■ 図2：企画展“Fish and Fiction”の様子
(2018年09月20日～2019年01月19日開催)

①研究者の支援

ライデン大学図書館の貴重コレクションについて、キュレーターより詳しい知識をお持ちの人は、専門の研究者です。外国の研究者が自館に来訪した際には案内や手助けをしております。これは私にとって大変に勉強になることであります。

②貴重書のカタロギング

貴重書のカタロギング（カタログ作成）は通常の図書より難しく時間がかかるため、特に明治期以前の資料のカタロギングはキュレーターが担当しています。

③貴重書の購入

貴重書のコレクションを拡大するために、現存のコレクションをふまえて新資料を購入するというタスクもあります。例えば、2018年に購入したものに、「改正日本輿地路程全圖」で有名な長久保赤水がなした1780年版の手書き地図と佐賀の鍋島藩に関する蘭学者のアーカイブがあります。

④展示チームの支援

毎年3回、ライデン大学図書館では展示を行っています。展示のテーマによって異なりますが、日本か韓国の貴重な資料を展示することが多いため、展示担当者のために資料を選抜し、準備するのも私の仕事の一部となってい

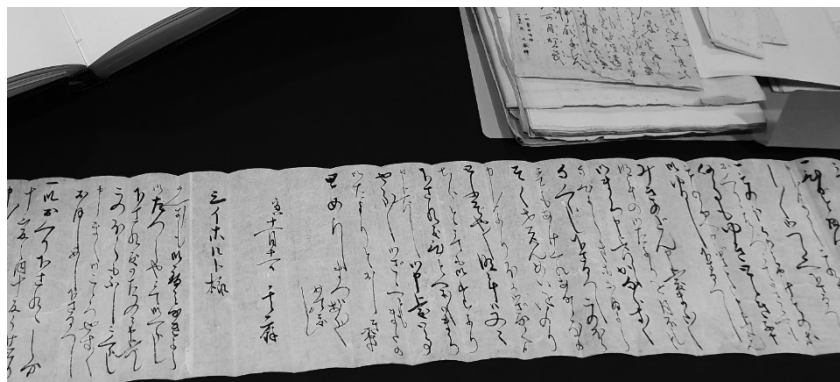


図3: [Letter from Kusumoto Taki (1807-1869) to Philipp Franz Von Siebold (1796-1866)]
BPL 2186: M 8

ます【図2】。

⑤貴重コレクションのプロモーション

担当コレクションの中に発見された「宝物」を、ソーシャルメディア、テレビ、ラジオ、新聞といったメディアでプロモートすることはきわめて重要な仕事となります。例えば最近発見された資料の一例としては、出島の其扇（そのぎ）という女性（楠本たき:1807～69年）がフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philipp Franz von Siebold）へ送った手紙があります【図3】。日本のニュースでも取り上げられたので、本日の参加者の中にもご存じの方がおられるかもしれません【注1】。この発見はオランダでも大ニュースとなりました。2019年1月には総理夫人の安倍昭恵氏がアジア図書館を来訪しこの資料を見学されました。

⑥貴重書のデジタル化のための寄付金集め

私自身のキュレーター業務のうち、現在1番大切なものは、日本の貴重書を世界に「ひらく」ための寄付金集めです。アジア図書館の「宝物」をデジタル化して世界に「ひらく」ことは、新しいライデン大学アジア図書館の

目的の一つであるからです。

3. ライデン大学アジア図書館とこれからのチャレンジ

(1) ライデン大学アジア図書館について

ライデン大学アジア図書館は2017年9月に同大学図書館内（3階）に開設しました【図4】。以下、①コレクションとその担当者、②アジア図書館の新設、③アジア図書館の意義と目的、④アジア図書館の開会式についてお話をしたいと思います。

①コレクションとその担当者について

ライデン大学アジア図書館の主なアジアコレクションについて、それぞれの地域ごとに、コレクションの特徴、有名な貴重書、担当者を紹介いたします。最初に東南アジア・南アジア、インドネシアの資料について説明します。ライデン大学図書館のインドネシアのコレクションは世界で1番大きいインドネシア関係資料のコレクションとなっています。これらは、(i) 王立熱帯研究所（KIT / Royal Tropical Institute、アムステルダム）、(ii) オランダ王立東



図4：ライデン大学図書館3階にあるアジア図書館
（写真の最上階）

南アジア・カリブ学研究所（カーイーテーエルフュー / KITLV / Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies）、(iii) 同図書館のジャカルタ・オフィス、(iv) ライデン大学図書館の東南アジアのコレクション（もとの

ケルン研究所 / Kern Institute 中のコレクション)、という四つの図書館が合併した結果形成されたものです。このコレクションには、現代の図書、雑誌と新聞だけではなく、古い写真や貝葉文書、銅板も含まれています。

ライデン大学図書館はカーイーテーエルフェー (KITLV) のジャカルタ・オフィスの同僚を通じ、インドネシアで刊行された図書や雑誌を購入しています。なお、インドネシアコレクションの中には、カリブ海地域の資料など、インドネシアに関係のないものも含まれています。

次に南アジアコレクションについて説明いたしましょう。南アジアコレクションについては、インドネシアコレクションのように、直接南アジアから資料を購入しているわけではありません。東南アジアと南アジアのコレクションは、インドネシアのコレクションと同じコレクションとして、ライデンのケルン研究所に保存されていました。1925年に開所したケルン研究所は、アジア図書館を新設するために合併した図書館の一つです。この研究所は比較的歴史の浅い研究所ですが、所蔵コレクションそのものは古いものが多くあります。南アジアコレクションは、インド、スリランカ、チベットのものが多く、モルディブとバングラデシュとネパールの資料も相当数所蔵しています。また、ヒマラヤの地域のものも非常に多く所蔵しております。特に仏教に関する、ヒンドゥー語資料とサンスクリット語資料のコレクションは有名です。



図5: 「Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā」 大般若波羅蜜多經
資料番号 I.KERN Skr. A 9

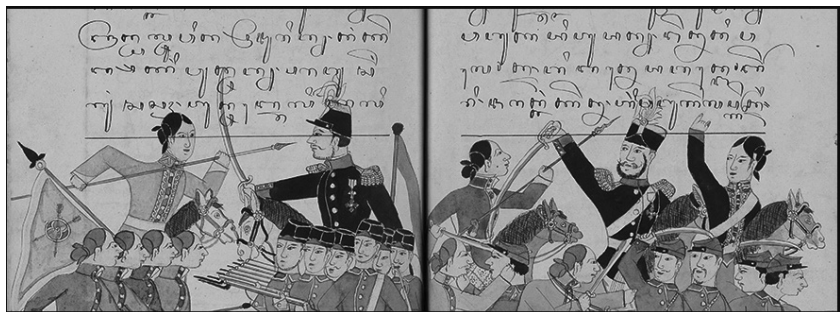


図 6 : Babad Dipa Nagara, D Or.13

南アジア地域の貴重資料の例を二つ紹介しましょう。一つ目は、12 世紀のネパールの貝葉写本経典「大般若波羅蜜多經 (Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā)」です【図5】。著者はこの資料に実際に触ったことがあるのですが、12 世紀に書かれてそのままで保存されたものとは想像し難いほど、破損しやすい資料です。

二つ目は、インドネシアのコレクションに含まれる彩色の資料です。この資料は 1825 年のジャワ戦争のとき、ディポヌゴロ王子がオランダ軍と戦い、その日のオランダ軍の負けを記念するために作成されたものだといわれています【図6】。

この資料を私に紹介してくれたのは、インドネシアコレクションを担当する 2 人の同僚でした。インドネシアコレクションは、世界で最も大きいインドネシア関係のコレクションであり、1900 年以降のものは「現代インドネシアコレクション」、それ以前のは「貴重書インドネシアコレクション」と、二つのサブコレクションに分けられています。前者の担当者はマリエ・プロンプ (Marije Plomp) 氏 (著者と同じサブジェクト・ライブラリアンです)。後者の担当者は、キュレーターのドリス・イエダムスキ (Doris Jedamski) 氏です。この 2 人はインドネシアを専攻する研究者ですが、インドネシアコレクションのみならず南アジアのコレクションも担当しております。ライデン大学図書館では東南アジアと南アジアは一つの地域として見られています。

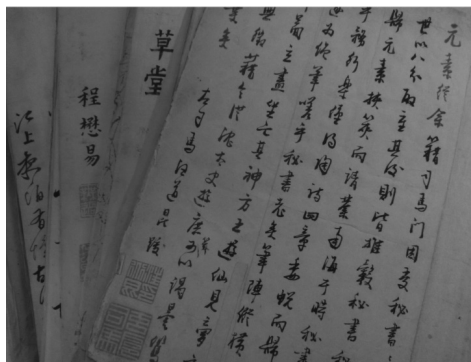


図7：文化大革命以前に集められた学術書群

るからです。

またサンスクリット語資料、ヒンドゥー語資料、チベット語資料の専門家であるラジュ・バッケール（Raju Bakker）氏は、プロンプ氏とイエダムスキ氏と協力して業務を行っています。ライデン大学アジア図書館は、世界中の東南アジア研究者や南アジア研究者にまだまだよく知ら

れていない貴重な資料を多く所蔵しておりますので、興味を持たれた司書または研究者の方はぜひこの3人の担当者にご連絡いただければ幸いです。

次に中国関係のコレクションについてご説明いたします。中国に関するコレクションは、1900年頃に、東アジア図書館の基本となるコレクションとして収集されました。特に有名なものは、文化大革命以前に集められた学術書【図7】と一般書です。

著名な中国研究者、ロバート・ファン・ヒューリック（Robert van Gulik）氏が収集した資料は非常に有名です。彼が集めたコレクションには中国にもないものが多いため、中国の研究者がよくライデン大学を訪問されます。

中国関係コレクションを担当しているのは、ギーベルト氏です。私と同じように、氏は現代のコレクションを担当するだけでなく、キュレーターの任務も果たしています。氏はフランス人でありまして、ライデン大学アジア図書館でオランダ人ではないサブジェクト・ライブラリアンは氏1人のみとなっています。また、氏は日本でフランス語を7年間教えていたこともあり、奥様も日本人であるため、授業中に日本語で冗談を飛ばすこともあります。

日本関係の貴重書について言いますと、オランダ人が17世紀に出島で貿易の傍らに収集した資料が中心となっています。おそらく1番有名な「オ

ランダ人」は、オランダ人ではなくドイツ人医師のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトでありましょう。18世紀に西洋医学を日本に紹介したシーボルトは、植物、図書、日常雑貨だけではなく、蝦夷の地図も持ち出そうとして、有名なシーボルト事件を引き起こしました。シーボルトが持ち帰った図書と地図は、現在、ライデン大学図書館で閲覧することができます。他の有名なオランダ人が収集した資料や日本の蘭学者がオランダ人に贈った資料もライデン大学図書館に保存されています。先ほど紹介した其扇がシーボルトに宛てた手紙はすべてデジタル化され、オンライン・アクセスが可能となっていますので、ぜひ閲覧していただきたいと思います【注2】。

次に韓国と北朝鮮について説明します。1970年代に韓国学部がライデン大学に新設されてから、韓国と北朝鮮に関する資料の収集が始められました。韓国については幅広い範囲の映画コレクションを所蔵しており、北朝鮮については1990年以降に購入された北朝鮮の雑誌と映画のコレクションを所蔵しているのが特徴です。2016年に開始された学部と図書館の共同プロジェクトを通じて、北朝鮮のプロパガンダポスターのデータベースを作成しました。2019年の夏までに、このデータベースを世界中の北朝鮮学者と美術史学者に「ひらく」ことを目指しています。韓国の貴重書の多くが漢文で出版されたものであるため、それらは中国のコレクションに含まれており、その多くをギーベルト氏が担当されています。私はギーベルト氏と同様、サブジェクト・ライブラリアン兼キュレーターとして、日本と韓国、現代と貴重書のコレクションの双方を担当しています。

②アジア図書館の新設について

ライデン大学では、昔からアジアの国々の文化、歴史、言語の研究が盛んでありました。そのため、出版物、原稿、地図、植物、動物、日用品など多くのものを収集し、それらを研究するために、アジアの国々から原資料を集めてきました。そのように集められたアジアに関するコレクションはライデ

ン市内の施設に分散しておりました。また、特にインドネシアに関するものは、ライデン市内ばかりか、ジャカルタにあるライデン大学図書館とアムステルダムの王立熱帯研究所でも所蔵されてきました。その結果、ライデンのアジア関係資料の図書館と司書は、まるで一人きりで島の中で働いているような状況でした。というのも、それぞれの図書館はまるで遠い島であるかのようにあまり知られておらず、外部の人が訪問したくても、アウトサイダーであるため、アクセスが難しかったのです。さらに、多くの図書館資料がオンラインカタログに登録されていないために、その学部に所属していない研究者が必要な情報を見つけることが不可能だったのです。

一方で、ライデン大学のアジア地域研究所における研究・教育活動は、アジアの国々のそれぞれの文化・言語に関する研究が互いに強く関連するようになってきておりました。最近の学生の中には、日本語と日本の歴史に興味を持つだけでなく、韓国やインドネシア、中国の歴史と言語にも興味を持っているような学生が多く、同時に多数の国の言語と文化を勉強する研究者と学生の数が増えている状況にあります。そこで、アジア学のためのハブを創設して、アジアに関するコレクションを一度に発見・閲覧できる場所を作ろうと、ライデン大学学長、ライデン大学図書館長、ライデン市長が手を結んだのです。その結果として新設されたのがライデン大学アジア図書館です。アジア図書館を新設してアジア関連資料を一つの図書館に置くということは、ライデン大学の研究者にとっても革命的なことでありましたが、世界中のアジア学者にとっても大きな意義があるものだ和我々は考えています。ヨーロッパのほかの図書館と比べた場合、アジア図書館は次の五つの意義を有していることでしょう。

一つ目の意義は、コレクションのサイズが大きいということです。すでにお話したように、ライデン大学アジア図書館は、四つの図書館を合併したものであるため、アジア関連資料の専門図書館として、ヨーロッパのみならず世界中のアジア研究の図書館の中でも、基幹図書館になっていると考えてい

ます。コレクションの量は、図書 500 万冊、E ブック 100 万点を誇ります。実際にやってみたくはないのですが、アジア関連資料を 1 列に並べると、試算では約 30 キロメートルにもなります。

二つ目の意義は、コレクションの長期性、希少性です。まず長期性について述べますと、ライデン大学は 1575 年に開学したオランダ最古の大学であります。アジア学という研究分野としては 1575 年に始まったわけではないのですが、アジアに旅行した人々、アジアのスパイスやタバコ、茶、植物といったものに興味を持った研究者が関連する書物を収集しておりました。研究者たちは自分のコレクションを大学図書館に寄贈するように遺言を残しておりました。遺言がない場合は、図書館が研究者のコレクションを購入することもありました。17 世紀頃から、アジアとヨーロッパの貿易や、現在のインドネシアの植民地が始まって、アジアの国々の言語・風俗・文化を学ぶ必要が出てきました。日本については科学の面でも研究が進められ、研究者の帰国後は、研究者の収集したコレクションがオランダ最古の大学図書館であるライデン大学図書館で保存されました。また希少性については、ライデン大学には、アジアの国々に存在していない資料が非常に多く所蔵されています。紙以外に書かれた資料、例えば貝葉文書のような資料は、アジアの気候ではすぐ劣化してしまうのですが、ライデンの気候は保存に適しているよ

うです。

三つ目の意義は多様性です。図書館のコレクションとして一般的な資料の種別は、図書、雑誌、新聞であります。しかし、ライデン大学アジア図書館には、映画のポスター、アンティークカメラ、中国のタイプライター、絵画など、およそ図書に

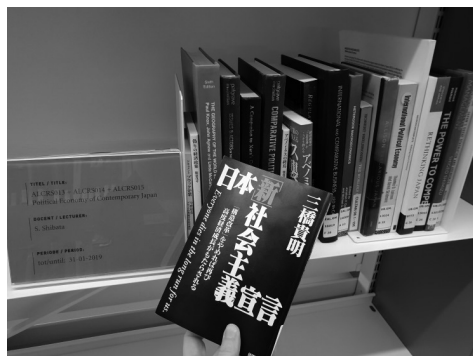


図 8：コース・リザーブ・シェルフ



図9：シネマルーム



図10：シーボルト庭園

は収まりきれない多様な資料を所蔵しております。

四つ目の意義はファシリティーズ（施設）です。アジア図書館は資料だけでも訪問するに値するものなのですが、現代的な閲覧室も設けられている点でも魅力的だと言えます。そこで、閲覧室の中の設備・施設について紹介しておきましょう。

まず、コース・リザーブ・シェルフ（Course Reserve Shelves）つまり授業本棚というものがあります【図8】。ここにはアジア学の授業に必要な資料が、学生のために予約され、集められ

ています。アジアに関する授業を受講している学生は皆、宿題のために、その本を読まなければならないので、学期中に授業本棚に配架された本は、図書館から持ち出せないような仕組みになっています。

次に、シネマルームがあります【図9】。ライデン大学にはアジア映画の専門家が何名かおられます。彼らは、韓国、中国、日本の映画、さらには映画史を研究していて、映画を題材とした授業も行っております。ライデン大学アジア図書館は映画に関する授業と研究も支えているのです。それだけではなく、ライデン大学アジア図書館には本物の映画館、15名ほどが入るシネマルームも設置されています。シネマルームの望ましい使い方はもちろん映画を見ることなのですが、勉強中に休憩したい学生が生放送のテレビを見るの



■ 図 11：サブジェクト・ライブラリアンとキュレーターのオフィス。
左から筆者、ギーベルト氏、ブロンプ氏、バッケール氏

にも使われています。宿題として見なければならない映画を見るため、あるいは言語の練習のために、学生たちはよくシネマルームに来ております。

シーボルト庭園は、植物が多く配置されたガラス屋根の部屋で、庭のよう

な雰囲気がある空間です【図10】。シーボルト庭園の植物は、近隣にあるライデン大学植物園で育てられたもので、シーボルトが日本から持ち帰った植物の子孫も含まれています。閲覧室では会話と携帯電話の使用が禁じられているのですが、電話を受けたりゆっくり友達に相談したりするときには、シーボルト庭園を利用することができます。

グループで使用するこのできる部屋が二つ用意されています。一つは定員6名のグループ・スタディー・ルーム「ケルン（Kern）」、もう一つは定員10人のルフアール・ルーム（Rouffaer Room）です。この多機能の部屋の用途は主として学生の発表練習、グループ学習となっていますが、教員が図書館の資料を授業中に使いたい場合に、これらの部屋を予約することもできます。また、図書館の館員もこれらの部屋をミーティングに使っています。パソコンとスマートボードがあり、自分のパソコンをインターネットにつなぐこともできるので、非常に使いやすい部屋となっております。

ライデン大学アジア図書館のコレクションの利用を目的に海外からライデンに来る研究者は少なくありません。中には1カ月から半年もの間ライデン大学図書館で研究を行う研究者もおります。そういった客員研究員のための研究室が4室あります。アジア学部は18時に閉まってしまうのですが、図書館は24時まで開館しているため、ライデン大学の研究者の中にはこれらの研究室をうらやましがっている人もいます。

さらに、サブジェクト・ライブラリアンとキュレーターのオフィスが閲覧室の入り口の近くにありますが【図11】。このオフィスはガラス張りで、私と先ほど紹介した2人の同僚の席があります。ガラス張りということもあり、利用者にとっては、サブジェクト・ライブラリアンが在室しているか否かをすぐに確認することができます。その場で質問やアポイントが取れるので大変に便利な場所になっています。アジアのサブジェクト・ライブラリアンが同じ部屋で働いているということは、在室する私たちにとってもよい面があります。アジア図書館のプロジェクトやアジア学のオーソリティーに、わざわざ

ざアポイントを取らなくても相談することができるからです。

五つ目の意義は、サポートチームが存在することです。研究支援を専門とする本日の聴衆の方に向けて、ライデン大学図書館の特徴となっているチームの一つを紹介しましょう。ここまでの私の説明では、ライデン大学アジア図書館の意義がコレクションとファシリティーズにあるように感じられてしまうかもしれませんが、図書館にとって本当に大切なのは、本や紙ではなく、人なのです。サブジェクト・ライブラリアンとして日本研究所のスタッフ、学生、外国から来訪した研究者らを支えるというタスクを行う際に、私は研究サポートチームの専門家たちに大変に助けられています。そのような研究サポートチームの中から、Centre for Digital Scholarship というチームを取り上げて紹介いたします。

本日のシンポジウムのタイトルは「図書館をめぐる知の変革」です。ライデン大学図書館は、21 世紀の大学図書館にとって必要な知識、技能とサービスに関するチャレンジの一環として、Centre for Digital Scholarship を創設しました。オープンサイエンス時代の研究方法を支えるために設立されたこのセンターには、総計 8 人のスタッフからなるチームが設置され、オープンアクセス、データとテキストマイニング、データマネジメント、著作権、出版の相談、GIS、VRE（バーチャルリサーチ環境）、データベースとウェブサイトの作り方、メタデータ、原資料のデジタル化など、各種の専門的なサービスを提供しています。私自身はファカルティー・リエゾンを行うサブジェクト・ライブラリアンであってもデジタル・ライブラリアンではないため、デジタル関係については基本的な知識しか持ち合わせておりません。それゆえ、アジア学部の教員と相談するときには、アジア図書館の目的を果たすために、Centre for Digital Scholarship と協力することが非常に重要であると考えています。

③アジア図書館の意義と目的

ライデン大学のアジア図書館の目的を説明いたします。第一の目的は、ライデン大学のアジア図書館のコレクションを、世界に向けて「ひらく」ことです。研究者のため、学生のため、そしてアジアの一般市民のために、皆が資料に簡単にアクセスできるよう、資料をデジタル化してオンライン公開することを目指しています。第二の目的は、デジタル化、デジタル・ヒューマニティーズ・サポート、フェローシップに精通することで、世界中の研究者をライデン大学図書館のコレクションに招待し、彼らの研究を支えることです。第三の目的は、特にサブジェクト・ライブラリアンである私にとって非常に重要なことなのですが、アジア図書館をいわば待ち合わせ場所として使用してもらい、オランダのアジア学者、アジアから来訪した専門家、ライデン大学の学生や留学生、そしてアジアに興味を持つ一般の人々との間に、まるで一つのコミュニティがあるかのような感覚を生み出すことです。

④アジア図書館の開会式

2017年9月14日、オランダのマキシマ王妃陛下のご臨席のもと開会式が行われ、ライデン大学のアジア図書館は正式に開館しました。開会式は一日中行われ、アジアについての講演、アジア図書館の貴重書の展示、アジアの文化に関するイベントが行われました【注3】。私にとっては忘れられないすばらしい一日でありました。

4. これからのチャレンジについて

最後に、ライデン大学図書館として今後チャレンジしたいこと、私自身が今後チャレンジしたいことについて述べたいと思います。

私自身として、チャレンジを「目的を実現するために克服しなければならない障害と制限」と定義したいと思います。その上で、私はライデン大学ア

ジア図書館の目的を、以下のチャレンジにあると考えています。第一は、ファカルティー・リエゾンに注力するだけではなく、国際学会と国際的な図書館資料の専門家のネットワークに参加して、現代の研究トレンドを見極め、大学図書館は将来どのような機関になるか予想することです。第二は、その予想とトレンドに基づいて、革新的なサービス、ファシリティーズ、そしてソフトウェアを生み出し、新しい種類のライブラリアンとなり、図書館が、現代の研究者の役に立つ存在であるだけではなく、将来の研究者コミュニティの繁栄をもたらすような存在となるよう努力することです。第三は、最大のチャレンジである資金獲得です。外国人研究者のためのフェローシップの実現やコレクションを世界に「ひらく」ためのデジタル化事業には資金が必要となります。第一、第二のチャレンジを実現するだけではなく、寄付金を集める活動やパートナーシップと締結を進めることが非常に重要なのです。

私のチャレンジは Life Long Learning、つまり生涯学習です。私は、各種 MOOC【注4】を利用した学習を続けるとともに、韓国語と日本語、オープンサイエンスの基礎知識、崩し字、MARC21【注5】、ボイストレーニングなどを学びたいと考えています。著者が現在、プロフェッショナルなライブラリアンとして身につけている技術や知識は、来年、再来年、10年後には不十分なものになるかもしれません。現代の図書館の利用者を支えるために、社会人生活を送りつつも、終生、勉学を続けること、プロとして向上心を持つことは、チャレンジであるのです。しかし、このチャレンジは、プロとしてのチャレンジというより人間としてのチャレンジなのでしょう。業務と関係がある内容であれ、そうでない内容であれ、今後も学び続けることを私は楽しみにしています。

注

- 【1】「「シーボルト様」切ない思い 妻の手紙、オランダで発見」朝日新聞デジタル（2018年10月27日）<https://www.asahi.com/articles/ASLBJ470JLBJTLZU001.html>
- 【2】<http://hdl.handle.net/1887.1/item:2010675>
- 【3】開館式の様子は以下のビデオで観ることができます。 <https://www.youtube.com/embed/kLXaeh9-9e4>
- 【4】例えば、日本で公開されているもの（JMOOC）の一つに、慶應義塾大学の提供する講座があります。<https://www.jmooc.jp/providers/keio/>
- 【5】JAPAN/MARC、MARC21 マニュアル・フォーマット、国立国会図書館 <https://www.ndl.go.jp/jp/data/catstandards/jm/index.html>

図書館に溶け込む世界の知識

——資料と空間と人の新たな関係——

❖宇陀則彦

1. はじめに——記録による知識共有

筑波大学には図書館情報学を教育・研究している組織があり、学部レベルには、情報学群知識情報・図書館学類が、大学院レベルには、情報学学位プログラム（組織改編により図書館情報メディア研究科から発展）があります。教員が属する組織はこれら教育組織とは独立しており、図書館情報メディア系という名称です。私は、知識情報・図書館学類の必修科目である「知識情報概論」と専門科目である「デジタルライブラリ」を担当しています。本日は「知識情報概論」で話している内容をダイジェスト版でお話したいと思います。

本日のシンポジウムは「図書館をめぐる知の変革」というタイトルであるので、私は、図書館情報学における知識をどう捉えたらよいのか、それに向けたアプローチを示そうと思います。もちろん知識に対するアプローチは一つではなく、他のアプローチもあると思いますが、今日は、図書館情報大学（1979年～2004年）の時代から筑波大学知識情報・図書館学類にかけて、長年議論してきた現時点での到達点を示したいと思います。それは、図書館情

報学から知識情報学への展開ということです。一言でいうと「記録による知識共有」です。

2. 知識はどこにある？

それでは話を始めましょう。さて、知識というのはどこにあるのでしょうか？ 真っ先に思い浮かぶのは頭の中でしょう。私たち一人一人が持っている知識です。しかし、私たちの頭の中にある知識は儚いものです。死んでしまったら知識も一緒に消えてしまいます。私たちはつい忘れがちになりますが、知識というのは消えるものなのです。それに唯一抵抗できるのが記録です。記録することで知識は個人から独立し、客観的存在となり、社会の知識として蓄積され、伝達され、共有されます。共有された知識は再び私たちの頭の中に取り込まれていくわけです。頭の中の知識から記録された知識へ、そして再び頭の中へ。この繰り返しによって知識は伝達され、共有されます。

3. 記録はいつから行われてきたのか

では、記録はいつから行われてきたのでしょうか。記録が行われる前は、語りによって知識を伝達していたと思われます。記録としての記号がなくと



図 1：語り合うネアンデルタール人（想像図）

出典：<https://www.doi.org/10.1126/science.aaf4120>

も、何らかの言葉は使っていたのではないのでしょうか【図 1】。記録がないのでわかりませんが。記録のない時代が長く続いたのち、ついに人類は記録を残すことに成功します。現在記録として最も古いものは洞窟に描かれた絵で



■ 図2：クロマニヨン人によるラスコー洞窟壁画（2万年前）

出典：<https://jp.france.fr/ja/bordeaux/article/30174>

す。有名なものはラスコー洞窟の壁画ですね。これは約2万年前にクロマニヨン人によって描かれたものらしいです【図2】。

洞窟の壁に絵を描

くことで初めて、自分たちの頭の中のイメージが頭の中から外部に出たのです。これは人類史上、画期的なことです。

さらに時代が下り、紀元前3100年頃になると、ついに文字を使った記録が出現しました。メソポタミアの粘土板に刻まれた文字がそれです【図3】。同様に、紀元前3200年頃には、エジプトの象形文字が出現しました【図4】。正確には、現在発見されているものということなので、そのうちさらに古い記録が発見されるかもしれません。



■ 図3：ウルクの粘土板

出典：https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_1989-0130-4



■ 図4：エジプト象形文字

（メトロポリタン美術館所蔵）

文字が使われるようになった意味は、人類の思考において記号化が飛躍的

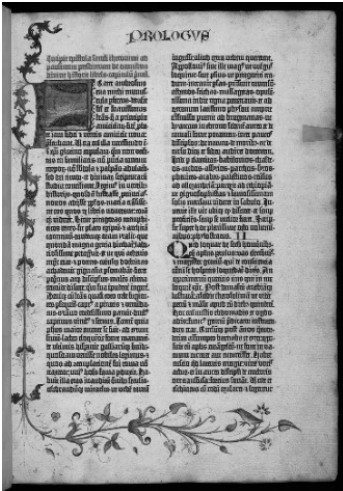


図5：グーテンベルクの活版印刷
(42行聖書 慶應義塾大学)

出典：<https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/incunabula/036>

4. 知識を集めたいという欲求

知識が社会に広がっていくと、今度は知識を集めたいという欲求が生じました。ディドロとダンペールは、記録を収集することで世界に存在する知識を把握し、まとめてみようとしたのです。それが百科全書（Encyclopedia）

に進んだということです。絵も記号ではあるのですが、意味を伝えるにはやや曖昧です。解釈の範囲が広いという意味では利点ともいえるのですが、概念をはっきりと伝えるという意味では文字のほうが効率がよいのです。時代はかなり下り、15世紀半ばにグーテンベルクによって活版印刷が発明されると【図5】、それまで写本でしか複製できなかった記録が機械的に大量に複製されるようになると、記録としての知識が世界中に広がっていきました。知識が社会的存在となり、共有されるようになったのです。

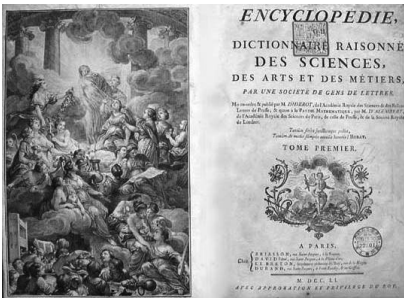


図6：フランス百科全書

出典：<http://www.library.pref.osaka.jp/France/France.html>

です【図6】。

日本に百科全書を紹介したと言われているのは西周（にしあまね）です。西はEncyclopediaを「百学連環」と訳しました。百科全書や百科事典より百学連環のほうが、知識がつながっている感じがしてかっこよくないですか。私は百学連環という言葉

を非常に気に入っています。

百学連環は百科事典のような知識を一つの記録としてまとめたものですが、それ以外の記録も大量にあり、ひとつにまとめることは不可能な状態がありました。知識が記録され、複製され、広がった結果、世界の書物のすべてを把握したいと考える人たちが出てきました。有名なのはオトレらの世界書誌目録という構想です。3×5 インデックスカードに書物の情報を記録することで、世界中の書物のすべて把握することを目指したのですが、カードが1,600万枚になったところで断念し、失敗に終わりました。しかし、語り部の時代から比べると、知のあり方が劇的に変わったということがわかりただけたと思います。

近年になると、情報技術の歴史としては、ヴァネバー・ブッシュの Memex、ダグラス・エンゲルバートのマウス、アイバン・サザランドの Sketchpad、テッド・ネルソンの Xanadu、アラン・ケイの Dynabook、ビル・ゲイツの Windows、スティーブ・ジョブズの Macintosh、ティム・バーナーズ・リーの World Wide Web、そして最近では、セルゲイ・ブリンとラリー・ページの Google というような形で、インターネット上における記録された知識というものが一挙に広がっていきました。その後も情報と知識に関する多くの試みがありましたが、21世紀になって登場した Web スケールディスカバリーサービスによって世界中の書物を把握するという野望が達成されたとみなすことができます。

5. 今後の図書館情報学は知識情報学である

さて、ここまでで、冒頭で述べた、知識には頭の中にある知識と記録された知識があり、記録することで知識の伝達と共有が進むということを説明してきました。まず人が持つ知識があり、その後、記録された知識が世界に登場しました。記録された知識は、最初はわずかでしたが、だんだんと拡大し、

今や記録された知識のほうが頭の中の知識（の総体）より大きくなっていると言えるでしょう。

記録された知識と頭の中の知識は独立しているわけではなく、相互作用しています。しかしながら、これまでの図書館情報学は記録された知識を中心に扱っており、頭の中の知識についてはあまり扱ってきませんでした。今後は両者の相互作用を含めた知識現象全体を捉えていく必要があるでしょう。この新しい図書館情報学が知識情報学です。

図書館情報学は記録された知識を図書館という現場でどう管理し、サービスするのかという実学の側面が大きいのですが、実学の内容を抽象化あるいは一般化して、図書館における知識をどのように捉えるのかという視点が学問としては必要ではないかと考えています。つまり、図書館というものを、建物、組織、サービスという個々の実体として捉えるのではなくて、総体的な知識共有現象として捉えることです。言い換えるなら、記録を介した知識の伝達と共有という現象が図書館という場で起きていると考えるわけです。実際、図書館の中では、様々な知の活動が起きているわけであるから、それを現象として捉えるのは理にかなっているのではないのでしょうか。

そこで改めて「知識情報学のフレーム」を確認しましょう【図7】。学問というのはおおむね、学問の目的と対象領域を定めているものですが、知識情

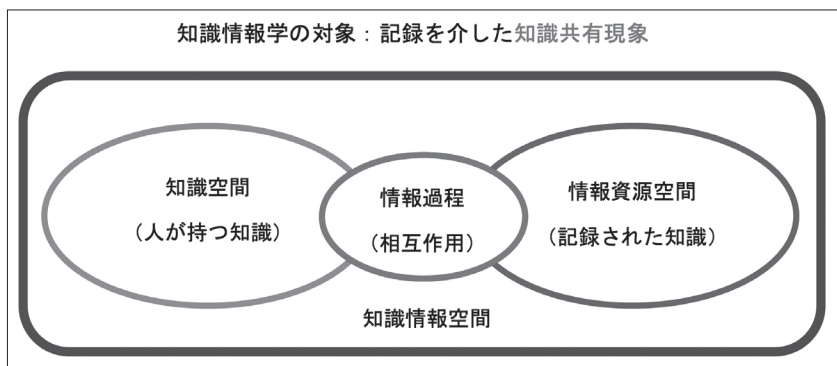


図7：知識情報学のフレーム

報学は記録を介した知識共有現象を解き明かすというのが目的であり、知識情報空間を対象と考えます。つまり、人の持つ知識（図7の左側）である知識空間と記録された知識である情報資源空間（図7の右側）、そして、両者の相互作用として捉えるのが知識情報学のフレームというわけです。

6. 我々はテキストから構成されている——テキスト空間

知識を得る過程を少し考えてみましょう。我々は生まれてしばらくすると、徐々に言葉を覚えていき、パパとママからしゃべり言葉で知識を獲得していきます。つまり、初期の頃は知識空間での伝達が活発なわけです。小学生になると教科書すなわち記録された知識を読むことで知識を獲得することが多くなり、情報資源空間から知識空間への知識の伝達が活発になっていきます。このことをもう少し考えてみましょう。

人は何かを読むと、読んだテキストが頭の中にイメージとして構成されます。さらにもう一つ別のものを読むと、前のテキストと関連づけて理解するでしょう【図8】。これがどんどん繰り返されます。つまり、こんな感じです（パワーポイントのアニメーション）。そうすると、頭の中にはテキストがわらわらとあり、それらが関連づけられて知識になっていると考えられます【図8】。

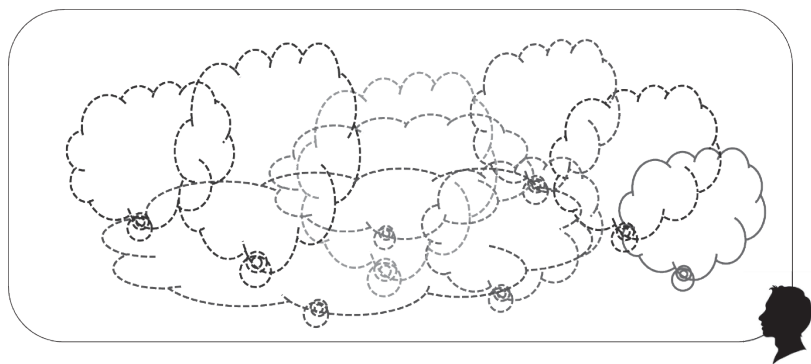
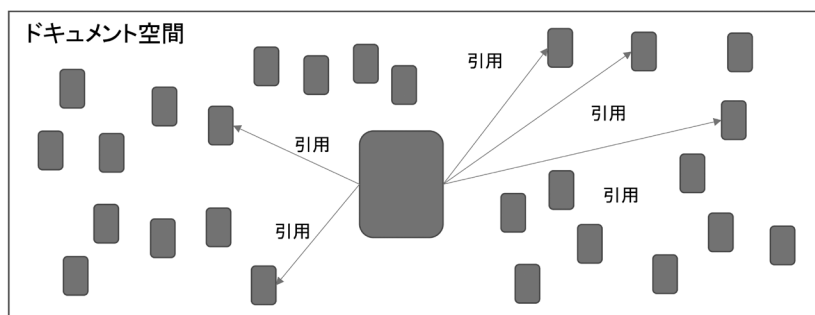


図8：読むという行為（テキスト空間の形成）

つまり、我々はテキストから構成されているといえるわけで、いわば我々はテキスト人間なのです。テキストの間の関連については、クリステヴァという人が「間テキスト性」ということを言っています。これはおそらくテキスト空間と同じと捉えてよいでしょう。

7. 情報資源空間はドキュメントから構成されている

次にドキュメントについて考えてみましょう。図7の右側の情報資源空間は、記録されたもの、すなわちドキュメントから構成されています【図9】。



■ 図9：ドキュメント空間

ドキュメントは本とか論文とか電子ジャーナルとか物理的な実体があり、そこがテキストと違うところです。また、テキスト間の関係と同じように、ドキュメント間にもいろんな関係があります。典型的には引用関係です。このドキュメント間の関係を分析するのが計量書誌学であり、かつては図書館情報学の中心課題でした。ドキュメント間の関係を分析することは知識の時間的伝達の様子が明らかになるということですし、知識の意味的關係がある程度客観的に測定できるということでもあります。

それでは、テキスト空間とドキュメント空間の関係はどうかというと、それが【図10】となります。ドキュメントを読んでいくことによって、それぞれの頭の中にテキスト空間が構成されていきます。例えば、村上春樹の

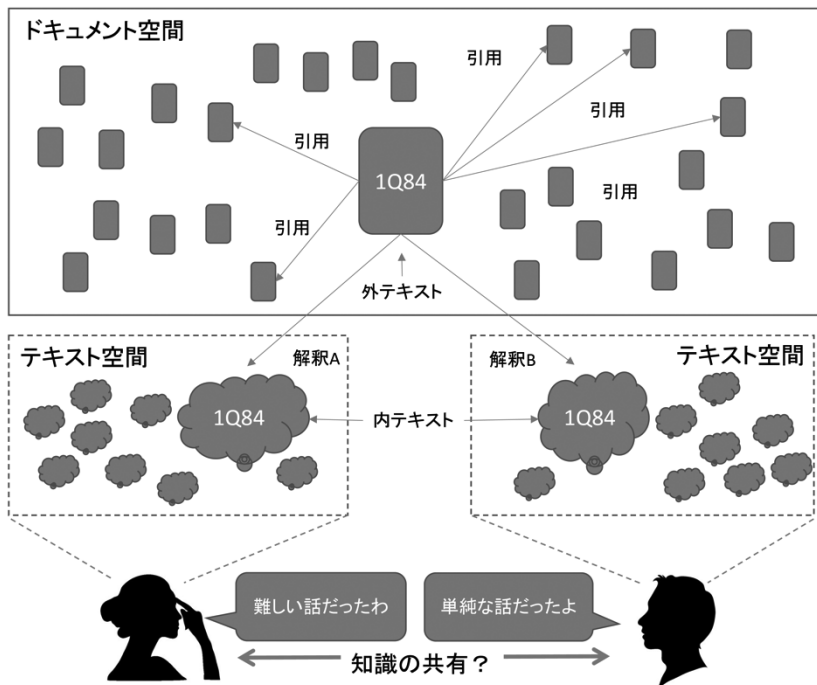


図 10：テキスト空間とドキュメント空間

『1Q84』という同じドキュメントを読んだとしても、頭の中のテキスト空間の構成は異なるはずです。このように考えると、知識が人から人へと正確に伝達されることはありえず、知識の共有も不可能ではないかという疑問が浮かびます。にもかかわらず、我々は、知識は伝達され共有されていると日常的には考えます。それはなぜなのでしょう。このあたりのことを哲学、心理学、社会学、情報学の知見をふまえながら考えるのが知識情報学といえます。

ドキュメントとテキストの関係を別の角度から考えてみましょう。【図 11】にあるのは卒業証書という一つのドキュメントです。霞ヶ浦かすみさんに対して、「右の者は高等学校の普通科の課程を卒業したことを証する平成 31 年 3 月 25 日」と書かれています。校長先生の名前は「ツクバ・ヤ

ドキュメントとテキストの関係

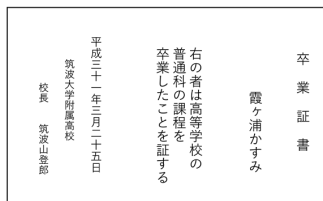


図 11：卒業証書として成立するドキュメント
(図 12 とテキストは同じ)

ドキュメントとテキストの関係

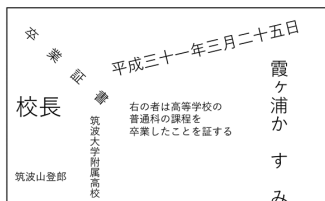


図 12：卒業証書として成立しないドキュメント
(図 11 とテキストは同じ)

マノボロウ」です。人はドキュメントとして見て、そこに書かれている内容をテキストとして理解します。

それでは【図 12】はどうでしょうか。

これは卒業証書というドキュメントとして成立するのでしょうか？ 成立しませんね。【図 11】と【図 12】はテキストとしては同じですが、ドキュメントとしては異なります。どこが違うかというと、テキストの配置が異なっています。卒業証書として成立するためには、テキストがしかるべき配置になっていないといけない。つまり、ドキュメントには構造があり、構造も含めてドキュメントの意味を構成しているわけです。

テキストについてももう少し考えてみましょう。【図 13】は何らかのテキストですが、おそらく大部分の人が読めないでしょう。一方、【図 14】は



図 13：外テキストのみ存在

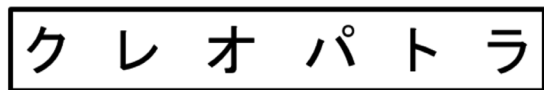


図 14：外テキストと内テキストの両方が存在

“クレオパトラ”を表
現したテキストある
と理解しますね。【図
13】も【図 14】も紙
の上に描かれた黒い
しみであり、物理的
存在です。しかし、【図
13】は理解できませ
んが、【図 14】は理

解できます。【図 14】は「クレオパトラ」という物理的存在であると同時に“クレオパトラ”という意味が頭の中に浮かぶからです。しかし、【図 13】は何も浮かびません。大部分の人は【図 13】の文字が理解できないからです。実は【図 13】も“クレオパトラ”を意味しており、古代エジプトの象形文字で書かれています。

何が言いたいかという、テキストというのは普通、物理的な存在だと思っていますが、実は頭の中にイメージされる心的な存在であるということです。知識情報学ではこの二つを区別し、物理的な存在を「外テキスト」と呼び、心的存在を「内テキスト」と呼んでいます。一般に「テキスト」と呼んでいるものは、外テキストのように見えて実は内テキストを指していることが多いのです。我々がテキストを見たとき、外テキストと内テキストの両方が存在する場合（【図 14】）と外テキストのみが存在する場合（【図 13】）があるということです。

8. 本棚と、個人知と世界知、そして共同知

最後は本棚の話です。皆さんの部屋にも本棚があり、本が並んでいると思いますが、なぜそのように並べたのでしょうか。そう並べたいから並べたのでしょうか、なぜそのように並べたいのかというと、それは皆さんの頭の中の知識がそのようになっているからです。つまり、本棚の構成は皆さんの頭の中の知識の射影であるということがいえます。だから、他の人の本棚を見るとその人の考えがある程度理解できるわけです【図 15】。



図15: 本棚と個人知

個人の本棚ではなくて図書館の本棚はどうでしょうか。図書館の本棚を眺めていると、何かひらめいたといった経験を多くの方がしているのではないのでしょうか。例

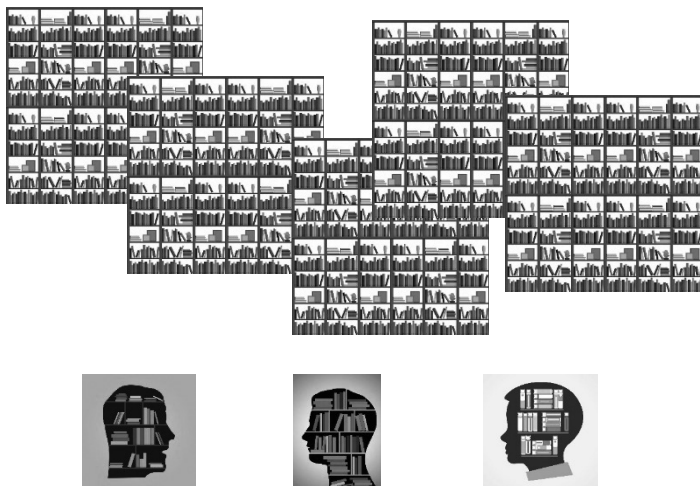


図 16：図書館の本棚と共同知

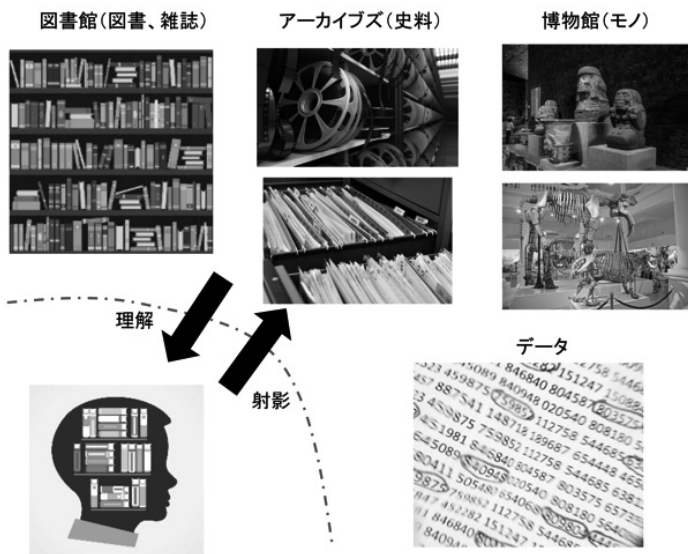


図 17：ドキュメント概念の範囲

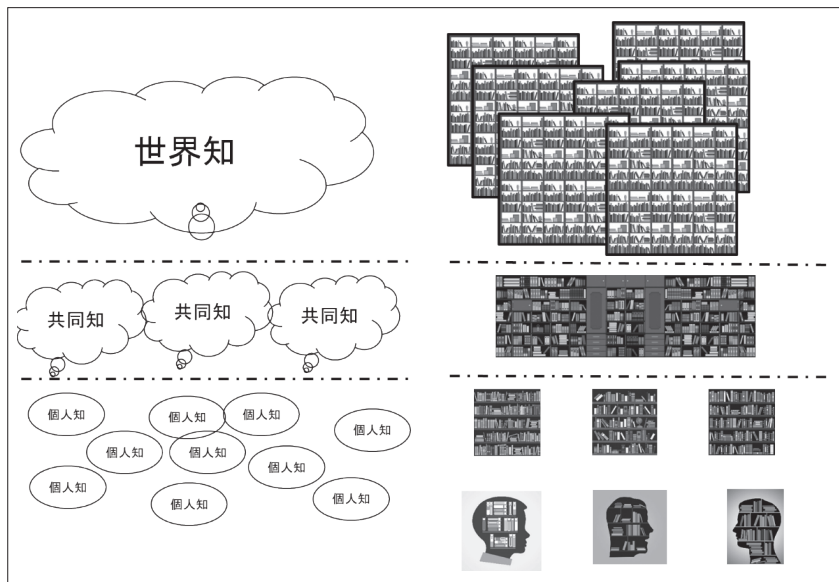


図18：知識の層と本棚の大きさ

えば、曖昧な考えを言語化できたとか、意外な言葉を組み合わせた書名をみて、新しい考えが浮かんだとか、昔の経験を思い出したとかです【図16】。

このようなことは、図書館の本棚だけでなく博物館やアーカイブズなどでも起きた経験があるはずです【図17】。つまり、図書館、博物館、アーカイブズに記録された知識と人が持つ知識は、常に相互作用が生じており、知識情報学のフレームそのものというわけです。

知識には、大きさと範囲のレベルから三つに分けることができます。最も小さいレベルは個人が持っている個人知です。反対に、最も大きいレベルは世界全体の知識の総和である世界知です。そして、世界知と個人知の間にあるのが共同知です。これを本棚の話と組み合わせると、個人の蔵書は自分の頭の中の知識の射影なので個人知といえます。世界知は現実的ではありませんが、世界の本をすべて集めた世界本棚です。面白いのは中間の共同知で、図書館の本棚が共同知に相当すると思われます【図18】。

共同知とは個人知と世界知の橋渡しをするものであり、図書館の本棚は、私たちが巨大な世界の知識にアクセスするための橋渡しをしてくれるものなのです。いきなり世界知にアクセスしても個人の知識では理解不能です。しかし、共同知である図書館の本棚を介することで我々は世界を部分的ではありますが、理解可能になるわけです

さて、そろそろ時間なので、強引ではありますがまとめに入ります。講演のタイトルは「図書館に溶け込む世界の知識」としましたが、今まで述べてきた通り、知識は記録によって飛躍的に広がり、共有されるようになりました。そして、人が持つ知識と記録された知識が相互作用しながら、知識共有現象が起きているという話をしました。また、記録にはテキストとドキュメントの区別があるという話をしました。最後は、図書館の本棚は中間知に相当し、世界の知識が一部溶け込むことで個人知と世界知の橋渡しをするという話をさせていただきました。「資料と空間と人の新たな関係」というサブタイトルにあるように東京大学アジア研究図書館は、資料と空間と人が新しい関係を築く可能性をもった図書館であると考えます。ありがとうございました。

アジア研究図書館の可能性と方向性

❖小野塚知二

1. どういう夢を描いているか

私はアジア研究図書館の館長です。館長は2018年4月に任命されたのだから、当然、アジア研究図書館はあるのだろと思うられるかもしれませんが。アジア研究図書館はあるといえはあるのですが、図書館としての機能はまだまだありません（この講演は2019年1月26日になされました。アジア研究図書館の開館は2020年10月1日）。そして、館長だけでなく、「アジア研究図書館の理念」という文書があります。さらに、こういうものをつくりたいというアジア研究図書館の構想もあります。それから、その理念や構想を実現しようとする主体として、2018年5月にはアジア研究図書館運営委員会も発足しました。委員会には東京大学内のアジア研究に関わる何人かの先生方と附属図書館の職員の方々に加わっていただき、この委員会がアジア研究図書館を創るという仕事をする主体となっています。私の初代館長としての役割は、アジア研究図書館に最初の実体を与えることであると心得ています。

では、私たちは東京大学にアジア研究図書館を創るということで、どのよ

うな夢を描いているのでしょうか。そこにはどういう可能性があるのでしょうか。どういう方向性を探っているのでしょうか。アジア研究図書館にはどのような必要性が、あるいは使い道があるかということについて、いま考えていることをお話ししてみましょう。

2. 東京大学の蔵書の特徴——アジアのほぼ全域を研究してきた

東京大学が持つアジア関係の資料には少なからず歴史があります。ご承知のように、東京大学の創立は1877年、明治10年ですが、それより千年以上前から、アジア諸地域との交流の前史があります。つまり近世までの外国との関係でいうならば、日本のアジア関係資料は圧倒的に中国と朝鮮との関係によって構成されていたといっても大過ないと思います。ただし、近世においてもオランダとの国交があったため、それに関連する資料もあります。近代以降、かつては「唐天竺」などと十把一からげに呼んでいた諸地域について新たな関心が発生し、東京大学はそれに関する資料を収集してきました。すでに百何十年にわたってそうした資料を集めてきたのです。そのうちの少なからざる部分が1923年の関東大震災で焼けてしまいました。図書館に関係する者としては非常につらいそのような歴史もあるとはいえ、ともかく東京大学の蔵書は、近代以降、中国・朝鮮のみならず東南アジア、南アジア、西アジア、北アフリカ、それから中央アジア、東北アジアという、日本の外側に対する関心が徐々に拡大してきた歴史をきれいに反映していると考えることができます。このように、東アジア、中国・朝鮮のみならず、アジアのほぼ全域に関して様々な研究を行い、文献資料を収集し続けてきたということは、東京大学の特徴の一つであるといっても差し支えないでしょう。これは、このシンポジウムの冒頭の蓑輪先生のご挨拶でも言われたことですが、アジアに関して、中国・朝鮮だけに偏らない多様な資料を持っており、またいろいろなことを研究できる力を持っており、そのための資源を集積してき

たというのが、東京大学の特徴です。これを活用しないで放っておくのはもったいないので、アジア研究図書館を創ろうという構想が2009年頃に始まり、それはさらに、本郷キャンパスの総合図書館の改築を含む「新図書館計画」の一つの柱となりました。アジア研究図書館の構想の背後にはこのような歴史があります。

3. 学内で分散して保管されている資料を集約する

東京大学が所蔵するアジア関係の文献資料は膨大ですが、それらは現在、学内にいくつもある様々な図書館・図書室や研究室に分散して保管され、利用に供されています。分散している理由は何かということ、大学とは、学問の方法別に組織されてきたというところにあります。例えば「人間」を研究する学問は数多くあります。哲学、倫理学、宗教学、あるいは歴史学、法学、政治学、経済学、医学、人類学といった多様な学問が同じ人間——これらの学問分野の研究対象が同じ「人間」といいいいのかどうかそれ自体が難しい問題なのですが——を対象にしています。しかし、大学の学部・学科や研究所は学問の方法別に組織されてきましたので、同じものを認識対象にしても、それに関する文献はいろいろなところに分散しているのです。アジアに関しても、アジア学部というような部局は東京大学にはこれまで存在していませんでした。様々な学部や研究所、具体的には、文学部や東洋文化研究所、それから社会科学研究所、法学部、農学部、経済学部といったところでアジアに関する文献を収集し、研究してきたのです。

一つの対象を方法横断的に研究する組織の試みは、これまでもなされてきました。アジアに関していうなら、「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET 機構）」というアジアに関する教育と研究のための、ある種の連携大学院のようなものを試みてきたという例があります。しかし、認識できる対象とは方法によって制約されているので、例えば、経済学で認識

されているアジアと、東洋文化研究所で認識されているアジアとがまったく同じアジアであるという保証はもちろんありません。認識対象は方法に規定される面があるので、それらが同じかどうかということは簡単にはいえません。しかし、いま学問の方法が大きく変わろうとしています。それがアジア研究図書館にとっても重要な点です。

もはやかなり古めかしい言葉になっています、「文理融合」などという言葉が随分前から唱えられるようになっていきます。もともと、「文系・理系」というのは学問の本質にはほとんど関わらない区別でして、ほとんど意味のない分類だと思うのですが、専門分野を超えて知の統合や融合や連携を図ろうとする方向性は、いわゆる「文理融合」にとどまらず、あちこちで現れています。また、知の統合・融合・連携を可能にする様々な技法や手法が存在しているということも、すでによく知られている通りです。

その方向性の一つが、対象別に知的な資源を集約してみるということだと思うのです。それによって、諸専門分野間の、あるいは、研究者と研究資源の間の、さらに学外・国外諸機関の間の架橋をするということ、これは、先ほどナディア・クレーフトさんもおっしゃっていた「橋を架ける」ということですが、それは対象別に知的資源を集約することによって可能になるでしょう。東京大学アジア研究図書館という構想は、そのための一つの試みであるということができます。

4. 図書・資料を集約し「書脈（コンドキュメント）」をつくる

研究資源としての図書・資料を集約することには、どのような効果があるのでしょうか。それは、ちょうど先ほど宇陀氏がお話になったことと密接に関わってきます。私たちは文書を、通常は、テキスト（意味のある言葉の連鎖）として読み取ります。そのテキストが他のテキストと頭の中で結びつけられると、文脈すなわちコンテキストが発生します。テキストとテキストの間に

相互作用が発生するのです。それをコンテキストというわけです。単に一つのテキストに書かれていることだけをうのみにするのではなく、複数のテキストをぶついたり、比べたり、あるいは接合したりして、複数のテキストから文脈的に物事を認識し判断するというのが、私たちの頭脳の働き方です。

これと同じように、文書（ドキュメント）に関しても同じようなことがあるのではないかと私は考えています。図書・資料などの文書を、何らかのルールにしたがって操作すると、一つの文書を他の文書と結びつけることができます。その一つの文書が、他の複数の文書との間に関係性や相互作用ができたときに、それを何と呼んだらいいでしょうか。もしかしたら、宇陀先生の専門分野では、そういうことについて何らかの概念があるのかもしれませんが、今日は私の造語で、それを「書脈」と呼ぶことにしましょう。テキストとテキストの間の関係や相互作用が文脈（コンテキスト）だとするなら、文書と文書の間の関係や相互作用は「書脈（コンドキュメント）」だという意味の造語です。複数の文書間の関係や相互作用を書脈と呼ぶのが適切かどうか自信はありませんが、ともあれ、そこには文脈に照応する何かが生成するだろうということが期待されるわけです。

図書館とは、実をいえば、元来、書脈の場だったのではないのでしょうか。実際に書庫に入って、書架に並んでいる本を眺めているだけでも、何かが変わってくるということは、皆さん、よく経験されることだと思います。わたくしの恩師の1人は、かつて若き日に、京都大学の図書館の書庫に入り込んで、ドイツ経済史の書物を次々と引っ張り出しては読み比べているうちに、ときのたつのを忘れて、書庫の出入り口を閉められてしまって、一晩中そこで過ごす羽目になったことがあったのだそうです。しかし、この先生は、そうして、書庫の中で何らかの「書脈」を発見したのではないかと思うのです。通常、図書館の書庫というのは、書架の左上から右下に向かって受け入れ順に並べてあるので、右下の文献というのは左上の文献を参照したり引用したりしながら書かれています。書架の前に立っただけで、例えばそういう関係

が簡単に発見できるわけです。東京大学にアジア研究図書館を創るとはどのようなことかということ、アジアに関する文書の書脈を、新たに意識的に創るということを意味しているのではないかと私は考えています。

5. 自然発生的にできあがった書脈は、意図的に再現するのは難しい

しかし、書脈というのは崩壊することもあります。崩壊するとどのような事態になるのか、私の個人的な体験をお話ししましょう。この写真は私の研究室です。現在はこの状態ではありませんが、これは東日本大震災の直後に撮った写真です〔図〕。私の研究室には、東側の壁面に二層式の書架14基が立っていました。西側には書架が6基あり、合計20基の書架が立っていました。あの震災のとき、私は研究室にいたのですが、揺れがだんだん大きくなり、東側の書架を見ると、14基がうねり始めました。ちょっと危ないなと思うほどでした。書架がガッタンガッタンとうねっているのです。私は危険を感



図：東日本大震災直後の研究室

じて、思わず立ち上がり、西側の書架に背中を預けて避けたところに、東側の書架14基が全部、収められている本や書類を津波のように流しながらこちらに倒れてきました。どこまで倒れてくるかと思ったのですが、途中で——写真では書架の下敷きになってしまって見えないのですが——ソファ、ファイル・キャビネットやコンピューター・デスクなどの什器類があって、倒れる書架はそれらを破壊しながら私の顔の前で、斜めに倒れた状態で止まってくれました。これだけだと、私があの震災でどういう経験をしたかという話ですが、ここから先が大切なのです。

東側の14基の書架には実に様々な本や資料が入っていました。私は別にきれいに分類していたわけでも、番号を付けていたわけでも、カタログがあったわけでもありません。しかし、先ほど宇陀先生のパワーポイントの映像の中にあったように、書架上の本の配列は、あの本はここにあるという視覚情報として記憶されていたのです。そのため、震災前は、大体どのあたりに行つて、こうやって手を出せばあの本が出てくるとか、あるいは書架が二層式になっており奥にも本が入っているので、これをよければあの本が見えるといったことが大体わかっていた状態でした。ところが、地震によって、そのような書脈が壊れてしまったのです。恥ずかしい話ですが、私はその後、かつてあった書脈を再現することに成功していません。現在はこれとは別の新しい書架が、もう少し頑丈な仕方で東側の壁に固定されており、震災時に崩れた本を全部その書架に入れたものの、かつての書脈を再現することに成功していないのです。買ったり、贈呈されたりした本を、その都度、適切な場所に並べることによって自然発生的にできあがった書脈とは、意図的に再現するのは難しいのです。

その結果どうなったかという、何か必要があつて本を探すのですが、それがなかなか見つからないのです。30分ぐらい探しても見つからないときは、仕方がないので、学内の図書館の所蔵状況をコンピューターで調べて、経済学図書館に行ったり、社研の図書室に行ったり、あるいは文学部とか東

文研の図書館、総合図書館、こういうところに行って借りてきてしまうのです。壊れた書脈の中から特定の本を探し出すより、体系的に整備された図書館の書脈に頼る方が早いのです。図書館では書脈がカタログという形で可視化されていて、それがきれいに配架されているのです。それがあから、私の頭の中の書脈が崩壊してしまった後も、図書館があれば必要な書物を使うことができるのです。

6. アダム・スミスの書齋を再構成——蔵書目録と書き込み (Marginalia)

もう一つ、書脈の重要性がわかる例を話してみたいと思います。アダム・スミスは三千数百冊の蔵書を持っていました。いろいろな分野の、様々な言語の書物です。その蔵書の唯一の目録は、1781年にアダム・スミスが秘書に作らせた手書きのもので、「1781年目録」と呼ばれています。このスミス蔵書目録の現物は東京大学経済学部資料室に所蔵されているのですが、それにはおそらく、三千点余の蔵書がどのようにスミスの書齋の本棚に配架されていたのかという情報が含まれていると考えられます。つまり、この蔵書目録を使えば、スミスの書齋を再現できる可能性があるわけです。スミスの書齋を仮想空間上で再現して、コンピューターの画面上で、ある本の背中をクリックするとその本のデジタルデータがぱっと開くといったような形で、スミスの書齋をデジタル技術によって再現してみせるという可能性が開かれています。

アダム・スミスは、亡くなる少し前に手稿や草稿や覚書をすべて焼却するよう友人に依頼し、その友人が依頼を実行したため、手稿類は一切残っていません。彼が、いくつかの書物を書くに至る前の段階で、何を考えて、何を書いたのかという途中の経過がわからないのです。例えばマルクスは、パリ、ブリュッセル、マンチェスタ、ロンドンで膨大な草稿を書き記したノートを残しています。それらの一部がのちに、『経済哲学草稿』や『経済学批判要

綱』などの形で刊行されて、マルクスの研究と思想がどのような経緯をたどって形成・変化したのかがわかります。マルクスが悪筆で自分でも読めなかったような草稿がたくさん残っているのです。ところがアダム・スミスは全部焼かせてしまったので、途中の経過がわからないのです。彼の学知の形成過程は、彼が残した著作物つまり何冊かの本や論文を通じて、概略は再構成できるのですが、多くの問題が残されています。ところが、この蔵書目録を活用すると、新しい可能性が開かれると思うのです。この蔵書目録にしたがって、アダム・スミスの書斎を再構成してみて、アダム・スミスが構築した書脈と、それから旧蔵書にスミスが書き込んだ書き込み（Marginalia）を通じて、スミスの学知の形成過程に迫り得るという可能性です。このように、本というのは、単なるテキストの容れ物ではなくて、何かそれ以上の意味があるように思います。本という実物が書架にどのように並べられていたのかというところに、何か意味があるのではないかと考えています。

7. サブジェクト・ライブラリアンという職種をどう考えるか

さて、専門図書館としてのアジア研究図書館を創るということで、私たちが大切に考えていることの 하나가人材です。専門図書館を土台にして形成される人材であり、また、その専門図書館を支える人材です。それをどのように呼ぶべきかについて、いま、アジア研究図書館運営委員会ではいろいろな議論をしています。「サブジェクト・ライブラリアン」という名称を仮のものとして使っていますが、それ以外にも例えば、先ほどのクレフトさんのお話にもあったように、キュレーターという概念もあり、レファレンス・ライブラリアンという言葉もあります。あるいは、より直截的に、「ゲートキーパー」のような表現を使うほうがよいかもしれません。いろいろな概念がありますが、このような人材を育成する必要性や、そうした人材が活躍できる可能性を今後追求していきたいと考えているところです。

ただし、東京大学アジア研究図書館が今後、実体を伴って運用を開始したとして、おそらく、アジア研究図書館の中だけで閉じた形でサブジェクト・ライブラリアンが育成され、また仕事ができるということにはならないでしょう。なぜならば、このような専門人材というのは、学外あるいは国外の諸機関との連携関係の中で初めて意味を持ってくるからです。さらに、もう一つ重要なことは、専門人材の職業経歴、ジョブ・キャリアがサブジェクト・ライブラリアンで行き止まりだというのは、おそらく望ましくないと思うのです。そうではなくて、職業経歴が他の方面にも開かれているとか、あるいはキャリアアップすることができる、そういう建て付けで、この新たな職種を考えなければいけないので、当然ながら学内に閉じていない可能性を追求したいと考えるわけです。東京大学アジア研究図書館だけではこのような専門人材の育成も運用も困難だからです。他の大学の様々な図書館、あるいは国外のいろいろな図書館、さらに各大学の関係者と協力関係を結ばなければ、この第一の夢はきれいには実現できないでしょう。これは決して容易なことではないと考えていますが、ぜひとも実現したい夢の一つです。

8. アジア研究図書館の様々な可能性

2 番目の夢は、「研究する図書館」です。アジア研究や、方法融合的な新しいアジア研究の基盤としてのアジア研究図書館の構想を追求したいというのはもちろんなのですが、それだけではなくて、先に述べたように、ドキュメントが並んでいるということを活かして総合的な研究ができるのではないかと考えています。ドキュメントに何が書かれているのかというテキストの側面だけではなくて、ドキュメントそのものの実物を文献学的、書誌学的、あるいは古文書学的に、さらに文書を構成している紙の質や紙の製法、それから、印刷、筆記法、製本・造本などについての研究といったものをふまえ、文書に関する、より総合的な研究ができないだろうかということも夢想して

います。さらに文書に記載されたテキストの意味や内容と、物としての文書、文書の物的側面の特質・個性との比較や関係を明らかにするということも、殊に文書がわずかしか遺されていない時代や地域についての研究では重要になるだろうと思います。アジア研究図書館にはこうしたこともできる可能性があります。これが2番目の夢です。

3番目の夢は、「アジア研究図書館の必要性」ということです。もちろん、アジア研究が必要であるということは、わざわざいうまでもありません。そうなのですが、アジア研究にとってアジア研究図書館が必要だというだけでは説得力は弱いと思うのです。なぜならば、アジア研究という言葉をどのように定義したとしても、残念ながら私はいかなる意味でもアジア研究者ではないからです。申し訳ないことに、私は経済史の研究者であり、しかもアジア経済史ではなくて西洋経済史、ヨーロッパの経済史を研究している者です。アジアと無関係ではないとはいえ、自身がアジア研究者ではない者がアジア研究図書館の初代館長になっているわけです。そういう人間が、アジア研究図書館はやはり必要なのだということを自信をもっていうことができるようにするためには、ただアジア研究の役に立つということだけでは不十分だと考えるのです。

ここで二つだけ簡単に私の思いつきを話しましょう。一つは、アジアとヨーロッパの非対称性に関する研究を、アジアの側からできるということです。私は、これは非常に重要なことだと考えています。アジアとヨーロッパの非対称性というのは次のようなことです。ヨーロッパの人々はアジアに対して、これまでいろいろな欲望を持ってきました。例えば茶や絹や木綿や香辛料や金といったアジアの産物あるいはアジアの文化に対して強い欲望を抱いてきただけでなく、その延長上で、アジアの土地や人民を支配したいという欲望も示しました。むろん、アジアの側でもヨーロッパに対して様々な欲望を抱いてきました。それで、アジアとヨーロッパの間には古くから交渉・交通・交易があったわけです。しかし、この交渉・交通・交易の過程に作用した欲

望は非対称だったということが、近年いろいろところで議論されるようになりました。非対称とはどういうことかということ、16世紀から20世紀に至るまで、ヨーロッパのアジアに対する欲望のほうがはるかに大きかったということです。その証拠に、ヨーロッパの船と商人がアジアの諸地域に赴いたのであって、その逆ではないということが挙げられます。中国やインド、あるいは日本の船がヨーロッパに行って、ヨーロッパのものを買い集め、ヨーロッパの人々と何か交流をしようとしたわけではないのです。ヨーロッパの人々がアジアに来たという事実は覆しようがないと思います。

従来はなぜかヨーロッパの側に注目してこれを説明してきたのです。ヨーロッパでは近世に欲望が解放されて、個人が自由になって、経済活動が盛んになって、そのうえ遠洋航海する技術があったなどと説明されてきたのですが、それだけでは話は済まないのです。アジアに注目して、この非対称性を考察する可能性を追求してほしいのです。アジアの側から欧亜の近世以降の非対称性について考察すると、そこから何が出てくるのかとを考えることは、アジア研究図書館の使い道として非常に重要だと思うのです。これはヨーロッパを理解するためにもきわめて重要な意味をもっています。

もう一つ、次のようなことも考えてみたいのです。すなわち、共同体や身分制というものを解体し、人権や自由や民主主義という考えが登場して、初めて市場経済・資本主義というのは発展するのだというのが、これまでの経済学や政治学や教育学が考えてきた常識でした。しかし、いま、私たちの眼前に開かれている現実には、その常識が通用しないかもしれないという現象が起きています。必ずしも身分制や共同体的な規制が撤廃されず、あるいは人権や自由や民主主義という概念が完全に確立しなくても（つまり、「近代化」は欠いても）、市場経済・資本主義が発展してしまう（つまり、「産業化」は進展する）可能性があるのです。そうなのだとすると、資本主義・市場経済を再定義する必要性が出てきます。個人の自由や人権や民主主義がなくても、あるいは、その点で不十分や欠格があっても、発展する市場経済とか資本主義というの

は何なのかという問題です。アジア研究図書館はその点でも役に立つはずで
す。だから、アジア研究だけではなく、経済学や政治学や教育学の研究にも
すごく重要な役割を果たす可能性がある、私は考えています。

ここまでで、アジア研究図書館の可能性、必要性、達成しなければいけな
い条件について述べてきました。今後私たちは、唯一無二の図書館を創るた
め、その作業を進める主体と条件をさらに整えていくのです。そして、学外・
国外との緊密な連携・協力関係も築いていきたいわけです。その前途は文字
どおり^{りょうえん}遼遠です。本当にそんなことができるのか、率直に言って自信はあり
ません。それでも、この遼遠な前途を皆さまとともに歩む関係を築くことに
意味があると考えています。いろいろなところでご協力をお願いし、また、
お知恵やお力を借りることがあるかと思いますが、どうか、東京大学アジア
研究図書館をよろしくお願いいたします。

パネルディスカッション

☆モデレーター：齋藤希史

☆登壇者：熊野純彦×小野塚知二×蓑輪顕量×尾城孝一×
ナディア・クレフト×宇陀則彦

1. 熊野附属図書館長から総括コメント

【齋藤】早速ですが、熊野附属図書館長に今日皆さんの話をうかがった上での総括的なコメントをいただきたいと思います。

【熊野】私が図書館長になってからまだ1年もたっていません。ここに並んでいる皆さんの中で、1番、図書館に関わってきた時間が短く、また専門分野もアジアとあまり引かからないので、基礎的素養に欠けるところがあるのですが、1年足らずの図書館長としての経験に引き寄せる形で、感じたこと、思いついたことを少しお話しさせていただきます。

私は2年間、文学部長をやらされて、その任期が終わり、後は定年まで遊ぶだけだと思っていたところ、総長に呼ばれ、図書館長をやってくれ、あなたが断ると理系学部長の経験者に回り、この状況で理系の人に回るのは少しきついだろうと言われました。実際はそんなことはなく、むしろ全国的には工学系・情報系の図書館長の方が今や多数派だということが後で

わかったのですが、だまされて図書館長を引き受けたわけです。

私自身は大変古いタイプの人文系の研究者で、図書館というと、40年前の自分の学生時代でイメージが止まっています。実は、図書館と関わるようになってからすぐさま問題になった、電子ジャーナルとか、デジタル化とか、そういったものについて、個人的にまったく切迫感を持っていませんでした。

これもまったく知らなかったのですが、この大学の図書館長をやると、国立大学図書館協会会長にほぼ自動的に就くことになってしまいます。ほとんど名ばかりの役職なのですが、それでも様々な会合に出なければならず、4月にすぐさま直面したのは、オープンサイエンス、オープンデータという動向に国立大学図書館がどう関わっていくかという問題でした。それから付け焼き刃で一夜漬けの勉強を重ねて参りまして、本日、NIIの尾城さんのお話をうかがい、自分の中で整理がつかなかったオープンデータをめぐるこれまでの経緯・現状・将来像といったことについて、頭の整理がつくようになりました。

また私は不幸なことに、10年ほど、似合わない学内行政に携わってきましたが、元来は制度や規則に大変疎い人間で、東京大学附属図書館長というのは、同時に総合図書館長であるということすら知りませんでした。総合図書館というのは、大震災の後、ロックフェラーから寄付を頂戴して建てた歴史ある建物で、当時のお金で25億円ほど出してくれたと聞いています。少し時代がずれるので単純な比較はできませんが、東京駅の丸の内口の立派な庁舎の建築にかかった費用は15億ほどだったと聞いています。大きさも全然違いますし、東京駅の駅舎はあの時代でもかなり立派な建物でしたが、総合図書館は、内装等も、当時としては大変なお金をかけて造ったようです。

ところが本日、ナディア・クレフトさんのお話をうかがい、ビデオなども拝見すると、規模が違うことに驚きました。歴史の厚みがまったく違

うのです。少し数字を挙げると、東京大学全学の蔵書は現在約960万冊で1000万冊に少し足りませんが、この国の中では最大規模の図書館施設です。ところが、ライデン大学はアジア図書館だけで500万冊の蔵書を抱えています。もちろん、大学としての歴史、近代化の歴史の深淺がありますが、同時に、その国が文化や学問に対して、どれだけ投資する気があるかという問題が関わってきます。それは、その国の言ってみれば上品さの指標になっているようにも思います。この国も、東京大学も、図書館総体も、今後あまり明るい見通しはありませんが、与えられた規模と予算の中で頑張っていかななくてははいけません。ライデン大学の事例は、アジア図書館という意味で、よいモデルを示していただけたと考えています。

私自身の専門は、ヨーロッパをフィールドとした哲学史、ないし思想史です。また私は、もちろんコンピューターは使いますが、ほとんどメールとワープロにしか使わないというぐらいの、大変意識の遅れた研究者です。そういう研究者がいきなりインターネット環境の中での新たな図書館の問題に直面したので、様々な問題が自分の中で未整理です。宇陀さんは、私のような、哲学畑から出てきた者にとっては、大変興味深いお話でした。とりわけ、ドキュメント空間、あるいはテキスト空間といった言葉は大変刺激的でした。ジュリア・クリステヴァの「間テキスト性」という言葉は、ちょうど私の院生時代の80年代に広く議論された概念ですが、現在も、物としての本、電子情報としての様々なテキストをさらにつなげていく一つの視点を、空間という言葉、また間テキスト性という概念で与えてくださったような気がしています。また、私どもが使い慣れてきた概念も無用のものではないという思いも強くしています。

私は昨年3月に前図書館長から引き継ぎを受けて、4月から図書館長室に幽閉されているわけですが、最初の仕事は、アジア研究図書館長の仕事を小野塚さんに押しつけることでした。小野塚さんは、自分分分野も違ふし、健康上の不安もあるしということで固辞されたのですが、三顧の礼を

取ってお引き受けいただきました。今日のお話をうかがい、実に適材適所、誠にふさわしい、優れた方をお迎えできたと意を強くしています。間テクニスト性という概念が出る前に、もう少し普通の言葉として、文脈、コンテキストという言葉が使われていたわけですが、今日さらに書脈、コンドキュメントという言葉がうかがいました。あまり使うなとくぎも刺されていましたが、これによってまた一つ、見慣れた景色が新しい意味を帯びて自分の前に立ち上がってきたという感触を持っています。投影された資料の中には、3.11の惨状も写っていて、よくあの日に写真を撮り記録されたものだと、やはり歴史家は違うもんだと感心もいたしました。

もう一つ、小野塚さんの話のきっかけの中で強く心に刻んだ言葉があります。現在、図書館だけではなく大学自体が新たな困難な状況を抱えています。それは、政府からの要請、経済界からの圧力の下にさらされているということです。この1年足らずの間、私も、国家と資本の支配に大学や図書館はどこまで組み込まれていくのかということを考えてきました。統制そのものは抗し難いものですが、大学にも、また図書館にも、国家と資本という、この世界の圧倒的な力の下に組み込まれてはならないものが存在します。しかし、国家と資本が圧倒的な力を振るっている現状、抗し難い現状の中で、その逆の視点もまた必要であるということは常々考えています。

今日、小野塚さんが話し始めに「アジア研究図書館の夢」という言葉をお使いになりました。なんだか少し頼りない言葉のようにも聞こえますけれども、尽きない夢、見果てぬ夢であるのかもしれませんが。今、私どものアジア研究図書館が、その夢の一つを紡ぎ始めています。小野塚さんとしても様々な思いを込めて使われた言葉だと思いますが、私としては、得手勝手な文脈で、そのようにも受け止めさせていただきました。

2. 図書館の一般社会との関係と、物・事を集約することについて

【齋藤】では次に全員に向けての質問を二つほど紹介して、それについてのコメントをいただきたいと思います。また、それぞれの方にも個別の質問をいただいていますので、それについては、それぞれの方にコメントをいただく前に紹介します。

まず、全員に向けての質問です。一つは、熊野さんがお話になったことと大きく関わっています。日本の図書館や教育の予算が減らされている現状の中で、図書館の役割の重要性を研究者や学生だけでなく、一般市民にも伝えていく必要があるのではないのでしょうか、つまり、図書館側からどのような働きかけをしていくべきだろうかということです。全員に向けての質問ですが、東京大学の中でアジア研究図書館の設立に携わっている方からまずコメントをお願いします。

最初の質問は予算の話、あるいは一般社会との関係でしたが、もう一つの質問は、図書館という機関にとって本質的な問題、つまり、様々な物や事を集約する際には、個々に持っていた特性などが失われることがあるのではないのでしょうか、というものです。アジア研究図書館として資料を集約しまとめていくときに失われるものがあるのではないか、という懸念です。

このご質問は、皆さんに向けて全体的な議論の一つの核になるかと思いますが、まず、U-PARL 部門長の蓑輪さんから、そういったことも含めて、補足、コメントが何かあればお願いします。

【蓑輪】まず最初に、今日の皆さんの発表を聞かせていただいた感想を述べ、それから、齋藤さんからいただいた質問に答えたいと思います。

私も U-PARL の部門長に関わってからまだ3年しかたっていません。初めて部門長を仰せつかったときは右も左もわからず、特に大学の制度的なこともわからない中で、アジア研究部会にも出席せざるを得なくなり、

不安に思うこともありました。皆さまのおかげでいろんなことがのみ込めるようになってきました。その中で、何のためにアジア研究図書館をつくるのかという目的を実感しました。それは、新しい学術拠点を大学の中につくっていくということです。今までの図書館というのは基本的に、本を収蔵し、保存し、利用していくということを中心に動いていましたが、新しく研究と教育という視点が加わり、それを開いたものにしていくというのが目指されています。これからの日本の将来に向けて、東京大学の中に新しい知の学術拠点をつくっていく、これが1番の目標なのだとということを実感しました。

熊野館長がされたロックフェラーのお話は、西洋やアメリカ社会の大学における図書館の位置づけが反映されていると思いました。ある方から聞いたのですが、大学紛争が起きたときに学生たちが最初に占拠するところはどこかという、日本だと学部長室という話が出てきそうな気がしますが、海外の場合、大学の1番の拠点である図書館だそうです。熊野さんの話を聞いていて、大学の1番中心にあるべきものが図書館だという価値観があり、図書館をつくるときにたくさんのお金をかけて知の拠点として最もふさわしいものを造ろうということが、そのときにはあったのではないかと思います。

今はITが進歩してデジタル技術が進んでいますので、データベースとか様々なものを図書館が集約できるようになっていますが、それを生かしていくために必要なものは実は人なのだというのを、クレフトさんの発表を聞かせていただき、すごく実感しました。資源がたくさんあっても、それを現実に活用するためには、やはり専門的な人がいなければ難しいものです。U-PARLの中でできあがってきた標語に「むすんで、ひらく」というのがありますが、様々な領域にわかれてしまった現在の学問をもう一度つなげていく、つまり、いろんな人たちが集まり、そして情報を交換し、それぞれが開いていくということを実践しているのは、やはり中にいる

人なのではないかと感じます。新しい研究者を育てていくときにも、図書館の中に、それを支援できる人がいるということが、非常に大きな意味を持ってくだらうと思いました。そういう意味で、U-PARL が次の時代を担う人を育てる場所であるということを実感し、きちんと確認していかなければいけないと考える次第です。

一般市民にも開かれたものにしていくためにはどうすればよいのか、という質問に対して、東京大学の場合は、まず利用資格について考えなければいけません。現在、東京大学の中の書籍を使うことができる人は、大学に関係している学生や教職員です。開かれてはいるのですが、まだ学内だけであり、外には厳しいところがあるように思います。ですので、どのような条件の下に開くことができるのかということを検討しながら、開かれた図書館というビジョンを考えていく必要があると思います。

実際、U-PARL で購入したデータベースがいくつもありますが、この使用に関しても、いろいろな制限がかかっています。提供者の意向もありますが、将来的にどうすれば開かれたものにしていけるのか考えていかなければならないでしょう。

二つ目に、物や事を集約すると、失われてしまうものがあるのではないか、という質問がありました。その質問を聞いて思い出したことがあります。私は、インド哲学・仏教学という、南アジアから出発した学問をしています。仏教が専門で、私たちはテキストを中心に研究していますが、大御所の先生方は常に、仏教は文化の一つである、一つのものに限定せずに、文化として考えていく必要があるということをおっしゃっています。例えば、仏教が伝えてきたものを可視化する者が現れ、仏像を造りました。実際に仏像がつくられるのは、釈迦が亡くなってから約4、500年たった、紀元後1世紀ぐらいからと言われています。仏像は、多くの人々は礼拝の対象として捉えています。

この仏像が様々な形で博物館などに展観のために出されるのですが、博

物館に出すと、本堂の中に安置され、様々なものに囲まれているという文脈がなくなってしまう。ただ見るためのもの、鑑賞するためのもの、美術品になってしまいます。これが実は、美術史の世界でも、ある時期から問題になったようで、インド学の教育でも、関心のある先生方が、その文脈をきちんと残す必要があると考え、様々な工夫をするようになってきました。これは東大寺のお坊さんから聞いた話ですが、東大寺の仏像は、ヨーロッパにも時々出張なさるそうで、そのときには必ずお坊さんたちが一緒についていき、簡単な法具を用い、朝勤をするそうです。その仏像が置かれている文脈を常に忘れないでほしいという配慮から、そうしているのだと聞きました。

先ほどの質問を聞き、物や事を集めたときには、それが本来あった文脈も何らかの形で一緒に残していく努力も必要ではないかということを考えました。

【齋藤】 今のお話は、小野塚さんのお話にも出てきた、文脈や書脈の重要性ということを示唆しておられるように感じました。発表の順番とは前後しますが、宇陀さんが、小野塚さんのお話を受けて感じたことがあったとおっしゃっていましたので、それを御紹介いただけますでしょうか。

3. プレストルームの研究

【宇陀】 はい。実は小野塚さんの発表を聞き、やられたと思いました。というのは、私はパネルディスカッション用に隠し玉を持っていたからです。小野塚さんと同じことを考えていて、クリステヴァの間テクスト性をドキュメント空間に持ち込み、「間ドキュメント」という構想を持っていたのですが、それを先に言われてしまいました。間ドキュメントより書脈のほうがぴったりくるので、私のほうでも「書脈」という言葉を使わせていただきたいと思います。

あと、小野塚さんの話の中にアダム・スミスの書齋を実現する話がありましたが、日本でも島崎藤村の書齋を記録した人がいます。それから、空間設計という話でいうと、昔私はブレストルームの研究をしていたことがあります。この研究はブレインストーミング（ブレスト）を活性化する部屋を作ろうというものでした。方法論として考えたのがデザインスペースマッピングという手法です。ブレストがうまくいかない原因の一つは、相手がどういう人なのかわからないことです。初対面だと会話が進まないが、だんだん仲よくなっていくと話がはずむという経験は誰もがしたことがあるはずです。そこで我々が考えた方法は、お互いの仕事をブレストの部屋に仮想的に持ち込み、相手がどのような仕事をしているのか理解しやすくしようというものでした。相手の仕事をみると、どんな人なのか結構わかりますよね。仕事場にこそ、その人の考えが表れているというか。例えば大学の先生だったら、机の上にたくさんの本が積みあがっていたり、今仕事をしている関係の書類が置かれていたりします。その空間的配置や時間的配置をみればその人がしてきた仕事の「知層」がわかるわけです。しかし、それを言葉で説明してもなかなか伝わりません。そこで、お互いの仕事をデジタル技術によってブレスト空間の中に持ち込む研究を行っていました。

4. 図書館における民間企業の役割／データ管理は誰が担うのか

【齋藤】今の「書脈」で言うと、複数の書脈をぶつけることで創造性が生まれるという話にも通じると感じました。

続いて、順は前後しますが、データの話やデジタル空間の話もありましたし、いくつか質問もいただいていますので、尾城さんにコメントをお願いしたいと思います。

一つは、これは実際的なことかもしれませんが、大学図書館における研

究データ管理において、民間企業はこれからどのような役割を担うことになるだろうか、民間企業の役割は拡大していくだろうかという質問です。それから、これも実際的なことですが、データ・ライブラリアンというのは、図書館職員が担うべきなのか、URAのような専門職員が担うべきなのかという質問をいただいています。もちろんこれは、組織によって、形態によって、いろいろあると思いますが。

【尾城】一つ目の質問、データ管理における民間企業の役割ということですが、ここで言う民間企業というのは一体何を指しているのでしょうか。民間企業というのはすごく範囲が広いと思います。IT企業などもあるだろうし、民間の出版社なども関わってくるでしょう。

【齋藤】 従来であれば、例えば国立大学なら国立大学の中でやっていた仕事というものを、民間企業との役割分担でしていくこともあり得るということでしょうか。

【尾城】 それは当然あり得る話だと思います。ただ、そこで注意しなければいけないのは、特に商業出版社との関係です。図書館に関係している方はご存じと思いますが、電子ジャーナルの値上がりなどが問題になっていて、学術論文は少数の商業的な出版社に独占・寡占されてしまっています。このままいくと、論文の裏にあるデータも、やはりいくつかの少数の出版社に独占されてしまうのではないかという危惧もあります。

論文についてはもう遅いかもしれませんが、データについては過度に営利的な会社に依存することなく、学術コミュニティというか、我々の側できちんと保管・保存し、可能なものは共有し、公開できるようなプラットフォームを我々自身が持たなければいけないと思います。

二つ目の、誰がデータ・ライブラリアンになるのかという質問ですが、今日の私の発表の中では、データ・ライブラリアンというのは、学内の様々な部署の人たち、図書館員やURAの人、情報基盤センターなどの技術スタッフ、そうした人たちがチームとして集合的にその機能を担っていくと

というのがよいのではないかという話をしました。ただ、チームをつくるにしても、その中で中心になる人がいないと、チームを編成することもできないし、機能させることもできないと思います。では誰がチームの中心になるのかということについては、私はもともと図書館員で、図書館員に対する期待は非常に大きいので、大学の中では、図書館員が、データ・ライブラリアン的な機能を果たし、チームの中心的な役割を担ってほしいと考えています。

5. サブジェクト・ライブラリアンの専門性と身分

【齋藤】データ・ライブラリアンもそうですし、図書館職員の役割の大きさという話も出てきたと思いますが、クレフトさんにいくつか質問がありましたので、コメントをお願いしたいと思います。まず、サブジェクト・ライブラリアンというのは、もともと専門性を持っている、専門的な知識を持っているということが前提になっているのか、という質問がありました。

【クレフト】私もそうでしたが、ライデン大学では図書館で働くために勉強するわけではありません。私の場合は日本学ですが、まずは専門の地域、あるいは歴史、哲学、医学、そういった専門を持ちます。図書館で必要になる知識や機能は職場で勉強しても大丈夫なので、サブジェクト・ライブラリアンの中に図書館で働くために勉強した人はほとんどいません。

「ナディアは司書らしくない」とよく会議で言われます。冗談なのか本気なのかわかりませんが、司書というものを考えると、ライデンには一つのイメージがあります。それは図書館の奥のほうで、自分の部屋のデスクで働いている人というものです。誰とも話したがらず、カタログに本を入れる、そういう人もいると思いますが、サブジェクト・ライブラリアンになるのは、自分の地域の専門家と親しくて、話しやすい人がお勧めです。

この二つのポイントは大事です。

【齋藤】もう一つ、オランダでは図書館員の身分はどのようなものでしょうか、という質問がありました。図書館員のステータス、身分です。

【クレフト】ステータスというのは、社会の中でのステータスということですか？

【齋藤】日本の場合、正規雇用ではなく、アルバイトのような形が多く、男性よりも女性が多いのが現状です。日本の場合、社会全体として女性はフルタイムではなくパートタイムでの労働が多いという現実とも関係していますが、それと比べてオランダはどうでしょうか。

【クレフト】オランダでは、司書の働き方としてはパートタイムが一般的ですが、専門性が高く、長期的なキャリアとしての仕事と認識されています。それでも女性のほうが多いです。なぜかというと、人間関係の構築が大事なので、その点で女性は男性より少し力を持っています。オランダではパートタイムでも、例えば月曜日から水曜日まで、パートナーと共働きをすれば給料は足りるので、そういう人には司書の仕事は人気です。私はフルタイムですが、ライデン大学には、私とギーベルトさん以外にフルタイムのサブジェクト・ライブラリアンはいません。多くの人はそれで間に合っています。

6. 東京大学内の図書館の連携と人材育成

【齋藤】クレフトさんのお話から、サブジェクト・ライブラリアンや図書館職員について、オランダと日本の違いがわかってきました。

これからアジア研究図書館をつくっていくことに関する質問がありましたので、それについて蓑輪さんと小野塚さんにおうかがいしたいと思います。まず、今のクレフトさんへの質問と関連しますが、アジア研究図書館と附属図書館との連携関係はどういうふうにしていくのかという質問で

す。今の大学図書館の構造だと、日本ではサブジェクト・ライブラリアンを育成していくことは難しいのではないかと、そうなると、アジア研究図書館は附属図書館とは独立して運営していくのかということです。

それから、アジア研究図書館ではサブジェクト・ライブラリアンをどのように位置づけていこうというお考えなのかという質問です。

【義輪】 附属図書館との連携が難しいのではないかとありますが、今は附属図書館の総合的な機関の下で動いていますが、将来的にいろんな変化があり得ると思っています。仏教では、「入る息、出る息を待たず」と言うぐらい、次がどうなるかわからないと言いますので、よりよい形を目指して変化していければと思っています。

サブジェクト・ライブラリアンですが、海外のサブジェクト・ライブラリアンたちの仕事内容を聞いていますと、U-PARLの特任研究員たちはサブジェクト・ライブラリアンに通ずる仕事をしています。選書もそうですし、先生方と連携を取って仕事をするというのもやっています。

大学院生の指導などにはまだ関わっていませんが、そうしたことも念頭に置いて、新しい職種が図書館の中にできるとよいと考えています。大変に大それた発言かもしれませんが、理想としては、新しい知の拠点ができ、アジア研究図書館に限らず、総合図書館や駒場や柏の図書館にも、専門的な領域を研究してその実績があり、なおかつ図書館のこともよくわかりながら研究の支援をしてくれるという新しい職種ができると、日本の社会、あるいは日本の図書館のあり方が少し変わっていくのではないかと考えています。

【小野塚】 アジア研究図書館は、現時点では東京大学附属図書館の中につくるという路線です。なぜかというと、職員の方々の理解を得られなければ、アジア研究図書館は運営できないからです。教員がいくらつくりたいといって、院生がいくらほしいといってもできません。職員の方々が動いてくださらなければできません。そのために1番よいのは、附属図書館

の中にアジア研究図書館を設けるという位置づけだと私は考えています。

サブジェクト・ライブラリアンは難しいです。東大の学内だけで閉じていたらできませんから、サブジェクト・ライブラリアンがいくつかの大学を回るというような職業経歴のつくり方の可能性まで追求しないと不可能なことです。ただ、これは誰かが言い出さなければ、絶対にできません。現状、文科省がやろうと言ってくれる可能性はほぼゼロに等しい、だから我々が言い出しました。言い出して、他大学の方々と一緒にできることがあればやろうということを、我々は考えているところです。

7. ライデン大学のアジア図書館から学べること

【齋藤】 もう一つ、小野塚さんや蓑輪さんには、クレフトさんの発表をふまえて、具体的に取り入れたいと思った活動や考え方はおありでしょうか。

【小野塚】 視覚と音声を伴った情報で、ライデン大学のアジア図書館のイメージが非常によくわかりました。学生、院生に親しまれている場所ですので、そういうところをつくらないといけません。今、アジアの研究をしたいと思っている学生、院生はたくさんいます。昔は、熊野さんみたいに、我々の学問的な参照基準は基本的にヨーロッパでしたが、今、圧倒的にアジアに関心が向いています。そういう人たちが、アジア研究図書館に来れば何かわかるし、誰かとつながることができるという場所をつくりたいです。集積してしまうと従来あった書物の持っていた位置づけが失われていくのではないかとこの質問がありました。もちろん、その懸念はあります。本には必ず来歴がありますし、文庫という一まとまりの形で遺贈されたものもありますし、誰が利用してきたということもあります。だが、これも書脈ですが、一旦記号化して残したものを崩し、新たなアジア研究図書館という書脈に位置づけ直すことによって、学生や院生がアジアに対する理解を深めることができるし、新しい研究をするきっかけになるという面もあ

と思います。先ほどのライデン大学の例では、学生、院生があの手紙館を自分のものとして使っていましたので、やはりそういうものをつくりたいと思いました。

8. 「研究する図書館」は誰と協働し、あるべき姿を模索していくか

【齋藤】関連して小野塚さんへ、「研究する図書館」というものにおいて、誰が研究するのかという質問があります。

【小野塚】実際につくってみないと誰が研究するのかわからないところがあります。何しろ実体がない図書館について、「研究する図書館」というのは誰が何を研究するのか、と問われても非常に困ります。簡単に言うと、図書館に研究機能を持たせようという話です。従来は、図書館というのは研究支援機能だけを持っていました。つまり、研究する学生、院生、教員を知識基盤という点で支援するのが図書館の仕事でした。アジア研究図書館の場合、その対象をアジアに限定していますが、方法を横断的にして研究機能を持たせるとどういった新しい知の融合が起きるか、そういうことを試したいのです。そのためには教員のポストがほしいですし、外国人や学外の研究者が、客員研究員、客員研究者、あるいは客員教授として、アジア研究図書館に一定期間滞在して一緒に研究することが大事です。そして、サブジェクト・ライブラリアンとも交わりながら、研究し、そして、図書館をつくっていく、そういう機能を持ちたいのです。そうすることで、これまで我々が描いていた図書館のイメージとはだいぶ違う、アジア研究図書館というものができるのではないのでしょうか。そういう夢です。

【齋藤】もともと図書館というのは、研究とは切り離せないものとして存在してきました。ここで誰が研究するのかという問いに対しては、例えばクレフトさん御自身もサブジェクト・ライブラリアンとして研究をなされています。それから、宇陀さんのお話にあったように、ドキュメント空間

に対峙したものは、常にそれを自らのテキスト空間と相互に作用される点において、それも研究的な空間をつくっていくわけです。それから尾城さんの言われた、研究データというものをどのようにつくって、保持し、あるいはそれをオープンにしていくかということも、研究的な作業と言えます。つまり問題は、もともと図書館にあった研究とのつながりをいかに見えるようにし、いかに恒常的で安定したものにし、いかにきちんと再生産していくことができるかということではないでしょうか。私は、研究図書館というのは、従来の図書館とはまったく離れたものではなくて、むしろ、その機能をきちんと目に見えるようにしていく一つのあり方なのではないかという気がしました。ただ、そのときに、やはりアジアという枠を立てることが、例えば今の日本の東京大学においては有効であろうという、戦略的な方向はあると思います。

【蓑輪】 私は U-PARL の部門長をしていますが、U-PARL の目的の一つに、「研究図書館の機能開拓研究」があります。小野塚さんがおっしゃったように、今後のあり方というものを考えていく、それも様々な人たちとの協働の中で、あるべき姿を模索していくというのが、U-PARL に課せられています。実際に自らが体験して問題を見つけ出し、そしてその方向性を考えていくことができるのは、おそらく、日本全国を探しても U-PARL 以外にないのではないかと考えています。ですから U-PARL の存在は今、とても大きな意味を持っています。

【小野塚】 研究機能を持ちたいと申し上げましたが、もちろん図書館の 1 番基本的な機能は、知の社会的な備蓄です。備蓄がない社会は、一旦何かあったとき、不作や天災があったときに滅びます。知の社会的な備蓄がない社会というのも、そういう社会や大学は滅びます。図書館というのは、まず備蓄という意味を持っています。そういう点で、先ほどお話したように、図書館の機能がおびやかされています。

さらにそれを超えて、図書館は、今後もっと発展するための投資、将来

に対する投資という機能も持っていますが、アジア研究図書館は、さらにその先を考えています。備蓄の機能、投資の機能は、これまでも図書館が果たしてきた機能ですが、それを超えて、さらに研究機能を持とう、あるいは研究交流の機能を持とうということです。今、削られている部分を一生懸命守り、後退を余儀なくされたり、戦線を維持するだけの戦いではなく、前線をもっと先に広げたいという、前向きの発展的な姿勢がアジア研究図書館だと私は考えています。ぜひ、いろいろな図書館関係者の方々と一緒に戦いたいです。図書館は今、後退戦を強いられています。そうではなく、前に打って出て突破するという戦いをしたいというのが私の夢です。

9. ライブラリアンにできて研究者にできないこと

【齋藤】アジア研究図書館館長からの力強い宣言があったところで、最後に、ゲストの皆さんに、今後のアジア研究図書館への期待も含めて、あるいは、あまり期待できないという声ももしかしてあるのかもしれませんが、お一人ずつコメントをいただければありがたく思います。

【尾城】アジア研究図書館に対する期待にはならないのかもしれませんが、少し今日の私のお話に補足させていただきたいと思います。今日は、研究データ管理の背景として、オープンサイエンスの推進と研究公正という二つの流れがあるという話をしましたが、私は研究公正のためのデータ保存にはあまり魅力を感じていません。なぜかというと、それは基本的にコストにしかないからです。何かのときの保険という意味はあるかもしれませんが、そこから何も生み出されません。コストを何らかのベネフィットに転換していく、要するに、データを大学の資産として価値あるものに変えていく作業が求められると思いますが、大学の中でそれができるのは、おそらくライブラリアンだと思っています。そういう意味からも、オープ

ンサイエンスの推進やデータ管理に関して、図書館の人たちに対する期待というのは非常に大きいと思います。

【クレフト】 ライデン大学アジア図書館の場合、これからも支えたいのは言語の先生や言語の教育です。なぜかというと、日本語で出版された資料をいくら集めても、学生たちがまったく読めなければ、それはもったいないからです。研究を支えるのは大事ですが、将来の研究者、今の学生は、日本語、韓国語、中国語、サンスクリット語、あるいはヒンドゥー語が読めないと、よい研究者になれないと思います。研究者だけではなく言語の先生方も支えることが、図書館としての責任を取ることになるはずです。

今年からアジア図書館には、Language Learners' Corner を設けます。例えば、一つの本棚に、日本語能力試験のための学習書、Bilingual Readers、そして簡単な雑誌や本を集め、時間のあるときにそれを利用できるようにします。そして、古い日本語で書かれている資料にアクセスするためのコースも先生と一緒に立ち上げ、図書館がそうした古い言葉や古い倫理を学習するための場所となるように頑張りたいと思います。研究は大事ですが、教育も忘れないようにしてほしいと思います。

【宇陀】 サブジェクト・ライブラリアンやデジタル・ライブラリアンが日本で広がらない理由は、歴史的な経緯、つまり制度的な問題が大きいのですが、それを抜きにしても、大学の先生の大部分は図書館員が研究の能力があるとは思っていないでしょう。私は図書館員の方と長く付き合っているので、ライブラリアンの能力は高いことを知っています。

皆さん、機関リポジトリはご存じですね。今でこそ当たり前のようになっていますが、機関リポジトリ構築は非常に困難で、図書館員たちは絶望的な戦いを強いられました。もともと目標としていた形にはならなかったかもしれませんが、今や立派な学術情報基盤として機能している姿を見ると、機関リポジトリ構築を成し遂げたライブラリアンのポテンシャルは非常に高いということが証明されたと思っています。

とはいえ、ライブラリアンが研究者と同じレベルのことができるかというと、それは難しいと思います。特に日本では。しかし、ライブラリアンにできて研究者にできないことがあります。それはドキュメント空間のマネジメントです。研究者は主にテキスト空間で仕事をするので、ドキュメント空間を使いこなすことは苦手です。これまでの図書館員はドキュメント空間でのみ仕事をしてきましたが、これからはテキスト空間を理解しつつ、ドキュメント空間をさらに使いこなして、研究者のテキスト空間での仕事を手伝ったり、一緒に仕事をしたりすることができるようになると思います。

【齋藤】「図書館をめぐる知の変革」ということで、短い時間でしたが、いろいろな問題点や図書館の可能性が浮かび上がりました。また、最後に皆さんがライブラリアンそのものの可能性を強調されていて、私にはその点が大変印象深いものでした。本日は、まことにありがとうございました。

オープンアクセスをめぐる近年の動向

——即時オープンアクセス義務化の流れと新たな取り組み——

❖横井慶子

1. オープンアクセス義務化の動き

公的資金が投入された研究成果を市民へ還元するといった観点から、近年欧米を中心に公的資金を受けた研究成果の即時オープンアクセス（Open Access、以下 OA）を求める動きが相次いでいます。それ以前にも OA を求める方針はありましたが、多くは論文の雑誌掲載時点から OA までのエンバargo（公開猶予）期間を許容するものでした。それに対し、近年策定されている方針は論文の掲載後の即時 OA を求めるようになってきています。

2018 年 9 月、欧州の研究助成機関を中心に、研究成果の即時 OA を実現するためのイニシアティブ cOAlition S【注1】が創設されました。cOAlition S は Plan S【注2】という計画を発表し、cOAlition S 参加機関が 2020 年 1 月以降に公募する助成を受けた研究成果の即時 OA を義務付けました（後に、開始時期を 2021 年 1 月へ延期）。2022 年 8 月には、米国大統領府科学技術政策局が、連邦政府から助成を受けた研究成果の即時公開を求める覚書【注3】を発表しました。

2023年5月開催のG7広島サミット及びG7仙台科学技術大臣会合では、OAを含むオープンサイエンスの推進が共同声明【注4】に明記されました。この流れを受け、日本では2023年6月に「統合イノベーション戦略2023」【注5】にて、学術論文等の即時OAの実現に向けて国の方針を策定することが示されました。同年10月には、内閣府総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）有識者議員懇談会での議論のとりまとめ「公的資金による学術論文等のオープンアクセスの実現に向けた基本的な考え方」【注6】にて、国の方針に盛り込むべき内容が示されました。そして2024年2月16日に統合イノベーション戦略推進会議において、日本のOA方針ともいえる、「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」【注7】が決定されました。その内容は、対象となる競争的研究費制度が2025年度以降に新たに公募する研究費の受給者に対して、研究成果の学術論文およびその根拠データの即時OAを義務付けるものでした。続く2月21日には関係府省申合せとして「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針の実施にあたっての具体的方策」【注8】が示されました（同年10月8日に改正）。2024年度には文部科学省により、各大学等の即時OAに向けた、体制整備・システム改革を加速させることを目的とする「オープンアクセス加速化事業」【注9】が実施されました。

2. オープンアクセスが直面する課題と克服の取り組み

政策や研究助成機関によってOAが推進される一方で、雑誌上で論文をOA出版する費用、APC（Article Processing Charge）の増加が問題になっています。APCの高額化は、十分な研究資金をもたない発展途上国の研究者や若手研究者等による論文のOA出版を困難にしています。APC単価の変動や為替の変動の影響を考慮する必要がありますが、日本の研究機関所属の著者が責任著者となった論文のAPC支払推定額は毎年上昇し、2023年度は

約130億円に上ると推計されています【注10】。

研究者や大学の経済的負担が増える中、負担の抑制や、APCに拠らないOAを目指す取り組みが行われています。主要なOA実現手段の一つ、雑誌上でのOA論文出版に関しては、主に次の三つの取り組みがあります。

一つ目は、購読費用とAPCをまとめて支払うことで、対象雑誌へのアクセス権とOA論文の出版枠を得られる、転換契約(Transformative Agreement)です。日本の大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)は、2019年8月に「オープンアクセス出版モデル実現に向けた交渉方針について」【注11】を作成して出版社との転換契約交渉を開始しました。2022年からは大手商業出版社を中心に、日本国内の大学で転換契約締結が進んでいます。

二つ目は、年単位で雑誌のOA化を可能にするS2O(Subscribe to Open)です。年間購読収入の目標額に達するだけの数の図書館が購読契約を結ぶと、その年に刊行される巻号がOAになります。一方で、購読機関数が不十分な場合はS2Oが成立せず、該当巻号は通常の購読モデルのもと、契約機関のみがアクセス可能となります。このOA化するか否かの判断が、毎年繰り返されます。近年、中小規模の出版社を中心にS2Oの採用が増えてきています。

三つ目は、ダイヤモンドOAと呼ばれる、読者からの購読料にも著者からのAPCにも拠らないOA出版モデルです。多くの場合、研究助成機関や大学、研究機関などの第三者から出資を受け、編集等の作業はボランティアに支えられているといった特徴があります。2022年以降、欧州を中心に持続可能なダイヤモンドOAを開発・拡大するため行動計画、基準やガイドラインの策定、環境整備のためのツールやトレーニングの提供が行われています。

もう一つの主要なOA実現手段に、機関リポジトリ等で論文を公開するセルフアーカイブがあります。しかし、一般的に論文の著作権は、出版社や雑誌に譲渡されるため、エンバーゴ期間が設定されている場合は、著者であっても論文をすぐに公開することはできません。これに対して、権利保持戦略(Rights Retention Strategy)を用いての即時OAを目指す動きがあります。権

利保持戦略とは、著者が出版社等へ著作権を譲渡する前に、論文の公開・再利用等に関する利用許諾を所属機関や研究助成機関に与える、または研究助成機関が助成金受給者に対して、論文に CC BY ライセンスの付与を義務付けるものです。これにより、エンバーゴ期間の終了を待たずに、論文を公開できるようになります。実践例として、ハーバード大学文理学部による OA ポリシー【注12】や、Plan S における権利保持戦略【注13】が有名です。

3. 図書館員に期待される役割

特定の競争的研究費を受給する者への即時 OA 義務化により、幅広い研究者への手厚い支援が求められます。長く学術情報基盤を支えてきた図書館員は、その豊富な学術情報流通の実践知識を活かし、大学の研究推進担当部署や URA (University Research Administrator) らと協力して支援にあたることで、OA 推進に寄与することが期待されます。また、OA の進展に伴って顕在化した課題を克服するための新たな取り組みが次々に登場しています。最新の動向を把握し、必要な知識を取り込んで対応することで、より望ましい OA の実現につながると考えられます。

注

【1】 What is cOAlition S?. <https://www.coalition-s.org/about/>

【2】 Plan S Principles. https://www.coalition-s.org/plan_s_principles/

【3】 Office of Science and Technology Policy (OSTP). MEMORANDUM FOR THE HEADS OF EXECUTIVE DEPARTMENTS AND AGENCIES, Ensuring Free, Immediate, and Equitable Access to Federally Funded Research, August 25, 2022 <https://bidenwhitehouse.archives.gov/wp-content/uploads/2022/08/08-2022-OSTP-Public-Access-Memo.pdf>

【4】 G7 Science and Technology Ministers' Communique. Sendai, May 12-14, 2023.

https://www8.cao.go.jp/cstp/kokusaiteki/g7_2023/230513_g7_communique.pdf

- 【5】統合イノベーション戦略 2023. (2023 年 6 月 9 日閣議決定)

<https://www8.cao.go.jp/cstp/tougosenryaku/2023.html>

- 【6】公的資金による学術論文等のオープンアクセスの実現に向けた基本的な考え方. (2023 年 10 月 30 日 総合科学技術・イノベーション会議 有識者議員)

https://www8.cao.go.jp/cstp/231031_oa.pdf

- 【7】学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針. (2024 年 2 月 16 日統合イノベーション戦略推進会議決定)

https://www8.cao.go.jp/cstp/oa_240216.pdf

- 【8】学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針の実施にあたっての具体的方策. (2024 年 10 月 8 日改正 関係府省申合せ)

https://www8.cao.go.jp/cstp/openscience/r6_0221/hosaku.pdf

- 【9】文部科学省. オープンアクセス加速化事業の公募開始について (2024 年 3 月 26 日)

https://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/detail/1421775_00008.htm

- 【10】大学図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE). 論文公表実態調査報告 2024 年度 (公開版). 2025,

https://contents.nii.ac.jp/sites/default/files/justice/2025-04/2024_ronbunchosa.pdf

- 【11】オープンアクセス出版モデル実現に向けた交渉方針について. (2019 年 8 月 20 日, 2022 年 2 月 21 日更新 JUSTICE 事務局).

https://contents.nii.ac.jp/sites/default/files/justice/2022-02/OAnego_20220221.pdf

- 【12】Harvard Library Office for Scholarly Communication. Open Access Policies.

<https://osc.hul.harvard.edu/policies/>

- 【13】Plan S. Plan S Rights Retention Strategy.

<https://www.coalition-s.org/rights-retention-strategy/>

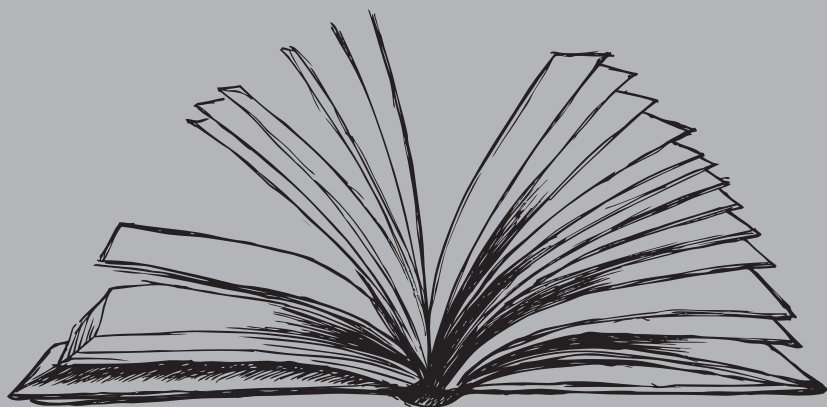
第 2 部

サブジェクト・

ライブラリアンの

将来像

——日本の大学図書館への導入拡大に向けて——



第2部をお読みになる前に

サブジェクト・ライブラリアン制度の検討は、U-PARL に与えられた重要なミッションであり、U-PARL ではこれまで日本の大学図書館への配置と養成を目指して、海外の大学図書館とサブジェクト・ライブラリアンに関する調査・分析を行ってきた。このような活動の成果もあって、2021年4月には東京大学アジア研究図書館にサブジェクト・ライブラリアン相当の教員3名（准教授1名、助教2名）を擁するアジア研究図書館研究開発部門（Research Advancement Section for the Asian Research Library、通称 RASARL）が新設されて現在に至る。配置は実現したものの、その先の、日本の大学図書館への普及、そして定着を見据えるとき、サブジェクト・ライブラリアンが社会的に認知されていない日本の状況下で、この職をどのように位置付けるのかということが困難な課題として浮かび上がる。

第2部のもととなったシンポジウム〈むすび、ひらくアジア4〉「サブジェクト・ライブラリアンの将来像—日本の大学図書館への導入拡大に向けて—」では、サブジェクト・ライブラリアン制度が国内の大学図書館にも広がっていくことを目指して、その課題を共有し、サブジェクト・ライブラリアンに求められる期待や役割について議論した。

小野塚知二アジア研究図書館初代館長による「**アジア研究図書館の紹介**」に続き、先行する欧米での事例を参照すべく、現職のサブジェクト・ライブラリアンであるシカゴ大学図書館の**吉村亜弥子氏**に、アメリカにおけるサブジェクト・ライブラリアンの現状について、現場報告をしていただいた。

アメリカでも近年、それまでサブジェクト・ライブラリアンに必須とされていた図書館情報学の修士号を不問とするケースも出てきており、主題領域での博士号のみを持った人を採用するケースもある。サブジェクト・ライブラリアンに求められる「専門知識」とは何か、研究者・研究経験者がライブラリアンの職務を果たす上で重要なこと、そして博士号保持者と図書館情報

学の専門家はどのように協力し合えるか。その具体的な事例は、今後、この職を日本で広めていく上で、また、養成の仕組みを考える上で、重要なヒントとなる。

サブジェクト・ライブラリアンについて、海外の事例に学ぶことは多いが、一方で、欧米の大学とは研究環境や図書館文化が異なる面もある。日本の研究環境にあわせるかたちでの制度設計が必要になることはいうまでもない。

日本での事例としては、すでに古くは金沢工業大学、そして、一橋大学、天理大学等で、サブジェクト・ライブラリアンあるいはそれに準ずる専門司書が配置されている、配置されていた例がある。ところが、その貴重な試みは、日本の多くの大学図書館に対して今のところそれほど大きな波及効果を及ぼしてはいない。そこで、日本の大学図書館への導入に向けて、どのような点に気をつけなければならないか、普及と定着への課題は何なのか、日本における先行事例から学ぶ必要があろう。図書系職員と研究者はともに資料の積極的・効率的利用を望んでいるという点では想いを同じくするものの、やはりその立場の違いから、相互理解にはいわば通訳が必要となってくる。その通訳の役割を果たすのがサブジェクト・ライブラリアンではないか。一橋大学の附属図書館でサブジェクト・ライブラリアンとして10年の勤務経験を持つ**福田名津子氏**に、国内の大学図書館における数少ないサブジェクト・ライブラリアンの経験者として、大学内でサブジェクト・ライブラリアンが果たす役割について述べていただいた。

九州大学は2011年に大学院にライブラリーサイエンス専攻を設置し、大学院教育にサブジェクト・ライブラリアンを含む図書館員の養成を組み込んでいる。**渡邊由紀子氏**は九州大学の附属図書館で図書館職員として勤務する傍ら、九州大学大学院ライブラリーサイエンス専攻で准教授を兼務されている。図書館の職員が教員を兼務するという立場から、ライブラリーサイエンス専攻の設置経緯や、図書館との連携による教育研究活動をご紹介いただき、大学院教育におけるサブジェクト・ライブラリアンを含む大学図書館員の人

材育成についてご報告いただいた。

また、第2部では〈来賓特別報告〉として文部科学省より**三宅隆悟氏**をお招きし、オープンサイエンスや研究DX（デジタル・トランスフォーメーション）の推進といった最近の大学図書館をめぐる政策動向の視点から、大学図書館に期待することを語っていただいた。

以上、4名の報告に対して、**大向一輝氏**（人文社会系研究科）、**北村由美氏**（京都大学附属図書館研究開発室）のお二人からコメントをいただいた。大向氏は、人文学と情報学の結節点としてのデジタル・ヒューマニティーズ（人文情報学）に関する研究に携わっておられるが、サブジェクト・ライブラリアンとよく一緒に仕事をされている情報学研究者の立場から、同職に期待すること等を述べていただいた。

北村氏は、東南アジア研究、特にインドネシア華人の文化や歴史に焦点をあてた研究と、大学図書館に関する研究を行っている。また、ハワイ大学で図書館情報学の修士号を取得されており、日米両国の大学図書館事情にも通じていることから、そのご経験をふまえたコメントをいただいた。

サブジェクト・ライブラリアンの確保・育成は、個々の大学では困難であり、全国規模で確保し、育成する必要がある。また、学外との人事交流やキャリアパスの仕組みを考える、さらには、業務、パフォーマンスの評価をどのように行うのか、といったことも重要な論点になるであろう。



東京大学附属図書館アジア研究図書館・上巻情報付図書付研究部門
U-PRJ PROJECT FOR THE ASIAN RESEARCH LIBRARY
THE UNIVERSITY OF TOKYO LIBRARY SYSTEM

アジア研究図書館開館記念シンポジウム

サブジェクト・ライブラリアンの将来像
—日本の大学図書館への導入拡大に向けて—



東京大学アジア研究図書館
2020年10月1日に開館しました

サブジェクト・ライブラリアン制度は、海外では既に認知されていますが、日本ではようやく認知されつつあります。東京大学アジア研究図書館は、そのような試みを本格的に始動させ、制度の確立とその普及を目指しています。

このシンポジウムでは、サブジェクト・ライブラリアン制度の確立と日本の大学図書館への普及に向けて、人材の育成と確保のための新しい仕組みを構築する方法とその課題について議論し、サブジェクト・ライブラリアンの将来像を展望します。

2021年3月15日(月)
9:30-13:00
オンライン開催

事前申込制 締切 | 2021年3月10日(水)
<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/mh4>
※詳細はお申し込み後にご連絡いたします

無料 | 先着 480 名
どなたでも参加できます

【プログラム】

9:30 開会の辞 蓑輪 顕量 (U-PARL 部門長、人文社会系研究科)
9:35 アジア研究図書館の紹介 小野塚知二 (アジア研究図書館館長、経済学研究科)
9:50 趣旨説明 中尾道子 (U-PARL 研究員)

10:15 報告1 谷村雅彦 (シカゴ大学図書館蔵書司(ライブラリアン))
■ 報告2 プロット・ライブラリアンの概念
■ 報告3 マーケット・ライブラリアンとライブラリアンによる情報提供
10:30 報告2 堀江美津子 (岡山大学文学部教授)
■ 報告4 上巻プロジェクト・ライブラリアン 図書館の発展、研究の促進
10:45 報告3 渡邊弘昭 (U-PARL 研究員)
■ 報告5 東京大学ライブラリー・サイエンスセンターによる大学図書館員の人材育成

11:20 討論セッション
3分間 (文部科学省所管研究費等助成事業(学術的助成)による学術情報研究費)
■ 大学図書館に対する助成—大学図書館による学術的助成の促進から—
11:30 コメンタリー 中尾道子、堀江美津子、渡邊弘昭、小野塚知二、大野一博、北沢崇
11:45 コメンタリー 中尾道子、堀江美津子、渡邊弘昭、小野塚知二、大野一博、北沢崇

12:15 パネル・ディスカッション
モデレーター 堀江美津子 (岡山大学文学部教授)
パネリスト 小野塚知二 (東京大学文学部教授)、堀江美津子 (岡山大学文学部教授)、渡邊弘昭 (U-PARL 研究員)、北沢崇 (U-PARL 研究員)

共催：東京大学附属図書館アジア研究図書館・上巻情報付図書付研究部門 (U-PARL)、東京大学アジア研究図書館
協力：東京大学ヒューマン・メディア・センター (HMC)、東京大学東アジア言語学 (EAL)
【お問い合わせ】 E-mail: u-parl@u-tokyo.ac.jp 開催等のために参加に配慮が必要な方は事前にご連絡ください。



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

〈むすび、ひらくアジア 4〉アジア研究図書館開館記念シンポジウム 「サブジェクト・ライブラリアンの将来像 —日本の大学図書館への導入拡大 に向けて—」

2021年3月15日(月) 9:30 - 13:00 オンライン開催

プログラム

[第1部]

- 9:30 〈開会の辞〉蓑輪 顕量 (U-PARL 部門長、人文社会系研究科)
- 9:35 〈アジア研究図書館の紹介〉小野塚知二 (アジア研究図書館館長、経済学研究科)
- 9:50 〈趣旨説明〉中尾道子 (U-PARL)

10:15 〈報告1〉吉村亜弥子（シカゴ大学図書館）

■ 米国サブジェクト・ライブラリアンの現状：「博士号オンリー」日本研究専門ライブラリアンによる現場報告

10:35 〈報告2〉福田名津子（松山大学人文学部）

■ 通訳としてのサブジェクト・ライブラリアン：図書館の言語、研究の言語

10:55 〈報告3〉渡邊由紀子（九州大学附属図書館）

■ 九州大学大学院ライブラリーサイエンス専攻による大学図書館員の人材育成

11:20 〈来賓特別報告〉三宅隆悟（文部科学省研究振興局参事官（情報担当）付学術基盤整備室）

■ 大学図書館に対する期待—大学図書館を巡る政策動向の視点から—

11:35 〈コメント1〉大向一輝（人文社会系研究科）

11:45 〈コメント2〉北村由美（京都大学附属図書館）

[第2部]

12:05 〈パネルディスカッション〉

モデレーター：蓑輪顕量（U-PARL 部門長、人文社会系研究科）

パネリスト：小野塚知二、吉村亜弥子、福田名津子、渡邊由紀子、大向一輝、北村由美

12:50 〈閉会の辞〉藤井輝夫（理事・副学長）

[共催]

・東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）

・東京大学アジア研究図書館

[協力]

・東京大学ヒューマニティーズセンター（HMC）

・東京大学東アジア藝文書院（EAA）

アジア研究図書館の紹介

❖小野塚知二

1. 東京大学アジア研究図書館と東京大学憲章

東京大学アジア研究図書館について紹介したいと思います。アジア研究図書館の構想そのものは随分古く、10年ほど前からあり、そのときすでにアジア研究図書館という名称も使われていました。私はその初代館長ですが、実際に館長になったのは2018年の4月で、3年前のことです。アジア研究図書館が実際にサービスを開始したのは昨年（2020年）の10月1日で、まだできたばかりなのです。開館はできましたが、蔵書や機能の面ではまだ完成形にはなっていないと考えています。ここではアジア研究図書館の完成形がおよそどんなものになるのかということに関してではなく、むしろ東京大学がアジア研究図書館を創るに至った経緯を若干お話ししましょう。

その経緯は、まず東京大学憲章という文書に遡ります。これは、東京大学における憲法のようなものですが、この前文の最初のあたりに、「世界の公共性に奉仕する大学として、文字どおり『世界の東京大学』となることが、日本国民からの負託に応じて日本社会に寄与する道であるとの確信に立」っ

て云々と書かれています。日本国民からの負託に応えるということは、日本だけに閉じこもるということの意味するのではなく、日本に^{きよくせき}踞しない国際公共財を提供する、あるいは国際公共財となることが、東京大学憲章でうたわれている東京大学の目指す姿ということになります。

さらに同憲章は、「東京大学は、自らがアジアに位置する日本の大学であることを不断に自覚し、日本に蓄積された学問研究の特質を活かしてアジアとの連携をいっそう強め、世界諸地域との相互交流を推進する」と述べている。つまり、日本に^{きよくせき}踞しないからといって直ちに国際的な普遍性の追求だけを行うということの意味するのではなく、アジアに位置する日本の大学という自覚をするということが、東京大学憲章における東京大学の自己認識のもう一つの特徴なのです。

2. 「アジア研究図書館の理念」という文書

次に、「アジア研究図書館の理念」という文書が4年近く前に作られました。これは、アジア研究図書館運営委員会の前身であったアジア研究図書館部会で、さんざん時間をかけて議論し、当初かなり長い文章だったものをかなり圧縮して作ったのです。この「アジア研究図書館の理念」では、「東京大学に蓄積されてきたアジア関連資料を集約、再構築し」、「アジアと世界の過去と現在を可視化し、未来を拓く概念を練り上げる場」がアジア研究図書館であり、したがって「それは、従来のアジア研究の蓄積を尊重しつつ広く新しい文脈へ開き、発見的かつ発信的な新たなアジア研究を浮かび上がらせる」のだということがうたわれています。

また、「アジア研究図書館の理念」という文書では、アジア研究図書館が研究機能を持った図書館という、非常に新しい構想なのだということ、さらに、その研究機能を広く外に向かって開き、国際的な連携の下に置くのだということを述べているのです。

3. 「アジア研究図書館の将来像」という文書

さて、このような東京大学憲章と、「アジア研究図書館の理念」という文書を基にして作られた、「アジア研究図書館の将来像」という文書があります。これは、初代館長としての私の名前で発表した最初の文書です。そこでは、なぜアジアなのかということに関して、次のような三つほどの要点を挙げています。従来、特に19世紀に最盛期を迎えたと思われる、「進んだ」西洋と「遅れた」非西洋の非対称な関係を基調とする歴史叙述や歴史認識、あるいは学問の方法論があります。そのことはやはり冷静に受け止めなくてはならないと考えます。その上で、日本は非対称な関係の中で、西洋とアジアのはざまに自己を位置づけようとして、いろいろともがいてきたという過去の経緯があります。しかし、現在、私たちの目の前に開かれている学問の世界、あるいは現実の世界においては、西洋と非西洋という二項対立を乗り越えた学び合いの中で、特にアジアと対話を深めることを通じた自己認識を実現することが求められていると思うのです。

さらに、「研究をする図書館」ということに関しては、文献の内容（テキスト）だけでなく、文献学・書誌学・古文書学、さらに文献をなす紙、印刷、筆記法、製本・造本などについての研究も求められると考えています。「アジア研究図書館の将来像」という文書ではまた、専門図書館を土台として形成され、専門図書館を支える人材として、サブジェクト・ライブラリアンと呼ばれる人々が必要であり、その育成が大事だということを述べました。

4. 幅を持った研究者として自己を形成してほしい

——サブジェクト・ライブラリアンの任務

さらに、昨年（2020年）10月1日に、アジア研究図書館がようやく開館し、全面的に改修された総合図書館の建物の4階が、アジア研究図書館の開架部

分として供用されています。ここで述べるアジア研究図書館の第1の目標は、いうまでもなく、東京大学の各部局に長年にわたって蓄積されてきたアジア関係図書や資料を集中運用することなのですが、もう一つの目標は、学内外のアジアに関する人材と研究資源が集まって展開する、文字どおりの研究図書館として機能することです。そのためには、現地語文献に基づく地域研究や図書館学に精通したサブジェクト・ライブラリアン——今日のテーマであり、現在、私たちは「主題資料専門職」といったような仮訳で呼んでいます——を育成することが大切です。

さらに具体的に述べるならば、学部や修士課程の学生が自分の研究を始めようとするときに、あるいはもうすでに自立した他分野の研究者が、何か必要に応じてアジアのことを調べなければいけないというときに、研究支援をするというのがサブジェクト・ライブラリアンの最も大きな任務であると考えています。自らが研究支援に携わることを通じて、アジア諸分野の若手ないし中堅研究者の方々が自己形成をしていくということに非常に大きな意味があると思うのです。通俗的ないい方になりますが、単に自分の専門分野のことしか知らない、そこからちょっと外れたことは何もわからないというのではない、幅を持った研究者として自己を形成してほしいというのが、私たちの目標の一つなのです。

5. サブジェクト・ライブラリアンという初めての試みを前にして

最後に、サブジェクト・ライブラリアンについて、現在、東京大学アジア研究図書館がどのように考えているのかということについて述べたいのですが、実際にはまだ確定的なことを言い得る段階に至っていません。これは東京大学にとって、まさに初めての試みなのです。したがって、先行する諸経験から私たちがいろいろ学ばせてもらうというのが、今日のシンポジウムの最も大きな目的であると考えています。

むろん、先行する諸経験の中には、日本国内での様々な経験や教訓があると思います。また、外国の大学ではさらに、深く長く広い経験や教訓が蓄積されています。それらをふまえて、研究支援すなわち他の人の研究を支援するということと、それから、アジア研究図書館自体が研究の場、あるいは研究のハブであるので——この場合の研究には、研究支援をする人自身の研究であったり、図書館利用者に関する研究であったりと、何重かの意味がありますが——研究支援と研究を行ったり来たりするという試みにどのような可能性があり、またどのような必要性があるのかということについて、特に議論してみたいというのが私の希望です。

しかし、実をいうなら、このサブジェクト・ライブラリアンという職を設けて、研究支援と研究そのものを行ったり来たりするという試みをするためには、東京大学で行うだけでは不十分であり、完全なものではないだろうと私は考えています。したがって、少なくとも日本国内のほかのおもだった大学に、同じような発想のサブジェクト・ライブラリアンという職が確立し、それらと連携することによってこそ、日本における、特に人文社会科学系の図書館のあり方と研究のあり方ということの、新しい可能性の地平を切り拓くことができるのではないかと期待しています。その点について、ぜひ、皆さまの知恵をいただきたいというのが、今日の私の希望です。

米国サブジェクト・ライブラリアンの現状

——「博士号オンリー」日本研究専門ライブラリアンによる現場報告——

❖吉村亜弥子

1. はじめに

このたびは、シンポジウムにお招きいただきまして、どうもありがとうございます。微力ながら私の体験談や見解が、貴館の今後の発展の参考になれば大変光栄に存じます。

今回の発表では、まずは自己紹介を兼ねまして、私がライブラリアンになった経緯をお話し、そして北米大学図書館でのサブジェクト・ライブラリアンというポジションの位置づけ、それから実務経験の重要性を現在の職務内容を例に説明し、むすびにつなげたいと思います。

2. ライブラリアンになるまでの経緯

私は日本で生まれ育ち、日本の高校を卒業後、留学目的で渡米し、ウィスコンシン州立大学マディソン校で民俗学と文化人類学を専攻していました。ここで過ごした5年の間には、キャンパス内の音楽図書館で学生のア

アルバイトとして事務をこなしていました。業務内容は、利用者対応のカウンター業務、書庫出納、書籍等のラベル貼り、書誌データのアップデートなどです。その後、カナダのニューファンドランドメモリアル大学で民俗学を学び、修士課程を修了しました。その間、民俗学部内のアーカイブで、地元の民俗文化調査資料の整理や音声テープのデジタル化などを行っていました。2007年にウィスコンシン州立大学へ戻り、民俗学の博士課程に進みました。2010年に同大学の総合図書館で日本研究ライブラリアンに近いハーフタイムのポジションが設けられたので、応募したところ、オファーをいただきました。

ウィスコンシン州立大学でのハーフタイムの仕事の雇用形態について説明しますと、これは米国の大学院ではよくあるリサーチ・アシスタントやティーチング・アシスタントと同様の、院生を雇うためのポジションです。待遇は、学費免除に加え、健康保険と月々の給料が支給されるものでした。職務内容は、「ビブリオグラファー」と同様に、選書（蔵書構築）及びレファレンス・サービスが主でした。その他、館内の企画展示やトークイベントなどの企画といったアウトリーチ活動もさせてもらいました。

この仕事の面接を思い起こすと、面接を担当した後に上司となる方から、「どうしてあなたがこの職に適していると思うか」と聞かれました。私は、専門分野が民俗学で、民俗学は学際的な学問であり、人文科学・社会科学の多くの分野を網羅する必要がある学問であるため、その学際性・多様性を蔵書構築やレファレンスの仕事に応用できると思う、と答えました。また、ティーチング・アシスタントの経験があることに加え、公共民俗学が専門の教授の下で学んできたので、専門的、学問的な情報を学生や一般の方々にもわかるように伝える応用力を身につけてきており、この経験を基に利用者サービスを提供することが得意だと伝えました。

後に、採用された理由として上司に言われたことは、民俗学で培った学際性・多様性の視野や応用力を図書館の仕事に応用することに賛同できるし、

私が館内の仕組みや業務の工程を実務経験を持ってすでに把握しているということが大きいとのことでした。さらには、私の指導教員が日本研究の教授ではなかったことから、教授と院生としての関係性に、教授とライブラリアンとしての関係性が加わることで変にギクシャクしてしまう懸念もない、という図書館側の配慮もあったようです。その後、2015年に博士課程を修了し、シカゴ大学図書館の日本研究ライブラリアンに着任しました。

この民俗学で培った強み、学際的・多様性に富む視野や応用力は、シカゴ大学図書館の日本研究ライブラリアンの面接の際にも強調しました。応募者の中では、私だけが日本研究ライブラリアン業務の経験者もあったこともあり、採用に至りました。図書館での実務経験がありますが、図書館情報学コース等の受講経験はありませんので、資格という点で、私はいわゆる「博士号オンリー」のライブラリアンということになります。以上が経緯です。

3. 北米大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの位置づけ

次に、北米の大学図書館という組織におけるサブジェクト・ライブラリアンの位置づけについて述べます。大学図書館では様々な種類のライブラリアンが働いていますが、大きく学習支援や研究支援といった、利用者と直接関わる仕事をするパブリック・サービスのライブラリアンと、書籍データ作成や電子リソース管理などを担うテクニカル・サービスのライブラリアンにわかれます【注1】。

大学のような研究機関のパブリック・サービスに従事するサブジェクト・ライブラリアンとエリアスタディーズ・ライブラリアン（地域専門ライブラリアンのこと）の中には、図書館情報学の学位がなくても採用されるケースがあります。その理由は、主題領域の専門知識、特にエリアスタディーズ・ライブラリアンの場合は言語力及び地域専門の知識（歴史・文化）が、図書館情報学の専門知識以上に、職務を遂行する上で重要であると判断されるケース

があるためです。例えば、日本研究ライブラリアンの応募資格としての一般的な条件には、図書館情報学の学位及び東アジア研究（特に日本）の修士課程修了者、または東アジア研究関連（特に日本）の博士課程修了者、といった記述が見られます。これらの資格に加え、実務経験が必須になることもあります。私の場合は、後者のケースで採用となった例となります。

現在、北米の大学図書館に勤める日本研究ライブラリアンは20名ほどですが、うち5名が博士課程修了者であり、そのうち4名が「博士号オンリー」のライブラリアンです。ですが、その4人共、図書館実務経験者でした【注2】。2年ほど前までは、このほかにもさらに4名の博士号取得者がいましたが、その4名の離職後、博士号取得者が後任になったケースは1件のみです【注3】。以上のことからわかるように、博士号取得者が必ず優先されるということではありません。大学内での日本研究の規模や図書館内での日本研究予算、利用者層の規模やニーズ、学習支援と研究支援の割合などによって、どのような専門知識がより望まれるかが異なるためです。規模や予算が小さい場合、日本研究ライブラリアンとして雇われても、実際には日本研究関連以外の業務をこなす必要がある場合もあることから、図書館情報学の専門知識があった方が適任だと判断されることもあります。そのため、大学のニーズによって、適任者の条件が異なります。これは日本研究ライブラリアンに限ったことではなく、研究機関に勤めるサブジェクト・ライブラリアンとエリアスタディーズ・ライブラリアンに関しては、各機関のニーズや内部構成にあわせて様々な資格と経験を有する者が勤務しているのが現状です。

4. 実務経験の重要性

実際に仕事をこなしていく中で、資格と実務経験とを比べると、実務経験の重要性がいかに高いかを実感する機会が多くあります。すでに述べましたように、ウィスコンシン州立大学での採用とシカゴ大学での採用の双方に、

私が図書館での実務経験があったことが採用理由のひとつとなっていることから、実務経験の重要性をご理解いただけるかと思いますが、ここでは、実際の職務内容について詳しく説明します。私の現在の職務内容は大きく三分野にわかれており、まず蔵書構築ならびに選書、そしてレファレンス・サービスの提供で、この二つの分野は米国において「ビブリオグラファー」と呼ばれる職種の業務です。三つ目はテクニカル・サービスと呼ばれる業務に含まれる、件名標目と管理番号の選定をして行うデータ作成などです。これは、米国議会図書館分類表（Library of Congress Classification）に基づいて行われるもので、「メタデータ・ライブラリアン」及び「カタログガー」と呼ばれる職種の業務です。シカゴ大学の東アジア・コレクションでは、中国・韓国・日本研究ライブラリアン各自がこの業務も担います。

一つ目の業務、蔵書構築ですが、これは、毎年度予算額を使って書籍等の資料を購入することと、いただいた寄贈書から適当なものを選出することが主です。大学内の利用者の学習や研究をサポートすることが第一の目的ですが、私の場合は、一般利用者の対応も行うため、学外者からの要望やニーズも視野に含みます。

蔵書構築には、まず既存の蔵書を把握すること、その歴史を理解すること、そして学内利用者のニーズに対応することが必要になります。取引先から定期的に届くメールやチラシなどを参考に選書するのが主流ですが、学内の利用者層は大学によって異なるため、現場で何が必要か判断します。これは、実務経験をこなしてこそ上達する業務です。さらに予算に余裕がある場合は、他機関のコレクションも把握すると、北米全体の日本研究の将来を考慮した選書や蔵書構築が行えます。また、予算が大きければ、ニーズ以外の選書をする余裕があるということなので、選書にライブラリアンの蔵書構築のビジョンが反映されます。私は現代民俗学の研究者でもあるので、戦後の雑誌や一般書、現代のはやり、トリビア的な書籍を選ぶことが多くありますが、それに加えて20年後、50年後を見越して、将来一次資料になり得る資

料を今のうちに買っておくということが大切だと考えています。私の選書活動には、私自身の現代民俗学者及びエスノグラファーとしての考え方がそのまま反映されています。もちろん民俗学者でなくてもできることではありますが、私の選書方針・スタイルとして、自身の学者・研究者の観点が役立つ業務であると感じます。

二つ目の業務、レファレンス・サービスですが、これは利用者からの問い合わせの対応です。ここ数年で各機関がリブガイド（LibGuide）というソフトウェアを使ってリサーチガイドなどを作成しており、利用者対応の一環として定着しました。ウェブ上で機関間での異なるリサーチガイドの構成などが確認できます。

もちろん利用者からの直接の問い合わせがなくなるわけではないので、順次個別に対応することが求められます。自分で答えられない質問があった場合には、先輩方や他機関の司書にご教示いただくことも大いにあり、その際にはメーリングリストを利用したり、レファレンス・データベースを参照したりすることもあります。しかし、やはり自身の研究者としての経験やティーチングの経験が生かされているとも思います。自分が使ってきた参考書やデータベースがあり、研究者として自ら資料を探してきた経験もあるので、要領がわかっているからです。また、レファレンスの問い合わせに対応することは、実務経験を積む以外に上達する術がなく、現場で慣れていく仕事でもあります。学習支援に関する質問ですと、楽なときもありますが、研究支援となると、やはり研究者としての自身の経験があったからこそ対応できたと思うことが多々あります。

三つ目の業務、テクニカル・サービス（ここでは、米国議会図書館分類表に基づき、件名標目と管理番号を選定し、書誌データを作成することに限る）についてですが、これは通常、図書館情報学の専門知識が必要とされる業務です。私は未経験であったため、米国図書館協会（American Library Association）主催のオンライン授業を取らせてもらったり【注4】、専門のライブラリアンに個人

指導してもらったりして徐々に慣れていきました。この業務に関しましても、実務経験を積んで上達する以外に道がないと感じます。博士号を有するものと図書館情報学の専門家が、図書館という職場でどのように協力できるかという観点から申しますと、その都度必要に応じて現場で直接教えてもらうのが効率のよい協働の仕方であると考えます。

その他の仕事について言及すると、シカゴ大学図書館での私の雇用条件には、研究・執筆活動は必須業務に含まれていないのですが、私は個人的に好きで研究活動を継続しています。また同様に、アウトリーチ活動も必須ではありませんが、公共民俗学者としての責務という思いで積極的に活動しています。

例えば、他のエリアスタディーズ・ライブライアンとともに館内展示を企画したり、シカゴ大学と日本との歴史をたくさんの方に知ってもらうために、貴重資料のアーカイブで展示を企画したりしました(Yoshimura 2021b)。また、地元の日本人・日系アメリカ人団体や日本文化関係の団体と連絡を取り合い、情報交換ができるようにしました。一般の方向けの着物に関するイベントなども行っており、こうした活動には、在シカゴ日本国総領事館の広報文化センターにもお世話になっています。このようなアウトリーチ活動は、私としてはどちらかというと、ライブライアンとしてというよりは民俗学者としてこなしていますが、ライブライアンとして活動される方も当然いらっしゃると思います。そのため、サブジェクト・ライブライアンの活動範囲の例としてご紹介しました。

また補足ですが、機関によってライブライアンの雇用体制や業務内容が異なるため、ライブライアンが教授ランクの大学機関では、研究や執筆・出版の任務が課されている大学附属図書館も少なくありません。

私が常々思うことは、今まで経験した図書館やアーカイブの仕事（事務作業も含め）とともに、博士課程レベルの研究者としての経験も、ティーチングの経験も、そのすべてが大学図書館という教育・研究機関の場において、

自身のライブラリアンの仕事に活かしているという実感があるということです。もちろん、私のような「博士号オンリー」の道のみが、サブジェクト・ライブラリアンへの道だとは思いませんが、私のようなケースがあることを、ご紹介させていただきました。

5. むすび

最後に「図書館で働くということ」についてお話しします。私は、図書館の仕事というのは実際に業務に携わって慣れていく、そして上達していく仕事だと思っています。それゆえ、博士号にしても図書館情報学の学位や資格にしても、それはただ応募資格の最低条件の一つにすぎないと考えます。私の場合は、大学教育を受ける過程で自分が選択した専門分野を通して培った学際性・多様性、そして図書館での実務経験があったので、ライブラリアンの仕事を始めることができ、また実際に仕事をこなしてきました。様々な方にアドバイスやご指導をいただき、経験を積むことができたと感謝しています。

私自身の利用者・研究者としての経験や専門知識を生かして、図書館利用のサポートに活用する。そして自身の研究活動を多くの人と共用するために活動する。これらを、学究的環境で携われることに魅力を感じて、私はライブラリアンになる決意をしました。

博士号取得者と図書館情報学学位・資格取得者とがどう協力できるか。やはり専門知識が異なるので、お互い学び合い、サポートすることが望ましいと考えます。サブジェクト・ライブラリアンは専門的な業務をこなし、例えば研究支援を重点的にこなし、そして図書館内の専門的業務はそれぞれ専門の方に任せるといった分業が現実的ではないでしょうか。研究者上がりのライブラリアンは、図書館情報学の専門家から図書館運営の全体像を考慮した上での判断の仕方を学ぶ必要があります。図書館情報学専門のライブラリア

ンにとって、もとは研究者だった図書館利用者がライブラリアンになって図書館運営に関わることは、研究者レベルの利用者がどのようなことを必要としているかをよく理解するいい機会だと思います。そして双方が協力し、既存の工程で改善できるところはないかといったようなことを話し合えると思います。同じ職場で働くことで、情報を共用しコミュニケーションを取って大学図書館とそのサービスの向上に役立てるために協働できると思います。

大学附属図書館というのは、学習支援と研究支援を両立する必要があります。そして利用者、特に研究者がその運営側に入るということは決してネガティブに捉えられることではないはずです。なぜかという、それは図書館というところが、利用者のニーズに応じて随時提供するサービスやサポートを変えていくところだからです。したがって日本の大学教育の質を高めるため、研究成果の質をより高めるために、図書館情報学とは異なる専門知識を有するサブジェクト・ライブラリアンを起用すること。そして求められる専門性が博士課程レベルと判断されるのであれば、博士号取得者がライブラリアンを務めるということは必然ではないでしょうか。前向きに検討して然り、というのが私の見解です。

注

- 【1】その他の例として、アーキビストもライブラリアンとしての専門職の一種に挙げられます。
- 【2】昨年、筆者は、博士号を持つ日本研究ライブラリアン3名と共同で、アメリカアジア研究協会（Association for Asian Studies）のブログ『アジア・ナウ』（Asia Now）にエッセイを投稿した（Yoshimura 2021a）。各自、ライブラリアン職に就くに至るまでの経緯を述べている（Corbett 2021; Davis 2021; Kao 2021）。また、なぜそのようなエッセイを公開する必要があると感じたかなどを序文に綴っている（Davis, Corbett, Kao 2021）。
- 【3】この発表以降、博士号を持つライブラリアンが退職した後、博士号取得者が新しく着任したケースが1件あった。
- 【4】米国図書館協会は、オンラインで様々な講習を有料で提供している。筆者が受講した

のは、「Fundamentals of Cataloging」という書誌データ作成基礎のコース（American Library Association）。

参考文献

- American Library Association: “Fundamentals of Cataloging”.
<http://www.ala.org/core/fundamentals-cataloging> (accessed 2022-04-05).
- Corbett, Rebecca 2021: “A Circuitous Path to Finding the Right Career”.
<https://www.asianstudies.org/a-circuitous-path-to-finding-the-right-career/>
(accessed 2022-04-10).
- Davis, Ann Marie 2021: “Changing Careers But Not Gears – My Path to Librarianship” . <https://www.asianstudies.org/changing-careers-but-not-gears-my-path-to-librarianship/> (accessed 2022-04-10).
- Davis, Ann Marie, Rebecca Corbett, and Regan Murphy Kao 2021: “Ask a Librarian: Re-thinking Professional Contributions in Area Studies”. (accessed 2022-04-10). <https://www.asianstudies.org/ask-a-librarian-re-thinking-professional-contributions-in-area-studies/> (accessed 2022-04-07).
- Kao, Regan Murphy 2021: “Playing a Critical Role in Achieving a Bigger Goal”.
<https://www.asianstudies.org/playing-a-critical-role-in-achieving-a-bigger-goal/>
(accessed 2022-04-10).
- Yoshimura, Ayako 2021: “An International Student’s Long Road to Librarianship”, Asia Now, Association for Asian Studies.
<https://www.asianstudies.org/an-international-students-long-road-to-librarianship/> (accessed 2022-04-07).
- Yoshimura, Ayako 2021: “Nikkei South Side: Japanese and Japanese Americans in Hyde Park and its Vicinity”, The University of Chicago Library.
<https://www.lib.uchicago.edu/collex/exhibits/nikkei-south-side-japanese-and-japanese-americans-hyde-park-and-its-vicinity/> (accessed 2022-04-07).

通訳としてのサブジェクト・ライブラリアン

——図書館の言語、研究の言語——

❖ 福田名津子

本日は報告者が一橋大学で行ったサブジェクト・ライブラリアンの仕事を具体的に振り返りつつ、図書館の言語と研究の言語の違いについて（ここでの「言語」というのは比喩であり、立場とか視点という意味で使っています）、図書館と研究者という異なる話者をつなぐ通訳としてのサブジェクト・ライブラリアンがいればどのようなことが可能なのか、最後にサブジェクト・ライブラリアンが常勤職員であることの意味について考えてみたいと思います。

1. 報告者の経歴——なぜ図書館へ

[年表] から報告者の経歴をお話したいと思いますが、ポイントは経済学と図書系の仕事を二足のわらじでやってきたことにあります。そして、一橋大学でサブジェクト・ライブラリアンに採用され、10年間勤めた経歴を持っているということです。

[年表]

- 2000 年 滋賀大学経済学部卒業
- 2005 年 名古屋大学経済学研究科修了、博士号取得
- 2005 年 名古屋大学附属図書館研究開発室非常勤職員
経済学系の非常勤講師をいくつか並行
- ▶ 2007 年 一橋大学附属図書館専門助手（サブジェクト・ライブラリアン）
- 2017 年 東京大学経済学部資料室学術支援職員（非常勤）
社会思想史系の非常勤講師をいくつか並行
- 2019 年 松山大学人文学部准教授（司書課程担当）、現在に至る

なぜ図書館で働くことになったかという、それは歴史研究との関わりにあります。私は経済学の博士号を取得しており、専門は社会思想史研究です。もう少し細かく言いますと、18 世紀スコットランド啓蒙研究、アダム・ファerguson の道徳哲学研究をしており、紙媒体あるいは電子媒体の西洋古典籍を使います。思想形成史を追うには、各版対照・草稿や書簡などマニュスクリプト研究も必須となっており、ある程度の書誌学的な知識が前提となります。

こうした背景から、名古屋大学附属図書館研究開発室で非常勤職員として 2 年間勤務することとなりました。ここでの仕事は、「西洋古典籍デジタルライブラリー」のメタデータ整備、特別展『知の万華鏡：書物からみた 18 世紀の西洋と東洋』への協力でした。

以上のような経歴を評価され、2007 年に一橋大学のサブジェクト・ライブラリアンに採用されました。

2. サブジェクト・ライブラリアンの仕事

一橋大学のサブジェクト・ライブラリアンが、学内でこういった位置づけであったかということを確認しておきます。

「一橋大学における専門助手に関する規則」（2007年2月7日制定、2015年4月1日改正）には、高度の専門性を持ち、代替不可能な補助業務を行うということ、大学院博士後期課程の修了を前提としているということ、配属は附属図書館または社会科学古典資料センターであるということになっています。詳しくは、福田名津子「一橋大学附属図書館サブジェクト・ライブラリアンの10年」（『一橋大学附属図書館研究開発室年報』第5号（2017年3月）、83-94頁。<https://doi.org/10.15057/28662>）で紹介しています。

「一橋大学における専門助手に関する規則」

（2007年2月7日制定、2015年4月1日改正）

（趣旨）第1条 この規則は、国立大学法人一橋大学（以下「本学」という。）の専門助手に関し必要な事項を定めるものとする。

（定義）第2条 専門助手とは、**高度の専門性**を持ち、他の補助業務のものでは**代替不可能な補助業務**について設ける職種で、**大学院博士後期課程**を修了した者又はこれと同等以上の専門的な知識、技術又は経験を有する者をいう。

（選考）第3条 専門助手の選考は、学内共同教育研究施設人事委員会の議を経て、学長が行う。

2 前項に定める選考については、国立大学法人一橋大学**教員選考基準**の規定を準用する。

（職務）第4条 専門助手は、**附属図書館又は社会科学古典資料センター勤務**を命ぜられる。

（雑則）第5条 この規則に定めるもののほか、必要な事項は、学長が定める。

＊太字は報告者による強調

報告者の知る限り、一橋大学で「サブジェクト・ライブラリアン」という名称が使われたのは次の公募要領だけで、学内の職位は「専門助手」で統一されていました。

採用種別	A (1名)	B (1名)
職務内容	西洋社会思想史又は西洋経済（思想）史その他これに準ずる学問分野及び専門的知識を活用し、特殊文庫・コレクション（大塚文庫等）の整理・修復・電子化・展示などに従事する。 利用者に対し文献・情報探索、論文作法等の指導を行う。	日本近世・近代史、日本経済史又は日本思想史その他これに準ずる学問分野の専門的知識を活用し、特殊文庫・コレクション（山中文庫、幸田文庫等）の整理・修復・電子化・展示などに従事する。 利用者に対し文献・情報探索、論文作法等の指導を行う。
応募資格	(1) 博士後期課程を修了した者（見込みを含む）又はこれと同等以上の高度の専門的知識、技術若しくは経験を有する。 (2) 英語に加えて、ドイツ語又はフランス語のいずれかの言語に精通している。	(1) 博士後期課程を修了した者（見込みを含む）又はこれと同等以上の高度の専門的知識、技術若しくは経験を有する。 (2) 歴史的文書の解読能力に加えて、国際的な情報発信等に対応するための英語の読解力が相当程度ある。
任期	5年間（再任可）	5年間（再任可）

一橋大学附属図書館専門助手（サブジェクト・ライブラリアン）の公募条件

＊実際の文書に基づき報告者が作成

公募要領の「職務内容及び募集人員」ではAとBの2種に分かれ、Aは西洋社会思想史または西洋経済（思想）史その他これに準ずる学問分野及び専門的知識を活用し、Bは日本近世・近代史、日本経済史又は日本思想史その他これに準ずる学問分野の専門的知識を活用するとあります。そしてAとBに共通し、特殊文庫・コレクションの整理・修復・電子化・展示などに従事するほか、利用者に対し文献・情報探索、論文作法等の指導といった情報リテラシー教育を行うことが求められています。

「応募資格」は次のいずれも満たすとし、(1) 博士後期課程を修了した者（見込みを含む）またはこれと同等以上の高度の専門的知識、技術もしくは経験を有する者、(2) Aにあっては英語に加えてドイツ語またはフランス語のいずれかの言語に精通している者、また、Bにあっては歴史的文書の解読能力に加えて国際的な情報発信等に対応するための英語の読解力が相当程度ある者となっています。どちらも任期は5年間で再任可でした。

公募条件の特徴は、第一に職務内容に選書・蔵書構築に関する記述がなく、所蔵資料の整理・研究に重点が置かれている点です。裏を返せば、これに苦

慮していたということが想像されるでしょう。第二に研究者色が強いということです。国際的にサブジェクト・ライブラリアンに必要とされる学位は通常（2種の）修士号であるところ、一橋大学では博士号を想定しているところが特徴的です。第三に人員は和洋で1名ずつのため、おのずと各人が担当する範囲がきわめて広いという点です。アメリカの大学図書館でもひとりのスペシャリストが複数のサブジェクトを担当すること自体はありますが、一橋大学が人文・社会科学系に特化した大学という点を差し引いたとしても、和洋1名ずつというのは異例であるといえるでしょう。

3. サブジェクト・ライブラリアン 10 年の仕事

サブジェクト・ライブラリアンの仕事を具体的に見てみます。10年間の仕事（全館体制の業務は除く）は以下の通りでした。

- (1) 資料整理…アーカイヴズ資料に重点、メタデータ設定、取扱要領作成
- (2) 資料保存…データロガー、ドライクリーニング、燻蒸、業務用冷凍庫
- (3) 電子化…仕様書作成、電子化したデータのウェブ公開の構造や見せ方を考える
- (4) 展示…企画・実施・監修、一定の学術的水準を担保
- (5) 蔵書構築…一般的な選書、アーカイヴズ資料の受贈・購入
- (6) 学園史および学問史研究…関連資料を収集し調査研究を進める
- (7) 情報リテラシー教育…情報検索は図書館員、アカデミック・ライティングはサブジェクト・ライブラリアンが務めるという分業体制
- (8) 外部資金獲得…科研費など各種助成金獲得のための申請書作成
- (9) 研究成果発表…資料解題の執筆や執筆依頼・展示の開催・口頭発表・論文

4. ロールモデルがない私の居場所

振り返ってみると、自分の居場所を探し続けた10年間であったように思います。一橋大学のサブジェクト・ライブラリアン着任に際し、元指導教官は「あなたのjob descriptionは、あなたが決めるんだよ。そう思って行っ
てらっしゃい」と送り出してくれました。

つまり、自分の仕事は自分で決めるものであり、よく考えて自分の役割を果たしなさいというメッセージで、弱気になるといつもこの言葉を思い出していました。ほかの図書館員とは別枠で採用されたからには、そこには別の期待があるのだろう、何か特別な仕事が期待されているのなら、私にしかできないことがしたいと考えました。改めて私にしかできないこと、私の強みはどこにあるのかということを突き詰めてみると、それは図書館と研究、二つの現場を理解していることにあるかと思います。

図書館に勤務するうち、図書館と研究者はその立場の違いに起因し、相互理解が必ずしも十分ではないのではないかという思いを強くしました。実際にかみ合っていない場面を何度か見てもいます。サブジェクト・ライブラリアンは、両者の通訳の役割を果たせるのではないかと考えたのです。その場合、研究者発想の狭い単数形のsubjectではなく、より広い複数形のsubjectsを意識しないと話が進みません。アダム・ファーガスンとか、18世紀スコットランド啓蒙研究とかいった次元ではなく、もっと大きな土壌で考えなければ務まらないことを意識しました。

5. 図書館の言語、研究の言語

図書館の言語と研究の言語はどう違うのか、立場や視点がどう違うのかということを見てみたいと思います。

大学図書館の立場	研究者の立場（人社系）
■資料の積極的・効率的利用を望む ■計画や規則に基づいて業務を遂行 業務の計画性と優先順位 予算とその配分 著作権法、個人情報の保護、プライバシーの尊重 図書館の狭隘化、除架しないとあふれる メタデータの記述規則（NACSIS-CAT） データベースの仕組み（各業者、各大学図書館システム）	■資料の積極的・効率的利用を望む ■できる限り多くの資料を使い勝手よく ← よきに計らって欲しい。
無茶をいわないで欲しい。→	システム更新のたびに使い勝手が変わる、ブックマークがずれて不便 現行のメタデータ記述・データベース構造に不満も 資料はすべて公開、仮に未整理であっても可 不要な資料は存在しない、すべてに歴史的価値 紙と電子は重複していても両方維持 電子ジャーナルやデータベースの機関間格差は理不尽

こちらは図書館と研究者の立場や視点の違いについて、やや強調して示したものです。まず、大学図書館も研究者も資料の積極的・効率的利用を望むという点では一致しています。では、それがどこでかみ合っていないかというと、図書館の場合は計画や規則に基づいて粛々と業務を遂行していくという立場にありますが、研究者の場合はできる限り多くの資料を使い勝手よく利用することを望んでおり、資料に対してとても貪欲であるし、またそうでなければならぬだろうと思います。また、図書館には業務の計画性がありその優先順位も決まっているのが常で、予算とその配分も明確に決まっております。そう簡単に変えられるものではありません。著作権法や個人情報の保護、プライバシーの尊重には十分に注意しなければならないし、図書館の狭隘化問題には毎年悩まされています。メタデータの記述規則については、大学図書館の場合はNACSIS-CATに準じるかたちで厳密に決まっています。データベースの仕組みも各業者、各大学図書館のシステムや機関リポジトリ等で決まっています。こういった立場を研究者の側から見るとどうなのかというと「よきに計らってほしい」ということになるわけです。図書館の細かい事情は図書館で何とかしてほしいというのが研究者の本音です。

図書館は粛々と計画的に仕事をしているので、研究者から見ると何だか反応が遅いような、動きが鈍いように見えることもあります。システム更新のたびに使い勝手が変わることや、データベースの階層が深すぎて使いづらい

といったことがストレスとなることもあります。では、研究者が資料についてどういうふうを考えているかというと、資料はすべて公開、仮に未整理であっても構わないので全部見せてほしい、すべてに歴史的価値があるため不要な資料など存在しないし、紙と電子は重複していても両方維持してほしい。電子ジャーナルやデータベースの機関間格差は理不尽であり、研究に深刻な影響を及ぼす問題なので何とかしてほしいと考えます。こうした要望に対し、図書館の立場から言うとどうなるかというと「無茶を言わないでほしい」ということになります。研究者の言い分はいずれも正論ではありますが、それが現実的には通らないという局面もあり、妥協点の模索が必要になるので、そこはご理解いただきたいということになるわけです。例えば、未整理のアーカイヴズ資料を十分に確認しないまま公開してしまうと、公開後に個人情報やプライバシーの問題が見つかった場合、その資料を寄贈してくれた方々との関係性が崩れてしまうということにもなりかねません。場合によっては社会問題となったり、裁判沙汰になったりしてしまうおそれもあります。確かに未整理だからといって図書館が資料を抱え込むのはよくありませんが、理由があってそうしているということもあります。また、研究者の側からは、資料はすべて捨てずに図書館本館に置いておいてほしいという要望が寄せられますが、図書館としてはスペースは有限なので、すべての資料を一等地の本館に置いておく時代は終わりを迎えているということを理解してほしいし、分担保存という考え方もあるということを知っていただければと考えます。

図書館と研究者の立場や視点の違いを見てきましたが、ここで重要なのは双方とも、相互理解への努力が必ずしも十分でないことです。面と向かって言わないけれど、互いに自分たちの立場を理解してほしい、尊重してほしいと考え、無言の攻防戦が行われているように見えました。そういったところに、サブジェクト・ライブラリアンの通訳があればどんなことが起こり得るかを考えてみたいと思います。

サブジェクト・ライブラリアンの通訳があげられることとして、まずは旧蔵書の受け入れに関する提案があります。これは現職中にできなかったことで後悔していることでもあるのですが、旧蔵書の持つアーカイヴズ資料としての側面を考慮することです。書架の並びを撮影することも大事です。書架は持ち主の脳内を反映するものであり、研究上重要な情報でもあるからです。資料の排列順に通し番号を付与することもやっておく必要があるでしょう。これは書架の再現性を確保するため、この作業により受け入れた後に再分類・別置されても原秩序の復元が可能となります。現在はこういったデータはコンピューターで処理するので、識別子は複数あっても構いません。そしてこれは難しいことかもしれませんが、受け入れから漏れた資料のデータを残す工夫が何かできないかと考えています。所在情報を必須とする OPAC には登録できませんが、例えば内部資料として書誌データを取得したり、標題紙を撮影しておくなど、持ち主が所蔵していた事実はどこかに記録として残したいと考えます。というのもスペースの問題等で重複資料が不受理になるのはよくあることですし、今後も図書館の事情で本来の旧蔵書のかたちがゆがんでしまう、崩れてしまうということはあるので、それをせめてデータとして残しておきたいと考えるからです。

次に「電子化」に関する提案として、「電子化＝現物非公開」の緩和を行えればと思います。テキストを読むだけが研究ではなく、製本構造・製紙技術などが研究対象にある場合もあるため、研究目的を理解したうえで柔軟に対応してほしいと思います。公開する際の工夫としては、検索の利便性を考慮した索引付与、研究上必要なメタデータ記述のあり方、公開する階層構造のあり方を研究者目線で考えることができます。実際にあった例として、会計帳簿の電子化に際し白紙の撮影は不要ではないかという話になったのですが、私はこれに反対し白紙も撮影対象に追加されたことがありました。白紙であるから価値がない、意味がないと図書館が判断するのではなく、たとえ数枚であっても製本構造の手がかりになる場合もあるし、本当に白紙かどうか

か自身で確かめたいので、白紙を省略されると研究者は困るという話をして差し戻したのです。研究者は自分の目で見ていないものについて書けないということへの理解が必要です。

最後に、外部資金獲得に関する提案です。発案においては、どの資料を使ってどういう成果が生み出せるかという目利きができるという研究者の強みがあります。それから申請書作成においても、所蔵資料の十分な知識に基づく研究計画、付加価値的な可能性を理解しているため、完成度の高い申請書を作成することができるでしょう。また専門研究者とのやり取りでも、サブジェクト・ライブラリアンは研究に関する一定の共通理解があるため話が早いということがあります。

6. 常勤職員であること

締めくくりにサブジェクト・ライブラリアンが常勤職員であることの意義について述べておきたいと思います。

一つ目は図書館全体にわたる視野を持っているということです。学術的知識という面では博士号相当の者を非常勤雇用するのでも問題ありませんが、非常勤職員はプロジェクト単位という要素が強いため視野・権限が限られます。報告者の例でいうと、名古屋大学時代は非常勤で雇用内容が明確かつ具体的にあり、上司の指示に従って担当業務を遂行するだけでは図書館全体を見渡すような視野を得られず、プロジェクト外で何かを提案することもありませんでした。常勤であった一橋大学では正反対で、様々な会議やプロジェクトに呼ばれて発言する機会があり、時間が経過するにつれ図書館の全体像や細部がはっきりと見えてくるようになりました。

二つ目はサブジェクト・ライブラリアンを常勤にすることで、長期的な蓄積が可能になることです。先に述べたような、図書館と研究者の立場や視点の違いについて理解するには一定の時間を要します。所蔵資料の位置づけや

その価値、可能性を把握するにも時間が必要でしょう。また、部署異動がなく図書館を定点観測できるというのは重要な立場であり、プロジェクトを継続させるという点からも常勤であることの意義は大きいのではないのでしょうか。担当者が異動して話が通じなくなった、また一から話さなければならなくなったという研究者からの不満に対し、部署異動しない話のわかるライブラリアンが常にいるということは、図書館に対する信頼にもつながるのではないかと考えられます。

九州大学大学院ライブラリーサイエンス専攻 による大学図書館員の人材育成

❖ 渡邊由紀子

1. はじめに

図書館職員と教員を兼務している立場から、大学院と連携した大学図書館員の人材育成についてお話したいと思います。

まず自己紹介をしますと、現在の専門分野は図書館情報学です。学生時代は九州大学の文学部で西洋史学を専攻し、ロシア2月革命をテーマに卒論を書きました。卒業後は琉球大学の図書館に採用されて3年間沖縄で過ごした後、九州大学に転任し、途中で当時の宮崎医科大学に2年ほど出向した以外は長らく九州大学に勤めてきました。2010年に大学図書館での実践をもとに論文をまとめてシステム情報科学府で博士(学術)の学位を取得した後に、2011年から新設された大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻の専任教員を、その翌年から文学部司書養成課程の専任講師を兼務しています。また、現在、日本図書館協会の図書館情報学教育部会で幹事も務めています。

本報告では、まずライブラリーサイエンス専攻の設置経緯を振り返り、次

に同専攻に関する最新の概要を紹介します。続いてその専攻と密接に連携した九州大学附属図書館の教育研究活動について説明し、最後に大学院と連携した人材育成の効果と課題を検討します。

2. ライブラリーサイエンス専攻の設置経緯

九州大学の「大学院ライブラリーサイエンス構想」は、当時の有川節夫附属図書館長が、大学における図書館の役割、日本の大学と諸外国の大学における図書館の違いなどについて考察する過程で生まれました（有川・渡邊 2011: 739-740）。有川先生は、1998 年から館長を 10 年にわたって務められ、その後、九州大学の総長になられた方ですが、大学改革の流れの中で「図書館が変われば大学は変わる」という標語を掲げて、特にサブジェクト・ライブラリアンの重要性について学内外の場で積極的に発言しておられました（有川 2003）。2007 年 6 月に統合新領域学府の構想とともに「大学院ライブラリーサイエンス構想」が学内で提案され、10 月から図書館を主体に検討が始まりました。その後、様々な議論や手続きを経て無事に設置申請が認可され、2011 年度に修士課程、2013 年度に博士後期課程が開設されました（九州大学 2017: 20-9-20-10）。その間の 2010 年 12 月に公表された学術情報基盤作業部会による「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」（科学技術・学術審議会 2010）は、有川先生が主査としてまとめられたものです。

統合新領域学府は、2009 年度に新設された学部を持たない大学院の教育組織です。もともと自動車に関するオートモーティブサイエンス専攻と感性学に関するユーザー感性学専攻の 2 専攻があり、第 3 の専攻としてライブラリーサイエンス専攻が設置されました（九州大学 2017: 20-3-20-4）。学位名称は修士・博士とも「ライブラリーサイエンス」のみで、入学定員は修士 10 名、博士 3 名となっています。当初は箱崎キャンパスで開設されましたが、2018 年に大学のキャンパス統合移転により、現在の伊都キャンパス・イー

ストゾーンに移転しました。

伊都キャンパスのイーストゾーンには、人文社会科学系の部局がまとまって配置されており、ライブラリーサイエンス専攻の教育研究活動のフィールドである中央図書館とその付設記録資料館もここに 있습니다。2018年10月にグランドオープンした中央図書館は、総面積約2万平方メートル、座席数約1,400席、収容冊数約350万冊という、国内最大級を誇る人文社会科学系と初年次教育の資料を集中化した大学図書館となっています【注1】。

3. ライブラリーサイエンス専攻の概要

ユーザーの視点に立った情報の管理と提供を行うことで、ユーザーの知の創造・継承活動を支える「場」のことを、我々は「ライブラリー」と呼んでいます。これは決して図書館に限定されるものではありません。そのような「ライブラリー」を科学する新しい学問領域のことを「ライブラリーサイエンス」と名づけて、その進化・発展を目指すことが専攻のコンセプトになっています（渡邊・富浦・吉田・岡崎 2011）。

専攻の教育研究上の理念は、ユーザーにとって真に意義ある情報の管理・提供の実現であり、そして、そのための人材養成とライブラリーサイエンスの探求を教育研究上の目的としています。【図1】に示す通り、入学者には、学部卒業生だけではなく、他分野の大学院を修了した人、あるいは留学生、さらには社会人といった多様な志願者を想定し、また、修了後の出口としては、図書館を含む情報の管理・提供を行う、様々な機関や企業を想定しています。

専任教員については、九州大学独自の学府・研究院制度を活用し、【図2】のように柱となる図書館情報学、アーカイブズ学、情報科学の3分野、および関連分野を含む、多様な分野からの参画が特徴になっています。現在、総勢11名の専任教員がおり、加えて学内外から非常勤講師を招いています。

【理念】 ユーザーにとって真に意義ある情報の管理・提供の実現

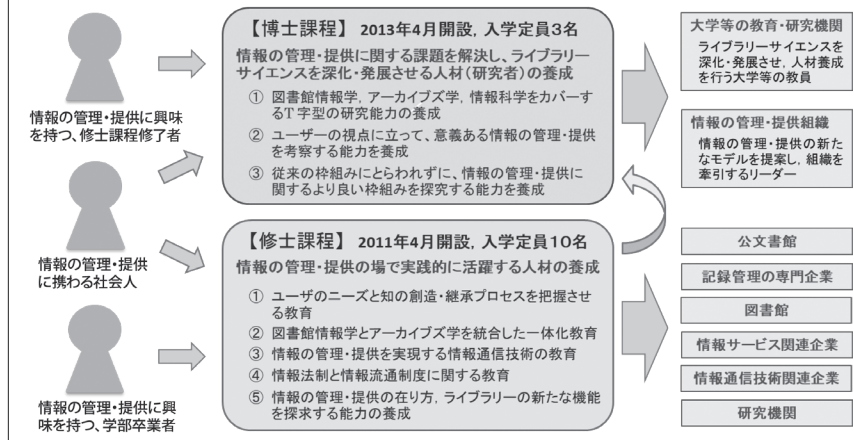


図1：ライブラリーサイエンス専攻による教育研究上の理念と養成する人材

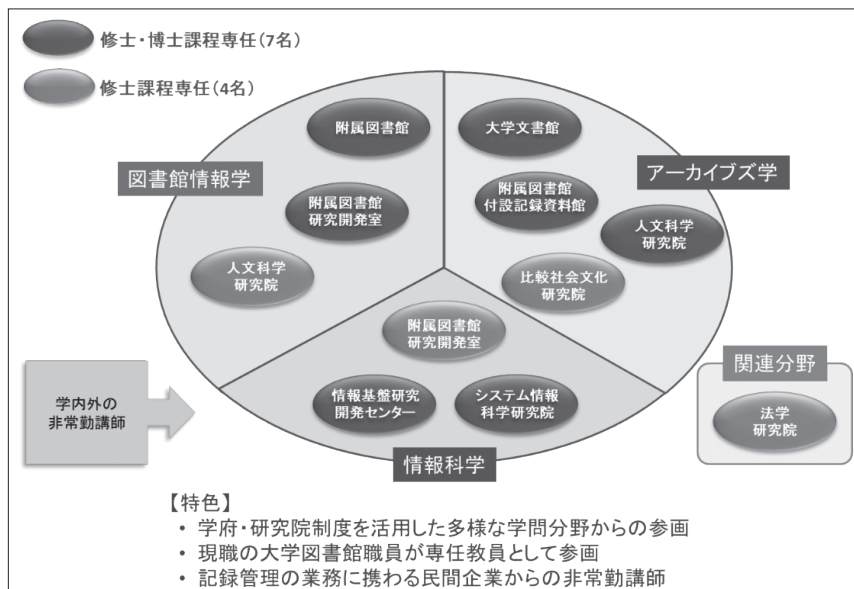


図2：ライブラリーサイエンス専攻の教員組織とその特色（2020年度）

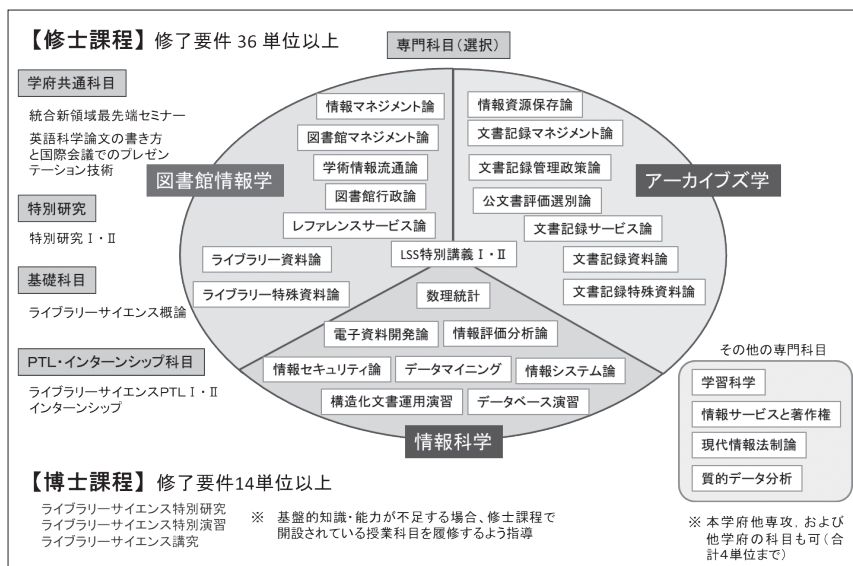


図3：ライブラリーサイエンス専攻のカリキュラム（2020年度）

【図3】に示した修士課程のカリキュラムには、学府共通科目、特別研究、基礎科目、PTL・インターンシップ科目、専門科目の5区分があり、専門科目は図書館情報学、アーカイブズ学、情報科学、その他の各分野から合計28科目を提供しています。また、必要に応じて他専攻や他学府、司書養成課程の科目なども受講可能となっています。特徴的な科目として、PTLというものがありますが、これはProject Team Learningの略で、図書館などでのフィールド調査をもとに課題を設定し、専門分野の異なる複数の教員と学生が、ともに課題解決に向けて取り組むものです。さらに、インターンシップも選択必修科目として用意されていて、図書館や公文書館、レコードマネジメントの専門企業などが受け入れ機関となっており、九州大学の図書館でも、【表1】の通り、これまでに10名の学生を受け入れました。

学位論文のうち修士論文の題目としては、図書館情報学系、情報科学系、アーカイブズ学系といった、三つの柱に沿った研究がなされています【注2】。

表 1：ライブラリーサイエンス専攻インターンシップ受け入れ実績（九州大学附属図書館）

年度	人数	研修テーマ
2011	1	・レファレンスサービスの向上に向けて
2012	4	・Cute.Catalog の機能拡張 ・新中央図書館計画 ・データを活用した図書館サービス向上の提案 ・留学生向けサービスと資料配置の立案
2013	2	・貴重資料の長期保存計画の検討 ・大学図書館における電子ジャーナルの契約のあり方
2017	1	・大学図書館のレファレンス機能を用いた研究者支援
2019	2	・資料の電子化・公開に係る作業や手続き ・電子ソリースの利用環境整備の方策 ・海外大学の事例調査等を通して、大学図書館における情報サービスの課題を検討

2020 年度までに博士論文は 4 本提出され、IR（Institutional Research）やアーカイブズ学・記録管理学といった分野での論文が九州大学学術情報リポジトリ（QIR）で公開されています【注 3】。

ライブラリーサイエンス専攻では、積極的に国際化にも取り組んでおり、学際的な情報学分野の大学院が所属する iSchools という世界的な組織に 2018 年から参加しています【注 4】。iSchools における最新の研究・教育動向を把握し、他国の類似教育組織とのネットワークを構築する活動を通じて、世界水準に見合う教育や研究を目指しています。

なお、専攻の活動状況については、2015 年度から刊行を開始した『ライブラリーサイエンス専攻年報』【注 5】で毎年詳しく紹介しています。

4. 九州大学附属図書館の教育研究活動

（1）研究開発機能を持つ図書館

九州大学附属図書館は、情報技術をめぐる環境の変化や教育・研究活動の高度化、多様化、学際化に対応するため 1996 年に研究開発室を設置してお

り、ライブラリーサイエンス専攻ができる前から研究開発機能を持っていた。室員は各部局の教員による兼任が一般的ですが、専任教員の准教授を2名配置していることが九州大学の特徴です。また、兼任教員と学外有識者である特別研究員を加えて、教員と図書館職員が協働して研究開発を行う仕組みが整備されています【注6】。

2020年度の研究開発室の活動においては、学習・教育活動との連携、コンテンツ形成・学術情報発信、図書館運営に関する3分野の下に、合計6件の研究開発事項を設定しています。それぞれの事項に図書館職員が職指定で、あるいは自主的に参加し、研究成果を『九州大学附属図書館研究開発室年報』【注7】で公開しています。

このように、九州大学の図書館には早くから研究開発の土壌があったと言えます。

(2) ライブラリーサイエンス専攻と附属図書館の連携

九州大学附属図書館とライブラリーサイエンス専攻との密接な連携について、5点に分けて紹介します。

第1は、専攻の概要で述べた通り、図書館を演習やPTL、インターンシップなどで教育・研究のフィールドとして活用していることです。

第2は、図書館職員が専攻の教員や学生になっていることです。最も特徴的なのは、図書館職員が専任教員として参画しているという点です。有川構想では、「図書館職員が教育にも携わる」ことがライブラリーサイエンス専攻の根幹と考えられていました。そのため、図書館職員が人事管理上は事務職員のまま、附属図書館の准教授を兼務して大学院統合新領域学府を担当し、文学部司書養成課程の専任講師も兼務しています。加えて教員と同等の責任を持った教育・研究活動を行い、学府教授会の構成員でもあり、個人研究室、個人研究費も持っています。また、専攻設置時に他の専任教員と同様に大学設置審の教員資格審査を受けた上で、修士課程だけではなく博士後期

表2：図書館職員のライブラリーサイエンス専攻授業協力例

ライブラリー資料論（2019年度後期）		
授業概要：近現代の印刷資料、非印刷資料、電子資料とネットワーク情報資源に関する流通、収集、保存、提供などに関する基礎的な知識を学ぶ。		
回次	テーマ	担当者
第1回	授業の概要、対象とするサービス	専任教員
第2-4回	情報の組織化	収書整理課
第5回	学術雑誌と電子ジャーナル	収書整理課＋eリソース課
第6回	電子リソース全般	eリソース課
第7回	機関リポジトリ	eリソース課
第8-9回	デジタルアーカイブ：講義＋実習	eリソース課
第10回	検索システム	eリソース課
第11回	情報検索サービス：文献検索実習	利用者サービス課
第12回	情報検索サービス：利用者教育	学術サポート課
第13-15回	まとめ	専任教員

課程の授業、ゼミ、論文指導を行っています。図書館職員が専任教員を兼務することによる教育・研究上の強みは、現職者として図書館の現場を持っていることだと考えられます（有川・渡邊 2014: 204-205）。

また、兼務教員以外にも、図書館職員が講師やコメンテーターとして専攻の授業に協力しています。例えば、【表2】に示す「ライブラリー資料論」という科目には、各課から複数の職員が講師として授業に参加しています（石田 2012: 9-10）。

図書館職員が学生としてライブラリーサイエンス専攻に入学してくることもあります。社会人コースはありませんが、一般的な社会人学生への配慮を行っており（渡邊 2011）、2015年度からは社会人を対象とする特別選抜も導入されました。また、専攻を開設した際に、勤務を続けながら平日昼間の修学が可能となるよう九州大学の就業規則が改正され、専攻設置以来合計5名の職員が1月単位の変形労働時間制を利用しました。さらに、大学間の人事交流を利用した入学希望者の受け入れ実績もあります。これまでに、他の国立大学から九州大学の図書館に出向した2名がライブラリーサイエンス専攻の修士課程を修了しています。

第3に、新しい動きとして、文学部司書養成課程を受講した学生がライブラリーサイエンス専攻の修士課程に進学し、在学時に大学図書館職員の採用

試験を受験して、修了後に九州大学の図書館に新規採用されるというパターンが出てきました。中には、図書館への就職と同時に博士後期課程に進学することもあり得ます。このように、学部の特長分野に司書資格を加えて、ライブラリーサイエンスの教育研究等の経験を持つ図書館職員が生まれてきており、今後、それらの経験を実務に活用していくことが期待されています。

第4に、図書館とライブラリーサイエンス専攻が連携して実施した共同プロジェクトも重要です。学内公募の「教育の質向上支援プログラム（EEP）」では、2009年度から8年間にわたって四つの図書館プロジェクトが採択されました。ライブラリーサイエンス専攻の専任教員でもある副館長をチームリーダーに、附属図書館、同館付設教材開発センター、ライブラリーサイエンス専攻が一体となって取り組みを推進しました（兵藤・渡邊 2017: 52-54）。メンバーには、教員、図書館職員、さらに2012年3月から後に図書館TAとなる学生たちが加わりました。このEEPの図書館プロジェクトから生まれたCuterと呼ばれる図書館TAは、図書館サービスを確実に拡張してきました（星子・渡邊 2020）。多様な分野の大学院生が専門知識と経験を生かして学習・教育支援をする姿は、いわばサブジェクト・ライブラリアン的な活動と言えるでしょう。

第5に、ライブラリーサイエンス専攻開設当初から続いている連携として、イベント等の共催があります（石田 2012: 7-8）。専攻と図書館がシンポジウムなどを共催することで、図書館職員が専攻の教員と学生、さらには国内外の研究者や図書館の利用者と、最新の研究動向を把握したり、問題意識を共有したりする場を用意しています。最近では、【表3】に列挙したような、オープンデータやデジタルヒューマニティーズ、研究データサービスなどの、オープンサイエンスや今後の研究支援に対応するためのテーマを多く取り上げています。

表3：ライブラリーサイエンス専攻と図書館の共催シンポジウム等（2017 年以降開催分）

開催年月	テーマ
2017年 1月	シンポジウム「オープンデータとデジタルヒューマニティーズ」
2017年10月	IIIFワークショップin九州
2017年11月	シンポジウム「情報管理専門職をめぐる民間企業と大学・学界」
2018年 1月	Computational Archival Science (CAS) 講演会
2018年12月	国際シンポジウム 「高等教育の国際化と大学図書館」
2019年 1月	シンポジウム 「オープンデータと大学」
2019年12月	シンポジウム・ワークショップ「大学における研究データサービス」
2019年12月	セミナー「研究インパクト指標」
2020年 1月	シンポジウム「情報ガバナンスと文理融合教育の課題」
2021年 2月	セミナー「はじめての研究データ管理とそのサポート」

(3) 文学部司書養成課程に協力

九州大学の特徴として、図書館職員が司書養成課程の授業を担当していることが挙げられます。ライブラリーサイエンス専攻の新設と連動して2012年度に文学部で司書養成課程を復活させて以来、教員兼務の図書館職員以外にも複数名が学内非常勤講師となり、通常の勤務時間内に図書館の本来業務として、【表4】に示した通り16科目のうち8科目の講義及び実習を担当しています（渡邊2019: 5-6）。ただ、この司書養成課程については、運営上の問題で2023年度をもって終了することが決まっています。

5. 大学院と連携した人材育成の効果と課題

上述した大学院と連携した活動の効果として、人材育成のための新たな仕組みを構築したということが言えます。つまり、図書館職員が教員や学生になり、学生が図書館職員になり、そこに図書館TAが関わるなど、「境目のない世界」が実現しています。図書館職員が大学院や学部の教育に直接関与

表4：九州大学司書養成課程の開講科目（2020年度）

	科目名	単位数	科目名	単位数	時間数	時期	開講学部	講師
必修科目	生涯学習概論	2	生涯学習概論	2	30	毎年・後期	教育学部	教員(人環)
	図書館概論	2	図書館概論	2	30	偶数年・後期	文学部	教員(人文)
	図書館制度・経営論	2	図書館制度・経営論	2	30	奇数年・前期	文学部	○
	図書館情報技術論	2	図書館情報技術論	2	30	偶数年・前期	文学部	教員(図)
	図書館サービス概論	2	図書館サービス概論	2	30	奇数年・前期	文学部	教員(図)
	情報サービス論	2	情報サービス論	2	30	偶数年・前期	文学部	○
	児童サービス論	2	児童サービス論	2	30	奇数年・後期	文学部	◎(学外)
	情報サービス演習	2	情報サービス実習Ⅰ	1	30	毎年・前期・集中	文学部	◎
			情報サービス実習Ⅱ	1	30	毎年・前期・集中	文学部	◎
	図書館情報資源概論	2	図書館情報資源概論	2	30	奇数年・後期	文学部	○+教員(人文)
	情報資源組織論	2	情報資源組織論	2	30	偶数年・後期	文学部	◎
	情報資源組織演習	2	情報資源組織実習Ⅰ	1	30	毎年・前期・集中	文学部	◎
			情報資源組織実習Ⅱ	1	30	毎年・前期・集中	文学部	◎
選択科目	図書館基礎特論	1						○ 教員兼務の図書館職員 ◎ 図書館職員
	図書館サービス特論	1						
	図書館情報資源特論	1	人文学Ⅳ	2	30	偶数年・後期	文学部	教員(人文)
	図書・図書館史	1	図書・図書館史	1	15	奇数年・後期	文学部	教員(人文)
	図書館施設論	1	図書館施設論	1	15	偶数年・前期	文学部	教員(人環)
	図書館総合演習	1						
	図書館実習	1						

することによって、教育能力が向上しており、研究開発室やライブラリーサイエンス専攻の研究活動に参加することで、研究マインドも涵養されています。また、シンポジウムなどの様々な場面で、国内外の研究者、学生、図書館職員、図書館の利用者と交流することにより、図書館職員の実務を俯瞰する視野が拡大しています。九州大学では以上の仕組みによって、図書館による学習・教育・研究支援機能の高度化が進みました。

他方、人材育成・確保にかかわる人事制度上の課題もあります。図書館職員としてのキャリアパス形成あるいは学位取得のインセンティブの付与、教員を兼務する図書館職員の人材確保、また人事評価を事務職員として行うのか、教員として行うのかといった問題などが挙げられます。九州大学ではこれらの課題を解決しながら、図書館と大学院との交流・連携を進め、新たな仕組みによる大学図書館員の人材育成を続けていこうと考えています。

注

- 【1】九州大学附属図書館：“中央図書館グランドオープン”，<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/libraries/central/opening-guide>
- 【2】修士論文の題目一覧と概要は以下より閲覧可能。
九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻＞院生論文＞修士課程，
<https://www.ifs.kyushu-u.ac.jp/lss/lss-01-00/lss-01-05/>
- 【3】博士論文の本文は以下より閲覧可能。
九州大学学術情報リポジトリ QIR＞学位論文＞博士（ライブラリーサイエンス），https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_browse/dissertation/?lang=0
- 【4】iSchools, <https://ischools.org/>
- 【5】『九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻年報』，<http://hdl.handle.net/2324/1657755>
- 【6】九州大学附属図書館研究開発室，<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/about-us/research>
- 【7】『九州大学附属図書館研究開発室年報』，<http://hdl.handle.net/2324/2819>

参考文献

- ・有川節夫 2003:「図書館が変われば大学は変わる」『国立大学図書館協議会ニュース』70: 16-26. <http://hdl.handle.net/2324/7666>
- ・有川節夫・渡邊由紀子 2011:「大学図書館職員の育成・確保に向けた新たな取り組み」『図書館雑誌』105-11: 738-740. <http://hdl.handle.net/2324/26653>
- ・有川節夫・渡邊由紀子 2014:「変わりゆく大学図書館員の役割」『情報の科学と技術』64-6: 200-206. https://doi.org/10.18919/jkg.64.6_200
- ・石田栄美 2012:「九州大学大学院ライブラリーサイエンス専攻の概要と附属図書館との連携」『名古屋大学附属図書館研究年報』10: 1-11. <http://hdl.handle.net/2237/16264>
- ・科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会 2010:「大学図書館の整備について（審議のまとめ）―変革する大学にあって求められる大学図書館像―」，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm
- ・九州大学 2017:「第20編 統合新領域学府」『九州大学百年史 第6巻：部局史編 III』九州大学，20-1-20-13. <http://hdl.handle.net/2324/1801801>
- ・兵藤健志・渡邊由紀子 2017:「図書館職員をハブとした情報リテラシー教育の展開 ―九州大学の実践をもとに―」『大学図書館研究』105: 50-60. <https://doi.org/10.20722/>

jcul.1469

- ・ 星子奈美・渡邊由紀子 2020: 「図書館 TA とともに創るパスファインダー—九州大学附属図書館の Web 学習ガイド Cute.Guides を例に—」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2019/2020: 27-36. <https://doi.org/10.15017/4061015>
- ・ 渡邊由紀子 2011: 「九州大学ライブラリーサイエンス専攻における大学院教育の現状」『大学の図書館』30-11: 191-193. <http://hdl.handle.net/2324/26656>
- ・ 渡邊由紀子 2019: 「図書館職員による「情報サービス演習」—九州大学における事例—」『日本図書館協会図書館情報学教育部会会報』125: 5-8. <http://www.jla.or.jp/LinkClick.aspx?fileticket=OAORekoQ%2bd8%3d&tabid=376>
- ・ 渡邊由紀子・富浦洋一・吉田素文・岡崎敦 2011: 「九州大学大学院「ライブラリーサイエンス専攻」の構想と意義」『情報管理』54-2: 53-62. <https://doi.org/10.1241/johokanri.54.53>

〈特別寄稿〉大学図書館に対する期待

——大学図書館をめぐる政策動向の視点から——

❖三宅隆悟

私からは、「大学図書館に対する期待」と題し、科学技術政策の動向を踏まえた大学図書館に対する期待ということでお話をさせていただきます。

我が国の科学技術政策は、科学技術基本法に基づいて、5年ごとに科学技術基本計画を策定して進められています。科学技術基本法は1995年に始まり、5年ごとに更新で、現在、第6期に向けて議論が行われており、我が国が目指すべき社会として、Society5.0というものを第5期から掲げています。Society5.0の実現に向けて、サイバー空間とフィジカル空間の融合による持続可能で強靱な社会の変革や、新たな社会を設計し、価値創造の源泉となる「知」の創造、それを支える人材の育成が掲げられています。

新たな研究システムの構築として、オープンサイエンスとデータ駆動型研究等の推進に対応していかなければなりません。研究データの管理・利活用であったり、研究DXが開拓する新しい研究コミュニティや環境の醸成が今後求められていくことになるでしょう。

科学技術・学術審議会、学術分科会・情報委員会の共同提言として、コロナ新時代に向けた今後の学術研究及び情報科学技術の振興策についてまとめ

られています。その中で、予測困難な事態に対処するためには、多様な学術知の確保が最善の策であり、学術研究への公的投資を充実し、振興を図ることや、情報科学技術への研究開発投資の拡充、研究のデジタル・トランスフォーメーションの推進に取り組むことが必要とされています。

具体的な振興方策としては、新しい研究様式への転換が求められています。大学図書館及び多様な学術情報のデジタル化や著作権法の見直し、研究の遠隔化・スマート化など、研究環境のデジタル化を促進していく必要があるでしょう。

文科省においてもデジタル化推進プランを作成しており、この中でも、大学におけるデジタル活用の推進や、研究マネジメントに必要な情報データベース化といった研究環境のデジタル化、DXによる研究活動の変化等の分析、研究データ基盤、プレプリント等を生かす先導的な政策検討が現在議論されているところです。

学術情報スタイルの歴史的変遷ですが、もともとは手紙、写本、手書きベースの学術情報流通であり、それが印刷技術や物流技術が向上することによって、情報爆発が起きたのが13世紀頃と言われています。

翻って現代は、インターネットが支える科学と社会であり、情報爆発が再び起きています。これまで人が読むものだったものが、機械も読む時代になり、対処しなければいけない情報量というのも爆発的に増えています。これをふまえて、社会制度に応じた対応方針や運用を考えていく必要があるでしょう。

オープンサイエンスについては大きく二つの要素あり、一つは論文へのオープンアクセスです。インターネット上において、誰もが読み、ダウンロードし、コピーし、再配布し、印刷し、検索し、それらの論文のフルテキストにリンクを貼るというブダペストオープンアクセス宣言が、2002年からすでに提唱されています。

これに加えて、研究データのオープン化も広がってきています。特に公的

研究資金による研究成果においては原則公開とし、それを使って研究が進められるようにする必要性が2015年に示されています。

これは日本だけの問題ではなく、2018年設立のEUのヨーロッパ・オープン・サイエンス・クラウドの例や、オーストラリア、アメリカ、G7、OECD、UNESCOなど、各種機関でも同様の動きがあります。

日本としては、オープンサイエンスの推進のための研究データ基盤の整備を進めており、いわゆる研究データの平易な保存・管理、網羅的な検索等を実現する共通システムのシステム開発を行っていて、2020年3月の運用開始を目指しているところです。

基本計画の中で図書館関係については、「研究データの管理・利活用など、図書館のデジタル転換等を通じた支援機能の強化を行うために、2022年度までに、その方向性を定める」という観点や、「新たな研究システムの構築」として、オープンサイエンスとデータ駆動型の研究等の推進が掲げられていますが、特に研究者の研究データ管理・利活用を促進するため、データ・キュレーター、図書館職員、URA、研究の第一線から退いたシニア人材等々の人材の活用や、図書館のデジタル転換等の取り組みが、文科省に対して求められています。

ジャーナルを取り巻く現状について、およそ3年ごとに文部科学省の科学技術・学術審議会の作業部会等で議論されています。世界的な論文数の増加などを背景に、購読価格上昇が定常化しており、オープンアクセス・ジャーナルが普及してくると、それに対して、論文掲載時に出版社に支払う論文処理費用（APC）の負担増大が顕在化しています。ジャーナルへのアクセス確保という大学図書館を中心とした問題から、研究者はもちろんのこと、大学執行部や研究資金を扱うファンディングエージェンシーも巻き込んだ議論が不可欠な問題へと変化しています。

大手海外商業出版社の活動は、論文の出版だけにとどまらず、研究活動で生成される研究データを含む情報の交換、共有、保管、提供というサイクル

にも拡大しています。学術情報流通の問題は、単なるジャーナルの購読経費の削減方策だけの問題ではなく、研究振興戦略やどのようにオープン化に対応していくかという問題です。

また、大学においても、APC 支払額のデータの収集、機関の中での積極的かつ丁寧な状況説明というのが必要であり、執行部に対しても、研究戦略に基づくジャーナルの契約形態の決定、大学間で連携した出版社との交渉について説明させていただいています。

ジャーナルの問題は刻一刻と変化しており、学術情報流通そのもののあり方を見つめ直す契機となっていて、最適な学術情報流通環境を保つためには、各関係機関・関係者全体が主体的に問題解決に取り組んでいくことが期待されています。

大学図書館に対しては常に高い期待がされています。令和2年5月、科学技術・学術審議会の学術分科会で、新型コロナウイルスの影響に関してアンケートをとった結果、図書館の閉鎖等による影響として、閲覧制限や学外から電子ジャーナルの閲覧の問題が指摘されました。これにはデータのインフラ化・利用拡大に向けた体制整備や、デジタル化推進の支援が必要となります。

また、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う対応について継続してアンケートを実施したところ、コロナ禍で閉鎖している図書館も一定数ありましたが、秋になるにつれ「通常通り実施」もしくは「限定的に実施」として開館していく大学図書館が増えてきています。

大学図書館は、学術情報の主要な生産拠点である大学の活動を支える重要な基盤であることは間違いありません。一方、大学における教育・研究活動のあるべき姿というものは、常に変化しています。それを支える基盤としての機能は、進化し続けていく必要があります。

東京大学の図書館憲章に「東京大学は、附属図書館を学習・教育及び研究のために不可欠な全学組織として設置し、人類の知的遺産の収集・保存・整

理及び新たに創出される学知の世界への発信の拠点とする」という理念があります。「大学の知の基盤」として、大学図書館のあるべき姿、理念については大事にしつつ、時代とともに変化する課題に対して、引き続き積極的な対応を期待します。

研究の世界と図書館の世界と二つ持っている サブジェクト・ライブラリアン

——コメント①——

◇大向一輝

私は人文社会系研究科・次世代人文開発センター人文情報学部門に所属しています。人文情報学は、英語ではデジタルヒューマニティーズ（DH）と呼ばれ、人文学と情報学の融合領域であると定義されています。人文学における非常に長い蓄積の上で、データベースをどのように使っていくか、あるいは実際の分析にデジタル技術をどう生かしていくかという課題をサポートする立場であると考えています。東京大学には大学院横断型教育プログラムがあり、デジタルヒューマニティーズの基礎を、様々な研究科の大学院生に学んでもらおうという取り組みを行っています。また、デジタルアーカイブづくりの仕事として、文化庁・国立美術館のメディア芸術データベースにも携わっています。

以前は国立情報学研究所にて学術論文や大学図書館の蔵書の検索サービスである CiNii を担当していました。本来の専門はウェブ情報学であり、ウェブ上での知識表現や共有の仕組み、ネット上のコミュニケーション支援に関する研究に取り組んでいました。こういった背景から、学術コミュニケーショ

ンの先端的な課題であるオープンアクセスやオープンサイエンスにも強く関心を持っています。

これまで、研究者は自らの分野の研究や教育に取り組み、図書館は情報のインフラとして役割分担をしてきました。互いの専門性はまったく異なりますが、両者が扱う論文、書籍、雑誌といった文献は、分野を問わず同じような形態をしているからこそ、分業が可能です。その接点を最小化して、それぞれがあまり混ざり合うことなく効率的にやっていけばいいというのが、これまでの学術情報流通の方向性でした。

一方、オープンサイエンスの背景には、学術情報へのニーズが多様化し、もはや図書館の知見だけでは扱い切れない、各分野の現場の声を取り入れたシステムづくりの必要が生じているという状況があります。また、情報技術がコモディティー化して、誰でもシステムがつくれる環境になっています。例えば、人文情報学部門で深く関わっている仏教学のデータベースでは、データ作成もシステム開発も研究者が担当しており、役割分担のあり方が変わってきています。

その中で、研究者として学術コミュニケーションに関わることは、通訳の作業であると考えています。図書館の情報流通には、資料の受け入れがあり、目録を作り、相互貸借や機関リポジトリを通じて利用者に届けるという一連の流れがある、ということすら最初は知らない状態だったのですが、それでは研究者の要望を伝えようとしても会話が成立しません。図書館には図書館の原理原則、研究者には研究者の原理原則があり、それらをいかに共有できるかということが重要です。

そのためには、互いに異なるコミュニティにある者同士の関係性をどう築き上げるかが大きな課題になります。長らく交流を続け、時には人事異動で他の大学や組織に移られるのを見送ったりということを繰り返していく中で、双方が持っている理想や現実、悩みごとがわかってくるようになり、それがシステムづくりにも生かされていきました。

オープンサイエンスやサブジェクト・ライブラリアンが必要になる世界においては、今が過渡期であるということを認めつつ、ライブラリアンと研究者が混じり合いながら状況を観察し、何が必要かが見つかったら具体的な行動をともに起こしていく、時間のかかるこのサイクルをきちんと回せるか、じっくり待てるかという胆力が試されています。

最後に、サブジェクト・ライブラリアンへの期待として、「共通性」と「固有性」という言葉を挙げます。これまでは、各分野に共通する性質が確固たるものとして存在しており、その範囲を拡大していくというアプローチで、現在の学術コミュニケーションの姿が形づくられてきました。

一方、サブジェクトは本当に多様で、人文学に限っても、哲学、歴史、文学等々に分かれ、それぞれの研究者は異なる対象を取り扱っています。すべてが固有であるという前提がありつつも、俯瞰する中で「それぞれの方は固有だとおっしゃるが、実はあそこで見た光景と同じかもしれない」といった形で共通性を能動的に見だしていくのが、大きな仕事になるだろうと思います。共通性が見つかれば、そこから本来の固有性も明らかになり、それが社会に対してどのような意味を持つのかというコミュニケーションのきっかけにもなり得ます。その点において、サブジェクト・ライブラリアンの役割は非常に重要です。

研究者やライブラリアンの役割がどうあるべきかという議論はこれからも続いていくものと思われますが、私自身は、ライブラリアンは、最終的には共通性に依拠する職能だと考えます。固有性から共通性をあぶり出し、他者とどうつながっていくかということをファシリテートしていただきたい。研究の世界と図書館の世界とを二つ持っているサブジェクト・ライブラリアンは、2倍楽しんでいただけたらと期待しています。

コミュニケーションを通じた 新たな価値観の創生を

——コメント②——

❖北村由美

私の所属している京都大学附属図書館研究開発室について紹介したいと思います。

研究開発室の設置年月は1996年で、そこから10年以上たって専任教員が着任するという流れがありました。専任教員は当初1名だったのだが、2021年現在は、京都大学重点戦略アクションプラン（2016－2021）の事業の一つ、オープンアクセス推進事業の関係で、工学博士の助教と私の2人が専任で、学内の各分野の先生方に室員として活動していただいています。活動内容は、京都大学図書館機構の将来構想に沿って研究・教育活動を推進していくことです。

日本の大学図書館は、研究教育に深くコミットした機関でありながら、事務職員が中心となっていることがあって、研究開発を職員だけで十分に行うことができず、教員と図書館員を橋渡ししつつ研究・教育に従事する人材を獲得するまでに非常に苦労してきました。

私自身はハワイ大学の図書館情報学修士を取得し、その後に、現在の東南

アジア地域研究研究所（当時の東南アジア研究センター）に助教・図書室主任として着任しました。アメリカの図書館情報学修士課程は、当時は図書館の館種別に専門が分かれており、私は大学図書館を専門にしていました。大学図書館に勤めるのであれば、ダブルマスターか、博士号を取るのが望ましいと指導されていました。帰国後に就職した京都大学が法人化した後に、国立大学の教員が国立大学で学生として勉強してもよいことになり、一橋大学大学院にて東南アジア研究を勉強し博士号を取得した後に、附属図書館に移り、現職に至ります。サブジェクト・ライブラリアンを目指していたというところはありましたが、実際に研究所の専門図書館的な場所と、大学のメインライブラリーである附属図書館で働いてみると、やはり一般的な意味での大学図書館の方があっているのではないかと考えています。

さて、2000年代に入り、日本の大学図書館というのは非常に大きく変わりました。まず2000年代の後半から2010年代前半は、ラーニングコモンズに見られる多様な学びへの対応や空間の活用方法の変化がありました。その後、2010年代後半から現在は、研究成果のオープンアクセス化の推進と、オープンサイエンスに向けた動きがあり、対象資料と提供方法の多様化、研究支援へのニーズの高まり、さらにグローバルな視点が不可欠になっています。

大学図書館の機能、本来的な役割が、次世代に向けた研究資料の保存と提供というところは変わっていないと思いますが、利用者との関係が多様化していることと、研究資源に関するより高度な知識が必要になってきているというところが変わってきたと思います。

今回、東京大学附属図書館にサブジェクト・ライブラリアンに相当する職が設置されるということで、大学図書館において多様な専門職が活躍する第1歩になることを願っています。さらに、サブジェクト・ライブラリアンならではの、教育へのコミットメントというものも考えられ、教育への関与が将来のサブジェクト・ライブラリアンの発掘へもつながるのではないかと考

えています。

大学院生の研究者パスとしてサブジェクト・ライブラリアンは考えられにくいのではないかという話がありましたが、京都大学で司書課程を担当する中で、研究を進めていった上で、サブジェクト・ライブラリアンのような職につきたいという学生に出会うことは少なくありません。

また、国際ネットワークによる資料収集・提供も、非常に重要です。資料の収集・提供に関しては、特に文系分野におけるオープンサイエンスの先導として、東京大学アジア研究図書館だからこそできるということを実現していただきたいと思います。一方で課題としては、サブジェクト・ライブラリアンの業績の評価や、サブジェクト・ライブラリアンが主題に関する知識をどのようにアップデートしていけばいいのかということ挙げられます。

三者の報告に共通するところとして、コミュニケーションを通じた新たな価値観の創生ということが求められていると感じました。

最後になりますが、サブジェクト・ライブラリアンは最初の取りかかりで、今後の大学図書館内には様々な専門職が必要であると感じています。図書館における多様な専門職について、さらに議論を深めていければと考えています。

パネルディスカッション

☆モデレーター：蓑輪顕量

☆登壇者：小野塚知二×吉村亜弥子×福田名津子×渡邊由紀子×
大向一輝×北村由美×三宅隆悟

1. サブジェクト・ライブラリアンの方々の情報交換の場

【蓑輪】本日ご報告をいただいた皆さま、どうもありがとうございました。大変、内容の豊富な報告をいただき、どのような点から議論に入っていくべきか、少し迷うところがあります。

東京大学では、新しい職種としてサブジェクト・ライブラリアンを考えています。つまり図書館専任の教員を設けていきたいと考えています。着任される方々が、すでに活躍している方たちとどのように交流し、どのように情報を交換しながら業務を進めていくのがよいのかというのが、先生方のお話を聞いていて気になったところです。

これについてパネリストの先生方に一言ずつ御意見を述べていただければと思います。最初に吉村さんいかがでしょうか。実際にお仕事をされる上で、サブジェクト・ライブラリアンの方々の情報交換の場みたいなもの

がどのような形で確保されているのか、アメリカ等の事例等を交えて話を頂戴したいのですが。

【吉村】 アメリカの日本研究ライブラリアンの場合だとメーリングリストがあります。皆、別々の場所で働いているので、私もウィスコンシンで最初に仕事を始めたときは、自分の図書館内には誰も日本研究ライブラリアン特定の仕事のやり方を教えてくれる人がいませんでした。上司には、学会などに参加して、話を聞いてくれそうな人を見つけて、その人から教えてもらうようにしてほしいと言われました。そこで、年会に送り出してもらって、優しそうだなと思う方に声をかけて、これこれこう思っているのだが、どうだろうか、それでいいよ、といった感じにいろいろアドバイスをいただいて、その後も交流を持ち、質問があったときにはご連絡させていただいて、いろいろ情報を得るようにしました。

今は逆に情報を与えるようなレベルまで達してきたと思いますが、私は新しく仕事に就いた日本研究ライブラリアンには、あなたの機関には誰も教えてくれる人がいないから、必ず遠慮せずに他の機関の日本研究ライブラリアンに連絡を取ってほしいとお話しています。

【菱輪】 日本の研究者の世界だと、それぞれの領域に学会という名前のつく組織が存在していることが多いと思います。そのような学会に研究者の方たちが所属していて、そこで様々な情報を得るということをしているのですが、サブジェクト・ライブラリアンの方々の場合も、サブジェクト・ライブラリアンとしての学会のような組織が存在していると理解してよろしいのでしょうか。

【吉村】 CEAL、Council on East Asian Libraries という団体があります。東アジア研究に携わる地域研究専門のライブラリアンのための学会のようなもので、年会があり、研究発表の場である雑誌なども出しています。その発表、雑誌などで他の東アジアコレクションではどういったことが行われているかを把握することができます。日本研究は日本研究で、韓国研究、

中国研究とまた別にそれぞれ協会のような組織があり、北欧や東欧、東南アジアや中東なども、それぞれ地域ごとの専門ライブラリアンの組織が存在します。

【**養輪**】一つの大学の中に、ある領域の担当が1人しかいないという状況の中で、同じようなことをしている他大学の方々とどうやって連絡を取っていくのかは、仕事を進めていく上で大事なことではないかと思います。福田さんのお話を聞いていて、実際に日本ではある意味で非常に孤立して始まってしまったのではないかと思いました。福田さん、今の質問、情報の交換の場などに対して何か御意見はないでしょうか。

【**福田**】一橋大学では和洋1人ずつの採用で、西洋担当は私、日本担当にはとても優秀な方がいました。彼との会話で日本史の方法論を聞いたり、現地調査では古い蔵を見に行くとかそういう話を聞いたことは、とても勉強になりました。図書館情報学関係では、都内だと講演会やセミナーが割とあるので、積極的に足を運んで情報収集をしていました。それから、自分の専門に関しては学会に所属しているので、定期的に参加して知識をアップデートしていきます。それぞれ出向いた先で、いろんな人からお話を聞く機会がありました。

【**養輪**】様々な場を通して情報交換をしながらブラッシュアップしていくというようなことをしていच्छあったということですね。

九州大学さんの、図書館の専門の方々を新たな視点から育成しようとしていच्छるというお話を聞かせていただきました。大変に先進的な取り組みなのではないかなと思いました。渡邊さんは出向されたことがあるということをおっしゃっていたと思いますが、そのような観点から何か御意見はあるでしょうか。

【**渡邊**】出向したのは、いわば官僚制的人事制度の問題でした。係長になるときには外に1回出なければいけないとか、今も管理職の幹部人事は割と全国規模で動いて、それで昇任していくみたいな制度が残っているので

すが、当時は係長昇任のために出向しました。初任地は琉球大学でしたし、九州大学だけにずっといるよりは、小さな単科の医科大学や、ある程度規模のある琉球大学などでの勤務経験というのは、図書館職員としては非常にいい経験になりました。

コミュニティーとして図書館界は非常に狭く、大学図書館界は特に狭い世界なので、大体、誰がどこにいて何をやっているかというのは情報としてはわかっているため、情報交換をするということに関しては、非常に密なコミュニティーが存在していると思っています。

2. サブジェクト・ライブラリアンの異動／ポスト

【**蓑輪**】実際に東京大学では、2021年4月から3名の方が新しく教員として図書館に入りますが、その方たちが、同じような立場の先生方とどのように連絡を取り合いながらブラッシュアップしていくのが望ましいのか考えています。図書館の中では、出向という形で他大学に出ていくこともあるというのを耳に挟んでいたので、東大の場合もそのような方法を取るのが望ましいのかは今後の課題なのではないかと思っています。

吉村さんにアメリカの大学の実際の例をお聞かせいただけるとありがたいのですが、一度あるポストに決まった後はずっとその大学におられることが多いのでしょうか。

【**吉村**】これは個人の選択で、私が特にこうだ、とは申し上げにくいのですが、離職する方もいますし、そのままずっと残る方もいます。また、空気が出たときに異動される方もいますが、今、現職の方のほとんどは、同じ機関に10年、20年、もしくは30年とお勤めの方が多いと思います。ですから、ライブラリアンという専門職のキャリアが始まったら、異動はあって1回だと思います。何度も異動する方は、私は存じません。1回か、2回が多分上限かなと思います。一つの機関に長くいらっしゃる方が多いと思

います。

【**養輪**】日本の場合は、一つの機関におられて、それが教員だったら、助教などから准教授、教授と上がっていくわけですが、転任のときにポストが上に行くというような感じのことはあるのでしょうか。

【**吉村**】これもまた機関によって雇用形態や契約条件が違いますが、異動する場合は、大抵は、予算額が大きい、学習支援より研究支援の割合のほうが大きい大学にステップアップのような形で異動されることがあります。いわゆるランキングが上の大学機関に移ると、多分ですが、給料も上がるでしょうし、「上に行く」という解釈ができると思います。同じ機関にとどまる場合でも、ライブラリアンが教員枠の機関では、教授と同等の雇用継続か否かの評価をする審査を通る必要があります。ライブラリアンが教授と同等の雇用枠でない機関では、それぞれ審査方法が異なりますが、ライブラリアンはライブラリアンで特定のランクがあって（専門職扱いだから）、審査を通れば「位が上がる」という設定になっている機関もあります。私自身がまだ経験していないのでわかりませんが、大抵そうではないかと思えます。

3. サブジェクト・ライブラリアンの業績の評価

【**養輪**】北村さんのコメントの最後に、業績の評価等はどう考えているんだというご質問がありました。実は私たちも、このパネルディスカッションのところで、評価というものをどのような形で考えていくのがいいのかをテーマとして議論させていただきたいと思っていました。そこで、ここで当初から掲げていたところに入りたいと思います。まず、北村さん、評価等に関して、京大における具体的な現状と、何が望ましいと思っていらっしゃるのかという二つの視点からお話をいただけないでしょうか。

【**北村**】評価する側にいないのであまりよくわからない面もあるのですが、

今は事務系ではなくて教員としての評価基準で審査されています。日本の大学全般般的に見て評価基準というものが非常に明確に、かつ厳しくなっているのです、サブジェクト・ライブラリアンの先生方が長くキャリアを務めていく上ではどういうふう to 評価していくのかが明確にされていくのが望ましいのではないかなと思っています。

どこを見たらいいのかということなのですが、数値化することはとても難しいと思います。教育支援、研究支援、そして図書館支援という、私は支援という言葉はあまり好きではないのですが、言い換えると、論文とか、教えている授業のコマ数以外に、数値にならない活動を、どういうふうに見えるようにしていき、評価していき、さらにエンカレッジしていくのかというところを、うまく皆さんで文章化して、東京大学の現状に合う形できつくり上げることができればいいのかなと思っています。

【蓑輪】 東大の場合、これから制度が始まっていくので、評価というのは、どうしても出てくるというか、きちんと考えておかなければいけないところだと思っています。私たち教員は、すでにいくつかの基準等があって評価が行われています。数年に一度点検評価が入ってきますので、それにあわせていろいろなところをそれぞれ見ていくわけです。この新しい職種になるであろう図書館の専門の教員に対して、どこを見ていくのか。それから、目に見えない、今までの教員では評価の対象になっていなかったものを、評価対象として含めていくべきではないかということは、当然考えていかなければいけないところです。

それで、これもまた、先行しているアメリカの例をお聞かせいただければと思います。吉村さん、実際に評価という点では、何か具体的などころを、もしわかったらお話いただけませんか。

【吉村】 シカゴ大学では、ライブラリアンは教授と同等の「教員」というわけではないのですが、アザー・アカデミック・アポインティー（Other Academic Appointees）という、教授、ファカルティー（Faculty）の次に待

遇がよいことになっている雇用形態のカテゴリーに属しています。教員とは別の審査、レビューというのがあって、私も1年半ぐらい前に経験しました。審査する項目が書類上決まっていて、職務上必須ではないのですが、私は執筆して出版したものがあったので、その出版したものであるとか、アウトリーチ活動内容や、ユーザーからの推薦状を提出しました。実際にサービスを提供した学生、教授や大学院生からの評価、推薦状といったようなものが、やはり強く影響する、評価の対象になったと思っています。図書館内には私の仕事ぶりを、言語力の面でも、研究支援の面でも評価できる人がいないので、ユーザーからの評価を正式な推薦状というカタチでいただいて、レビューの際に提出するといったことをしました。

【養輪】確かに、研究支援に対する評価というのは、おそらくユーザーの方からの評価が1番的確なのかなという気がします。実際に、私たち教員も、今では授業評価というものが入ってきていて、学生さんたちからの評価というのが結構大事な視点になってきていますので、同じようなことかなという気もします。実際に、日本で先行して経験のある福田さんはこの件に関していかがでしょうか。

【福田】評価という点では私も、どのように評価されたかは闇の中というか、わかりません。ただ、10年間勤める中で徐々に教員とのコミュニケーションが密になり、信頼を獲得できた実感というか事実はあります。例えば、授業にゲストとして呼ばれてアカデミック・ライティングについて教えたり、あるいは大学院のオリエンテーションに呼ばれて剽窃防止ガイダンスを任されたりということがありました。サブジェクト・ライブラリアンという存在を、口コミか何かわかりませんが個人的なつながりから徐々に先生方に知っていただけてお声をかけていただき、学内の教育に関わるというようなことが増えていきました。そういうことも評価の基準になっていたらいいかと思います。

4. サブジェクト・ライブラリアンはどう知識をアップデートしているか

【養輪】大学の先生方との密なコミュニケーションといえば、U-PARL でサブジェクト・ライブラリアンの調査をしていく中で、国によって呼び方が結構違うということがわかり、その中にリエゾン・ライブラリアンという名前がありました。これは大学の研究者の方や院生の方の研究支援で、いかにきちんと他の研究者の方とのつながりを持てるよう支援をしていけるのかという点が表面に出た名前なんだなということを感じました。確かにそのようなところも評価の対象になってくるとよいのではないかと感じる次第です。

評価についてはいろいろな視点から考えていくことができるのだらうと思います。それがまた、サブジェクト・ライブラリアンの方が教員として、日本の場合であれば、助教から始まって、准教授、教授と上がっていくときの基準になっていく可能性もあるのではないかと感じていますので、今後、私たちもしっかりと考えていきたいと思います。

それでは、次の論点に移りたいと思います。私たちは、サブジェクト・ライブラリアンの方たちの研究支援ということが大きなポイントになってくのだらうと考えています。蔵書の構築も大変大切な仕事ですし、また本人の研究も大事ですが、いかにして研究を支援していくか、研究者を養成していくかというのが、やはり東京大学の各学部、部局に課された使命として存在しています。図書館はたくさんの資料を持っていますし、いろいろな知識の集成がありますので、それを活用しながらいかにして研究の支援をしていくのか、ここが大事な点になってくると思います。そのときに、1人の研究者がサブジェクト・ライブラリアンになり、あまりにも広い領域をカバーすることは困難ではないかと思います。ある程度領域を絞ったにしても、現在何が研究の最先端で、どこにどういう問題があるのかというようなことを把握していく、いわゆる知識のアップデートを行っていく

ためにはどのようなことをすればよいのか。この点について皆さんの意見を聞きたいと思っています。

実は今日の発表内容についての質問にも一つ近いものがありました。現状ではゼロのようなところから出発していくことになりますので、少数で広い学際的領域をカバーすることにならざるを得ないのではないかと、本来はアメリカの大学のような形が望ましいと思うが、今後どうなっていくのがよいと思うかという質問です。そのこともあわせて御意見を聞かせていただければと思います。

【吉村】アメリカにはアジア研究学会というのが存在しています。アジアの全域をカバーする学術学会なので、例えば年会に参加するとか、学者がつくっているメーリングリストに加入して、ディスカッションが出たときにそれをチェックすることができるという方法があると思います。

それから、図書館側の動向に関しては、大学機関の内部でいろいろ情報が飛び交い、もちろんそういったことは内部でシェアするので、それに目を通して、いろいろなところで何が起きているのかを把握できます。最近ではやはりeメール、ウェブサイトもあるので、割と楽に情報収集ができるかとは思いますが。私自身は日本研究だけが専門なので、いくつかの地域やサブジェクトを兼務されているサブジェクト・ライブラリアンはもっと大変なのだろうと思うのですが、そういったことをする以外に、網羅する術が、私には考えつきません。

【福田】先ほどお話ししたと重複してしまいましたが、やはりそれぞれのコミュニティに自分から飛び込んでいき、そこから貪欲に学びを得ることかと思っています。図書館情報学であれば図書館の方々とお付き合いがあるのでいろいろ情報が集まってきますし、講演会、セミナー、ワークショップといったものにもできるだけ参加して知識を蓄積していくことができます。自分の狭い専門に関しては、論文を書き続けるぞという覚悟で研究を続けるわけですが、それからもう少し広げていくためには、やはりほかの

研究者コミュニティにも足を運ぶことが必要だと思います。

具体的には足がかりとして、学内にどういった先生方がいて、どんなニーズを持っているかということをインタビューしに行くこともできると思います。一橋大学では学園史とか学問史に関する研究会を発足させて、図書館員も教員も一緒に集まって研究会をするという場を持っていました。研究会でもお話をしてコミュニケーションを取るし、終わった後は食事をしながらのコミュニケーションもあって、先生方の研究内容やニーズがわかります。やはり、それぞれ違う場に足しげく通って情報を収集していくということが、研究支援のニーズを汲み取るのに不可欠な基盤になるのではないかと思います。

【蓑輪】 研究のためのニーズを酌み取るという点では、かなり組織的なことをしていけないとなかなか難しいのかなという気もするのですが、そういう点で九州大学さんのシステムというのはよさそうに感じます。渡邊さん、それについてもう少し詳しくお願いできますか。

【渡邊】 研究者の方々と図書館員との間が近く、接点が多いというのが強みのんだろうなとは思っています。図書館というのはやはり、どうしても内向きになりがちなところがあるので、積極的にこちらから出かけていくことが大事なのではなかろうかと思います。待っていてもなかなか情報というのは集まらないので、いろいろなアンテナを張りめぐらせて、出ていく。先ほどリエゾン・ライブラリアンという名称が出てきましたが、せめて1学部には1人はリエゾンのような担当者がいて、その人たちが必ず、その情報は集めてくるというようなことにすれば、組織的には人海戦術で情報が集まってくるということができるのではないかなと思います。

有川節夫先生はよく、研究者は深く掘るが、サブジェクト・ライブラリアンは広く浅く掘る、それで結果としては同じ体積になるのだというような例え話をなさっていました。図書館員は「広く浅く」で止まってしまうかもしれないのですが、そこに研究者の深い掘り方が入れば、結果として

体積がもっと増えた形で、サブジェクト・ライブラリアンとしての仕事ができるのでよいのではないかなと思っています。

【義輪】今の例えはすごくよいですね。広く浅くと、深く狭く。研究者の方たちは確かに深掘りをするのが使命のようにやっていますが、その領域から外にシェアを広げてというのはどうしても難しい感じになってしまうことが多い気がしますので、それを補ってくださるという意味で大変にありがたいなと思います。最終的に掘り上げたものの体積は一緒なんだよというのは非常に心強いことではないかと思います。

知識のアップデートということについて、人文情報学のほうで活躍していらっしゃる大向先生、一言お願いできますか。

5. 先端的な研究を支えていくためには

【大向】図書館員の方々の横のつながりがすごいということはこの業界に入るまで知りませんでした。全国どこでも誰かがつながっているのは、一研究者としては想像を絶することです。一方、例えば医学などの専門分野の図書館に配属された方は、その分野の知識のアップデートが要求されるので、専門のコミュニティーをつくって研鑽するという仕組みになっています。そういった縦のつながりと横のつながりがある中で、特に横のネットワークの存在が、外部からは見えづらい。公式の場でもつながりが見えるような仕組みの上で、縦と横をどう密につないでいくかというのが重要かなと思います。アメリカのNCC（北米日本研究資料調整協議会）の皆さんとはよくお会いしていたのですが、開かれた場での情報共有を強く意識されていらっしゃるの、そこは参考になると思います。

さらに先端的な研究を支えるためには、学会との関わりや、学内の研究者との直接的なつながりを何本張れるか、網の目を細かくできるかという勝負になってくると思うので、やはり、サブジェクト・ライブラリアンが

一人一人で頑張るということではなくて、ネットワーク同士をどのようにつなぎ合わせるかというファシリテーションができると、知識のアップデートを含めて、より強固な枠組みがしてくれるのではないかと感じます。

【蓑輪】確かに、図書館という場を活躍の舞台にしていけることになるわけですから、そこにいらっしゃる方たちとの協働というのが大事な視点であるというのはよくわかるような気がいたしました。

それから、知識のアップデートのことで教員の立場から発言させていただくと、実際に自分の分野の授業、概説的な授業もありますが、講義とか演習の中で、今1番問題になっていることについて学生さんたちに話をしていくということもあって、その中で教員もブラッシュアップされていくという気がしています。東大が考えているのは、専門領域を持った、博士号を持った人たちがサブジェクト・ライブラリアンの職に就くということです。その方が専門領域に関する授業等を担当することは望ましいのかどうか。これは今後の本質的なあり方に関わってくる可能性があるのですが、日本型のサブジェクト・ライブラリアンとして一つ、私たちが打ち出したいと思っているのは、専門領域を持っていることをまず大事にしたいということです。その上で、様々な支援というところは補助的なものとして心得ていてくれるとありがたいなと考えています。それでは実際に、専門領域の、本当にもう直球ど真ん中の質問ですが、授業を持つことが果たして望ましいかということに関して、実際の経験からお話をいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

6. サブジェクト・ライブラリアンは自らの専門領域の授業を持つべきか

【吉村】図書館の資料の使い方を教える講義1回分をライブラリアンが担当することは、よくあることで、これはかなり定着しているかと思いますが、サブジェクト・ライブラリアンの中には、講師を兼務している方もいます。

シカゴ大学では、法律学のサブジェクト・ライブラリアンで法律学の講師も兼ねている人が2名いて、詳しい授業内容は私はわからないのですが、年に1回程度の頻度で教えているようです。

私の知っている限りでは、南カリフォルニア大学の日本研究ライブラリアンであるレベッカ・コーベット（Rebecca Corbett）さんが、講師として、彼女の専門分野である日本研究に関する授業を担当することが可能な状況にあるようです。彼女が教えなければ教えられる、というような。これは、日本研究の教授たちからの要望もあって実現したようです。日本研究ライブラリアンの中で、図書館学ではない授業を受け持てる選択があるのは彼女1人かもしれません。いずれにせよ、シカゴ大学図書館の法律学のサブジェクト・ライブラリアンも、南カリフォルニア大学のコーベットさんも、授業を持つときは、別途講師としての給料が支給されています。エリアスタディーズ・ライブラリアン、サブジェクト・ライブラリアンが講師も務めるというケースはあまり多くはないと思いますが、資格があり、雇用条件上可能であり、本人の希望があれば、それは推奨されているのではないかと思います。

【養輪】日本での経験がおありの福田さんは、実際に専門的なことで講義を持つ、担当するというようなことに関してはいかがでしょうか。

【福田】いいか悪いかでいうといいと思うのですが、私の場合は実現しませんでした。なぜかという私の専門にはもうすでに競合する教員がいて、そちらの先生が全部担当なさるので私が出る幕はないというか、お声は特別かからなかったのです。情報検索、アカデミック・ライティングとか剽窃問題とかそういったことで出張講義を頼まれる場合があり、リレー講義を数コマ担当する、各先生の授業冒頭に15分から20分ほどレポートの書き方を教える、大学院のオリエンテーションで剽窃問題について説明する、そういったことはありました。専門分野を持っていようと私は図書館で採用されたため、あくまでその範疇での仕事を依頼されました。

【渡邊】専門領域の授業を持つというのは非常によいことだと思います。ただ、私は今、図書館職員、管理職もしながら教育研究もしているのですが、サブジェクト・ライブラリアンとしての仕事をしながら授業を持つというのはかなり負担になるので、そこをどう考えるかという課題はあると思います。例えば、サブジェクト・ライブラリアンの授業は通年ではなく、クォーター制であれば1クォーターにするとか、そういった工夫ができればだいぶ違ってくるのかしらと思います。もちろん、最先端のことを知るために、授業を持っていることは非常に緊張感もあるし、教えることによって2度学ぶというような見方もあるので、とてもよい取り組みになるのではと思います。

【蓑輪】実際に今、京都大学でお仕事をしていらっしゃる北村さんはいかがでしょう。

【北村】私も非常にいいことだなと思います。私自身は、図書館機構が提供している学術情報リテラシー関係の、ほかの先生方とチームティーチングで行う授業と、研究支援に関わるところでは、これもほかの先生方と一緒にやる大学院生向けの学術情報リテラシー、それにプラスして司書課程の授業を教えています。さらに、余裕があるときには東南アジア研究についてアップデートしていきたいと思っているので、全学共通科目の学部1年生向けの少人数制ゼミを提供しています。東南アジア関係の授業でも、やはり附属図書館の教員が教えるということで、学術情報リテラシー的な、文献をどのように活用していくのかとか、研究公正に関する知識をどういうふうに学部生が取り入れていけるのかというような話も盛り込みつつ仕上げていくという形にしています。私にとって、蓑輪さんがおっしゃる、新しいところをアップデートしていくという意味では、図書館情報学に関しては司書課程の授業、東南アジア研究に関しては学部生向けのゼミがあります。先ほど負担のことをあげられましたが、今回は3人の先生が着任されるということなので、チームティーチングのような形で、文献や専

門を取り入れたものを通年でも半期でもやっていかれると、非常に充実した授業を提供しつつ、先生方にとってもメリットがあるのではないかなと思います。

また、授業を教えることができる立場の人は図書館には多くないので、そこをうまくつないでいくと、図書館の運営にも役立つ知識や情報が入ってくることもあるので、そこはメリットかなと思っています。

7. サブジェクト・ライブラリアンというポストは、ポスドク研究員の受け皿で終わってしまうのか

【養輪】視聴者の方から一つ、非常に手厳しいご質問をいただいております。

これは皆さんが感じていることではないかなと思いますので、議題にさせていただきますと思います。それは、サブジェクト・ライブラリアン、教員として新しいキャリアパスができたとしても、教員の就職にあぶれたポスドク研究員の受け皿で終わってしまうおそれがあるのではないかなというご意見です。これは私たちも考えたところです。結局、腰かけ制度で終わってしまうと危惧される、これについてはいかがでしょうか。

【吉村】そのような考え方、博士号、特に博士号オンリーでサブジェクト・ライブラリアンになった人へのバッシングといいますか偏見は、実は北米では随分あります。私はソーシャルメディアをやっていないのでわかりませんが、フェイスブックやツイッターなどでもひどいことを言われているそうです。でも、私も、ほかの博士号を持つライブラリアンも、決して教職に就けなかったから仕方なくライブラリアンになったわけではなく、博士課程に属している間に自分のキャリアを見つめ直したとき、ライブラリアンのほうが自分の可能性または自分の特性を発揮できるのではないかなと思ってライブラリアンになったり、一旦は教職に就いたけれども、やはりライブラリアンになりたい、と転職した者です。やはり教職がよかったと

いう人は教職を求めて離職したりしますし、受け皿的な理由でライブラリアンになった人は結局は続かないと思います。受け皿的な存在になると思われがちかもしれませんが、実際にはそんなことはありませんし、そのように捉えられることはちょっと悲しいと思います。

【福田】 私は一橋大学のサブジェクト・ライブラリアンに決まったときうれしいとも思いましたが、一方で複雑な思いもありました。私は研究者になりたいのだからライブラリアンになるのは違うのではないかと思ったんです。一橋の規定でサブジェクト・ライブラリアンは「代替不可能な補助業務」となっているため、主体的な自分の研究は業務時間にできない。研究費の支給也没有。そこがやはり、どうかなと思ったところなんです。研究も業務の一つとして認めて評価してくれるとなれば、多分安易な受け皿とは捉えられないと思います。研究と研究支援を両方とも業務にするという立場だったら十分に人は残るし、とても魅力的なポストだと思います。

教員にしても教育と研究を両方やっているわけですから、それと同じように、サブジェクト・ライブラリアンは研究支援と研究を両方やればいいと思います。しかも、それはインタラクティブな関係にあります。研究と研究支援の両輪という形にすれば、受け皿と言われるような軽い立場にはならないと思います。

【渡邊】 受け皿のように見られてしまいがちな部分は確かにあるのかなとは、ご質問を聞いて思ったのですが、研究者志向の方がサブジェクト・ライブラリアンになることもあるし、今、新採用で入ってくる図書館員はほとんどが修士を出ているような状態なので、そういう人たちがサブジェクト・ライブラリアンになるという、研究者のプールとは別に、図書館員のプールから育ててサブジェクト・ライブラリアンにするというような形もあるのかなと思いました。

【大向】 組織に所属する研究者としては、何年かたったときに東京大学でこの質問がもう1回出たら負けだと思います。そうならないために組織が

支える必要があると思うし、サブジェクト・ライブラリアンとなる方には、今、成果のあり方が多様化している中で、独自のアクションをどう取れるかということを組織と一緒に考えていけるように、私も応援したいと思います。

【三宅】我々としては、サブジェクト・ライブラリアンも含めて、図書館がどのような活動をしていかなければいけないかという将来像を考えながらこういう議論をしていただくのは非常に大切なことだと思っています。課題というものは、状況が日々変わっていて、それは図書館だけの議論ではなく、例えば執行部の問題、人事の問題、そういうものも含めて体系的に対応していくものだと思っています。我々としても様々な形で御支援を申し上げたいと思うので、ぜひ現場からも様々な形で、今後の将来像をふまえた対応を進めていただければと思っています。

8. おわりに

【小野塚】今日の皆さんの話をうかがっていろいろなことを勉強させていただきました。その一つは、サブジェクト・ライブラリアンの横のつながりということですが、今後、日本の様々な大学でサブジェクト・ライブラリアンという職ができたときに、サブジェクト・ライブラリアンの協会もしくは組合のようなものをつくる必要があると感じました。しかし、それとは別に、サブジェクト・ライブラリアンが実際にお仕事をする上で、自分の専門領域から外れたことについて研究支援を求められたときに応えられるかという、そちらの横のつながりというのも必要で、様々な専門分野の教員や、場合によってはドクターコースの院生に助言を求めるという仕組みもつくるべきだと感じました。

教育に関しては、サブジェクト・ライブラリアンは二つの専門性、つまりサブジェクト・ライブラリアンとしての専門性と、個々の研究領域の専

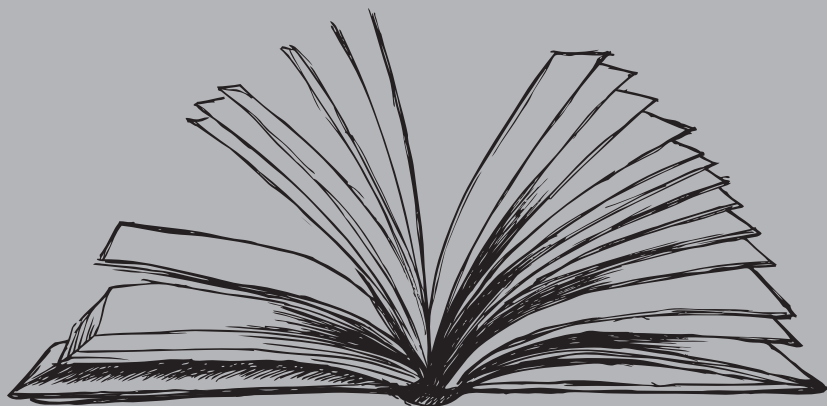
門性との両方を持つので、そのどちらかを生かした教育に携わる機会というのは、やはり妨げるべきではないと感じました。

3 番目に、最後に問題になった、腰かけになるのではないのかという事例ですが、私は、大学教員というのは研究だけしているわけではなく、学部の教員も研究所の教員も、教育もやっているし、教育でも研究でもない用務も大量にあるわけです。しばしば誤解されているのですが、教育・研究部局の教員でも教育・研究だけをしているのではなく、それ以外の用務が大半といって差し支えないと思います。したがって、それと比べた場合に、アジア研究図書館の専任教員が、教育部局や研究部局の教員と比べてすごく研究時間が足りないなどということは発生しないのではないかと考えています。ただ、キャリアパスがどこまで上がれるかという課題は残されています。教育部局、研究部局の教員定数のほうが圧倒的に多いわけだから、アジア研究図書館の教員になった方が、どこかの時点で教育部局、研究部局に移るということは当然あり得ると思いますが、私は、研究図書館でサブジェクト・ライブラリアンとして一生を終わるということが可能になる設計をやはりすべきで、これも大学教員の一つの仕事のあり方、生き方なのだということを開拓できればいいと考えています。そのためにも今後皆さんとのいろいろな協力関係を保ち、皆さまから教えていただきたいと考えています。

【養輪】 今日のこのシンポジウムにはたくさんの方に御参加いただきました。申し込みは 430 人で、実際には大体 300 人ぐらいの方々が、入れ替わりはあったようですが、出てきてくださっていました。そして、図書館や研究機関から参加された方が 80 人をちょっと超えるぐらいでした。国立、公立、私立大学を問わず大学からは 90 校近くの方がいらっしゃり、それ以外に図書館という単位で約 136 機関が出てくださっています。本当にありがとうございました。

第 3 部

U-PARL における 図書館機能開拓研究 の取り組み



1. はじめに

東京大学アジア研究図書館は、従来の大学図書館が担ってきた教育研究支援だけではなく、学内外のアジア研究組織・研究者との連携によるアジア研究や国際的な成果発信・研究交流を行うなど、図書館自体が研究機能を持つことを一つの特色としている。

その研究・連携という面に関連して、2014年に東京大学附属図書館で初めての研究部門であるアジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（通称U-PARL）が創設された。U-PARLは設立時より任務の一つとしてアジア研究図書館の構築支援を掲げており、具体的には、アジア研究図書館の開館に向けた、蔵書構築、フロアプランの検討、新たな分類法の策定など、U-PARLと学内の教員、図書館員の協働によって様々な面でこの構築支援に取り組んできた。加えて、所蔵資料のデジタル化、デジタルリソース研究にも力を入れおり、「アジア研究図書館デジタルコレクション」の構築も活動の大きな柱となっている。さらに、アジアや図書館に関するセミナー・シンポジウムの企画・開催、出版やウェブサイトを通じた社会還元も行っている。2020年10月1日には東京大学にとって10年来の念願であったアジア研究図書館が開館し、さらに2021年4月にはサブジェクト・ライブラリアン相当の教員3名（准教授1名、助教2名）が配置されるアジア研究図書館研究開発部門（Research Advancement Section for the Asian Research Library、通称RASARL）が新設されて現在に至る。こうして現在は附属図書館にU-PARLとRASARLの二つの研究部門が存在し、アジア研究ならびに図書館の構築支援を行っている。

2. U-PARL の活動内容

U-PARLは、公益財団法人上廣倫理財団の寄付により、2014年4月1日

に附属図書館に設立された研究部門である。

U-PARL の第 1 期（2014 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日）の主な目標は、アジア研究図書館の実現であった。U-PARL は「研究部門」として研究者の視点と能力を活かしながらアジア研究図書館の開設に向けた支援および研究を行ってきた。

2019 年 4 月に始まった第 2 期（2019 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日）では、【1】協働型アジア研究の拠点形成、【2】研究図書館の機能開拓研究、【3】人材育成と社会還元、【4】アジア研究図書館構築支援の四つを主要なミッションとして設定している。

こうした活動に加えて、U-PARL では第 1 期より研究図書館の機能開拓研究の一環として、日本におけるサブジェクト・ライブラリアン制度の検討も行ってきた。

3. 図書館視察とサブジェクト・ライブラリアンとの交流

U-PARL では第 1 期よりサブジェクト・ライブラリアン配置と養成のための研究の一環として、国内外の図書館との交流・連携を図り、日本の研究・教育環境に即した形でのモデルを提示すべく、同職に求められる資質、能力、業務内容を調査し、その実現可能性について検討を重ねてきた。特に 2018 年よりアジア研究の専門ライブラリアンを擁する海外の大学図書館の視察・調査を本格的に開始し、ハーヴァード大学イェンチン図書館、ハワイ大学マノア校図書館アジアコレクション部、ライデン大学アジア図書館、ベルリン自由大学、ベルリン国立図書館、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館、スタンフォード大学東アジア図書館、ロンドン大学 SOAS 図書館、オックスフォード大学ボドリアン図書館、大英図書館の訪問・視察、CEAL（東亜図書館協会）、ICoSAL（アジア専門図書館国際会議）等の図書館関係の学会・研究会への参加、シカゴ大学、イエール大学といった欧米の主要大学から来

訪したライブラリアンとの意見交換を重ね、研究図書館に必要な人的資源に関する調査・研究に取り組んできた。その成果についてはアジア研究図書館へのサブジェクト・ライブラリアンの配置と日本の大学図書館への導入と拡大に向けて、この間の調査結果をまとめた「サブジェクト・ライブラリアン（仮称・専門図書教員又は専門図書館員）提言書」として提出され、2019年11月1日にアジア研究図書館運営委員会で承認された。

国内に前例のほとんどないサブジェクト・ライブラリアンを備えた研究図書館を構築するにあたって、欧米の研究図書館やサブジェクト・ライブラリアン、そしてアジアの研究図書館スタッフとのネットワークを築き、横のつながりを通して、アジア研究図書館に必要な制度・設備、人材やスキルアップなど、実際の業務に関する生の情報を得ることは、非常に重要である。U-PARLでは、設置初年度から国内・海外の大学研究機関図書館と交流を図り、機会あるごとに交流を深め、関係の構築および部門の活動の周知に努めてきた。

【視察訪問先・来訪機関一覧】＊肩書は当時

2014年度

(a) 部門および学内等での交流

- ・ オックスフォード大学ボドリアン図書館（イギリス）
- ・ コロンビア大学東アジア図書館（アメリカ）
- ・ プリンストン大学（アメリカ）
- ・ チュラロンコン大学（タイ）

(b) 部門からの訪問・視察

- ・ 国立国会図書館関西館（京都府）
- ・ 京都大学人文科学研究所附属アジア人文情報学研究センター（京都府）
- ・ 公益財団法人東洋文庫（東京都）
- ・ 国際基督教大学図書館（東京都）

- ・ 都立中央図書館（東京都）
- ・ 京都大学東南アジア図書室（現東南アジア地域研究研究所図書室）（京都府）
- ・ 京都大学地域研究統合情報センター図書室（京都府）
- ・ 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所図書館（千葉県）

2015 年度

(a) 部門および学内等での交流

- ・ ベトナム社会科学院社会科学通信院（ベトナム）

(b) 部門からの訪問・視察

- ・ オックスフォード大学ボドリアン図書館（イギリス）
- ・ ロンドン大学 SOAS 図書館（イギリス）
- ・ 国立民族学博物館みんなく図書室（大阪府）
- ・ 第 4 回アジア専門図書館国際会議 International Conference of Asian Special Libraries (ICoASL 2015)（韓国）
- ・ 延世大学校アンダーウッド国際大学図書館（韓国）
- ・ 千葉大学アカデミック・リンク・センター（千葉県）
- ・ 京都大学東南アジア研究所図書室（現東南アジア地域研究研究所図書室）（京都府）
- ・ 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所図書館（千葉県）

2016 年度

(a) 部門および学内等での交流

- ・ ハーヴァード大学イェンチン図書館（アメリカ）
- ・ プリンストン大学図書館（アメリカ）
- ・ ニューヨーク大学図書館（アメリカ）
- ・ プリンストン大学東アジア図書館（アメリカ）
- ・ ベトナム社会科学院南部分院（ベトナム）
- ・ 新潟大学学術情報部学術情報サービス課（新潟県）

(b) 部門からの訪問・視察

- ・ イスラーム・イラン歴史専門図書館（イラン）
- ・ テヘラン大学中央図書館（イラン）
- ・ イスラーム学コンピュータ研究センター（イラン）
- ・ インディラ・ガーンディー国立学芸センター（インド）
- ・ デリー大学図書館（インド）
- ・ 浙江大学図書館（中国）
- ・ 国立中央博物館（韓国）
- ・ ハングル博物館（韓国）
- ・ 国史編纂委員会（韓国）
- ・ 国立国会図書館関西館（京都府）

2017 年度

(a) 部門および学内等での交流

- ・ 大英図書館（イギリス）
- ・ ベルリン国立図書館東アジア部（ドイツ）
- ・ ハーヴァード大学イェンチン図書館（アメリカ）
- ・ 国立台湾大学（台湾）
- ・ 国立政治大学（台湾）
- ・ 淡江大学図書館（台湾）
- ・ コンケン大学図書館（タイ）
- ・ シンガポール国立図書館（シンガポール）

(b) 部門からの訪問・視察

- ・ 東亜図書館協会（Council on East Asian Libraries）年次大会・ワシントン D.C.（アメリカ）
- ・ ハーヴァード大学イェンチン図書館（アメリカ）
- ・ インドネシア国立図書館（インドネシア）

- ・ インドネシア科学院図書館（インドネシア）
- ・ ガジャマダ大学図書館（インドネシア）
- ・ ベトナム国家第一文書館（ベトナム）
- ・ ベトナム国家図書館（ベトナム）
- ・ ベトナム社会科学図書館（ベトナム）
- ・ シンガポール国立図書館（ベトナム）
- ・ ネルー記念博物館図書館（インド）
- ・ イスラエル国立図書館（イスラエル）
- ・ ヘブライ大学人文社会系図書館（イスラエル）
- ・ ロックフェラー考古学博物館附属図書館（イスラエル）
- ・ 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所図書館（千葉県）

2018 年度

(a) 部門および学内等での交流

- ・ 筑波大学図書館情報メディア系（茨城県）
- ・ 関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（大阪府）
- ・ シカゴ大学図書館（アメリカ）
- ・ ハーヴァード大学イェンチン図書館（アメリカ）
- ・ 上海師範大学閩南佛学院（中国）
- ・ 北京龍泉寺（中国）
- ・ プリンストン大学宗教学部（アメリカ）
- ・ イェール大学図書館（アメリカ）
- ・ 京都大学本部構内（文系）共通事務部図書掛（京都府）
- ・ ハワイ大学マノア校図書館アジアコレクション部（アメリカ）
- ・ ワシントン大学東アジア図書館（アメリカ）
- ・ カリフォルニア大学バークレー校（アメリカ）
- ・ プリンストン大学東アジア図書館（アメリカ）

- ・ チューリッヒ大学アジア・オリエント研究所図書館（スイス）
- ・ 成均館大学校博物館（韓国）
- ・ ライデン大学アジア図書館（オランダ）
- ・ 国際交流基金日本語国際センター（埼玉県）
- ・ ハワイ大学マノア校図書館アジアコレクション部（アメリカ）
- ・ 国立国会図書館関西館（京都府）

(b) 部門からの訪問・視察

- ・ ハワイ大学マノア校図書館アジアコレクション部（アメリカ）
- ・ ベルリン自由大学キャンパスライブラリー、文献学図書館（ドイツ）
- ・ ベルリン国立図書館（ドイツ）
- ・ ライデン大学アジア図書館（オランダ）
- ・ 第6回アジア専門図書館国際会議 International Conference of Asian Special Libraries (ICoASL 2019)（インド）
- ・ デリー公立図書館（インド）
- ・ ネルー記念博物館図書館（インド）
- ・ 国立近代美術館図書室（インド）
- ・ カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館（アメリカ）
- ・ スタンフォード大学東アジア図書館（アメリカ）
- ・ 東亜図書館協会（Council on East Asian Libraries）年次大会・デンバー（アメリカ）
- ・ 王立プノンペン大学フン・セン図書館（カンボジア）
- ・ インドネシア国立図書館（インドネシア）
- ・ イラン国民評議会図書館（イラン）
- ・ MELCOM（Middle East Librarians Committee）インターナショナル年次大会・ブダペスト（ハンガリー）
- ・ ハンガリー国立科学アカデミー図書館（ハンガリー）
- ・ MELA（Middle East Librarians Association）年次大会・サンアントニオ（ア

メリカ)

2019 年度

(a) 部門および学内等での交流

- ・ ベルリン自由大学キャンパス図書館 (ドイツ)
- ・ 京都大学附属図書館研究開発室 (京都府)
- ・ ハワイ大学マノア校図書館アジアコレクション部 (アメリカ)
- ・ ワシントン大学東アジア図書館 (アメリカ)
- ・ 大英図書館 (イギリス)
- ・ 人文情報学研究所 (東京都)
- ・ 台湾漢学リソースセンター (TRCCS、Taiwan Resource Center for Chinese Studies) (台湾)

(b) 部門からの訪問・視察

- ・ ロンドン大学 SOAS 図書館 (イギリス)
- ・ オックスフォード大学ボドリアン図書館 (イギリス)
- ・ 大英図書館 (イギリス)
- ・ シャールジャ国際ブックフェア (UAE シャールジャ首長国)
- ・ イスタンブール国際ブックフェア (トルコ)
- ・ ベトナム国家図書館 (ベトナム)
- ・ ホーチミン市総合科学図書館 (ベトナム)
- ・ MELCOM インターナショナル年次大会・ナポリ (イタリア)

2020-2021 年度

新型コロナウイルス感染症の影響により対面での交流は行われなかったものの、2020 年 9 月 11 日には、ハワイ大学マノア校図書館アジアコレクション部日本研究ライブラリアンのバゼル山本登紀子氏をアドバイザーとしてお招きし、オンラインによるサブジェクト・ライブラリアン勉強会を行った。

小野塚知二アジア研究図書館長によるアジア研究図書館の構想の説明に続いて、中尾道子（U-PARL）が「アジア研究図書館運営の具体化に向けて」というタイトルで、これまでの海外のアジア図書館での調査結果に基づき報告を行い、アジア研究図書館に配置予定のサブジェクト・ライブラリアンの具体的な業務ならびに図書系職員、オンキャンパスジョブの大学院生との協働モデルについて提案を行った。その後、バゼル山本登紀子氏よりコメントとアドバイスを受け、アジア研究図書館運営委員、附属図書館職員、U-PARL スタッフ、その他オブザーバーを交えて、質疑応答が行われた。

2022 年度

(a) 部門および学内等での交流

- ・ ケンブリッジ大学図書館（イギリス）

(b) 部門からの訪問・視察

なし

2023 年度

(a) 部門および学内等での交流

- ・ 国立国会図書館（韓国）
- ・ 大英図書館（イギリス）
- ・ チュラロンコン大学（タイ）

(b) 部門からの訪問・視察

- ・ MELCOM インターナショナル年次大会・アンタルヤ（トルコ）

4. アジア研究図書館開館に向けた取り組み

アジア研究図書館の設立は、東京大学総合図書館の耐震・設備改修や自動書庫の新設を含む「新図書館計画」（2012 年～2020 年）の柱の一つとして構

想されたものである。従来、学内に存在する 35（当時）の部局図書館・図書室において、部局の研究活動と密接に関連して構築されてきたアジア関係資料を、一定程度総合図書館の 4 階に新設するアジア研究図書館に集約することで、総合図書館の研究・教育機能を高め、部局や専門領域の境界を越える研究拠点の創出を図ることがその主な目的である。総合図書館本館の改修工事は 2015 年に始まるため、U-PARL は設置後すぐに、アジア研究図書館計画を具現化するための様々な課題に取り組むこととなった。最終的に、本館の改修工事は 2020 年 8 月に完了し、アジア研究図書館は 2020 年 10 月 1 日に開館の日の目を見た。建物の改修工事とほぼ同時並行で行われたアジア研究図書館のソフト面の構築支援は、工事が進捗しなければ確定できない要素を多く孕んでいるがゆえに、常に想定と現実とを擦り合わせ、微修正をしながら進められていった。具体的な検討課題の主なものを以下に示す。

・フロアプラン

アジア研究図書館の蔵書配架スペースには、総合図書館 4 階の開架フロアのほか、本館の保存書庫（地上階）の一部が割り当てられ、さらに、総合図書館北側の噴水広場の地下に新設される自動書庫（約 300 万冊収容可能）にも蔵書を収容することができる。これらの中でも、アジア研究図書館の蔵書が目に見える形で配架され、アジア研究者が集う場所となる開架フロアのフロアプランは最重要課題の一つであった。

開架フロアには、どのような図書を、どの程度、どのように排列するべきか。保存書庫、自動書庫との使い分けはどのようになされるべきか。また、新しいアジア研究を推進するために必要な設備はどのようなものであるか。学生や研究者の利用に適した什器の配置はどのようなものであるか。U-PARL は、附属図書館に設置されたアジア研究図書館部会の管轄の下、建物の設計監修を担当する生産科学技術研究所の川添研究室、附属図書館の新図書館計画推進室と連絡をとりつつこれらの点を検討した。

過去に文系部局に対して行った調査などから、各部局からアジア研究図書館に提供され得るアジア関係図書の候補は数十万冊に上ることが想定された。仮にこれらがすべてアジア研究図書館に移された場合、どのような資料をどれだけ開架フロア、保存書庫、地下自動書庫に配架するのかについて、それぞれの配架スペースの特徴と、資料の性格との相性を考えながら検討しなければならない。総合図書館の蔵書とあわせて300万冊が収容可能であるとされる自動書庫はともかく、開架フロアに何冊の本を置くことができるかについては、最終的に設計図が確定し、書架の大きさと数が定まるまで判明しない（実際には、個々の図書のサイズにも左右される）。とはいえ、その時点での設計図上の書架の数から、配架可能な冊数の概算を最大約7万冊と見積もり、フロアの東側に並ぶ書架に、東アジアから西アジアに至るアジア各地域の図書が一望できるような排列を基本の配置とした。その上で、その他の空間に参考図書、大型図書用の書架、マップケースや展示ケースを配置し、また、研究図書館に必要な設備として、サブジェクト・ライブラリアンやカウンタースタッフが利用するスタッフ・ルーム、小規模の講演会等に利用できるレクチャールームを置くプランが完成した。また、図書館スタッフと相談しつつ、机・テーブルと椅子やコンセントの数などについても検討を行った。最終的には、バリアフリー対応による書架数の調整等を経て、開架フロアには約5万冊が収容可能となっている。

・請求記号の検討

開架フロアにどのように図書を並べるかという問題は、どのような請求記号を採用するかという問題に直結する。U-PARL 設置以前に行われた聴取の結果、アジア研究図書館の図書は、資料が扱う地域（資料の出版地域ではなく）ごとに並べられているのが望ましく、従って図書をまず地域によって分類する方法が考えられた。図書を主題によって分類する方法には、日本の多くの図書館が採用する日本十進分類法や、国際的に広く使われているデューイ十

進分類法、アメリカ議会図書館分類表などが存在するが、地域によって分類する方法には、共通のスタンダードと呼べるものが存在しない。既存の地域分類は、現在の国家の枠組みで分類するものが多いが、歴史研究などへの適用を考えると、必ずしも万能とは言えない。

U-PARL では、各地域を専門とする特任教員・特任研究員が議論を重ね、まず大枠の地域として東アジア、東南アジア、南アジア、中央ユーラシア、西アジア、それらを包括するアジアの六つを設定し、各地域の細分については、地域ごとの研究動向等を考慮し、東アジア、東南アジア、南アジアでは国別の細分を採用するが中央ユーラシアと西アジアでは採用しないというように、地域ごとに異なる細分方式を採用した。地域別に分類された図書は、さらに本文の言語、主題によって分類され、著者記号を付される、という方針は早い段階で固まったものの、それらの記号法の詳細については、様々なシミュレーションを行いながら検討が重ねられた。使いやすい分類を目指すのはもちろんであるが、後述する移管作業との兼ね合い上、各部局から大量に提供される図書を速やかに分類できるということも考慮しなければならない。こうした議論をふまえて 2017 年に確定したのが、アジア研究図書館分類表である。その詳細については、U-PARL 編『図書館がつなぐアジアの知：分類法から考える』（東京大学出版会、2020 年）第 3 章に述べているのでそちらを参照されたい。

・開架フロアへの図書移管

アジア研究図書館の開館時に開架フロアの書架に並んでいる（と想定された）図書は、当初の計画に筋書きされている通り、主に部局から提供されるアジア関係資料である。これに、退職教員らから寄贈された資料（後述）、U-PARL の予算で購入する資料（後述）、国際交換資料等の一部が加わる。とはいえ、各部局で資産登録された図書をそのまま総合図書館内のアジア研究図書館に移動させることは、資産管理上、好ましいとは言えない。この点

についてもアジア研究図書館部会で議論が行われ、結果としてアジア研究図書館に移される図書は、各部局で一旦除籍された上で、新たに総合図書館の資産として登録し直される、すなわち「移管」（管理換え）の形をとることになった。2018年には、アジア研究図書館部会の後身として同年4月に設置されたアジア研究図書館運営委員会から、各部局に対して本格調査を依頼し、移管候補図書を具体的にリストアップする作業が始まった。調査の結果、文学部・人文社会系研究科、東洋文化研究所を含む九つの部局から合計約47,000冊の移管候補図書のリストが寄せられた。U-PARLは、アジア研究図書館運営委員会の依頼を受ける形で、このリストから開架フロアにふさわしい図書を選別する作業を請け負った。その目的は、運営委員会で決定した開架フロア蔵書の収集方針に見合った図書であるかどうかを判断すること、加えて、総合図書館蔵書との重複や、各部局から出された図書同士の重複をできる限り避けることであった。

選別作業に際し、U-PARLがまず行ったのは、各特任教員・特任研究員の専門とする地域や言語に従ってリスト全体を選り分け、判定担当者を決める作業である。各担当者は、図書の一冊一冊を、A) 開架フロアにふさわしいもの、B) 自動書庫にふさわしいもの（今回は受け入れしない）、C) 保留（現物確認が必要）、D) 謝絶するものに分類した。部局側で除籍の作業を進めるには相当な時間が必要となると想定されることから、リスト上で開架フロアへの受け入れが決定したAの資料については早い段階で部局に通知を行って除籍作業を進めてもらい、同時にU-PARL側でCの現物確認を進める。Cのうち現物確認が済んだものを再度A、Dに振り分け、新たにAに判定されたものを改めて部局に通知するという形で、全4回に分けて開架フロアに受け入れする図書を確定させていった。この結果、約3万冊の移管図書が開架フロアに受け入れされることが決定した。

判定作業が済んだ後は、Excelリスト上で請求記号の付与を進めた。図書が部局から送られてきてから現物を見て分類していたのでは、開館に間に合

わないためである。このために、大学院生などを学術支援職員として雇用し、図書の分類を進めた。

2020 年、COVID-19 の感染拡大により一時的に業務が中断されたこともあり、移管作業が完了していない状態ではあったが、10 月 1 日にアジア研究図書館は開館した。その後もいわゆるコロナ禍が続く中、作業を続け、最終的に開架フロアの移管図書の請求記号付与は 2022 年に完了した。

・資料購入

上廣倫理財団からの寄付金を運営費の原資とする U-PARL では、上記の移管図書とは別に、設置当初から資料の購入も行ってきた。とはいえ、アジア研究図書館の移管図書の全貌やサービスの具体像が定まっていなかった中で資料収集になるため、後で重複が生じないよう、辞書・事典や参考図書のいわゆる「工具書」や汎用性の高い資料集などを中心に、購入を進めてきた。これらの図書は、手元において使うことが望ましく、部局の図書館・図書室から移管されない可能性が高いと判断されたためである。また、古書市場から散逸しやすい一点ものの貴重資料等も積極的に購入を行った。その主なものは以下の通りである。

- ・『北路紀略』、『朝鮮国王踐祚賀書附弔問・乞新印書』、『平生四柱吉凶訣』、『朝鮮半島地図等資料』、『田中武雄氏旧蔵写真等資料』（2014 年度）
- ・『古今歴代法帖』、『金麟厚狂草千字文』、『朴彭年草書千字文』、『マンマー地図』、Lelieve, A. E. and Cha.-A., Clouquer. 1914. *Pagode de Dakao.*、MAILLET, Benoit de. Isaac Beauregard, *Beschryvinge van Egipte; behelzende verscheide keurige aanmerkingen over de oude en hedendaagsche aardrykskunde van dat land; deszelfs aloude gedenktekenen, de zeden, gewoontens en godsdienst der inwoners, de regeering en koophandel, de dieren, boomen, gewassen, enz. Opgesteld volgens de aantekeningen van De*

Maillet, door Le Mascrier. Uit het Fransch vertaald. 1737.、SANDYS, (George) , Voyagien, behelsende een historie van de oorspronckelijcke ende tegenwoordige standt des Turcksen rijcks ... Als mede, van Egypten .. Neffens een beschrijvinge van het H. Landt .. Eyndelyck, Italien beschreven met hare nabuerighe eylanden; als Cyprus/ Creta/ Malta/ Sicilia/ de Aolische eylanden; van Roomen/ Venetien/ Napels/ Syracuse/ Mesena/ Etna/ Scylla/ en Charypdis/ etc. Uyt 't Engels vertaelt door J. G (lazemaker) . Baltes Boeckholt, Amsterdam, 1665.、ほか (2015 年度)

これと並行して、部局の教員からアジア研究図書館への要望を聴取し、選書の参考とするため、特に理工系の教員に対してインタビューを実施した（後述の「アジア研究多士済々」）。

また、U-PARL スタッフの専門外の地域・分野の参考図書や基本書の収集を充実させるため、学内外の院生・研究者に基本図書リストの作成を依頼し、蔵書構築の参考とした。中国研究、中国仏教、台湾研究、韓国・朝鮮語学、朝鮮文学、島嶼部東南アジア研究、カンボジア研究、マレーシア研究、ラオス社会科学ほか研究、南アジア経済学、インド哲学、インド文学、インド仏教、パリー仏教、ベンガル地域研究、チベット研究、チベット近現代史、チベット仏教、モンゴル研究、中央アジア研究、中央アジア歴史研究、コーカサス研究など、多彩なリストを作成し、幅広い選書に活用することができた。

・データベース購入

U-PARL では、設置当初から、部局では購入が難しいと思われるデータベースの購入を積極的に行ってきた。アジア研究図書館の請求記号やサービス内容が確定していない段階でも全学の利用に供することができるという点で、大きなメリットがあった。また、コロナ禍以降は、学内のどこからでも、

また自宅や学外からも利用できるこれらデータベースの利便性はますます高まっていると言える。

- ・ 中国基本古籍庫 (2014 年度)
- ・ Encyclopedia of Islam Online (2014 年度)
- ・ The Times of India (2015 年度)
- ・ 中華經典古籍庫 (第 1 ～ 4 期 2017 年度、第 5 期 2018 年度、第 6,7 期 2020 年度、第 8 期 2021 年度、第 9, 10 期 2023 年度)
- ・ 人民日報 (2017 年度)
- ・ 申報 (2017 年度)
- ・ Bibliography of Asian Studies (2017 年度)
- ・ 中華再造善本 (2019 年度)
- ・ Encyclopedia of Women and Islamic Culture Online (2020 年度)
- ・ Myanmar Book Centre Membership Programme (2021 年度)
- ・ Archives Unbound シリーズのうち、Observer: News for the American Soldier in Vietnam, 1962-1973 および European Colonialism in the Early 20th Century: French Colonialism in Africa: From Algeria to Madagascar, 1910-1930 (2023 年度)
- ・ Encyclopedia of Hinduism Online (2023 年度)
- ・ Encyclopedia of Buddhism Online (2023 年度)
- ・ Encyclopedia of Jainism Online (2023 年度)

5. アジア資料の目録作成

U-PARL では、部門の設置当初から、多様なアジア資料の目録をどのように作成するかについて検討が行われた。当初は特任研究員が自ら目録規則を学んで NACSIS-CAT (多くの大学図書館が加入する共同目録データベース) に目録

データを登録する方法も検討されたものの、スキルや効率等の問題から実現には至らず、2015年度からは目録担当の事務補佐員を雇用し、特任研究員が、あるいは特任研究員が対応できない言語については学術支援職員やアルバイトの大学院生等が書誌データを作成し、それをもとに事務補佐員が図書館システムに登録するという体制が確立した。

・アジア資料目録作成ワークショップ

多くの大学図書館・研究機関図書館に目を向けると、多言語資料を収集していても、整理作業要員を自前で行える機関は多くない。目録作成を下請け業者に発注した場合でも、図書館で短期的に作業者を雇用した場合でも、作業者の人材が流動的であるためにノウハウが蓄積されず、結果として問題のある書誌データが増えるばかりか誰もそれを修正することもできなくなり、結果としてOPACやディスカバリーサービスで検索できない資料が増えることになる。

U-PARLでは、機関の枠を超えて図書館員や目録作成者がノウハウを共有・継承するため、アジア資料目録作成ワークショップを開催してきた。専門知識を持つ研究者から図書館員へのレクチャーだけでなく、多機関の担当者が一所に集い、情報を共有する場ともなっている。これまでに以下のワークショップを開催した。

- ・2017年度「オスマントルコ語編」講師：林瞬介氏（国立国会図書館）
- ・2018年度「チベット語編」講師：浅井万友美氏（東京外国語大学オープンアカデミー）
- ・2019年度「ペルシア語とアラビア語編」講師：徳原靖浩（U-PARL）
- ・2020年度「ウルドゥー語編」講師：松井香織氏（大阪大学外国語図書館）
- ・2021年度「現代ウイグル語編」講師：河原弥生氏（アジア研究図書館研究開発部門）
- ・2023年度「サンスクリット編」講師：伊澤敦子氏（国際仏教学大学院大学）

6. アジア資料のデジタル化

U-PARL では、2014 年の部門創設以来、アジア研究関連資料のデジタル化と公開の方法について検討してきた。そして、部門の時限的な性格と東京大学全体のデジタルアーカイブ基盤構築事業の進展を考慮に入れた結果、簡易で低コストでありながらも、「見つかる（ウェブで検索される）」、「使える（データをダウンロードし使用できる）」、「持続する（独自のサーバーやシステムを持たず、上位のアーカイブ基盤が成立すればそちらと連携する）」アーカイブを構築するという方針を立てた。

2017 年 5 月、こうした方針に沿うものとして、民間クラウドサービスである flickr をプラットフォームとし、「漢籍・碑帖拓本資料」の名で、メタデータを伴う資料の JPEG 画像の公開を開始した。公開当初からすべての画像には「CC BY-NC-SA（クリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際ライセンス）」を付与し、資料に関心を持つすべての人が、ライセンス条件のもとで画像を利用できる環境を整えた。なお、ここでいう「漢籍」とは、前近代の東アジアで漢文（古典中国語文）により選述、刊行・書写された書籍を、「碑帖拓本」とは、碑・銘・墓誌などの石刻資料、および法帖原石（紙に書かれていた書跡を石材に転刻したもの）から採拓された拓本を指す。

同年 10 月には、アジアンライブラリーカフェ no.002「古典籍 on flickr！～漢籍・法帖を写真サイトでオープンしてみると～」を開催し、画像公開に至る経緯と現状、アーカイブのコンテンツ概要や将来の可能性などを報告した。その詳細は、富澤かな・木村拓・成田健太郎・永井正勝・中村覚・福島幸宏「デジタルアーカイブの「裾野のモデル」を求めて：東京大学附属図書館 U-PARL「古典籍 on flickr！～漢籍・法帖を写真サイトでオープンしてみると～」報告」『情報の科学と技術』68 巻 3 号、pp. 129-134、2018

年 (https://doi.org/10.18919/jkg.68.3_129 最終閲覧日 2023 年 10 月 30 日) で報告した。

このほか、公開した画像の研究利用に向けた要件定義や、メタデータとアノテーション（注釈）の付与に関する研究として、中村覚・成田健太郎・永井正勝・富澤かな「U-PARL における漢籍・碑帖拓本デジタルアーカイブの試作と研究利用」『人文科学とコンピューター』5 号、pp. 1-8、2018 年 (<http://id.nii.ac.jp/1001/00185462/> 最終閲覧日 2023 年 10 月 30 日) を発表した。さらに、デジタル化を進めている『水滸伝』諸版本を対象とした分析の成果として、上原究一・永井正勝・中村覚・中尾道子・近藤隼人・荒木達雄・蓑輪顕量「図書館における木版本のデジタル化と利活用の可能性：IIIF と TEI を用いた『水滸伝』諸版本のデジタル化を通じて」『じんもんこん 2018 論文集』、pp. 381-388、2018 年 (<http://id.nii.ac.jp/1001/00192402/> 最終閲覧日 2023 年 10 月 30 日) を発表し、デジタル化の先に広がる資料の活用の可能性についても提言を行っている。

その後、2018 年より東京大学内で学術資産アーカイブ化推進室が本格的に稼働し、デジタル公開事業の基盤が整ったのを受け、U-PARL によるデジタル資料を学内サーバーへ移動させ、名称を「U-PARL 漢籍・碑帖拓本資料」と改めた。この際、公開画像の形式には、IIIF (International Image Interoperability Framework) を採用した。IIIF とは、2015 年に欧州の学術機関を中心にはじまった画像共有のための国際規格であり、日本では 2016 年に東京大学が加わって以降、採用する学術機関が年々増加している。この規格を採用することで、一つのブラウザー上で、複数の異なる学術機関が公開する画像資料を同一条件で閲覧できるようになる。従来の方式よりも公開まで時間がかかるという難点はあるものの、資料対照研究などに資することが多いと考え、転換に踏み切った。IIIF 画像の公開にあたっては、総合図書館が新規に策定した画像データ等の利用条件に従い、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスの「CC BY (クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス)」

相当の条件を適用した。

2020 年 1 月には、アジア研究図書館を全学のアジア研究の結節点とするという理念に基づきサイトのリニューアルを行った。この際、コンテンツを従来の漢籍・碑帖拓本以外にも広げ、アジア全域を対象とすることを明確に示すべく、名称も「アジア研究図書館デジタルコレクション」と改めた。このコレクションには利用の便のため複数の下位コレクションを設けた。従来の漢籍・碑帖拓本資料のうち碑帖拓本を独立せしめて「碑帖拓本コレクション」とし、漢籍は新規公開資料とあわせて「U-PARL セレクション」に収めた。このほかさらに、「水滸伝コレクション」、「Digital Resources for Egyptian Studies (エジプト学研究のためのデジタル資料)」を開設し、新規資料を収録、公開した。また同年には、「漢籍デジタル化公開と中国古典小説研究の展開」、および「IIIF に準拠した画像公開の方法と TEI との連携」と題する、資料のデジタル公開に関するシンポジウムやセミナーも開催した。

公開当初約 2000 点であった資料の画像は、2023 年 3 月現在、約 12,000 点に達している。

7. 各種セミナー・イベントの実施

・シンポジウム「むすび、ひらくアジア」

U-PARL 創設一周年記念シンポジウム（第 1 回）以降、計 5 回開催した。

(i) むすび、ひらくアジア「アジア研究図書館の構築に向けて」（2015 年 1 月 31 日、於「福武ラーニングシアター」）

アジア研究図書館構築に向けての当部門の活動の一端を紹介し、今後の末長い協力と支援を呼びかけられるとともに、アジア研究の第一線で活躍する本学教員 5 名により、それぞれの視点からの新しい図書館への期待と提言が語られた。具体的には、富澤かな（U-PARL）（肩書きは当時、以下この項同じ）

が「＜アジア＞を考えるインドの事例に見るその意味と困難」、下田正弘氏（大学院人文社会系研究科）が「仏教学知識基盤から照らすデジタル・ヒューマニティーズの現在と図書館の未来」、齋藤希史氏（大学院総合文化研究科）が「漢籍の境界」、羽田正氏（東洋文化研究所）が、「アジア研究図書館の意味と使い方」、附属図書館長の古田元夫氏（大学院総合文化研究科）が「東京大学図書館の未来とアジア研究図書館東南アジア研究者の視点から」と題する報告をそれぞれ行った。また会場ロビーには、アジア研究図書館に導入するデータベースやコレクションの現物を展示した。

(ii) むすび、ひらくアジア2「アジアの〈共有〉・知の〈共有〉」（2017年1月29日、於「法文2号館文学部1番大教室」）

U-PARL主催、東京大学附属図書館新図書館計画推進室共催で実施した。アジア研究図書館における〈共有〉はいかなるものであるべきかを考えるため、アジアにおける共有の形についての講演と、アジアに関する研究の知識の共有についての講演を組み合わせ、欧米のコモンズとは異なるアジアの〈共有〉のあり方を探った。

増田知之氏（安田女子大学文学部）が「近世中国における「法帖」の刊行・流通と書文化の変容について」、三浦徹氏（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）が「イスラーム地域における知の獲得と利用——ウラマーとマドラサと図書館」、原正一郎氏（京都大学東南アジア地域研究研究所）が「日本における「知」の蓄積と共有——日本史史料の所蔵のあり方から考える」、附属図書館長の久留島典子氏（史料編纂所）が「地域研究情報基盤における「地域の知」の蓄積・共有・利用の事例について」と題する報告をそれぞれ行った。

(iii) むすび、ひらくアジア3「図書館をめぐる知の変革」（2019年1月26日、於「福武ラーニングシアター」）

2020年度に予定されていたアジア研究図書館の開館に向け、図書館が扱

うべき知のあり方を具体的に模索することを目的とした。国立情報学研究所オープンサイエンス基盤研究センターの尾城孝一氏が「オープンサイエンス時代の新たな図書館員像～データライブラリアンに求められるスキル標準とその育成～」、ライデン大学アジア図書館のナディア・クレフト氏が「橋を築け、橋になれ～ライデン大学のアジア図書館と橋渡しとしてのサブジェクト・ライブラリアン～」、筑波大学図書館情報メディア系の宇陀則彦氏が「図書館に溶け込む世界の知識～資料と空間と人の新たな関係～」、アジア研究図書館長の小野塚知二（大学院経済学研究科）が「アジア研究図書館の可能性と方向性」と題する講演をそれぞれ行った。

(iv) むすび、ひらくアジア4 アジア研究図書館開館記念シンポジウム「サブジェクト・ライブラリアンの将来像—日本の大学図書館への導入拡大に向けて—」（2021年3月15日、オンライン開催）

U-PARL・東京大学アジア研究図書館共催、東京大学ヒューマニティーズセンター（HMC）・東京大学東アジア藝文書院（EAA）協力で実施した。

はじめに「アジア研究図書館の紹介」がアジア研究図書館館長の小野塚知二（大学院経済学研究科）からなされ、その後シカゴ大学図書館日本研究ライブラリアンの吉村亜弥子氏が「米国サブジェクト・ライブラリアンの現状：『博士号オンリー』日本研究専門ライブラリアンによる現場報告」、続いて福田名津子氏（松山大学人文学部）が「通訳としてのサブジェクト・ライブラリアン：図書館の言語、研究の言語」、渡邊由紀子氏（九州大学附属図書館）が「九州大学大学院ライブラリーサイエンス専攻による大学図書館員の人材育成」と題する報告を行った。また来賓特別報告として文部科学省研究振興局参事官（情報担当）付学術基盤整備室長の三宅隆悟氏に登壇いただいた。

(v) むすび、ひらくアジア5「むすび、ひらくアジア5：人文学における研究データの共有・公開に向けて」（2023年11月26日）

総合図書館、及びオンライン（ライブ配信）で実施した。

三つの分野からデジタル化と公開の事例を紹介するとともに、公開システムの構築や継続に関する課題についても情報共有を図る第一部と分野横断的な研究データの共有・公開に向けた基盤整備について、現在進められている取り組みを紹介した。

第一部では徳原靖浩（U-PARL）が「図書資料のデジタル化：アジア研究図書館デジタルコレクション」、柳澤雅之氏（京都大学東南アジア地域研究研究所）が「フィールドノートのデジタル化と多目的・長期的利用」、渡邊英徳氏（大学院情報学環・学際情報学府）が「戦災・災害のデジタルアーカイブ」と題する報告を行った。第二部では文教大学文学部の池内有為氏（文部科学省科学技術・学術政策研究所客員研究官）が「分野や国境を超えた人文学データの共有」、国立情報学研究所オープンサイエンス基盤研究センターの南山泰之氏が「NII RDCにおけるデータキュレーション機能の開発」、大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センターの大向一輝氏が「研究データエコシステムとデジタルアーカイブ」と題する報告を行った。

・文献探索セミナー

2016年度よりアジア研究に使用する研究文献の探し方を学ぶセミナーを連続開催した。講師は各地域担当の U-PARL 特任教員・特任研究員が務めたほか、国立国会図書館関西館アジア情報課、学習院大学東洋文化研究所、関西大学 KU-ORCAS 等から講師を招聘した。主として、これから研究をはじめめる学部生・大学院生などへの情報提供を目的に企画されたセミナーであり、データベースへのアクセス権の問題から、対象は東京大学所属者限定の回と学外者も対象にしている回の2種ある。

(i) 2016年度第1回 中国語文献編（2016年5月31日）

成田健太郎（U-PARL）が講師を担当した。中国の膨大な論文を横断検索で

きる CNKI の効率的な利用方法を学習するとともに、台湾国家図書館との協定により 2015 年度から利用可能となった台湾の学位論文・雑誌論文検索システムについても実践的課題を通して体験し、利用を促進することができた。

(ii) 2016 年度第 2 回 中東・イスラーム研究文献編 (2016 年 6 月 30 日)

徳原靖浩 (U-PARL) が担当した。インターネット検索とは異なる研究ガイドブック類の利点、アラビア文字で資料検索を行う上で知っておくべき、コンピューター上でアラビア文字を扱う上での注意点や、文献による翻字方式の違い、NACSIS-CAT におけるアラビア文字等の正規化の仕組み、東洋文庫や国会図書館の検索システムの特徴などをレクチャーした。

(iii) 2016 年度第 3 回 韓国朝鮮語文献編 (2016 年 7 月 7 日)

辻大和氏 (学習院大学東洋文化研究所) を講師として招き、「文献探索セミナー 韓国朝鮮語文献編」を開催した。内容としては、日本・韓国における韓国朝鮮語文献の探索方法の説明、および韓国の歴史学関係サイトの紹介が行われた。

(iv) 2016 年度第 4 回 日本語と英語で収集する全アジア編 (2016 年 12 月 22 日)

国立国会図書館関西館アジア情報課で AsiaLinks の運営に携わる田中福太郎氏を講師として招へいした。日本語・英語で得られるアジア情報の種類や情報源の特徴、アジア言語で得られる情報の種類や特徴についてレクチャーが行われた。

(v) 2017 年度第 1 回 漢籍編 (2017 年 5 月 15 日)

成田健太郎 (U-PARL) が講師を担当し、無料でアクセス可能な漢籍テキストデータベースの紹介や、2014 年度に購入したデータベース「中国基本古

籍庫」を使用する講習を行った。

(vi) 2017 年度第 2 回 中東・イスラーム研究文献編 (2017 年 6 月 28 日)

徳原靖浩 (U-PARL) が講師を務めた。インターネット検索とは異なる研究ガイドブック類の利点、アラビア文字で資料検索を行う上で知っておくべき、コンピューター上でアラビア文字を扱う上での注意点や、文献による翻字方式の違い、NACSIS-CAT におけるアラビア文字等の正規化の仕組み、東洋文庫や国会図書館の検索システムの特徴などをレクチャーした。

(vii) 2017 年度第 3 回 韓国朝鮮語文献編 (2017 年 9 月 20 日)

講師は辻大和 (U-PARL) であった。CiNii を使った韓国朝鮮語文献の探索方法の説明、および韓国の歴史学関係のデータベースの紹介が行われた。学内者のほか一般参加者を受け入れた。

(viii) 2017 年度第 4 回 南アジア地域研究 (近現代) 編 (2017 年 11 月 22 日)

足立享祐 (U-PARL) が講師を担当した。各参加者の関心にあわせ、レファレンス・サービスを兼ねた講演を行うと同時に、南アジア地域研究資料の日本・欧米・南アジアそれぞれにおける所在と調査の方法について紹介した。事前アンケートをふまえ、特に英語資料の文献探索に重点を置いて実施した。学内者のほか一般参加者を受け入れた。

(ix) 2017 年度第 5 回 日本語と英語で収集する全アジア編 (2018 年 1 月 18 日)

国立国会図書館関西館アジア情報課から齊藤まや氏を講師として招へいた。セミナーの前半では日本語・英語で得られるアジア情報の種類や情報源の特徴、アジア言語で得られる情報の種類や特徴についてレクチャーが行われた。学内者のほか一般参加者を受け入れた。

(x) 2018 年度第 1 回 研究資料整理術編 (2018 年 7 月 5 日)

一次資料（原資料）の整理として画像管理ソフト Tropy の使い方に関する講習を菊池信彦氏（関西大学 KU-ORCAS）が、二次資料の整理として文献管理ソフト Zotero の使い方に関する講習を山王綾乃氏（お茶の水女子大学大学院博士課程、Tokyo Digital History メンバー）が、コンピューターを使用して WEB 情報と効率的に抽出する技術（ウェブスクレイピング）について小風尚樹氏（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程、Tokyo Digital History メンバー）が講演を行った。

(xi) 2018 年度第 2 回 日本語と英語で収集する全アジア編 (2018 年 7 月 6 日)

駒場図書館にて、国立国会図書館関西館アジア情報課から山本彩佳氏を招へいし実施した。紙媒体の資料では追いつかない最新のアジア情報を入手する手助けをするツールとして、「AsiaLinks- アジア関係リンク集-」「アジア情報の調べ方案内」「アジア情報関係機関ダイレクトリー」の三つの情報源の利用実習を行った。主として教養学部前期課程学生を対象にしたセミナーであったため、広報に際しては、教養学部前期課程でアジア関係の講義を担当する教員に広報依頼を行い、多くの教員から協力を得た。教員と図書系職員、U-PARL の協働による学生支援の先駆的な試みとなった。

(xii) 2018 年度第 3 回 研究ツール編「地域研究のフィールド調査と GIS・地図の利用」(2018 年 10 月 23 日)

上智大学アジア文化研究所より人文地理学を専門とする小泉佑介氏を招へいし、駒場図書館にて開催した。地域研究における GIS の利用可能性と、講師自身の「マルチスケール」な研究アプローチが説明され、「QGIS」「Inkscape」といった最新のツールが紹介された。

・アジアンライブラリーカフェ

U-PARLの研究活動を社会に広く還元するとともに、U-PARLの活動を浸透させるために、2017年度より図書とアジアに関するトーク・イベントとしてアジアンライブラリーカフェを行っている。研究者や大学関係者のみならず一般の人々に広く門戸を開いてきた。

(i) no.001 古代エジプトの書記は聖刻文字を書いていなかった～書記の書いた神官文字を体験する～ (2017年7月22日)

古代エジプトの文字資料に関する内容で、U-PARLが購入した古代エジプト関連の図書の展示を兼ねた。

(ii) no.002 古典籍 on flickr! ～漢籍・法帖を写真サイトでオープンしてみると～ (2017年10月20日)

U-PARLが画像公開の手段としてFlickrを選択した背景、資料の概略、公開におけるライセンス表示、資料の統合メタデータ、flickrと図書資料の構造、flickrから外部データベースへの連携について報告した。報告内容は富澤かな・木村拓・成田健太郎・永井正勝・中村覚・福島幸宏.2018.「デジタルアーカイブの『裾野のモデル』を求めてー東京大学附属図書館U-PARL『古典籍 on flickr! ～漢籍・法帖を写真サイトでオープンしてみると～』報告」『情報の科学と技術』68(3):129-134.として公開した。

(iii) no.003 アジアの言語を語ろう (2018年3月24日)

アジアの言語に長く触れてきた学内外の研究者6名が登壇し、アジア地域の歴史・社会・文化において言語が果たしてきた役割、アジアの言語を学ぶ意義や醍醐味について語り合った。

(iv) no.004 文字を支える書字材料—パピルス・羊皮紙・紙・活版印刷 (2018年7月14日)

パピルスと羊皮紙の専門家である羊皮紙工房の八木健治代表、和紙の専門家である小島浩之氏 (大学院経済学研究科)、活版印刷の専門家である安形麻理氏 (慶應義塾大学文学部) による講演を行った。

(v) no.005 北米の大学図書館とサブジェクト・ライブラリアンのお仕事 (2018年11月19日)

『サブジェクト・ライブラリアン—海の向こうアメリカの学術図書館の仕事—』の著者であり、アメリカのワシントン大学東アジア図書館で日本研究のサブジェクト・ライブラリアンとして活躍する田中あずさ氏を迎えて、日本では馴染みの薄いサブジェクト・ライブラリアンの業務について話をうかがった。

(vi) no.006 インドと私と『百年泥』 (2020年1月28日)

ゲストに大学院人文社会系研究科出身にして『百年泥』(新潮社刊)で第158回芥川賞を受賞した石井遊佳氏を招へいた。

(vii) no.007 「パンダはかわいい！」は常に真実なのか?～文献で見る「パンダ観」の歴史 (2023年10月24日)

ハイブリッド開催 (アーカイブ配信あり)。

中国の政治外交史におけるパンダの位置づけを研究する家永真幸氏 (東京女子大学)、中国の古文献にパンダが記載されているかを探る荒木達雄 (U-PARL) がそれぞれ文献記述から読み解く時代ごとの「パンダ観」について発表を行い、さらにエッセイストの藤岡みなみ氏を交えて、「ヒトはなぜ、いつからパンダをかわいいと思うようになったのか」をめぐって討論を行った。

・研究集会、合宿、講演会等

U-PARL 主催のワークショップを下記の通り開催し、多くの学内の研究者や国内外の研究者・大学院生が参加した。

(i) 公開ワークショップ「Archiving of Asia in Asia - Collection, Preservation and Digitization of Rare Documents from the Colonial Period in Kolkata (コルカタにおける植民地期貴重資料アーカイビングプロジェクト)」(2015 年 12 月 18 日)

U-PARL 主催、科学研究費基盤研究 (C)「インドにおける近代的宗教表現の展開とその影響」共催で東京大学附属図書館共同利用棟会議室 1 にて実施された。ストックホルム大学のフェルディナンド・サルデラ氏を招き、氏がコルカタの図書館と共同して進めている、宗教とインド学に関わる植民地貴重資料のデジタル化とオープンアクセス化のプロジェクトについてうかがった。

(ii) 東洋学・中国学若手研究者のための合宿ワークショップ「つながる・史料と研究」(2016 年 3 月 19～21 日)

U-PARL 主催、東洋文化研究所、同附属東洋学研究情報センター、京都大学人文科学研究所、同附属東アジア人文情報学研究センターの共催により、東洋学・中国学若手研究者を対象とした合宿ワークショップを山中寮内藤セミナーハウスにて開催した。土口史記氏（京都大学人文科学研究所）、永田知之氏（京都大学人文科学研究所）、吉澤誠一郎氏（人文社会系研究科）成田健太郎（U-PARL）がセミナーの講師を務めた。

(iii) ミニシンポジウム「東アジア漢籍世界の沃野―その多様性を考える―」(2016 年 5 月 28 日)

U-PARL 主催、東洋文化研究所東洋学研究情報センター共催で山上会館地下会議室 001 にて実施された。

中国・日本・韓国・ベトナムにおける漢籍の捉え方の相違点を確認し、現在の東アジアにおける漢籍を用いた研究の多様性を確認するミニシンポジウムで、南京大学文學院の童嶺副氏（京都大学人文科学研究所招へい研究員（客員准教授））、六反田豊氏（大学院人文社会系研究科）、平塚順良氏（大阪大谷大学）、大木康氏（東洋文化研究所）の報告があった。

・協働型アジア研究オンラインセミナー等

協働型アジア研究の成果として下記のイベントを実施した。

(i) 協働型アジア研究オンラインセミナー「IIIF に準拠した画像公開の方法と TEI との連携」（2020 年 12 月 1 日）

(ii) 協働型アジア研究オンラインセミナー「3 次元データでひらく“人文学”の世界」（2021 年 3 月 13 日）

(iii) 協働型アジア研究オンラインセミナー「古代エジプト資料の記録、分析、利活用を考える」（2021 年 9 月 3 日）

(iv) U-PARL エジプト学若手研究者養成セミナー（2022 年度夏期）（2022 年 9 月 1 ～ 4 日）

・図書館総合展

図書館界最大のコンベンションである図書館総合展に 2018 年より出展し、図書館界への発信を行ってきた。

(i) 第 20 回図書館総合展（2018 年 10 月 30 日～11 月 1 日、於パシフィコ横浜）

11 月 1 日に行われた関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-

ORCAS) 主催、U-PARL 共催のフォーラム「東アジア図書館とデジタルアーカイブ」に参加した。また U-PARL 独自でポスターセッションに参加し、ポスター報告「アジア研究図書館構築に向けた取り組み～東京大学附属図書館 U-PARL の活動紹介～」を行った(10月30日～11月1日)。

(ii) 第21回図書館総合展(2019年11月12～14日、於パシフィコ横浜)

ポスターセッションに参加し「アジアの知と図書館の知のリエゾンへ～東京大学附属図書館 U-PARL の活動紹介～」と題する報告を行った。

(iii) 第22回図書館総合展2020_ONLINE(2020年11月1～30日、オンライン開催)

ポスターセッションにて「アジアの知と図書館の知のリエゾンへ～U-PARL の調査研究～」と題する報告を行うとともに、同セッションにて、2020～2021年度 U-PARL 協働型アジア研究プロジェクト6の成果報告として「フィールドワーク資料と大学図書館」と題する報告を行った。

(iv) 第23回図書館総合展2021_ONLINE_Plus(2021年11月1～30日、オンライン開催)

RASARL と U-PARL が共同でポスターセッションにて、「東京大学アジア研究図書館」と題する報告を行った。また同セッションで報告「東京大学アジア研究図書館の東南アジア関係コレクション—寄贈資料とその受入過程を中心に—」に『ライブラリアンのためのベトナム語・タイ語用語集』を添付し、インターネット上で配布した。

(v) 第24回図書館総合展2022_ONLINE_Plus(2022年11月1～30日、オンライン開催)

ポスターセッションに参加した。

(vi) 第 25 回図書館総合展 2023(2023 年 10 月 26 日～11 月 15 日、オンライン開催)

オンライン開催のポスターセッションに参加した。また会場開催の同セッション(10 月 24～25 日、於パシフィコ横浜)で、2022～2023 年度 U-PARL 協働型アジア研究プロジェクト 4 の成果報告として「現代東南アジアにおける出版に関する諸問題—ベトナムとタイを中心に—」と題する報告を行った。

・その他主催イベント

公開討論会、別館ライブラリープラザ・トークセッション、シンポジウム、資料展など多彩なイベントを主催してきた。

(i) 公開討論会「朝鮮時代公文書における草書—東アジア書字文化比較研究の試み」(2015 年 9 月 21 日)

朝鮮古文書の専門家である沈永煥氏(韓国学中央研究院)に発表を、中国書道史の専門家である増田知之氏(安田女子大学)にコメントをいただいた。山上会館 2 階大会議室にて実施された。

(ii) 東京大学総合図書館 別館ライブラリープラザ・トークセッション 3「アジア研究図書館はどんな場所？」(2018 年 10 月 18 日)

総合図書館別館ライブラリープラザにて U-PARL スタッフが報告を行った。

(iii) シンポジウム「漢籍デジタル化公開と中国古典小説研究の展開」(2020 年 8 月 8 日)

東京大学アジア研究図書館・東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門(U-PARL)主催、東京大学ヒューマニティーズセンター(HMC)・東京大学東アジア藝文書院(EAA)協力のシンポジウムで、オンラ

イン形式で実施された。

講演者は小松謙氏(京都府立大学)、中川諭氏(立正大学)、中原理恵氏(京都大学)、報告者は荒木達雄(U-PARL)、コメンテーターは中島隆博氏(東洋文化研究所)と一色大悟氏(人文社会系研究科)であった。

(iv) アジアの資料をむすび、ひらくーデジタルコレクションの可能性ー(東京大学アジア研究図書館デジタルコレクション「原資料展」)(2023年3月6日～4月21日)

総合図書館1階の展示スペースにおいてU-PARLが作成・提供する「アジア研究図書館デジタルコレクション」に関する資料展を実施した。また記念セミナー(3月6日)「東京大学所蔵『水滸伝』諸版本について」を荒木達雄(U-PARL)が行った。

・他機関との共催・協カイベント等

下記の通り国内外の多様な機関と共催・協カイベントを実施してきた。

(i) 集中セミナー「マクリーズィーの作業を肩越しに覗く～中世エジプトの歴史家はどう仕事をしていたのか～」(2015年5月4～6日)

山中寮内藤セミナーハウスにてU-PARL・東洋文化研究所・東洋学研究情報センター共催で開催された。

(ii) 東文研セミナー(U-PARL共催)「Towards an Archaeology of Scholarship in Premodern Islam: Investigating the Working Method of Scholars」(2015年5月11日)

東洋文化研究所3階第一会議室にて、U-PARL・東洋文化研究所共催で実施された。

(iii) 「Nile Floods and Irrigation System Decay in Late Mamluk Egypt」

(2015 年 7 月 29 日)

早稲田大学戸山キャンパス 33 号館 6 階第 11 会議室にて、U-PARL・早稲田大学中東イスラーム・セミナー共催、科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「環境・農業生産・記録管理—文書史料に基づくエジプト環境史の構築—」（研究課題番号 15K12930）の協賛で実施された。

(iv) 「体育会系イスラーム史家養成講座（中世後期編）」（2017 年 5 月 3～7 日）

早稲田大学 33 号館第 10 会議室、東京大学東洋文化研究所 302 会議室にて、東洋文化研究所・早稲田大学イスラーム地域研究機構・早稲田大学文学部文学研究科中東・イスラーム研究コース共催で実施された。

(v) ジョン・ウッズ教授（シカゴ大学歴史学部・近東言語文明学部）講演会「アジア研究再考」／Rethinking Asian Studies (Lecture by Prof. John E. Woods) (2017 年 5 月 9 日)

東洋文化研究所 303 会議室にて、東洋文化研究所・U-PARL・東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET）・Association for the Study of Persianate Societies Japan Office 共催で実施された。

(vi) 国際シンポジウム「Secular Religiosity and Religious Secularity: Rethinking the Asian Agency in the Shaping of Modernity」(2018 年 3 月 9 日)

伊藤国際学術研究センター 3 階中教室にて、科学研究費「インドにおける近代的宗教表現の展開とその影響」（代表・富澤かな、研究課題番号 15K02055）と科学研究費「ポスト・セキュラー状況における宗教研究」（代表・鶴岡賀雄、研究課題番号 26284011）の共催、U-PARL 後援にて実施された。

(vii) 総合図書館別館ライブラリープラザ「ブックトーク・著者が語る『リ

サイクルと世界経済』(2018年11月9日)

総合図書館別館ライブラリープラザにて、日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館、東京大学経済学図書館、東京大学総合図書館、東アジア・アセアン経済研究センター共催で行われた。

(viii) シンポジウム「アジアにおける西洋社会思想の受容と変容」(2020年8月1日)

東京大学アジア研究図書館・東京大学ヒューマニティーズセンター・東京大学東アジア藝文書院主催、U-PARL 協力で実施された(オンライン開催)。

(ix) 第21届中国古典小説戏曲文献暨数字化国際研討会(第21回中国古典小説・戏曲文献及びそのデジタル化国際学会)(2022年8月29日)

U-PARL・首都師範大学中国伝統文化数字化研究中心(中国・北京)共同主催で行われた(オンライン開催)。

(x) 講演会「TEI(Text Encoding Initiative) × Library が拓くデジタル人文学と図書館の未来」開催(2023年2月18日)

Cambridge Digital Library・AA 研基幹研究「記憶のフィールド・アーカイビング:イスラームがつなぐ共生社会の動態の解明」・国文学研究資料館・人文情報学研究所・U-PARL・科研費学術変革領域研究(A)「イスラーム信頼学」(研究代表者:黒木英充(ILCAA) 課題番号:20H05823)・TUFUS フィールドサイエンスcommons共催。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所大会議室およびオンラインによるハイブリッド方式で実施された。

(xi) 東京大学人文社会科学系組織連絡会議共催イベント「人文社会ウィーク2023」(2023年3月6～12日)

総合図書館等にて実施された本イベントの一環として、前掲の「アジアの

資料をむすび、ひらくーデジタルコレクションの可能性ー（「東京大学アジア研究図書館デジタルコレクション」原資料展）」および記念セミナーを実施した。

(xii) 東京大学 TRCCS（台湾漢学リソースセンター）台湾漢学講座

東京大学附属図書館と台湾国家図書館の協定によって設置された TRCCS（台湾漢学リソースセンター）は、国家図書館からの寄贈図書受け入れ、データベース提供のほかに、「台湾漢学講座」の定期開催を主要な事業としている。U-PARL では、兼務教員および特任研究員が選書委員会の委員を務めるほか、下記のイベントに協力してきた。

a.TRCCS 第 1 回台湾漢学講座「GIS を用いた中国研究」（2015 年 11 月 27 日）：駒場キャンパス・18 号館 1 階メディアラボ 2 にて開催された。

b.TRCCS 第 2 回台湾漢学講座「台湾歴史研究と公文書」（2017 年 10 月 13 日）：国家図書館漢学研究中心（台湾）・東京大学 TRCCS・東洋文化研究所・U-PARL の共催により、東洋文化研究所にて開催された。

c.TRCCS 第 3 回台湾漢学講座「台湾の移行期正義と人権の実現」（2019 年 7 月 1 日）：21 Komcee West レクチャーホールにて、東京大学 TRCCS 主催、国家図書館漢学研究中心（台湾）・附属図書館 U-PARL 共催で実施された。

d.TRCCS 第 4 回台湾漢学講座「《金雲翹傳》對世界的影響（『金雲翹伝』の世界への影響）」（2022 年 12 月 22 日）：国家図書館漢学研究中心（台湾）、東京大学 TRCCS 共催イベントで、総合図書館大会議室およびオンラインのハイブリッドで開催された。

8. ウェブサイトを通じた発信

・インタビュー「アジア研究多士済々」

サブジェクト・ライブラリアンの役割の一つとして、学内研究者の資料ニーズを聞き取り、収書や蔵書構築に反映させることが挙げられる。その下準備

となる人的ネットワーク作り、またアジア研究図書館への認知を高めるとともに、アジア研究図書館へのニーズを探るため、主として東京大学の理工系の教員・研究者8人へのインタビューを行い、その内容を「アジア研究多士済々」と題したシリーズ記事として公開した。また、これらを基に、必須の基本参考図書類の購入を進めた。

- ・ 第1回 小松崎俊作氏（大学院工学系研究科）「シビルエンジニアリングから見るアジアの固有性と普遍性」2017年7月10日掲載
- ・ 第2回 荒木徹也氏（大学院農学生命科学研究科）「農学が拓くアジアの国際協力」2017年7月18日掲載
- ・ 第3回 森川想氏（工学系研究科）「土木と取用から、政府市民間の問題へ」2017年8月7日掲載
- ・ 第4回 矢後勝也氏（総合研究博物館）「チョウを求めてアジアの多様なフィールドへ」2017年8月21日掲載
- ・ 第5回 梅崎昌裕氏（大学院医学系研究科）「教科書に載っていない固有の適応メカニズムの探求」2017年9月15日掲載
- ・ 第6回 鴨下顕彦氏（アジア生物資源環境研究センター）「アジアの人々とむすぶイネ研究」2017年12月7日掲載
- ・ 第7回 村松伸氏（生産技術研究所）「建築・都市をローカルな生態系として捉えるグローバルな建築史学」2018年1月24日掲載
- ・ 第8回 永田淳嗣氏（大学院総合文化研究科）「活気あふれるアジアのフロンティア地域の農村社会」2018年3月7日掲載

・「世界の図書館から」（ウェブサイトおよび図書）

U-PARLは2014年からウェブサイト(<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/>)上に「世界の図書館から」と題する世界各地の図書館を紹介するコラム記事を公開し、アジア研究に役立つ情報を発信してきた。

また、2019年4月には、ウェブサイトのコラム記事に加筆修正し、書き下ろしの記事4本を加えて『世界の図書館から：アジア研究のための図書館・公文書館ガイド』（勉誠出版）として出版した。書籍では、東アジア13館、東南アジア15館、南アジア4館、西アジア8館、欧米諸国6館を取り上げた。書籍出版以降もウェブ上ではコラム記事の掲載を継続している。現在までに掲載されたコラムは下記の通りである。

- ・ 第45回 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所図書館（日本）
2019年4月19日掲載
- ・ 第46回 スレイマニエ図書館（トルコ）2019年7月8日掲載
- ・ 第47回 クメール研究センター附属研究図書館（カンボジア）2019年10月4日掲載
- ・ 第48回 ドミニコ修道会オリエント研究所図書館（エジプト）2019年10月16日掲載
- ・ 第49回 トルコ大国民議会図書館（トルコ）2019年11月28日掲載
- ・ 第50回 アラブ連盟図書室 2020年6月23日掲載
- ・ 第51回 東南アジア研究所図書館（シンガポール）2020年6月29日掲載
- ・ 第52回 ホーチミン市総合科学図書館（ベトナム）2020年7月13日掲載
- ・ 第53回 デジタル化された古地図の共有のためのポータルサイト
“OldMapsOnline” 2022年1月25日掲載

・コレクション紹介

U-PARLが受け入れを行い、整理・公開を行ったデータベースやコレクションを紹介する。

【公開データベース】

- ・ 東京大学アジア研究図書館デジタルコレクション（碑帖拓本コレクション、水

許伝コレクション、U-PARL セレクション、エジプト学研究のためのデジタル資源)

アジア研究図書館および総合図書館が所蔵する貴重資料を中心とした画像のデジタル化とその研究を第1期に引き続き実施するとともに、アジア研究図書館の分館・分室となる予定の東洋文化研究所および文学部漢籍コーナーの蔵書を加えた「アジア研究デジタル図書館」構想を推進させる。本構想は、将来的には関連部局の所蔵する資料を包含するものに発展させていく予定である。部局を超えたデジタル化作業は個々の部局任せでは実現が難しいものであるゆえ、アジア研究図書館を拠点とすればこそ、可能となるプロジェクトだと言える。部門では、アジア研究図書館および総合図書館の所蔵する貴重資料を中心とした画像のデジタル化とその研究を第1期より行っている。また U-PARL では、世界の図書館や博物館で導入されている IIIF (International Image Interoperability Framework の略称) と呼ばれる新しい画像規格を用いた画像公開を行っているが、IIIF 形式の利用は我が国では比較的に新しいものであり、京都大学人文化学研究班・共同研究班「人文学研究資料にとっての Web の可能性を再探する」編・永崎研宣著『日本の文化をデジタル世界に伝える』(樹村房、2019 年)の「表 5-1 IIIF-BS 集録アイテムリスト」(p.131) にその成果が含まれている。

なお、U-PARL では 2018 年 9 月 20 日より「東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 U-PARL 漢籍・碑帖拓本資料」という名称のプラットフォームにて漢籍・碑帖拓本資料の IIIF 画像(約 2,000 点)の公開を行ってきたが、さらにコレクションを拡充させるために、2020 年 1 月 16 日にプラットフォーム名および URL を変更して新規サイトを公開するに至った。

【公開コレクション】

・ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) 寄贈識字教育資料

2014 年度に ACCU よりアジア太平洋地域の識字教育教材約 3,487 点の寄

贈を受け整理を行った。また本コレクションの公開に向けて、識字教育を専門の一つとする中村雄祐氏（大学院人文社会系研究科）や、柴尾智子氏（ACCU）からレクチャーを受けるなど資料研究を行った。これらの資料の整理はRASARLに引き継がれ、同コレクション全体の目録が全3巻の『アジア研究図書館所蔵ユネスコ・アジア文化センター識字教育資料目録』（東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門）として2023年3月に刊行された。本書は東京大学学術機関リポジトリでも全文が公開されている。

・植民地期朝鮮半島地図

2014年6月、東京の古書店より購入。植民地期（1910～45年）の朝鮮半島の地図（合計約180点）からなる。

・田中武雄旧蔵写真等資料

2014年10月、大阪の古書店より購入。朝鮮総督府の警察職を歴任し、政務総監まで昇った田中武雄（1891～1966年）旧蔵資料。本資料には、写真や絵はがきが貼り込まれたアルバムが3冊、1枚物の写真が100枚あまり、そのほか、1945年8月を前後する時期の日記メモ帳1冊が含まれる。

・桜井由躬雄旧蔵資料

歴史地域学者の故・桜井由躬雄氏の旧蔵書からなるコレクションで、ベトナム語で記述されたベトナム史やベトナムの文化・社会に関する図書が多く含まれる。後述の末廣昭旧蔵資料、古田元夫旧蔵資料とあわせ、関連文献として澁谷由紀・宇戸優美子著「東京大学アジア研究図書館における『東南アジア三文庫』の整理」（いずれも2022年4月1日刊行『アジア研究図書館』（東京大学アジア研究図書館ニューズレター）第7号に掲載）がある。アジア研究図書館の「桜井由躬雄文庫」として利用に供されている。

・末廣昭旧蔵資料

タイを主なフィールドとするアジア経済研究者、末廣昭氏が寄贈した蔵書コレクションで、タイの経済、社会、政治史に関するタイ語文献、雑誌から構成されている。アジア研究図書館の「末廣昭文庫」として利用に供されて

いる。

・古田元夫旧蔵資料

ベトナム現代史を専門とする古田元夫氏の旧蔵資料 259 点からなるコレクションで、ベトナムの政治や社会に関する資料が多く含まれる。アジア研究図書館の「古田元夫文庫」として利用に供されている。

・辛島昇旧蔵資料

南インド古代史に関わる一級の資料群を受け入れた。関連文献として足立享祐著「東京大学アジア研究図書館蔵『辛島昇文庫』について」および澤田彰宏著「辛島昇先生のご研究と教育について」(いずれも 2023 年 10 月 2 日刊行『アジア研究図書館』(東京大学アジア研究図書館ニュースレター) 第 13 号に掲載)がある。現在、アジア研究図書館の「辛島昇文庫」として利用に供されている。

・水島司・柳澤悠旧蔵資料

南インドを中心とする中世から近代にかけての社会経済史、インド洋世界をはじめとするグローバルヒストリー、インド系移民社会、南アジア地理情報に関わる資料を受け入れた。これらの資料は 2021 年度より RASARL が整理を継続中であり、近日水島司文庫、柳澤悠文庫としてアジア研究図書館の文庫となる予定である。前記の辛島文庫とあわせ、世界的に見ても重要な南インド史に関わる体系的なコレクションが構築されると期待されている。

・奈良毅旧蔵資料

ベンガル語資料、およびインド諸言語語学に関する図書。アジア研究図書館の「奈良毅文庫」として利用に供されている。

・生越直樹旧蔵資料

韓国朝鮮語学に関する図書約 540 点からなるコレクションで、一部駒場図書館からの移管扱いの資料を含んでいる。

あとがき

❖ 袁輪頭量

この度、ようやくサブジェクト・ライブラリアン論集が刊行されることになった。まずは第1期から第2期にかけて関わってくれた特任教員、特任研究員の方々の苦勞を労いたい。初代の部門長であった木村英樹教授、副部門長を務めた富澤かな特任准教授、2代目の永井正勝特任准教授、そして現在3代目の一色大悟准教授、そして第1期から第2期にかけて、サブジェクト・ライブラリアン調査に主担当として関わってくれた中尾道子特任研究員に感謝したい。その苦勞は並々ならものであった。

そもそもサブジェクト・ライブラリアンは、文部省（現文部科学省）の時代から内部で提案されては消えてを繰り返し、実現を見なかった代物であると聞いている。それが、東大のアジア研究図書館を創設する際の目玉として目標に掲げられた。「アジア研究図書館」構想に尽力された、当時の附属図書館長であった古田元夫教授、東洋文化研究所の羽田正教授、人文社会系研究科（以降、人社研）の小松久男教授、副学長を務められた人社研の佐藤慎一教授、社会科学研究所の末廣昭教授、教養学部長を務められた山形進教授、そして陰で支援してくれた濱田純一総長等の先生方が、サブジェクト・ライブラリアンを強く意識していたかどうかは、今となっては確認のすべがない。またこのような新しい職種の創設を目指すことになった背景には、U-PARLの生みの親でもある公益財団法人上廣倫理財団の丸山登事務局長の深い配慮もあったと聞く。

初代の木村部門長からその役職を継承したばかりの時の小生には、当初、その重要性を理解することができなかったが、アジア研究を取り巻く状況を

鑑みるにつけ、その重要性を痛感することとなった。またそれはアジア研究に限らないものでもあると思うようになったが、当時の附属図書館長、史料編纂所の久留島典子教授からは、その実現は厳しいことが予想されることも伺った。

当初はどう進めるのがよいのか迷ったが、その実現のため、まずはその制度自体の歴史とありようを調べることから始めた。富澤かな特任准教授を中心に、海外の図書館の事例が調査された。第1期の特任教員・研究員の方々が訪問した図書館は以下の通りである（以下の個別情報は富澤氏の提供）。ナショナル・ライブラリー、ネルー記念博物館図書館、デリー大学図書館、インディラ・ガーンディー国立学芸センター（インド）、オックスフォード大学ボドリアン図書館、ロンドン大学 SOAS 図書館（イギリス）、プリンストン大学図書館（アメリカ）、浙江大学図書館（中国）、国立中央博物館、ハンゲル博物館、国史編纂委員会（韓国）、テヘラン大学中央図書館、イスラーム・イラン歴史専門図書館、イスラーム学コンピュータ研究センター（イラン）など多岐に及ぶ。また私たちの活動が始まったことを知って、オックスフォード大学日本図書館のイズミ・タイトラー館長、ベトナム社会科学通信院附属社会科学図書館レ・ティ・ラン院長、プリンストン大学図書館デイヴィッド・メイガー氏、同大学東アジア図書館マーティン・ヘイドラ館長、同館日本研究司書の野口契子氏、ニューヨーク大学南アジア専門司書アルナー・メイガー氏、ハーバード大学イェンチン図書館日本語資料司書のマクヴェイ山田久仁子氏など、サブジェクト・ライブラリアンに関係する、多くの方々が訪問してくれた。これらの交流の中で、キャリアパスや蔵書構築等の具体的なことにアンテナを張って情報の蓄積に努めた。

その後、第2期に向けた交渉が財団と始まる頃には、中尾特任研究員に、韓国研究を通じて米国の実際を視察してもらい、日本にサブジェクト・ライブラリアンの制度を創設し、定着させるにはどうしたらよいかを具体的に考えてもらうことにした。まだ制度的に存在しないものを新たに作ることの

変さも実感したが、新たなことも経験できた。そして、中尾特任研究員を中心に報告書ができたのが、第2期の1年目である令和元年（2019）年11月であった。

U-PARLでは、その活動の一環として、アジア資料目録作成ワークショップシリーズや、多言語資料整理業務を行ったが、これらの活動も研究者とライブラリアンのスムーズな協働の仕組の構築を意図するもので、サブジェクト・ライブラリアン問題へのもう一つのアプローチであった。

そもそも研究者が研究者を支援するという形態に理解を得ることが大変であったが、サブジェクト・ライブラリアンはまさに研究者が研究者を支援するものであり、図書館の文化では違和感を抱かれるものであった。研究者を支援するのは事務職という了解が普通であるので、そのような疑問が起きたのも無理はない。ここには研究者文化と事務文化の意識の違いが存在することは否めない。

ところで、U-PARLの試みを通じて、図書館員の方々との協働ができたことはとても有意義であった。東大の図書館員の方の中にはなかなか素晴らしい研究業績を持っている方があって、そのような方々と協働でき、新しい礎の一步になったことは間違いない。目録の作成、分類や蔵書構築の方針の検討などから始まり、実際の集書、特殊なレファレンスの対応、デジタル化など、図書館とは切っても切り離せない業務を、U-PARLの研究者と図書館員が共同で行ったのである。これもU-PARLならではの試みであったと自負している。

研究の世界では専門が細分化し、教員が多忙になっている。その中で、研究者を育てるためにはどうしたらよいか。その分野の研究状況を正確に把握するのは研究者でなければならないことであることも容易に想像のつくところである。若手の研究者のために、研究主題に関するアドバイスをを行い、かつ研究者同士をつないでいくことが求められるのであるが、そのような人材

が、日本の研究世界に今、必須なことであると、いつの間にか確信するようになった。

こうして研究支援のできるサブジェクト・ライブラリアンを日本の研究重点大学である 16 大学に設置されることを理想として掲げ、2021 年の 3 月にはアジア研究図書館の開館を記念して大きなシンポジウムを開催したのであるが、その時の記録が本書の一部である。このシンポジウムには文部科学省からも担当官の方にオンライン出席をしていただき、意見を交わすことができたのは望外の成果であった。

サブジェクト・ライブラリアンの基本機能は、欧米の事例を参考にして暫定的にまとめたものである。日本に定着させるには日本的な文化事情も考慮しながら、まずはパイロットケースを作り出し、ある程度その成果を得ることができたら広まるであろうと、内心、青写真を描いた。

当時の附属図書館長であった熊野純彦教授（現在、放送大学教授）、及び江川和子事務局長の尽力のおかげで、附属図書館からの第 3 次配分の申請の中に、専任の教員 3 名（准教授 1 名、助教 2 名）の設置が盛り込まれた。こうして、ようやく 3 名のサブジェクト・ライブラリアンに相当する教員が、令和 3 年 4 月にアジア研究図書館に誕生したのである。これが RASARL（研究開発部門）である。教員が配置されるまでの間、アジア研究図書館長を務められた小野塚知二経済学部教授のご苦勞も並々ならぬものであったと思う。アジア研究図書館は設置されたとは言え、館長のみが存在するという不思議な事態がしばらく続いたのである。

その後、順調に推移したかと言えば、若干、そうとも言えない点もあるが、図書館に配置された専任教員として、研究者でなければならない、大きな働きをなしてくれている。研究者ならではの、アジアの諸言語で記された貴重な資料の目録などが、順次、日の目を見たのである。研究者による研究支援という、なかなか理解してもらえない職務を、将来的には多くの研究者のために行ってくれるであろう。そのための基礎作業がまだ続いているのである

が、これらの営みが種となって、サブジェクト・ライブラリアンが近い将来、日本の図書館の中に根付いてくれることを、心より念願する次第である。

サブジェクト・ライブラリアンはまだ産声を上げたばかりであり、しかもまだ公式の制度として国に認められたわけではない。東京大学以外の大学図書館にも設置がなされて、ゆくゆくは研究重点の 16 大学に公式にサブジェクト・ライブラリアンが配置される日が来て、初めて定着したといえるであろう。そうなる日が来ることを心から望んでいることを告白し、簡潔ではあるが、ここで閣筆としたい。

元 U-PARL 部門長 蓑輪顕量

(立正大学仏教学部教授 東京大学人文社会系研究科名誉教授)

執筆者・参加者プロフィール（2025.7 現在）

宇陀則彦（うだ・のりひこ）

筑波大学図書館情報メディア系教授、筑波大学情報学学位プログラム
リーダー、筑波大学附属図書館研究開発室員

大向一輝（おおむかい・いっき）

東京大学大学院人文社会系研究科准教授

尾城孝一（おじろ・こういち）

特定非営利法人 ScholAgora

小野塚知二（おのづか・ともじ）

東京大学特任教授、東京大学名誉教授、放送大学客員教授

北村由美（きたむら・ゆみ）

京都大学附属図書館准教授

熊野純彦（くまの・すみひこ）

東京大学名誉教授、放送大学東京文京学習センター所長・特任教授

齋藤希史（さいとう・まれし）

東京大学大学院人文社会系研究科教授

中尾道子（なかお・みちこ）

元 U-PARL 特任研究員、東京大学大学院人文社会系研究科研究員

ナディア・クレーフト Nadia Kreeft -Mishkovskyi

ライデン大学アジア図書館サブジェクト・ライブラリアン兼キュレーター

福田名津子（ふくだ・なつこ）

花園大学文学部講師

蓑輪顕量（みのわ・けんりょう）

東京大学名誉教授、U-PARL 元部門長、立正大学仏教学部教授

三宅隆悟（みやけ・たかのり）

文部科学省研究開発局海洋地球課長

横井慶子（よこい・けいこ）

東京大学附属図書館特任研究員

吉村亜弥子（よしむら・あやこ）

シカゴ大学図書館日本研究ライブラリアン

六反田豊（ろくたんだ・ゆたか）

東京大学大学院人文社会系研究科教授、U-PARL 部門長

渡邊由紀子（わたなべ・ゆきこ）

九州大学附属図書館研究開発室准教授、九州大学大学院統合新領域学府
准教授

編 者

U-PARL

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 Uehiro Project for the Asian Research Library (U-PARL) は、公益財団法人上廣倫理財団の寄付を得て 2014 年 4 月に附属図書館に設置された研究組織です。本論集にまとめられた第 1 期 (2014 年 4 月～2019 年 3 月)、第 2 期 (2019 年 4 月～2024 年 3 月) にはアジア研究図書館の構築支援や東京大学へのサブジェクト・ライブラリアン制度の導入に向けた調査を中心として、様々な研究・活動を行ってきました。第 3 期 (2024 年 4 月～) の U-PARL は、アジア研究図書館のハブ機能を一層充実させるため、東西融合・文理融合研究、学術資源デジタル化研究、アジア研究図書館運営、社会還元という四つをミッションとして掲げ、積極的な活動を行っております。 <http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/>

中尾道子 (なかおみちこ)

東京大学大学院人文社会系研究科研究員。専門は韓国・朝鮮美術史。編著に川西裕也・中尾道子・木村拓編『壬辰戦争と東アジア一秀吉の対外侵攻の衝撃―』(東京大学出版会、2023 年 3 月)、論文に「図書館における木版本のデジタル化と利活用の可能性―IIIF と TEI を用いた『水滸伝』諸版本のデジタル化を通じて―」(共著、じんもんこん 2018 論文集) など。

執筆：宇陀則彦、大向一輝、尾城孝一、小野塚知二、北村由美、熊野純彦、齋藤希史、中尾道子、
ナディア・クレフト、福田名津子、蓑輪顕量、三宅隆悟、横井慶子、吉村亜弥子、
六反田豊、渡邊由紀子

編集協力：一色大悟 (U-PARL 特任准教授)、菅崎千秋 (U-PARL 学術専門職員)

いま、なぜサブジェクト・ライブラリアンなのか 図書館をめぐる知の変革のために

2025 (令和 7) 年 11 月 30 日 第 1 版第 1 刷発行

ISBN978-4-86766-098-0 C0000 ©著作権は各執筆者にあります

発行所 株式会社 文学通信

〒113-0022 東京都文京区千駄木 2-31-3 サンウッド文京千駄木フラッツ 1 階 101

電話 03-5939-9027 Fax 03-5939-9094

メール info@bungaku-report.com ウェブ <https://bungaku-report.com>

発行人 岡田圭介

印刷・製本 モリモト印刷



ご意見・ご感想はこちら
からも送れます。上記
のQRコードを読み取っ
てください。

※乱丁・落丁本はお取り替えいたしますので、ご一報ください。書影は自由にお使いください。



U-PARL・荒木達雄 [編]

なぜ古い本を網羅的に調べる必要があるのか 漢籍デジタル化公開と中国古典小説研究の展開

「そんな古臭いものを研究することに何か意味があるのか」。

語学、文学、歴史学、社会学、各方面に広く及ぶ本を調べ尽くす意味と、そこに資料のデジタル化がいかに貢献できるかを、第一線の中国古典小説研究者とともに探る。
2020 年開催オンラインシンポジウム「漢籍デジタル化公開と中国古典小説研究の展開」を書籍化。

【目次】

刊行の辞○養輪顕量

はじめに一資料デジタル化のさらなる可能性を探るために○上原究一

第Ⅰ部 『水滸伝』 版本研究から何がわかるのか

1 『水滸伝』 版本研究から何がわかるのかー白話文学における校勘の意義○小松 謙

2 [上原究一からのコメント] 中原理恵発表『水滸伝』 百二十回本の所在調査と諸本の相違○上原究一

3 アジア研究図書館デジタルコンテンツ「水滸伝コレクション」の現状と展望○荒木達雄

4 デジタル化資料を用いた中国古典小説研究○中川 諭

第Ⅱ部 ディスカッション

第Ⅲ部 講演をめぐる討論会

付録ー主なデジタル化公開済みの清代までの『水滸伝』 諸本